



源氏物語の研究：機能的人物論による分析

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2008-03-24 キーワード: 源氏物語, 機能的人物論 作成者: 山田, 利博 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10458/1398

源氏物語の研究―機能的人物論による分析

山田 利博

目次

序章	研究史から見た機能的人物論の有効性	3
第一章	単一人物と他要素の連関による表現法	
第一節	序―玉鬘選定の理由	10
第二節	初瀬と石山の呼応	11
第三節	男踏歌の対照	21
第四節	玉鬘の造型	32
第五節	まとめ	42
第二章	人物の連関による表現法	
第一節	序―統合体的存在としての紫上	44
第二節	紫上の造型	45
第三節	六条御息所の機能	54
第四節	葵上の機能	63
第五節	花散里の機能	73
第六節	まとめ	87
第三章	人物の連鎖による表現法	
第一節	序	89
―連鎖的存在としての薫・匂宮、夕霧・柏木、光源氏・冷泉・明石姫君		
第二節	薫と匂宮	
1 物の怪の役どころの分担		
2 宇治十帖に於ける交錯		
第三節	夕霧と柏木	
第四節	光源氏・冷泉・明石姫君	
第五節	まとめ	
第四章	複数の人物連鎖とその統合による表現法	
第一節	序―「拒否」と「忌避」の定義	133
第二節	「拒否する」女性の連鎖	134
第三節	「忌避する」女性の連鎖	147
第四節	まとめ	157
第五章	負の力の発見	
第一節	序―物語を動かす負の力	160
第二節	負の力を有した主人公	
1 女三の宮		168
2 薫		178
第三節	まとめ	189
終章	まとめと展望	190

序
章

研究史から見た機能的
人物論の有効性

本論文は、「源氏物語の研究―機能的人物論による分析」と銘打つ訳だが、最近はその根底たる「人物論」についての批判が強いので、先ずその点について一言しておかなければならない。

最近の人物論批判で特に顕著なものは、吉海直人による「人物論の再検討」(『源氏物語の鑑賞と基礎知識』⑧夕顔 至文堂 平12)であろう。その中で吉海は、人物論は「第二次世界大戦に敗れた反動として、ヒューマニズムを背景にして急浮上した特殊な研究である」とし、「評価すべき人物論の成果も確実に存している」が、「登場人物の全登場箇所を抽出・網羅し、それを単純につなぎ合わせるだけで、いとも簡単に人物の物語を構築する気軽さ、主観的判断に基づく好き嫌いを結論とする感想文的安易さ、また作中人物にすぐに作者を投影させるような短絡的な人物論の多くは、およそ学問という名に値しない」と言い放ち、「これからの人物論は、既に方法的に否定されていることを自覚した上で、慎重に行わなければならない」と結論する。これらの評言のうち、特に中間部等は、後述する如く、強ち思い当たらないものがないでもないが、出だしの「第二次世界大戦云々」は、論者もかるうじてそういう世代だと思うが、「戦後」という言葉を実感していない者には余りしっくりこない。第一、人物論が始まったのは決して戦後ではないと思っているからである。

周知の如く源氏物語の研究が始まったのは平安時代末期であるが、『源氏積』や『奥入』といった正規の注釈書に挙げられているのは、確かに和歌や漢籍等の、いわゆる出典研究のみと言って良い。これは当時の正当な学問が、そうしたものとされてきたのだから致し方もないが、忘れてならないのは、確かに研究・注釈書には数えられていないが、ほとんど同じ時期に『無名草子』という興味深い書物が存在したことだと思う。最近の注釈書である新編日本古典文学全集の久保木哲夫の解説によると、『無名草子』の成立は、一二〇〇年七、八月から一二〇一年十一月の間のほぼ一年数か月に絞り込まれているとのことであるから正しく同時代であるし、作者が俊成女というのは、状況証拠として久保木は最後まで認めるのを躊躇っているが、「作者も恐らく女性であろう」とはしている(三〇七頁)。確かに女性の手になるものらしく、感覚的な叙述が多い(一)が、人物と場面の二つの面から物語を捉えていこうとする着想(二)は今見ても斬新で、論者はこれこそ人物論の嚆矢であり、本論文も遠くそれに連なるものと位置づけている。換言すれば、人物論とは物語を読解する最も古典的な方法とすることが出来る。

尤も、引用しなかったが吉海も、「第二次世界大戦云々」の前に、『源氏物語』の人物論は、もちろん古くから行われていたが」を冠していたから、こうした視野が全く無かった訳ではなからうが、吉海のこの発言を受けて行われた座談会「作中人物論の回顧と展望」(『人物で読む源氏物語』①桐壺帝・桐壺更衣(勉誠出版 平17)所収)も同じく「戦前から戦後へ」から始まっているので、この点は特に強調しておきたいところである。

無論、「古典的」であれば即ち価値がある訳ではないが、同じ座談会での、「基本的には、例えば作品論をやったり、主題論をやっても、必ず人物はかかわりがある」という吉海の発言もあり(一二頁)、やはり人物による分析は避けては通れないところであろう。だいたい自身でも言っている(二六頁)ように、吉海の著書にも『源氏物語の新考察 人物と表現の虚実』(おうふう 平15)というものは存在するし、同じ叢書の最終巻(②浮舟 平18)の座談会『源氏物語』の端役達——「作中人物論」の可能性」中の吉海の発言に

も、「従来の研究史、あるいはこの二十冊の叢書を踏まえた上でまだ足りない、まだ言えることがある、もっと違う視点からいろいろ言える。そういう風に考えていただと、人物論の未来はまだまだ捨てたものではないと思います」というものがある(四〇六頁)から、コメントーターとして呼ばれた気遣いを割り引いたとしても、「人物論の再検討」で述べたことは、聊か挑発的意味合いもあったのかもしれない。では、吉海がイメージする新しい人物論とは何か。勿論それはあくまで吉海がイメージするものであり、合わせなければいけないものでもなかるうが、これから「人物論」を展開しようとする者としては、一応考察しておくべきものと考ええる。

吉海のイメージする新しい人物論は、指導するゼミ生の論文を例示しながら、先ほどの発言の後で示されているが、本論文と直接関わる訳ではないので、紙幅の関係上割愛する。ただその内容は、確かに興味深いものではあるのだが、それ以前に論者が聊か疑問を感じたことは、ここでの吉海の人物論の定義である。この座談会の冒頭で吉海は、「ここでも一度確認しておきたいのですが、人物論の基本は、人格・一貫性を有する主人公格の登場人物が対象となります。そうになると、人物論として可能な登場人物の人数は必ずから限られてしまいます」と発言している(三七九頁)のだが、果たしてそうなのだろうか。と言うのは次の頁で、「源氏に関しては以前から「人格的不統一や矛盾」が指摘されていてます。つまり『源氏物語』においては、主人公の人物論からしてゆゆしき問題を孕んでいるわけで、これでは人物論そのものに不安が付きまともやむをえませぬ」という、やはり吉海の発言があるからで、もし主人公すら分析できない物語の研究方法があるとしたら、方法自体を疑うより、定義を疑う方が先なのではあるまいか。ただ、先ほども少し触れたように、研究史に鑑みれば、そのような「人物論」が多かったことも確かなのである。その筆頭として挙げるのは、歴史による徹底した実証という部分には大いに共感を覚えるので聊か躊躇われるのであるが、最も分かり易い例と思われるので掲げておけば、今井源衛の「女三の宮の降嫁」(初出『文学』昭30・6)である。有名な論なので詳細な説明は不要と思うが、歴史的事実を博捜し、皇女は未婚が通例であることを突き止め、朱雀院の決断は「錯誤」であったと断ずるものである。「錯誤」という言葉は発表当時から議論を呼んだようで、例えば石田穰二から、「まづ作品そのものを熟視し、創作の意図や動機など推測による他ない因子は注意深く分析から除外する」という観点で批判を受けた(3)ことも著名らしいが、最近刊行された『今井源衛著作集』² 源氏物語登場人物論(笠間書院平16)の「追記」には、

(秋山II論者注) 氏のいわれる、物語世界の自立的な発展からいえば、朱雀院が錯誤を冒したというべきではなくて、むしろ必然だというべきだとの説は一種の歴史的必然論に似たものであるように思う。クレオパトラの鼻を持ち出すまでもなく、大ざっぱにいえば、すべての現象は歴史的必然でないものではなく、朱雀院の選択ももちろんしかりである。しかし私の「錯誤」とあえて称するのは、その必然の中の動きの中に、人間個人が負うべき責任の有無についていつているのであって、そのことが物語的必然であるかないかということではない。むしろそうした朱雀院個人の責任とでもいべきものを作者が暗に意識していたという点を、私は重視し、そこにあえて「錯誤の人」という貶辞を用いた理由がある。

(一六五頁)

とあるから、今井は最後まで作中人物を実存として捉えないという考えには至らなかつた

ようである(4)。しかしこれは明らかに妙であろう。したがって、本論文で言う「人物論」は、作中人物を「人格・一貫性を有する」ものと捉えるところから出発しない。むしろ作中人物は、あくまで物語形成に寄与する存在にしか過ぎないのであり、その人物の一側面がテーマ或いは場面に如何に寄与しており、そのことに依って如何に物語を形成し得ているかを考察していくことを重点とする。その一側面を仮に「機能」、そのようにして物語を読解していくことを「機能的人物論による分析」と名付けた訳であるが、それ故、例えば本論文第三章第四節と第四章第二節のように、同じ明石御方を取り上げても論じ方が異なる場合は往々にしてある。これは一見矛盾しているように見えるかもしれないが、この人物のこの側面から光を当てればこのように読み取れ、また違う面から光を当てれば別様に見えるということ、当然あり得ることなのである。それはちやうど実在の人物が、何年付き合おうと次々新しい面を見せていくのと同じで、源氏物語のような複雑なものを、そのままの形で捉えることは不可能であり、可能なのはこのように、微細な切片に分解して把握し、それを再統合するという迂遠な方法のみと思う。

では、このような人物論がこれまで皆無であったかと言うと、無論そうではない。例えば、鈴木一雄編集・解説「国文学解釈と鑑賞別冊」『源氏物語(Ⅰ) 成立論・構想論』(至文堂 昭57・3) 一七頁、『源氏物語(Ⅲ) 文体論・表現論』(同年5月) 六頁で、「局面的人物論」と評される秋山虔、或いは人物論の第一人者と目される森一郎、自ら「人脈の方法」(5)と命名する上坂信男等の研究がそれである。敢えて差別化しておかなければならないものかどうか定かではないが、本論文のスタンスを示すために、それぞれ一言しておこう。

先ず秋山の論は、前掲の今井の言葉も触れていたように、「物語世界の自立的発展」というのが良く理解できない。観念的には分かるのだが、物語は自立的に動くものなのだろうか等と考えると、何やら悩ましくなってくるのである。また森の論は、吉海も言うように位置づけが難しく(6)、「全体の中で、主題とのかかわりとかに言及」する「人物造型」という視点に於いては共通すると言えるが、『源氏物語作中人物論』(笠間書院 昭54)、『源氏物語作中人物論集』(勉誠社 平5)で、個々の人物の論文目録を作ったという発想は、やや異なるようにも思われる。ただ吉海の言に依れば、「森先生の論文は、あまり人物論としては響いてこない」ということであるから、先に掲げた吉海による「人物論」の定義と異なるという意味では、やはり近いと言えるかもしれない。最後に上坂の論は、ごく初期を除いて意識的に模倣しようと思ったことなど無いけれども、何と言っても師匠であるから、知らず知らず影響があるのかもしれないが、森の論と同様、一個の人物という枠から完全に自由でないところに違いがある。前にも述べたように、本論文では作中人物を様々な機能の集積と捉えるため、第一章のように、人物以外の事象と連関して一つの主題を表現していると読む可能性も生まれるし、或いは第二章のように、一つの「人格」を複数の作中人物に分有させていると見る可能性も生まれる。いわばこの自在な作品把握、それが作品の形成過程に迫る一つの道であると信ずるが、こそが本論文の価値というものではなからうか。

本論文はそうした観点で、先ず単一人物とそれ以外の事象との連関による主題表現の例として玉鬘の造型を分析し、次いで複数の人物の統合による主題表現ということで紫上の造型を、第三章は、上坂の人脈とやや近くなるが、分身的人物の連鎖による表現の例とし

て、匂宮と薫、夕霧と柏木、及び、私に桐壺・明石一族と呼ぶ一族の造型を、第四章は二つの人物連鎖をさらに組み合わせることによるテーマ表現の例として「拒否する」女性の連鎖と「忌避する」女性の連鎖の関係を、そして最後の第五章では、それらの試みの中から獲得されたのではないかと思われる、物語を動かすものとしての「負」の力について見ていきたい。

このような形が「新たな人物論」として適っているか否かは、今後の検証を俟つ他はないが、取り敢えずこれが、論者が今至りついたところである。

最後に、本論文に於ける源氏物語の本文引用について一言すれば、原則として小学館の新編日本古典文学全集本（以下新全集と略称する）に依り、源氏物語の巻名・新全集の巻数・頁数・傍線等を付す。大島本を忠実に翻刻したという、岩波の新日本古典文学大系も、一つの見識であろうと思うが、近年そうした報告が相次いでいるように、大島本といえども所詮は室町期に下る写本の一つに過ぎないのであり、原本の姿をどれだけ忠実に伝えているかは疑問なしとはしない。これは独り大島本のみには止まることなく、如何なる写本に依ろうとも、一つに依拠する限りは同様に存心危険と思う。したがって、新たな混成本文を作り出してしまいう危険性も一方では存するが、場合によっては校合本文の方が原態に近い可能性もあり、そういう意味では拙著の序(7)でも述べたように、新全集本の本文はなかなか優秀との判断に依るものである。

注(1) 例えば源氏物語の女性評は、「めでたき女」「いみじき女」「好もしき女」「いとほしき女」だし、同じく作品に対する評は、「あはれなること」「いみじきこと」「いとほしきこと」「心やましきこと」「あさましきこと」である。また、狭衣物語の評には、有名な「さらでもありぬべきこと」が存在するし、夜の寢覚の評には「めでたき人」「憎きこと」の項が存在する等、かなりの部分が形容語で表わされる批評であり、その内容も、例えば「いとほしき女」の一人、宇治の中の君(『無名草子』では「中の宮」)の場合は、「宇治の中の宮こそ、いとほしけれ。はじめはいとさしもおぼえざりしかど、兵部卿宮、まめ人の婿になりて、もの思はしげなるがいとほしきなり。まして、『かばかりにてやかけ離れなむ』など言へるところは、見るたびに涙もとまらずこそおぼゆれ」(引用は、小学館新編日本古典文学全集による。一九六頁)とあるように、非常に感覚的なものが多い。

(2) 注(1)でも示したように、源氏物語については正にこの形式だし、狭衣物語以下でも、ほぼこれを踏襲している。

(3) 「若菜の巻について」(初出『国語と国文学』昭30・11。但し引用は『源氏物語論集』(桜風社 昭46)による。五六頁)。

(4) この「追記」が何時なされたかは正確には不明であるが、少なくとも『著作集』に至るまで削除されることはなかったのであるから、このように言うことは可能だと思われる。

(5) 上坂自身による言葉ではない(上坂は「人脈」の定義を明確にはしていない)が、上坂の学位論文の一部である『古代物語の研究』(笠間書院 昭46)の笹淵友一による「序」に依れば、「宇津保は脇役的人物を登場させ、空間的視野を拡大し

て長編化を結果している。それに対して源氏は藤壺と紫の上、夕顔と朧月夜というような、前身と後身、氏（＝上坂・論者注）のいわゆる「人脈」を形成している、それが源氏長編化の一つの素因である」（三三頁）というもの。その『古代物語の研究』に最も顕著である。

(6) 『人物で読む源氏物語』①桐壺帝・桐壺更衣 二一～三頁。

(7) 拙著『源氏物語の構造研究』（新典社 平16）。以下、拙著とはこれを言う。

第一章

単一人物と他要素の連関による表現法

第一節 序―玉鬘選定の理由

前章でも述べたように、これから「機能的人物論」による源氏物語の分析を行っていくが、そうは言っても、総登場人物四百五十余とも言われる源氏物語の全ての人物を見ていくことなど、紙幅の関係もあり、不可能である。そこで、前章の吉海の言葉と聊か抵触するかもしれないが、本論文で取り上げるのはやはり主人公級の人物としたい。但し、「機能的人物論」とは、これも前述したように、作中人物を作品形成に寄与するに過ぎない存在と見、実在の人物と同様に扱ったりはしないから、「人格・一貫性を有する」ことに拘るつもりは全くない。その辺りがこれまでの「人物論」とは一線を画すものとなるはずである。

さて、主人公級の人物と言っても多数存在するが、第一に取り上げるのは玉鬘としたい。玉鬘を玉鬘十帖の女主人公とするには異論のある向きもあるかもしれないが、たとえ本文中に「すき者どもの心尽くさするくさはひ」（玉鬘③一二二頁）という表現があろうと、彼女の主人公性は疑いがないと思われることは本章、特に第四節で詳述するので、ここではその前提に立って話を進めると、玉鬘の女主人公性は他と比較しても、かなり希有なものと思われる。何故なら、源氏物語の何々何帖と呼ばれる巻々で、単独の女主人公は彼女一人だからである（注）。これは、もしその何々何帖に、一つのテーマがあるとしたら、玉鬘十帖の場合は、玉鬘一人が背負っている可能性を示すものと思われるが、その玉鬘十帖は、第二、三節で分析するように、発端と終末にそれぞれ初瀬（観音）と石山（観音）の霊験端的結構と、源氏物語執筆時には既に絶えていたはずの男踏歌の詳細な行事描写を有し、始めと終わりが極めて明瞭な、他と隔絶された部分となり得ている上に、その二つの事象は、玉鬘と密接な関係を有していると思われるからでもある。これが本章の章名とした「単一人物と他要素の連関による表現方法」の謂であり、第五節でも述べるように、これに該当する例は、今のところ玉鬘しか見出せていないので、ここで取り上げた次第である。

そこで本章の進め方としては、先ず次節で源氏物語に於ける「初瀬」と「石山」の関係、次いで第三節では男踏歌の行事描写の意味性、第四節では玉鬘自体の造型について考察した後、最終第五節でそれらを纏めるという手順を採ることとする。

注 言うまでもないこととは思うが、帚木三帖では空蝉・夕顔の二人が女主人公として設定されているし、匂宮三帖には女主人公らしきものは存在しない。また宇治十帖では、第三章第二節の2で触れるように、大君・中の君・浮舟と、女主人公が移り変わっているとと思われる。

第二節 初瀬と石山の呼応

一

A あやにくに殿の御使のあらむ時いかに言はむと、「初瀬の観音、今日事なくて暮らしたまへ」と、大願をぞ立てける。石山に今日詣でさせむとて、母君の迎ふるなりけり。
(浮舟⑥一二九頁)

薫と間違ひ、匂宮を浮舟の寝所に引き入れてしまった浮舟の女房・右近は、翌朝そのことを知った時、思わずこのように祈る。一見何気ない描写でありながら、良く考えると分からないことがたくさんある。第一に、この前夜、宇治に辿り着いた匂宮が、先ず浮舟の様子を探るため垣間見した場面では、確かに浮舟が翌日物詣でに出かける予定であることは語られていたが、場所については何も触れるところがなかった。それなのに何故この場で唐突に、それが「石山」であると明かさねばならないのかということ。そして第二に、この日、石山に参詣する予定なら、右近は何故その仏に「大願を」「立て」ず、何の関わりもない「初瀬の観音」にそれをしなければならぬか等である。

このうち、後者の疑問の半ばについては、比較的簡単に答えを導くことが出来る。何故なら、浮舟が常に初瀬観音によって守護されているように読めることは既に柳井滋により指摘されており⁽¹⁾、この場合のように浮舟に対する加護を求めらるなら、石山の観音よりも初瀬に向かつての方が、物語の論理に適ったやり方だからである。

しかし、こう答えたからといって問題は解決しない。と言うのは、それなら何故、最初からこの日初瀬に行く予定にせず、石山を持ち出したかという疑問が残るからである。

勿論、これが実在した事件を扱う作品なら、このような問いを立てること自体無意味だが、今更言うまでもなく源氏物語は純粹に虚構の作品であり、この日浮舟に如何なる予定を持たせることも、基本的には自由であったはずだからである。これに対する答えとしては、匂宮が帰らないことにより、この日浮舟は結局出かけられなかったのだから、もしも初瀬に行く予定であったとすると、それを反故にしては初瀬にもものを頼みづらくなるので、別の観音の許に行く予定にした、というのが考えられないわけではないが、如何にもこじつけ臭いし、それに何より、たとえこの説を採用しても、それでは何故その別の観音が、石山でなければならなかったかが、依然謎のまま残る。それ故この二つの謎は、そう簡単に解けるものではなく、この物語に於ける「初瀬」と「石山」の描かれ方について、もう一度洗い直すことを迫るものと思われる。そこで本節ではその問題を正面に据え、併せて物語の構造にまで話を及ぼしてみよう。

二

前段で提出した課題に迫るためには、先ず源氏物語全体での「初瀬」と「石山」の用例の分布を知ることが必要である。そこでそれを簡単にまとめたのが次のような表である。

	関屋	玉鬘	真木柱	椎本	宿木	東屋	浮舟	蜻蛉	手習	夢浮橋	計
初瀬		3(i)		1	2(ii)	2(iii)	2(iii)		8(iii)	1	19
石山	2		1				5	1			9

(i) 「初瀬川」二例を含む。

(ii) 「初瀬御寺」、「初瀬詣」各一例。

(iii) 「初瀬観音」各一例を含む。

表外の注に示したように、これには、「初瀬川」或いは「初瀬御寺」といった、一見地名にしか見えないような例も含んでいるが、それについては問題ない。何故なら、源氏物語に於ける「初瀬」或いは「石山」の用例は、単なる地名に止まらず、長谷寺や石山寺、ひいてはその観音を意味することは、早くに重松信弘により証明されている⁽²⁾からである。そこで本節では、そうした用例を、「初瀬」或いは「石山」と表記し、以下それによって論を進めていくが、その前にまず、この表のデータについて今少し整理しておかねばならない。

第一に、関屋巻に見える「石山」の用例二例だが、これらは共に、源氏と空蝉の邂逅の舞台を逢坂の関に設定するためにのみ作用しており、純粹な「石山」の用例とは言い難い。吉海直人によると、それは続編の「初瀬」の用例も同じで、正編では、初瀬観音の靈験譚が基盤に存するのに、続編では、単に宇治に立ち寄る方便として利用されるにすぎないという位相差が存すると結論づけられる⁽³⁾。しかし、私見によればそれは誤りで、そのことは、続編で「初瀬」の用例が最多な巻が、舞台が宇治から小野に移動した手習巻であることから薄々知れようが、後述するように、その巻でその用例と最も密接な関係を有する浮舟は、そのとき都とはほとんど隔絶された状態にあり、そこから人が訪ねてくることなど、先ず無い。唯一の例外とも言えるのが、後に浮舟に求愛する、浮舟の庇護者・妹尼の娘婿の中将であるが、彼とて浮舟の許に、初瀬詣でを口実として来るわけではない。吉海が言うように、初瀬詣でを方便として女性の許を訪れるのは、権本巻に於ける句宮、唯一例であり、したがってそれは、むしろ例外として排除すべきであろう。

このように、単に数字ばかりではなく、その内容まで視野に入れて絞っていくと、残った意味のある「初瀬」と「石山」の用例は、玉鬘か浮舟が登場する巻にのみ存在し、しかもその二つの物語には、「初瀬」と「石山」が共に揃っていることに気がつく。この時若干気になるのは、巻末からしか浮舟が登場しない宿木巻の「初瀬」二例であるが、それらは共にその場面に位置し、この原則から外れるものではない。したがって、先程指摘したことは確実に言えるが、大雑把な表から述べられるのはここまでである。そこで次には、個々の用例について、もう少し詳細に見ていこう。

三

前段に掲げた表を見れば分かる如く、「初瀬」と「石山」の有意な用例の最初は、玉鬘巻に位置する「初瀬」三例である。言うまでもなくこれは、この巻で玉鬘とその女房・右近が、実に十八年ぶりに「初瀬」で邂逅する場面が延々と繰り広げられるからで、そこに初瀬靈験譚の性格が認められることは、新全集頭注⁽³⁾一三頁⁽⁴⁾の指摘を待つまでもなく明らかである。ただ、ここで確認しておきたいのは、この靈験に与ったのは、玉鬘と右近、いずれであるかということである。

説話等に見られる初瀬靈験譚によれば、「参詣」という行為はかなり重要な要素で、その点を考慮すれば、年数において玉鬘より遙かに勝る右近の力は無視し得ないし、玉鬘に近侍していた人々も、そのように理解していたと読める箇所は、本文中にも存在しないことはない⁽⁴⁾。しかし、その右近の長年の初瀬参詣というのも、この巻に至って初めて語られることなのであり、その意味では玉鬘の参詣とさして変わらないとも言えるし、先程言及した説話レベルでも、「参詣」というのは確かに重要な要素ではあるけれども、決して絶対的要素ではないことは、有名な唐の馬頭夫人の話を始めとして、初瀬参詣を一度

もしたことがないにも拘わらず、その靈験に与った話が少なくない⁽⁵⁾ことから証されよう。むしろ、靈験譚という観点から見逃せないのは、玉鬘一行が、上京後一旦「九条」に住み着き、右近との邂逅後もしばらくそこに居続けることである。と言うのは、当時の一般的な初瀬参詣の経路を考えればある程度当然とは言え、都との境界線でもある「九条」で、初瀬の靈験が示現する話は割と多い⁽⁶⁾からで、このこととこの設定とは、何か関わるところがあるのかもしれないと考えられるからである。

しかし、この邂逅は既に、参籠・靈夢・祈願成就・報賽という、一般的な靈験譚の型⁽⁷⁾とは相違しているから、単に靈験譚という観点ばかりでなく、物語の論理もそこに読み取るべきであろう。だとすると、この後、「すき者どもの心尽くさするくさはひ」(玉鬘^③一二二頁)として六条院に迎えられ、玉鬘十帖に於いては女性主人公的役割を果たす玉鬘が、この靈験に与ったと理解するのが最も自然であると考えられる。そこで本論文ではこの場面を、そのように捉えていくこととするが、注意すべきはこの場面が、玉鬘物語のほとんど最初だということである。そしてあたかもそれと呼応するように、玉鬘物語のほとんど最後⁽⁸⁾にもまた観音の靈験譚の話が現れる。これも前段に掲げた表から分かるように、真木柱巻の「石山」の用例である。

Bほど経れど、いささかうちとけたる御気色もなく、思はずにうき宿世なりけりと思ひ入りたまへるさまのたゆみなきを、いみじうつらしと思へど、おぼろけならぬ契り、ほどあはれにうれしく思ふ。見るままにめでたく、思ふさまなる御容貌ありさまを、よそのものに見はててやみなましよと思ふだに胸つぶれて、石山の仏をも、弁のおもとをも、並べて頂かまほしう思へど、女君の深くものしと思し疎みにければ、えまじらはで籠りゐにけり。げに、そこら心苦しげなることどもを、とりどりに見しかど、心浅き人のためにぞ、寺の験もあらはれける。
(^③三四九〜五〇頁)

鬚黒が「石山の仏」に祈願していたことは、ここで初めて描かれるため、聊か唐突の感は拭えないが、これが単なる言葉の文でないことは、傍点を付した「寺の験」という語の存在からも明らかであろう。新全集は「石山の仏」に、「契り」に照応して、神仏の力を思わずにいらぬ気持」という頭注(一〇)を付けるが、誠に首肯されるものであり、この辺り正に、石山観音の靈験譚の雰囲気醸し出している。ただ、ここで注意すべきは、先程、初瀬観音の場合は、物語の女性主人公・玉鬘のためになる利益を与えていたに對して、この石山観音の場合はちょうど逆、女性主人公のためにならない利益⁽⁹⁾を与えていることである。するとここに、源氏物語に於いては、初瀬観音と石山観音は、対立するよう描かれているのではないかという仮説が生まれるが、実はそれは、浮舟物語に於いても変わりない。続いてそれを見てみよう。

四

宿木巻末に於ける浮舟と薫の最初の出会いも、やはり初瀬詣で絡みで語られるが、そこも多分に靈験譚的である。例えば浮舟の老女房と弁の尼の次のような会話も、その一つとして数えられよう。

C (弁の尼)「昨日おはしつきなんと待ちきこえさせしを、なか今日も日たけては」
と言ふめれば、この老人、「いとあやしく苦しげにのみせさせたまへば、昨日はこの泉川のわたりにて、今朝も無期に御心地ためらひてなん」
(^⑤四九二〜三頁)

弁の尼の言葉によれば、浮舟は本来前日に宇治に到着する予定であった。ところが、老

女房の言葉から知られる如く、浮舟は不思議と気分が悪くなり、しかもそれはその日の朝まで続いたため、「日たけて」の到着となり、薫と出会ったのであって、このうちのどれか一つでも狂えば、二人の出会いは無かったかもしれない。言わば、二人の出会いは無妙な時のバランスの上に成り立っており、その辺りに、人知を越えた何物かの力が働いている感を醸し出していると言えるのである。そしてそれは、この一箇所止まらない。

Dこれ（浮舟）は別人なれど、慰めどころありぬべきさまなりとおぼゆるは、この人に契りのおはしけるにやあらむ。
（⑤四九四頁）

E（薫）「……かく契り、深くてなん参り来あひたると伝へたまへかし」とのたまへば、
（弁の尼）「うちつけに、いつのほどなる御契り、にかは」とうち笑ひて、……
（⑤四九五頁）

間に若干の言葉が入るので、便宜的に二つに分けて引用したが、頁数を見れば分かるように、この二つはほとんど連続するところにある。そして注目すべきは、傍点を付したように、この短い範囲に三度も「契り」という語が繰り返されることである。尤も、最後の弁の尼の言葉が、その語をかなり軽いものとしてしまったため、薫のそれも、単に男が女をくどく際の常套語のように感じられるかもしれない。しかし、新全集の頭注（二三）を待つまでもなく、この語は、浮舟を垣間見た時の薫の感想を描くDの「契り」と響き合うものと思われ、しかも「この人に」以下は所謂草子地であるから、「ここで作者は浮舟を薫と結びつけようとやつきになつてゐる」という、玉上琢彌のような読み⁽¹⁰⁾は、当然出てくるはずのものである。すなわち、ここでも作者は、何か見えざる力が、この二人を結びつけるべく働いているように描いているわけであるが、状況から考えて、その力が初瀬観音のものと読者が受け取るように、計算してあると思うのである。そしてそのことは、これ以降の巻々でも変わらない。

例えば次の東屋巻では、思いがけずに勾宮に侵入され、惑乱している浮舟を、「……さりとて、初瀬の観音おはしませば、あはれと思ひきこえたまふらん。ならばぬ御身に、たびたびしきりて詣たまふことは。……」と、乳母が慰める（⑥六八頁）ことによつて、脆弱ながらも浮舟が初瀬観音の庇護を受けていることが示され、その後浮舟が三条の小家に移されたことを知り、薫が、自身で訪れる前に、先ず弁の尼を送った場面では、それを迎えたのが、「初瀬の供にありし若人」であつたと、わざわざ語られる（⑥八九頁）事実が、浮舟と薫の結びつきに、初瀬観音が関わっている感を深くする。

そしてその延長上に位置するのが、最初に掲げたAの引用文であるのだが、ここまで来れば、右近に何故、その日行く予定であつた石山観音ではなく、初瀬観音に無事を祈らせたかは、もはや明らかであろう。だがそれは、第一段にも既に述べたことなのでここでは繰り返さない。ただ、ここで注意しなければならないのは、この巻で、と言うより、浮舟物語全体に於いても、「石山」の用例の初出はこの箇所だということなのである。けれども、そのことの意味について考え始める前に、もう一つ注意しておかなければならないのは、この浮舟巻が、浮舟物語中で「石山」の用例が最多の巻でもあるという事実である。これはこの後三度も、この時石山に行けなかつたということ、思い起こさせる記述が繰り返されるからであるが、そのうちの一つ（⑥一四二頁）は、単に宇治の所在なきを示し、それほど深い意味は認められない。しかし、残りの二つはなかなか興味深い用いられ方をしているのを、続いてそれを見てみよう。

二つのうちの一つは、Aからしばらく時間が経過し、薫が、浮舟と匂宮との関係を知らないまま、いよいよ浮舟を都に引き取ろうとする場面に現れる。このことにより浮舟は、薫と匂宮との間でさらなる板挟みとなり、ほとんど判断中止の状態に追い込まれる。

Fさそふ水あらばとは思はず、いとあやしく、いかにしなすき身にかあらむと、浮きたる心地のみすれば、母の御もとにしばし渡りて、思ひめぐらすほどあらんと思せど、少将の妻、子産むべきほど近くなりぬとて、修法、読経など隙なく騒げば、石山にもえ出でたつまじ、母ぞこち渡りたまへる。
(⑥一六三頁)

察するに、Aの石山詣では、あれで中止となったわけではなく、機会があればという形で延期したのである。だが、浮舟の義妹である少将の妻の懐妊により、それはまたしても流れてしまい、代わりに母が浮舟の許にやって来た。既に指摘があり(リ)、また、傍点を付した辺りからもその正しさは充分感じられる如く、母と非常に緊密な繋がりを有する浮舟にとっては、それはそれで良いことのように見えた(だが実際にはそうでないことについては後述)が、ここで一つ疑問になるのは、どうせ親子対面の実現させるなら、何故それが石山寺であってはいけなかったかである。この問題に答えるには、かなりの手順を要するため、それについては後回しにしたいが、ここで確認しておきたいのは、作者には浮舟に石山詣でをさせる意志がないということである。これには、浮舟を宇治川から離してしまつては、入水に追い込むことが容易でないという、消極的理由もあつたであろうが、もつと積極的に「石山」を使つていきたいという目算もあつたであろう。それを窺わせるに足るのが、次の「石山」の用例である。

Gあやしきことかな、物の怪などにやあらむと、(母君)「いかなる御心地ぞと思へど、石山とまりたまひにきかし」と言ふも、かたはらいたければ伏し目なり。
(⑥一六四頁)

しばらく見ぬ間の、娘の余りにも非道い憔悴ぶりに驚いた母が考えたその理由は、先ず常識的に妊娠の可能性であつた。しかし、Aの石山詣では、右近の捏造したものとは言え、浮舟の「穢れ」により延期となっている。そして、特にそれを疑う理由を持たない母の胸中では、その可能性は瞬時に否定される。その過程を見事に描ききつたのが傍線を付した部分で、末尾の「かし」は、浮舟に向かって発したものであると同時に、自分自身に対しても発したものであるのだろう。だがこの瞬間に、浮舟は自分の最大の理解者であると感じていた母を失ってしまった。言うまでもないことだが、母が胸に描いている幻想と、自分が置かれている現実が如何に乖離してしまっているかを思い知らされてしまったからである。その辺りの機微を表すのが、「かたはらいたければ伏し目なり」と思われるのであり、前引Fの傍点部にあつた如く、浮舟があれば望んだ母との対面は、却つて彼女を追い詰める結果となつてしまったわけであるが、そのきっかけとなつているのが「石山」の用例であることは、重々見逃してはならない事実なのである。

このように見てくれば、玉鬘物語の場合と同様、浮舟物語に於いても、「石山」は女主人公のためにならない作用を及ぼしているのではないかということが、だんだん納得されてきたのではないかと思われるが、浮舟物語には未だ二つ、「石山」の用例が残っている。そのうちの一つ、「いさや。右近は、とてもかくても、事なく過ぐさせたまへと、初瀬、石山などに願をなむ立てはべる。……」(浮舟⑥一八〇頁)は、「初瀬」「石山」が並称される、この物語でも珍しい例(言うまでもないが、Aは並称ではない)であるが、単なる

慰めの言葉以上のものではない。だが、蜻蛉巻にある、浮舟物語最後の「石山」はまた、既に玉上も喝破している（¹²）ように、「作者の脆計」の臭いがする。

蜻蛉巻冒頭は浮舟失踪後の人々の動静が描かれるが、匂宮の使い、浮舟の母と、急を聞いた人々が次々と宇治を訪れるけれども、肝腎の薫はなかなか登場しない。死体無き浮舟の葬儀後に漸く明かされるその理由は、薫の母・女三の宮が病気であったため、「石山」に籠もっていたというものである。しかし、玉上も既に述べているように、これはおかしな話で、たとえ石山に籠もっていたとしても、薫の許にはちゃんと連絡が行ったはずで、そうならば彼は直ちに来ないはずがないのである。すなわちこれは、浮舟の葬送をやや強引に済ますため、最大の障害となる薫を、石山参籠を口実に遠ざけたとしか考えられないのであり、玉上はそれを「作者の脆計」と呼んだわけであるが、その手段として選ばれたのが、他ならぬ「石山」であるのは、返す返す重視しなければならない事実であろう。この場合、果たして石山観音は、浮舟のためにならないよう作用しているか否かは、ここで薫が動き、彼女が見つかった方が彼女にとつて幸せか否かが即断出来ない以上難しいが、少なくとも男君と引き離そうとしていることで、浮舟物語の始まりで見た、初瀬観音とは逆の働きをしているとだけはいい得ると思う。したがって、玉鬘物語と同様、浮舟物語に於いても、初瀬と石山の観音は、逆の作用をしていると言い得るのである。そして、この物語に於ける「初瀬」と「石山」について、ここまで追って来たところで、漸く最初に提出した課題に答える準備が整ったので、続いてそれを見てみよう。

五

第一段で提出した二つの課題のうちの後者については、これまでの考察が自ずと答えを示しているのではないかと考える。何故ならこの石山詣では、浮舟にとつて確実に危機を招来しているからである。右近が誤って匂宮を浮舟の寝所に導いてしまった主因は、匂宮と薫の声が似ていたからであるが、それを語る浮舟巻の叙述は、もう一つ気になる事実を浮かび上がらせる。

H（匂宮）「ものへ渡りたまふべかなりと仲信が言ひつれば、おどろかれたままに出で立ちて。いとこそわりなかりつれ。まづ開けよ」とのたまふ声、（薫ト）いとようまねび似せたまひて忍びたれば、（右近ハ）思いも寄らずかい放つ。

（⑥一二三〜四頁）

見て分かるように匂宮の科白は、直前の垣間見によって聞き出した、浮舟一行が翌日から物語でやる予定であることを利用した巧みなものであった。しかもその垣間見の場面には、そのころ久しく来訪しなかった薫が、物語での留守中にやって来て、気分を害するのではないかと心配する右近と、事前に知らせておけば大丈夫だとするもう一人の侍女の会話が描かれているとなれば、この物語で浮舟の許に匂宮を近づける上で果たした役割は決して小さくない。と言うのは、その時抱いた薫に対する罪悪感と、折良く薫が来てくれたという安堵感が、右近をして不用意に戸を開けしめた一因と考えられるからである。すなわち、この物語では、浮舟を追い詰めるのに積極的な役割を果たしているわけで、それが石山詣であるのは、今まで見てきたこの物語の論理に照らして、極めて自然なことなのである。そして、Aで突然その物語で石山詣であると明かされるのは、本節でそうしてきたように、その直前に位置する「初瀬の観音」の語と合わせて、注意深い読者に、この物語の、そうした構造に気づかせるための細工ではないかと思われる。何故なら、先

に掲げた、さほど深い意味を持たないと推測される浮舟⑥一八〇頁の例を除いては、「初瀬」「石山」が並ぶのは、長い物語中でもここしか無いからであり、もしもこの例が無かったとしたら、遠く離れた「初瀬」と「石山」の用例から、この物語に於いてはそれらが、このような関係にあると読み解くのは至難の業だからである。そして、言うまでもなくこうした話は、管見の及んだ限りでは説話等にも存在しないから、作者の全くの創作によるものと判断される。本節では「靈験譚」という断定した書き方を一切せず、全て「靈験譚的」という持って回った言い方をしたのは、正にこういう理由からであった。

さて先程、A以外の「初瀬」「石山」の用例は皆かなり離れたところにあると言ったが、既にお気づきのこととは思いますが、もしも浮舟がこの浮舟巻で本当に死んでいたら、玉鬘物語と浮舟物語は、男主人公と女主人公を結びつける役割を果たす初瀬観音の靈験譚的な話から始まり、その逆の役割を果たす石山観音の靈験譚的な話で終わるといって、完全な相似形を描いたであろう。勿論、こうしたタイプも他には存在しないから、これもまた作者の創作によると言えるのだが、これもお気づきのように、このことを言うには今少し慎重であらねばならない。言うまでもなく、浮舟はここで死んでいるわけではなく、「初瀬」の用例も未だ続いているからである。そこで次段では、その用例を再び追ってみよう。

六

早くに柳井が指摘し(一)、また、第二段に掲げた表からも理解されるように、手習巻は、初瀬靈験譚の色彩が濃厚な巻である。本章の構成上詳細は略すが、巻冒頭の、浮舟発見に至る複雑な過程にしてからが、要所所で必ず「初瀬詣で」が絡んでくるのであり、ここに初瀬観音の強い意志が働いていることは、明瞭に表されている。しかもその意志は、妹尼ではなく浮舟に働いていることは、やはり柳井により綿密に明かされており(二)、それに若干の傍証を加えることも可能ではあるが、その主旨については著者も賛同するところであるので、委細はその御論に譲り、ここではそれが浮舟の出家場面にまで及んでいることのみを確認する。

浮舟が回復して半年、妹尼は初瀬へのお礼参りを提案するが、それまでの経験から、妹尼と同じようには初瀬の靈験が信じられない浮舟は小野に残った。この初瀬詣では小野を人少なにし、中将の侵入を許すことよって浮舟を母尼の部屋へと追い詰めたが、浮舟はそこでこれまでの人生を反省し、柳井の言葉をお借りすれば、「生の方向へ」の出家(一)を選び取ったことは押さえておかねばならない。すなわち、ここでも初瀬詣では浮舟のために働いているのであり、その点に於いてはこれまでと、何ら変わるところがないのである。また、翌日やって来た横川僧都の手により浮舟は遂に受戒するが、これも、最大の障害である妹尼が、初瀬詣でのため留守であったから可能となったことだし、その時浮舟の剃髪をした二人の僧も、共に母尼の供で初瀬詣でをし、浮舟の第一発見者となった人々であったと語られる(⑥三三八頁)に及んでは、この出家の過程全体に、初瀬観音の意志が働いているよう描かれていることも疑いない。

以上のように見てくれば、手習巻以降も、浮舟が初瀬観音の庇護を受けているよう描かれていることに間違いはない。ただ、そこでの初瀬観音は、浮舟と薫を一向に結びつけようとせず、むしろ浮舟に出家などさせて二人の仲を裂こうとし、或る意味石山観音の作用と似てきているから、それまでとは異なる印象を受けるかもしれない。が、それについては二つほど答えが考えられる。一つは、浮舟は浮舟巻で確かに死んだのだが、何らかの要

因で物語を書き継いだので、自然と構造もずれてしまったということ。しかしこれは、既に第三章第二節の2で考えるように余りありそうもないから、本論文では採らないとする。残る可能性は、これまでの読解が未だ浅く、裏にもっと深いものが存在するという考え方である。そしてこれは、蜻蛉巻冒頭の「石山」の用例に触れた時、「ここで薫が動き、彼女が見つかった方が彼女にとって幸せか否かが即断出来ない」という言い回ししか出来なかったこと及び、Fの引用文を考えた時、「どうせ親子対面の実現させるなら、何故それが石山寺であつてはいけなかったか」という疑問を提出しながら、未だそれに答えていない等、積み残した課題が未だあることを思う時、如何にもありそうなことなのである。そこで次段では、もう一度それらについて考察してみよう。

七

Fで提出した疑問は、もし石山観音が本当に浮舟の不利益になるよう働いているなら、浮舟を追い詰める母との対面の方は、石山であつても一向構わないはずなのにという意味を有するものであつた。そしてそれに答えられないとなれば、「石山」は本当に浮舟の不利益になるよう働いているのかという疑問が生じる。説明の都合上今まで隠していたが、その手掛かりは実は、Bの引用文に存する。この部分に玉上は、「髭黒が玉鬘を手に入れたのが、石山の験とすれば、髭黒を満足させるにとどまらず、玉鬘をも幸福にすることであらう」という評を付ける⁽¹³⁾が、その理由は直前にある、「そのときは神仏の真意がわからず、あとになってわかるのである。結局、神仏はその人を幸福にしたのだ、と」であるらしい。これだけだと単なる思い込みと取れなくてもないけれども、実際にそのような話は存在する。『閑居友』下巻の「初瀬の観音に月詣りする女の事」(『長谷寺験記』下巻第廿七に同話あり)である。

大変長い話なので梗概だけ紹介すると、中頃、東の京に貧しい女人がいた。何をやっても上手くいかないで、毎月初瀬にお参りすると、三年目の夜に霊夢を見、それに従つて、側で寝ていた女性の衣を盗み、それを纏つて外へ出ると、馬に乗つた貴公子と出会い、女は結婚して幸せになった。一方、衣を盗られた女性は、その後何をやっても上手くいかず、とうとう没落してしまつたが、三年後に富裕になつた女人と邂逅し、事情を聞いた女人はその女性を我が姉として引き取り、全ての人が幸福になつたという話である。

成立年代から判断すると、源氏物語作者がこの話を知っていたか否かはやや疑問⁽¹⁴⁾だが、類似した話は他にもある⁽¹⁵⁾し、たとえそれらを全て見ていなかったとしても、現代人とは異なり、信仰篤い当時の人にとつては、こうした考えは親しいものであつただろう。そこで良く考えれば、源氏物語に描かれている石山観音の働きも、女性にとつては、さほど悪いものではなかったことに気がつくのである。

例えば玉鬘の場合でも、うっかりすると源氏の愛人となりかねなかつた六条院にいるより、髭黒と結ばれた方が幸せであつたかもしれないし、浮舟の場合も、常に大君の面影を求め、浮舟本人を理解しようとしてもしない薫の許にいるより、離れた方が幸せと言えるかもしれない。言わば、石山観音が本当に不利益を与えているのは、一見庇護しているようでありながら、その実女性を苦しめている源氏、薫といった男性のみなのであり、そこにこそこれらの男性を相対化する作用を読み取ることも可能になるのであるが、それについては次節以降で詳細に述べるとして、本節では、一見逆の作用をしているかのように見えるこの物語の「初瀬」と「石山」も、その根底では女性を守護するという、共通した働きを

していることに気がつけば良い。これが、手習巻で再開された浮舟物語に於いて、初瀬観音が石山観音と類似してくる理由なのである。また、だからこそ、一見女性に不利益をもたらすかのように見える石山観音には、初瀬と違って参詣の場面が描かれないのである。たとえ後で反転するにせよ、女性を不幸にしているように思われる場面で、石山観音の力が直接的に働いているように見えるのは、やはり避けなければならないことだったと考える。尤も、こうしたことは皆、この物語の「初瀬」と「石山」について、ここまで追求した後でないと見えてはこない。したがって、本節で延々と繰り広げてきた考察の大半が、無駄であったとも嘘をついたとも思っていない。むしろ、「初瀬」と「石山」の対照から始まって、これら全てに気がつくことが、作者の意図したことだったのではないかと思うのである。

しかし、こんな事を言うと、ならば、そもそも初瀬観音が、女君と男君を結びつけなければ良かったではないかと思う向きもあるかもしれない。けれど、この考えは無意味である。何故なら、男君と一旦結びつく以外に、この女君達が物語に登場する手段があったのだろうか。それ故、この二つの物語は、始発で初瀬観音が女君を男君と一旦結びつけ、それでは女君は真の幸せを得られないので結末で石山観音とその男君から離すという、相似形を描くであろう。そして浮舟の場合はさらに話が続けるのは、その詳細については拙著に記してある¹⁶が、浮舟の求めた幸せは、もはや霊験等で安易に得られるものではなく、己の不断の努力により維持し続けねばならないものであったからである。それを示すために浮舟物語は始発を示す初瀬観音の霊験譚の話で終わるのであって、石山観音のそれがない以上、この物語は終結することなく開かれている。この構造を示すために玉鬘物語を積極的に引用したのも、それが浮舟物語なのである。

注 (1) 柳井滋「源氏物語と霊験―浮舟物語の考察―」(阿部秋生編『源氏物語の研究』

東京大学出版会 昭49) 及び「初瀬の観音の霊験」(『講座源氏物語の世界』第

九集 有斐閣 昭59)。

(2) 重松信弘「源氏物語における観音と阿弥陀」(『愛媛国文研究』 昭38・2)。

(3) 吉海直人「『源氏物語』続編の背景」(『源氏物語研究而立篇』 影月堂文庫 昭58)。

(4) 人々も、「……右近が、数にもはべらず、いかでか御覧じつけられむと思ひたまへしだに、仏神の御導きはべらざりけりや。……」(玉鬘③一二四頁)。

(5) 『長谷寺霊験記』上巻第六、第九、第十二等。

(6) 『今昔物語集』巻第十六「参長谷男、依観音助得富語第廿八」(『宇治拾遺物語』九六にも同話あり)、「仕長谷観音貧男、得金死人語第廿九」等。

(7) 注(1)の後者。

(8) 厳密には竹河巻も存在するが、これは玉鬘が話の中心となっているとは言い難く、玉鬘物語とも呼称しづらい。

(9) 鬚黒から見ればこも間違いない利益であるが、女主人公を中心に見たいのでこう言った。なお、一説によれば、ここで利益に与ったのは鬚黒ではなく弁のおもとだということになるが、この場合も、こう言っておけば差し障りがない。

(10) 玉上琢彌『源氏物語評釈』第十一卷(角川書店 昭43) 三〇二頁。

- (11) 永井和子「浮舟」(『源氏物語講座』第四卷 有精堂 昭46)。
- (12) 玉上琢彌『源氏物語評釈』第十二卷(角川書店 昭43) 二一六頁。
- (13) 玉上琢彌『源氏物語評釈』第六卷(角川書店 昭41) 一九一頁。
- (14) 『長谷寺靈驗記』は「中頃」を、「鳥羽院御宇」とする。
- (15) 『沙石集』卷第二の四「薬師観音利益事」には、この話を清水観音の利生譚として載せる。時代指定なし。
- (16) 拙著第3部 テキストの構造 第3章 手習歌の機能 第2節 手習巻・浮舟の手習歌

第三節 男踏歌の対照

一

竹河巻で、「まめ人」というあだ名を「うれたし」と思った薫は、「すき者ならばむかし」と、正月二十余日に玉鬘邸に赴く(⑤七〇頁)が、そこで、玉鬘大君に思いを寄せ、いつもの如く垣間見しようとして来た夕霧の息・蔵人少将と出会い、二人はそのまま玉鬘の歓待を受ける。

A (蔵人) 少将も、声いとおもしろうて、「さき草」うたふ。さかしら心つきてうち過ぐしたる人もまじらねば、おのづからかたみにもよほされて遊びたまふに、主の侍従は、故(鬚黒)大臣に似たてまつりたまへるにや、かやうの方は後れて、盃をのみすすむれば、「寿詞をだにせんや」と辱められて、竹河を同じ声に出だして、まだ若けれどをかしうたふ。簾の内より土器さし出づ。「酔ひのすすみては、忍ぶることもつつまれず、ひが事するわざとこそ聞きはべれ。いかにもてないたまふぞ」とともにうけひかず。小桂重なりたる細長の人香なつかしう染みたるを、とりあへたるまにかづけたまふ。「何ぞもぞ」などさうどきて、(薫)侍従は主の君にうちかづけて去ぬ。ひきとどめてかづくれど、「水駅にて夜更けにけり」とて逃げにげり。

(⑤七二〜三頁)

一見何の変哲もない宴会の場面のように見えるかもしれないが、それにしては傍線を付したような単語が、きら星の如く並ぶのが気にかかる。その詳細については後に譲るが、これらは皆、男踏歌という年中行事に関わる言葉なのである。だが、ここで問題になるのは、この場面ではそのような行事が行われているわけでは決してなく、これはあくまで私的な宴の描写にしかすぎない。にも拘わらず、何故これほどその行事を思わせる単語が羅列するのかということなのである。

勿論この物語には、六条院で行われるものを代表として、臣下の家で催された年中行事の描写は存在する。しかしこの場面はそれですらない。このような場面は他の行事では存在せず、それ故この物語に於けるこの行事の特殊性は自ずと浮かび上がってこようが、となれば当然、その意味性について考察しておかなければならない。そこで本節ではそれについて取り上げ、併せて光源氏の栄華の相対化について触れてみたい。

二

前段で、この物語に於ける男踏歌の特殊性について指摘したが、実はこの行事は、存在自体が特殊だとも言える。と言うのは、既に諸先学により明らかにされているが、男踏歌は、平安初期に誕生するけれども円融朝には廃絶される命短い行事(一)で、子細は、漢文諸記録等にもほとんど記載されていないにも拘わらず、一条朝に成立したこの物語には、末摘花巻・初音巻・真木柱巻・竹河巻と、都合四度もそれに対する言及が見られる上に、末摘花巻を除く三巻では、詳細な行事描写まで伴うからである。

これは、歴史物語まで視野に入れても、平安時代の他の散文作品にも見られない、この物語ならではの特徴であるが、それ故にこれまでは、もっぱら史料として利用されてきた。しかし、言うまでもなくこの作品は純粹に虚構のものであり、その描写がどんなに詳細を極めたとしても、これを史実として扱うのは危険である。

例えば、大抵の注釈書には、男踏歌は隔年に行われた行事となっているが、私に調べた

限りでは全くそうならない。参考までに、記録で確認できた限りの年代と資料名を掲げておくと次のようである。

宇多朝 寛平元(年中行事抄)年

醍醐朝 延喜三(日本紀略)、七(太后御記)、十(西宮記)、十三(踏調式、貞信公

記抄)、十七(日本紀略、踏調式)、二十二(日本紀略)、延長元(踏調式)、

七(太后御記、李部王記)年

朱雀朝 承平四(日本紀略、九曆)、天慶五(日本紀略、李部王記)、六(日本紀略)

年

村上朝 天曆四(李部王記)年

円融朝 天元二(日本紀略、小右記目録)、天元六(河海抄)年

周知の如く、この時代の史書には散逸しているものが多く、また見落とし等もあろうから、これだけだったと断言することは勿論出来ない。しかし、一応の目安ぐらいにはなるうからそのつもりで見れば、天皇の代替わりごとにかんがりの間を生じ、二年続けて行われた延喜二十二年と延長元年、天慶五年と六年の二例を除いては、平均間隔は三〜四年となり、注(1)に掲げた袴田氏も述べられているように、むしろ臨時行事と見なすべきであろう。それでは何故、大抵の注釈書に隔年に行われたとあるのかと言えば、断定は出来ないものの、この物語の初音巻と真木柱巻で行われた二つの男踏歌が、二年間隔であったことによるのではないかと思うのである。だとしたらこれは本末転倒で、現にこの物語に於けるもう一つの男踏歌も真木柱巻から三十八年後という計算になるから、むしろこの二つの巻の例が異常に近く、詳しくは後述するように、そこにこそ意図があったのだと思われる。無論、隔年にこだわる向きはこの間にも、書かれていないだけでその行事は存在したとするのであろうが、それを裏付けるだけの積極的証拠はなく、また、もしそうだとしても、ならば何故この三つの男踏歌だけが特別に描かれるのかということが疑問として湧くはずで、結局本節が辿る道筋と同じになるはずである。ただ、説明の都合上、それは後に回し、もう一つ、この物語を史料として用いることの危険性を述べておけば、これも良く注釈書にある、男踏歌は宮中から出、都中の貴顕の家を練り歩くというものがある。

踏歌に男女の別があることは、既に注(1)にも触れておいたが、「男」踏歌という名称自体が、既にそのことを自ずと語っている。男踏歌とは異なり女踏歌は、毎年正月十六日に、宮中に於いて行われ、室町時代まで残存したが、この物語に於ける「踏歌」という語の用例は、どちらとも判断のつかない花宴巻(2)、賢木巻の各一例を除いて、残り七例全てが男踏歌を意味し、女踏歌を明確に指すものは存在しない。この物語が書かれた時には既に無かったはずの男踏歌が詳細に描かれ、確実にあったはずの女踏歌が描かれないというのは、何とも奇妙なことであるが、その理由は、二つの踏歌の差にあったに違いない。と言うのは、帝の面前のみで行われたことが確実な女踏歌に対して、男踏歌は、帝前で舞った後、北廊の戸から出、移動するからである。

源氏物語に於ける年中行事の特徴については河添房江の論等に詳しい(3)が、宮中での行事は意外に少なく、六条院を始めとして、宮中以外でそれを模して行われたとされる行事の描写の方が遙かに多いのである。これは、この物語が光源氏に仕えていた女房の目を通して語られているという建前上、或る程度仕方がないのかもしれないが、同時に、河添も説く如く、この物語の関心のありどころを示してもいよう。すなわち、この物語は、宮

中というより、むしろそれ以外の繁栄を語るのに関心があるわけである⁽⁴⁾。そして、そういう意味では、踏歌は正にうってつけの行事であった。と言うのはそれは、男女共に、慶祝・繁栄予祝といった目的を持つからであり、中でも、宮中から移動できる可能性を有した男踏歌は、願ってもないものだったのだろう。これがこの物語に、女踏歌が無く、男踏歌の叙述のみある理由だと思われるが、今、「宮中から移動できる可能性」という微妙な言い回しを用いたのは、既に注(1)の袴田氏の御論にもある如く、男踏歌が内裏外に出たという確実な証拠は、漢文記録では発見できないからである⁽⁵⁾。換言すればこれは、男踏歌が内裏外に出たほとんど唯一の証言がこの物語ということであるが、この物語が虚構で、しかも、年中行事に関しては、先ほど述べたような傾向があるとすると、女踏歌同様、実際は男踏歌も内裏から出ることは無かったとしても、物語の論理に合わせてねじ曲げた可能性もあり、やはりこれを信ずるのは危険ということになる。

したがって、所詮虚構の作品を史料として用いることには無理があるとの、ごく当たり前の結論になってしまふのであるが、本書は歴史の研究ではなく、あくまで文学のそれを意図するものであるから、細かい史実はこの程度に止め、この物語に描かれている男踏歌について以下見ていこう。

三

この物語を史料として用いることの不当性を前段では主に述べたが、男踏歌についての文学的研究が、これまで全くなされなかつたわけでは勿論ない。だがそれは、時代を延喜天曆と定めるための所謂準拠である⁽⁶⁾とか、三つの場面が余りにも類似するので、単なる模倣反復か或いは年中行事絵のようなものが存在し、それを基に作者が描いたのではないか⁽⁷⁾等というものがほとんどであった。準拠は、これもこの物語独自の方法であるから、今軽々しく否定するつもりもないが、それを言ってしまうえば、また別の問題へと発展していこう。しかしここでは、それを追求するつもりはないので触れないこととしておきたいが、後者は聊か短絡的にすぎるのではあるまいか。

男踏歌の描写が単なる模倣反復とは思えないことは、本節のこれまでの叙述が自ずと明かしていることと思いが、ここでさらに一つの証拠を加えよう。それは、これらの場面には或る種の法則性が見受けられるということである。その手掛かりとなるのは、男踏歌は、竹河巻以外は全て玉鬘系の巻々に存するという、注(1)に掲げた著書中の山中の発言であるが、「玉鬘系」という語から分かるように、これは、注(7)に掲げた武田の、竹河巻別作者説に従ってなされたものであり、現在ではそれは余り認められていないから除外して考えると、行事の実際描写の存する巻は、全て玉鬘の登場する巻だとなろう。これが単なる現象論ではないことを証していこうと思うのであるが、その前に一つ確認しなければならぬことがある。それは、この三つの行事描写の場面は互いに独立しているわけではなく、連関しているという事実である。

例えば真木柱巻のそれでは、男踏歌の一行は、「御前、中宮の御方、朱雀院とに参りて」⁽⁸⁾と、前回とほとんど同じコースを辿り、さらに、「六条院には、このたびはとこそせしと省きたまふ」と表現する(同頁)ことよって、否応なく読者に初音巻を意識させ、竹河巻は、注(7)に掲げた論で、武田が模倣説を唱えた如く、細部まで初音巻と類似させた上に、詳しくは後述することになるが、「故六条院の、踏歌の朝に女方にて遊びせられける、いとおもしろかりきと、右大臣の語られし」という冷泉院の言葉⁽⁹⁾

九九頁)で、読者が過たず初音巻を思い起こすよう仕組まれている。ただ、ここで注意しなければならぬのは、この竹河巻の描写は真木柱巻のそれとは余り似ていない(8)という点である。換言すればこれは、この物語に存する三つの男踏歌の行事描写は単純に類似しているわけではなく、真木柱巻は初音巻、竹河巻も初音巻という、はっきりとした方向付けが認められ、二つずつ二組と捉える方が正しいということになる。そしてこの指定された二組を対照させてみると、微妙な相違が存在しているのであり、そこに一つの意味性が読み取れるのであるが、物語の順に従って、まずは初音巻と真木柱巻から見よう。

初音巻では先ず男踏歌一行のコースが示され、特に六条院には気を遣っていると語られる。その後、クライマックスである六条院での踏歌の様が描かれるので、少々長くはなるが、その部分を引用しよう。

B 朱雀院の後の宮の御方などめぐりけるほどに、夜もやうやう明けゆけば、水駅にて事ぞがせたまふべきを、例あることよりほかに、さまことに事加へていみじくもてはやさせたまふ。……かざしの綿は、にほひもなき物なれど、所からにやおもしろく、心ゆき命延ぶるほどなり。……ほのぼのと明けゆくに、雪やや散りてそぞろ寒きに、竹河うたひてかよれる姿、なつかしき声々の、絵にも描きとどめがたからんこそ口惜しけれ。御方々、いづれもいづれも劣らぬ袖口ども、こぼれ出でたるちちたさ、物の色あひなども、曙の空に春の錦たち出でにける霞の中かと思わたさる。あやしく心ゆく見物にぞありける。さるは、高巾子の世離れたるさま、寿詞の乱りがはしき、をこめきたる言もことごとしくとりなしたる、なかなか何ばかりのおもしろかるべき拍子も聞こえぬものを。……

(③一五八〜六〇頁)

男踏歌の一行は、子刻頃帝前から移動し、寅刻頃戻るとある(9)が、ここでは、朱雀院を経由した上に、六条院は遠いので、一行がそこに到着したのは夜明けであったと語られる。しかし源氏は歓待し、「水駅」であるにも拘わらず、定め以上のもてなしをした。

「水駅」というのは男踏歌特有のもので若干の解説が必要であろうが、一口に言えば男踏歌のある年に前もつて定められる、一行の饗応役であり、他に飯駅駕駅というものも存在するが、女踏歌同様、この物語には見られない。規定によれば、水駅は酒或いは湯漬のような簡単な食事、飯駅駕駅は正餐を出すことになっている(10)が、いずれにせよ相当な経済的負担となったと思われる、男踏歌が早く廃絶したことの一因として考えられている。しかし、これを立派に務めれば己の勢力を誇示することにもなるわけで、記録によれば、時の中宮や宮達、大臣や大将といった人々が各駅を務めている。ここで、「水駅」であるにも拘わらずそれ以上のことをしたのは、この時点では六条院にそれだけの力があつたことを示すと思われ、それが、傍線を付した、見物の女性達の袖口の華やかさの描写へと繋がっていくのだと考えられる。

またここでは、「にほひ」のない「かざしの綿」が、六条院という「所から」のせいであろうか「おもしろ」とか、男踏歌の行事自体は面白くないはずなのに、六条院でのそれは、「あやしく心ゆく見物」であった等、六条院という「場」の特殊性を強調する表現が多出することにも注意を払うべきであろう。すなわち、これらは総体として、六条院という「場」の讚美へと収斂していくと考えるのであり、これが、男踏歌はそれが展開された家の力を象徴すると考えられると述べた所以なのであるが、それは真木柱巻でも同様である。

C 御前、中宮の御方、朱雀院とに参りて、夜いたう更けにければ、六条院には、このたびはとこそせしと省きたまふ。朱雀院より帰り参りて、春宮の御方々めぐるほどに夜明けぬ。

ほのぼのとをかしき朝ぼらけに、いたく酔ひ乱れたるさまして、竹河うたひけるほどを見れば、内の大殿の君達は四五人ばかり、殿上人の中に声すぐれ、容貌きよげにてうちつづきたまへる、いとめでたし。童なる八郎君はむかひ腹にて、いみじうかしづきたまふが、いとうつくしうて、大将殿の太郎君と立ち並びたるを、尚侍の君も他人と見たまはねば、御目とまりけり。やむごとなくまじらひ馴れたまへる御方々よりも、この御局の袖口、おほかたのけはひいまめかしう、同じものの色あひ重なりなれど、ものよりことにはなやかなり。正身も女房たちも、かやうに御心やりてしばしは過ぐいたまはましと思ひあへり。みな同じごとかづけわたす綿のさまも、にほひことならうららじうしないたまひて、こなたは水駅なりけれど、けはひにぎははしく、人々心げさうしそして、限りある御饗応などのことどももしたるさま、ことに用意ありてなむ大将殿させたまへりける。

(③三八二〜三頁)

鬚黒と結ばれて以来、玉鬘は鬱々として楽しまなかつた。案じた鬚黒は、折から男踏歌のある年であつたので、それを機会に、尚侍でもある玉鬘を宮中に出仕させ、それによつて玉鬘の機嫌を取り結ぼうとした。そのため、この物語で唯一度の、宮中での男踏歌の描写が成立するわけであるが、この場面でも、「袖口」、「綿」の「にほひ」、「水駅」といった、Bと同じ表現が使用され、この「場」が、「やむごとなくまじらひ馴れたる御方々」のもとより勝ることが示されている。同じ行事の描写であるから、同じ表現が出て来るのは或る程度当然とも言えるが、肝腎なことは、今回これらの表現によつて讚美されるのは玉鬘の局で、最後にその用意は鬚黒がしたと殊更強調されることにより、結果的には鬚黒家の勢力を示すものへと収斂していき、六条院は何の関係も有していないことである。

六条院は、読者にBを想起させるべく仕組まれている、「このたびはとこそせし」以下の表現で最初に省略されているのだが、ここで気になる問題としては、この二つの場面の時刻の相違がある。Bで、男踏歌の一行が六条院に到着したのは、夜も白々と明ける頃であつた。ところがCでは、「夜いたう更けにければ」とあるのみだから正確なところは不明であるけれども、朱雀院から引き返し、春宮の御方々をめぐるうちに夜が明けたとあることより、時間的には恐らくBより早いと思われるにも拘らず、一行は六条院には来ないものである。

尤も、これは源氏の意志によるものとあるから、それはさほど重要な意味を持たないと思う向きも或いはあるかもしれない。しかし、古く『弄花抄』が指摘しているように、前もつて決定しているはずの饗応役を、当日になつて勝手に辞退することが可能かという問題があり、その設定にすら多少の無理が感じられるし、六条院が省略されることによつて鬚黒家の力を示す玉鬘の局での男踏歌の描写が成立するという物語の流れも、決して軽視できるものではないだろう。すなわち、ここでは既に六条院には栄華がなく、それは鬚黒の許へと移動しているとする山中の読み(II)が妥当だと思われのであり、その端的な表徴は氏も言われている水駅の移動であろう。

水駅が、家の力を示すことについては既述したが、実はそれが、この物語に飯駅駕駅の

見られない一因ともなっているらしい。何故なら、一定の上限がある水駅だからこそ、それ以上のことをすれば目立つのであり、初めから最上が期待されている飯駅芻駅だと、どれほどのことをしようと、そうはならないと思われるからである。また、こうした目に見える形で栄華の推移が描けることが、女踏歌より男踏歌が勝っている点なのであり、そこにこそ、廃絶された行事をわざわざ使った所以があると思われるが、山中の読みと私見では大きく相違する点が一つ存在する。それは、山中が栄華は源氏から玉鬘に移動したと見られるに對して、私見では、最初からそれは玉鬘の許にあったと捉えるからである。そしてその根拠は、この物語に於ける「水駅」の用例分布にある。

「水駅」はこの物語に四例しか見られないが、そのうちの三例については既に掲げた。見てお分かりのように、A・B・Cの引用文中に、各一例あるからである。B・Cについては何も問題がないと思うが、聊か気になるのはAの用例であろう。と言うのは、本節第一段でも既に触れたように、B・Cは、間違いなく男踏歌の行事描写であるけれども、Aはあくまで玉鬘邸での私的な宴であり、男踏歌とは何の関わりもないからである。しかも残った一例も、冷泉院で繰り広げられた本当の男踏歌の描写中にあるわけではなく、Aの翌朝薫から手紙が届き、玉鬘の息・藤侍従が返事を認めるという場面に、「昨夜は、水駅をなん咎めきこゆめりし」と出てくる(⑤七四頁)のだからなおさらである。勿論これは本来の水駅とは関係が無く、ただ単に早く帰ることの謂であるわけだが、樂人である藏人少将が酒を勧められる場面が存在するから、冷泉院は恐らくいずれかの駅であったと推測されるにも拘わらず、本物の男踏歌の場面ではその語は使用されていないのに、ここではいとも簡単に用いられていることが問題なのである。この理由としては、玉鬘の存在以外のことは考え難いであろう。すなわち、この物語に於いて水駅と玉鬘とは密接な関係を有するのであり、たとえ本当の男踏歌の描写であっても、玉鬘の存在を欠く冷泉院では、「水駅」の語は使われないと考えるのが一番自然だと思ふのである。そしてこのことは、裏を返せば、初音巻で六条院が「水駅」になれたのも、実はその場に玉鬘がいたからであり、それを失ってしまった真木柱巻に於いては、六条院は端から「水駅」になるなど不可能であったことを意味する。つまり、玉鬘を失ってしまった時点で、六条院はその先の繁栄が無くなってしまいうわけであり、これが、初音巻より時間が早いにも拘わらず、真木柱巻で六条院が省略されてしまった真の理由だと思ふのである。

以上で、初音巻と真木柱巻の男踏歌の描写を対照した時に見えてくることについては述べ終わったと思うが、本段最初に指摘したように、男踏歌の対はもう一組ある。続いて初音巻と竹河巻を対照してみよう。

四

初音巻と竹河巻の男踏歌を対照する前に、竹河巻の描写は、直前になるはずの真木柱巻のそれではなく初音巻を何故指向するかについて触れねばなるまいが、それは竹河巻で男踏歌が展開される「場」が冷泉院であるため、後で引用する冷泉院の言葉にあるように、六条院の全盛時代と比較する意図があったのだろう。裏を返せばこのことは、真木柱巻の男踏歌は、やはり源氏の栄華を描くものではなかったということにもなるが、話を戻すのはやめ、先へと進んでいくことにする。

初音巻と竹河巻の男踏歌の最大の相違点は、玉鬘と、それと密接な関係を有すると思われる水駅の不在であることは既に述べたが、他にも、これと関連すると考えられる微妙な

違いが数点指摘できる。先ず竹河巻の男踏歌の記述を見てみよう。

D その年返りて、男踏歌せられけり。殿上の若人どもの中に、物の上手多かるころほひなり。その中にも、すぐれたるを選らせたまひて、この四位侍従、右の歌頭なり。かの蔵人少将、楽人の数の中にありけり。十四日の月のはなやかに曇りなきに、御前より出でて冷泉院に参る。女御も、この御息所も、上に御局して見たまふ。上達部、親王たちひき連れて参りたまふ。右の大殿、致仕の大殿の族を離れて、きらきらしうきよげなる人はなき世なりと見ゆ。内裏の御前よりも、この院をばいと恥づかしうごとと思ひきこえて、皆人用意加ふる中にも、蔵人少将は、見たまふらむかしと思ひやりて静心なし。にほひもなく見苦しき綿花もかざす人からに見分かれて、さまざま声もいとをかしくぞありける。竹河うたひて、御階のもとに踏み寄るほど、過ぎにし夜のはかなかりし遊びも思ひ出でられければ、ひが事もしつべくて涙ぐみけり。后の宮の御方に参れば、上もそなたに渡らせたまひて御覽ず。月は、夜深うなるままに昼よりもはしたなう澄みのぼりて、いかに見たまふらんとのみおぼゆれば、踏むそらもなうただよひ歩いて、盃も、さして一人をのみ咎めらるるは面目なくなん。

(⑤九六く七頁)

引用部の最初に、他の男踏歌の場面では見られなかった、歌頭・楽人に対する叙述が存することに端的に示されているように、全体的にこの記述は、行事が行われている冷泉院という“場”よりも、男踏歌の一行、就中その一員である蔵人少将という“人”に対して多くの筆が割かれている。そして多分それと軌を一にするものとして、B・Cには共通して存在する、行事が行われている“場”の繁栄を示すと考えられた見物の女性達の袖口の華やかさに対する描写はここにはなく、「にほひ」のない挿頭の「綿花」についての叙述は無いわけではないが、初音巻ではそれが、「所からやおもしろく」という言葉で、六条院讚美へと収斂していたのに対して、ここでは「かざす人からに見分かれて」と、冷泉院讚美へと向かわないことが挙げられる。勿論、「内裏の御前よりも、この院をばいと恥づかしうことに思ひきこえて」という言葉も無いのではないのだが、それはやがて蔵人少将の心中へと移行していき、聊か話が流れている。それに何より、男踏歌の行われる“場”に属する人物が見るのではなく、楽人が逆にその“場”を見る等ということ自体、これまでの描写には無かった。「見る」ことが同時に「所有する」ことでもあった当時としては、この差は決して見逃すべきではない。

尤も、周知の如くこの巻は、この物語で唯一つ、光源氏側の視点で描かれない巻であるから、これらのことも或る程度は、その方面からの説明が可能かもしれない。しかし、それをしてもお疑問となつて残るであろうことは、この翌朝に冷泉院によつて語られる、「故六条院の踏歌の朝」の女楽(⑤九九頁)である。おそらくこれは、初音巻での男踏歌の翌朝、源氏によつて企画された女楽を指すのであろうが、結局それは実行されず、したがって物語中には描かれていないことが先ず問題になる。

けれど、このようなことはこの物語には良くあり、古注釈書の多くが理解しているように、この冷泉院の言葉によつて、逆にその時女楽が行われたことが確定されたと考えるのも一応は可能であるが、それについては伊井春樹が、初音巻では時間的に不可能であるとの計算結果を既に出されている(註)し、今のところその矛盾点は発見できない。ならばこれをどう理解すれば良いかと言えば、一条兼良が初音巻に付けた、「……わたくしの後宴

は六条院にて御かた／＼つとひ給ふつゐてに女樂あるへきよういあり されともあらましはかりにてその事ありともみえず 女かくはわかかなの下にある事也」という注^(B)が、その最大の手掛かりとなるのではないかと思う。これは或いは言葉通りの意味で、兼良にそこまでの考えは無かったのかもしれないが、それでもこれが捨てきれないのは、多分これが真実を言い当てていると思うからである。と言うのは、冷泉院は、この思い出話の後、薫に琵琶、玉鬘大君に箏を弾かせるのだが、そこにある、「御息所の御琴の音、まだ片なりなるところありしを、いとよう教へないたてまつりたまひてけり」という表現(⑤九九頁)は、既に藤村潔も気づいている(8)ように、若菜下巻で、源氏が女三の宮に琴を教えたことを踏まえていると思われるからである。つまり冷泉院の言葉は、表面的には初音巻の男踏歌の場面を指向するようでありながら、裏では若菜下巻の女樂の場面を手繰り寄せたものなのであり、その意味性を問わねばならないことになる。

ここで問題となるのは、若菜下巻の女樂の位置づけであろうが、言われる如くそれは六条院最後の光芒であり、それを境として六条院世界は、それまでに孕んでいた数々の矛盾を露呈し、一挙に暗転していく。したがって、B・Cとは異なり、玉鬘と水駅の存在を欠いた上に、「場」の純粹讚美も持たないDの男踏歌は、さらにこのようなものも招来することによって、冷泉院の表だけの榮華、先行きのない繁栄を照らし出していると言えよう。その証拠に、この直後、罪の子として子供に恵まれなかった冷泉院が、玉鬘大君によって次々と一女一男を誕生させるが、本来慶事となるはずのこの事件が、秋好を初めとして、それまで理想的に見えた夫人達の嫉妬を招き、却って冷泉院世界の矛盾を暴露する。いわばDの男踏歌は、その前兆であったとも言えるのである。

さて、この男踏歌が指し示す場面は実はもう一つ存在する。それは、引用文中の二重傍線部や、この翌朝の女房と薫との歌の贈答、「竹河のその夜のことは思ひ出づやしのぶばかりのふしはなけれど」、「流れてのたのめむなしき竹河に世はうきものと思ひ知りにき」(⑤九八頁)という、少々露骨とも言える形で、最初に掲げたAの場面をである。そこでそろそろ、それについて説明しなければならぬ時が来たようだ。

五

Aは単に、男踏歌を踏まえた機動的な会話がなされるのみであり、本当の行事とは何の関係も無いのだが、それにしても妙なことが多すぎる。その一つが、本物の男踏歌の描写であるDでは、必然性があつたと推測されるにも拘わらず使われず、Aではいとも簡単に用いられる「水駅」の語であることは既に述べたが、おそらくそれは玉鬘の存在の有無によるのであることもそこで述べた。それに間違いは無いのだが、より正確には、玉鬘は、男踏歌という行事そのものと密接な関係を有していると思われるべきである。

引用文では省略したが、初音巻の男踏歌は、懸案であつた紫上と玉鬘の初めての対面に一役買っている面があるし、真木柱巻のそれは、尚侍としての玉鬘が、宮中に出仕するきっかけとなっていることは、既に本節第三段で軽く触れた。しかも、冷泉帝に言い寄られた玉鬘はこの後直ちに退出し、以後二度と出仕することは無い。すなわち玉鬘は、男踏歌の時しか宮中にいないのである。竹河巻では、確かに玉鬘の存在は冷泉院には無いけれども、その代わりに彼女の娘がいるのであり、これも玉鬘と無縁とはいえない。つまり玉鬘は、男踏歌という行事そのものと深い関わりを有しているのであり、おそらくこれが、玉鬘系の巻々にしか男踏歌が存在していない原因ともなっていると思われるが、だとすれば、

竹河巻で真に問題となるのは、代わりしかいないDよりも、本人が存在するAの場面ということになりかねない。そしてこれが考えすぎとも言えないことは、「竹河」という語の分布と、「場」の讚美の描写の問題から証明できる。前者から見ていこう。

「竹河」というのは、男踏歌で歌われる催馬楽の曲名で、この物語には八例見られるが、その内訳は、初音巻と真木柱巻の、その行事の描写中に各一例、残り六例は全て竹河巻ではあるのだけれど、その巻のその行事の描写の中には三例しかなく、後の三例は、第一段の引用文から分かるように、Aに一例、その翌朝の、薫と藤侍従との贈答、「竹河のはしうち出でしひとふしに深き心のそこは知りきや」「竹河に夜を更かさじといそぎしもいかなるふしを思ひおかまし」(⑤七四頁)に二例と、結局Aがらみの場面で全て用いられていることになる。この語の性格上、男踏歌の行事描写中に使われているのは当然として、問題はその三例で、これはAが、他の男踏歌の場面と同列に扱われるべきものであることを示唆しているのではなからうか。そしてそれは、後者の問題を視野に入れた時ますます濃厚となる。

聊か含みのあるDの場面を除いては、この物語に於ける男踏歌の描写には皆その場の讚美があることは既に述べたが、Aの場面も、大分比重は薫に偏ってはいるものの、「場」が玉鬘郎ということもあり、蔵人少将の歌う催馬楽「此殿は」、或いは「寿詞」という科白、はたまた、他の男踏歌の描写中に存在した見物の方々の袖口の記述の残滓と見られる「小桂重なりたる細長」と、「場」の讚美と理解できる叙述が多いのである。それ故このAは、「擬男踏歌」とでも呼びたい場面になり得ていると思うのだが、問題はこのような場面が何故存在しているかであろう。

言うまでもなくこの場面は、どれほど男踏歌を指向しようとするか、^擬にすぎないのであり、本物にはなり得ないことを最大の特色とするが、その理由としては、鬚黒太政大臣亡き後、玉鬘郎には本当の男踏歌一行が来る由もないので採られた次善の策というのが一応は考えられる。しかし、だとすると、何故冷泉院の許でも重ねて男踏歌が描写されねばならなかったかが聊か不明となるし、鬚黒の死が読者に知らされるのも、この巻が初めてであることまで視野に入れれば、この辺りから既に作者の腕計が張り巡らされている感も無くはない。すなわち、これまでは必ず対として現れていた玉鬘と男踏歌を、何としても分離することがこの巻の至上命題であったと考えられるわけで、それが何を意味するかは、既に前段の考察から明らかだろう。

玉鬘を欠く男踏歌は、冷泉院世界崩壊の予兆であったが、本物の男踏歌の来ない玉鬘邸でもそれは同様であったと思われ、事実この後では玉鬘には嘆きの日々が訪れる。その序曲として描かれるのが、このAの場面と考えられるわけである。その証拠に、先ほど挙げた「場」の讚美の描写も、実は微妙に讚美していない。例えば、催馬楽「此殿は」は、肝腎な部分を抜き「さき草」と言われている⁽¹⁴⁾し、「寿詞」は結局なされない。そして「水駅」に至っては、第三段でも少し触れたように、単に早く帰ることの比喻として使われるという具合に、見事なまでに空虚化されているのである。しかも重要なのは、これらはこの場面のみを見ただけでは決して分からず、他の男踏歌の場面と対照させてみた時に初めて浮き上がってくる、いわば対照的方法とでも言うべき手段が採られていることなのである。つまり、この物語に於ける行事描写は、決して無意味な羅列ではなく、特にこの男踏歌という行事は、明確に指し示された二つの場面を対照することにより、その時点で

のその”場”の栄華の本質を、浮き彫りにするよう仕組まれていると結論づけられるのである。

- 注 (1) 踏歌自体は天武朝から存したと言われるが、正史に於いては、『日本書紀』持統天皇七年正月十六日の条に「漢人等、奏踏歌」とあるのを初めとする。男女の別がいつ頃生じたかは、正確には不明だが、『河海抄』末摘花巻の注に、「聖武天皇天平元年正月十四日始有男踏哥」とあるのは、他に記録がないので疑わしいかもしれないけれども、『年中行事秘抄』所引の「仁和五年正月十四日踏歌記」に、男踏歌を「累代之遺美也」としているの、少なくともそれ以前と思われる。廃絶の時期は、『河海抄』初音巻の注に、「円融院天元六年正月十四日有男踏歌（中略）今度以後男踏歌絶而無之」とあるが、これも他に記録がないので、『小右記目録』の天元二年を良しとすべきかもしれない。なお詳しくは、山中裕『歴史物語成立序説』（東京大学出版会 昭37）、同『平安朝の年中行事』（塙書房 昭47）、臼田甚五郎『神道と文學』（白帝社 昭16）、杉山とみ子「踏歌」小考（『星美学園短期大学研究論叢』 昭60・3）、袴田光康「男踏歌と宇多天皇——天皇“から”帝王“への回路——」（『文学研究論集』第七号 平9・9）等を参照のこと。
- (2) 但しこれは、右大臣の藤花の宴に招かれた源氏が、女房達の出衣の袖口の華やかさを見て、「踏歌のをり」を連想したものであり、実際の踏歌とは関係がない。
- (3) 河添房江「六条院王権の聖性の維持をめぐって——玉鬘十帖の年中行事と「いまめかし」——」（『源氏物語表現史 喩と王権の位相』 翰林書房 平10）。
- (4) 断るまでもないと思うが、これは宮中の繁栄を軽んじていることとは直結しない。むしろ、そこは永遠に繁栄し続けることを前提としているので、今更描いたりしないのかもしれないが、そのどちらであるか判断する根拠を今のところ持たないので保留にしておく。
- (5) 本節が基にした論は、昭和六十一年に書いたものだが、その時もこの事実には気づいてはいた。しかし、当時院生であった自分の漢文読解力に自信が持てず、つい通説に従って内裏外に出たと書いてしまったが、今この点は訂正する。なお、平間充子「男踏歌に関する基礎的研究」（『日本歴史』 平12・1）も、男踏歌は原則として内裏内に設けられた東宮・中宮・尚侍・親王・大臣らの局や直廬を廻り、内裏外へは赴かないとする。
- (6) 山田孝雄『源氏物語の音楽』（宝文館出版 昭53（復刻版第二刷）等）。
- (7) 武田宗俊「竹河の巻」に就いて——その紫式部の作であり得ないことに就いて——」（『源氏物語の研究』 岩波書店 昭58再版）。
- (8) 藤村潔「源氏物語竹河巻論補遺」（『源氏物語の研究』 桜楓社 昭55）。
- (9) 『河海抄』引用の「踏歌式」による。
- (10) 『花鳥余情』による。
- (11) 山中裕「六条院と年中行事」（『講座源氏物語の世界』第五集 有斐閣 昭56）。
- (12) 伊井春樹「六条院の女楽——玉鬘十帖の成立に関連して——」（『国語と国文学』 昭46・8）。

(13)

中野幸一編源氏物語古注釈叢刊第二卷『花鳥余情』一八五頁。

(14)

周知の如く「此殿は」は、「この殿は むべも むべも富みけり 三枝の あはれ 三枝の はれ 三枝の 三つば四つばの中に 殿づくりせりや 殿づくりせりや」(引用は、小学館の旧日本古典文学全集『神楽歌・催馬楽・梁塵秘抄・閑吟集』による)という歌詞で、その家の繁栄を予祝するものであるが、「さき草」というと、少なくとも四句目以降を指すと思われる。勿論、「三枝の 三つば四つばの中に 殿づくりせりや」という部分にも、家の繁栄を予祝する意味はあると思うので、厳密には言えないが、「この殿は むべも むべも富みけり」の部分、一番明瞭であるとは言えるのではなからうか。因みに、この作品に於ける「さき草」の用例は、この他に、初音巻、源氏が臨時客の宴を催すところにもう一例ある(③一五二頁)が、そこは、「この殿」うち出でたる拍子いとはなやかなり。大臣(源氏)も時々声うち添へたまへる「さき草」の末つ方、いとなつかしうめでたく聞こゆ」と、あくまで「この殿」の一部として語られ、この場合とはやや異なると思われる。

第四節 玉鬘の造型

一

若菜上下巻は、絶頂を極めた六条院の栄華が内部崩壊を開始する巻として早くから注目され、様々な分析がなされて来た。その中でも画期的なもの一つとして、それまでは退屈な行事描写の羅列としか見なされていなかった、若菜上巻に存する源氏の四つの四十賀に意味性を見出された、武者小路辰子の研究⁽¹⁾が挙げられよう。その後、川名淳子に継承され、四つの賀個々の性質が明らかにされつつある⁽²⁾が、中でも問題を孕むのは、玉鬘主催の賀と言えよう。第一は開催の時期である。

それは、巻名ともされた如く、若菜献上という形で正月二十三日にはやばやと行われるのだが、他の三つの賀はいずれも冬に行われており、群を抜いて早く設定されていることになる。既に指摘されている如く、これは二月十余日の女三の宮降嫁と密接な関係を有すると思われ、このことは当然その賀の性質とも深く関わって来るだろう。それについては川名も、また玉鬘の一生を追うという立場からこれに触れられた吉海直人⁽³⁾も、源氏に老いを意識させるものという見解で一一致しており、首肯し得るものと言えようが、ではそうした役割を果すのが何故玉鬘でなければならなかったのだろうか。

これについて吉海氏は、「四十賀によつて否応無しに源氏に老いを意識させ、外部から光源氏世界をつき壊す人物としては、六条院を去つて独立した玉鬘が一番適役だったのである」と答えられる。尤もな解答ではあるけれども、「玉鬘が一番適役だった」理由が、「六条院を去つて独立した」人物だからというだけではやや消極的すぎる嫌いはないだろうか。ここで注目したいのは、源氏が自己の老いを口にしたのは実はここが最初ではなく、玉鬘十帖に先蹤があることである。

とりわけ鮮明なのは、常夏巻冒頭で源氏が夕霧や内大臣の子息達を東の釣殿に集め、世間話をする中で発せられる「何となく翁びたる心地して、世間のこともおぼつかなしや」^(③二二四頁)と、引き続き玉鬘の住む西の対へと移動する個所で言われる「やうやうかやうの中に厭はれぬべき齢にもなりにけりや」^(③二二七頁)、さらに篝火巻で、同じく源氏が夕霧・柏木・弁少将を招いて合奏させ、それとなく玉鬘に兄弟達の爪音を聞かせる場面に存する「盛り過ぎたる人は、酔泣きのついでに、忍ばぬこともこそ」^(③二五九頁)という語の三つである。最後の例が、若菜下巻の有名な源氏の言葉「過ぐる齢にそへては、酔泣きこそとどめがたきわざなりけれ。……」^(④二八〇頁)を連想させ、幾分の深刻さを醸し出してはいるものの、総じてこれらはそれほど重いものとは言えない。特に常夏巻では、近江の君のことを語らせて嘲弄しようとする下心や、「すき者どもの心尽くさずるくさはひ」^(玉鬘③一二二頁)として、玉鬘を遺憾なく發揮せしめようというのが主たる目的となつていることは言うまでもない。しかし、冗談にもせよ源氏が自己の老いを口にするなどという場面は、これ以前には存在しないのであり、しかもそれがただ単に玉鬘十帖中の巻々だというだけでなく、すべて玉鬘絡みの文脈中であることにはもつと注意を払うべきであろう。

すなわち玉鬘は、若菜上巻以前でも源氏を相対化し、老いを口にさせる可能性を孕む存在であったと考えられるわけで、四十賀で玉鬘が果たす役割も、その延長線上のものとして理解する必要があるだろう。しからば玉鬘のそうした力は何に由来するのだろうか。そ

れを明らかにすることが本節の狙いである。

二

六条院の主人が光源氏というのは誰しも認めるところであろうが、それでは女主人は誰かという問いに対して、従来は紫上や秋好中宮といった女人が挙げられて来た。だが玉鬘と答えた人は少なかつたように思う。

思えばこれは不思議な話である。何故なら、六条院の落成は確かに少女巻であるけれども、ほとんどその巻末部で、そこでは四町の様子やそこに住む女人達の引き移りが語られるにすぎず、六条院の華麗な様が詳細に語り始められるのは、次巻玉鬘以降だからである。周知の如く玉鬘はその巻で登場するのであり、以後の十帖では、六条院の繁栄の様と玉鬘の生き生きした様子がほとんど並行して語られるのだから、普通ならそう答える人はもっと多くても良かったはずである。しかしそれが躊躇われて来たのは、玉鬘巻に次のような場面が存在するためである。

A 住みたまふべき御方御覧するに、南の町には、いたづらなる対どもなどなし、勢ひことに住みみちたまへれば、顕証に人しげくもあるべし。中宮のおはします町は、かやうの人も住みぬべくのとやかなれど、さてさぶらふ人の列にや聞きなされむと思して、すこし埋れたれど、丑寅の町の西の対、文殿にてあるを他方へ移してと思す。あひ住みにも、忍びやかに心よくものしたまふ御方なれば、うち語らひてもありなむ、と思しおきつ。
(③一二五頁)

六条院に最後に迎えられる玉鬘は、当然のことながら住むべき場所を持たず、源氏はこのような長い思考を重ねた上で、結局花散里と「あひ住み」という形で玉鬘を丑寅の町に住まわせる。この「あひ住み」という居住形態も聊か問題になるところではあるが、それについては後に述べよう。これまでこれは、玉鬘の物語が六条院構想の後に着想されたためと見なされて来たのだけでも、果してそう単純に言い切れるのであろうか。玉鬘の居住場所の決定が真実ここであつたかどうか疑問を提出するところから話を始めたい。

玉鬘の浮動性についてはこれまで多数論じられて来たが、逆に玉鬘が何故丑寅の町に住むことになったかについてはほとんど問題にされなかつたように思う。理由は簡単で、それはAの引用文中に明瞭に認められるからであり、夕霧の育ての親でもある花散里の気性が安心できるものであるためという中心的根拠は、疑う余地もないものと思われたからである。しかし物語本文を詳細に読み進めていけば、玉鬘の居住場所の決定はもう少し溯り、六条院の完成とほぼ同時であつた可能性も見えて来る。例えば少女巻での最初の六条院四季の町の描写で、丑寅の町は次のように語られていた。

B 北の東は、涼しげなる泉ありて、夏の蔭によれり。前近き前栽、呉竹、下風涼しかるべく、木高き森のやうなる木ども木深くおもしろく、山里めきて、卯花の垣根ことさらにしわたして、昔おぼゆる花橘、撫子、薔薇、くたになどやうの花のくさぐさを植ゑて、春秋の木草、その中にうちませたり。
(③七九頁)

藤本勝義は、ここに傍線を付した植物が存することで、既にこの時点でこの町に玉鬘が住むよう決定されていた可能性を指摘した⁽⁴⁾。その理由を簡単にまとめると、「呉竹」はこれ以前には夕顔巻の夕顔の家の記述にしか存せず、ここはそれを思い起こさせるよう仕組まれていると思われること。「花橘」は、わずか一か所ではあるが、胡蝶巻で夕顔をそれに擬え、源氏と玉鬘が「橘のかをりし袖によそふればかはれる身とおもほえぬかな」、

「袖の香をよそふるからに橘のみさへはかなくなりもこそすれ」という贈答をする場面(③一八六頁)が存することより、花散里のみならず夕顔とも関係を有する植物と考えられること。「撫子」は源氏物語で子供の比喩として使用される十三例の内九例までが玉鬘を示すものであることから、玉鬘と最も密接に関係する植物と思われることなどであるが、いずれも首肯し得るものであり、相乗効果を考慮すれば、その可能性は充分にあると言えよう。

さらに一つ付け加えるならば、Aの引用文で注意を喚起しておいた、花散里と「あひ住み」という居住形態も、やはり玉鬘が当初からこの町に住む予定であったことを裏付けるのではあるまいか。玉上琢彌も説く如く⁽⁵⁾、この語自体に玉鬘は花散里と同格といった感覚が内包されているのであるが、実際玉鬘十帖を子細に検討しても、その感覚は打ち消されることはない。これらすべてを勘案すれば、六条院丑寅の町は、花散里の占有ではなく、むしろ花散里と玉鬘が共有することこそが当初からの予定であったと思われるのである。だがここで一つ確認しておかなければならないのは、「あひ住み」とはあくまで「仮」といった感覚を有する語であって、決して主人と同義ではなく、場に緊縛されないことである。つまり玉鬘は、当初から丑寅の町に住むことが予定されていながら、なおかつ浮動性をも有するような両義的な存在として設定されていると考えられるのであるが、そのことを裏付けるもう一つの証拠は、実は引用文Aの中にある。もう一度それを見てみよう。

源氏が紫上と住む南の町は人目に付きそうだからだめ、秋好中宮の住む西南の町もだめということ、丑寅の町に決まってくわけだが、注意しなければならぬのは、六条院にある四つの町のうち、三つまでしか挙げられていないということなのである。残った北の町は、六条院で唯一つ、寝殿も無いような町だったと推定されるから、最初から候補にも挙がらないのだなどと考えるのは早計である。何故なら、玉鬘ではないけれども、その母・夕顔が、この時点でまだ生存していたら、明石御方並の寵愛を受けていたであろうことは、玉鬘巻開始早々、右近によって想像されている(③八七頁)し、Aの直後(③一二六頁)で、源氏自身も認めるところだからである。すなわち玉鬘は、身分的には明石御方と大差なかったと考えられるのであり、ならばこの時点では、明石御方に代わって彼女が北の町に住む可能性すらあった。と言うのは、通行年立によればここは少女巻末と同年の九月のことで、十月に越してきた(③八三頁)はずの明石御方はまだ住んでいず、北の町はまだ空いていたはずだからである。ところがAの数行後では、源氏の言葉により北の町には既に明石御方が住んでいるとされる。ここは通常、年立上の矛盾とされるところだが、どのような年立を想定してもこの矛盾が解消できないというのであれば、ここは作者がそのように欲していたのだとするよりないのではなからうか。すなわち、この時点ではまだ空いていた六条院四季の町を、無理に一杯にしてまで帰属する場所を無くさせ、それでいて花散里と「あひ住み」というのが、作者が玉鬘に与えようとした位置なのではないか。換言すれば、玉鬘の浮動性とは、敢えて作られたものとなり、これまでのように、他の女人に劣る性質とばかり捉えるのは正しくないだろう。それではその意義はどう捉えられるのか。続いてそれを考察しよう。

周知の如く六条院は、四季の町にそれを司る女人を各々一名住ませ、それを光源氏が統括することによって時の流れという自然をも支配しようという構図を有しているわけだが、逆にそれを四人の女人側から見れば、各々の女人はそれぞれの季に緊縛され、光源氏

の支配を受けているにすぎないことになる。ならばそうした体制を有する六条院に住みながら、しかもその場に束縛されない玉鬘は、あまたの女人達の中で唯一人、源氏の直接支配を受けない自由な存在となるのではなからうか。換言すれば玉鬘の浮動性とは、他の女人に対する劣性ではなく、三谷邦明が「道化師性」という語を用いた如く(6)、むしろ優位を示すものとして理解すべきだということになる。そしてこの優位性こそが、六条院における玉鬘の位置を明かす最大の鍵だと思われるのだが、それはこの論の中で徐々に明らかになっていくはずである。

さてこれで玉鬘の定位性と浮動性について一通り述べ終わったわけであるが、未解決の問題がまだ一つ残っている。それは玉鬘の住む場所が、四つある六条院の町の中で、何故丑寅の町でなければならなかったかである。次は当然これについて考察せねばなるまい。従来のように、玉鬘巻で初めて玉鬘の居住場所が決定されたと見るならば、その理由を養母・花散里の性格に帰しても良からうが、この決定がもつと溯るものだとすると、さらに奥がありそうである。すると考えられる可能性は、玉鬘と花散里との別の緊密な関係ということになる。とは言っても、前掲の胡蝶巻の歌に見られる如く、玉鬘もまた橘にゆかりがあることの他は、物語本文にはこの二人の繋がりを示す明証は存在しないのだが、その代わり玉鬘と末摘花の間には次のような事象からかなり強い関係が認められる。すなわち二人とも筑紫に縁があること、「玉かづら」の歌語はこの物語ではこの二人にしか用いられないこと(6)、玉鬘十帖以前では、末摘花・蓬生の二巻しか登場しなかった末摘花が、玉鬘十帖では主に玉鬘との絡みで、しばしば登場すること等がそれである。また末摘花と花散里が非常に密接な関係にあることは周知の事実であり、したがって末摘花を中間項として媒介させることにより、玉鬘と花散里の間にも関係が認められることになるのだが、それではこの三者に共通するものとは一体何であろうか。それを知るためには玉鬘十帖の構造を子細に検討していくしかあるまいと思う。

三

源氏物語に於ける玉鬘の初登場は夕顔巻であるが、そこは名のみであり実体が登場するのは玉鬘巻であることは言を俟たない。ところでこの玉鬘巻は、他の巻々と比較すると聊か特異な巻と言えよう。言わゆる並びの巻ではないのだけれど、その冒頭は玉鬘の幼女時代にまで溯り、時間的には遠く夕顔巻に接している。すなわち、玉鬘は幼年から成年までほとんど間断なく成長過程が語られているのだが、実はこれはこの物語ではかなり珍しいことで、他にはわずかに光源氏を数えるにすぎない。特に玉鬘の場合ほとりたてて幼女時代が語られる必然性はなく、これとほとんど相似形をとる浮舟の場合のように、初瀬詣で辺りから始められても、物語としては全く支障がないのであるから、敢えてそれが語られる意味は当然問われねばならないだろう。そしてそれを解く大きな手がかりは、登場後ごくわずかで四歳の幼女が「十ばかり」の美少女となって筑紫の田舎人に求婚され、さらに目睫の間に今度は「二十ばかり」になって大夫の監に求婚されるという、異常な成長速度だと思われる。

無論、これには源氏との出会いをなるべく早くするという理由も考えられるが、ならば無理をして幼女時代に溯ることはなかったはずであるから、ここはむしろ小林茂美のように(7)、小さ子神の異常成長譚の影を見るのが正しいように思う。また、そうした目で玉鬘巻を見渡せば、それを窺わせる記述は随所に見られるのである。

例えば、六条院で最初に源氏と対面した際の玉鬘の言葉「脚立たず沈みそめはべりにける後、何ごともあるかなきかになむ」（玉鬘③一三〇～一頁）は、既に説かれているように、蛭子の故事を踏まえて、玉鬘という小さ子神が筑紫という異郷を流離したことを印象づける表現と理解できるし、筑紫の求婚者を断わる理由が、玉鬘が「かたは」だということだったのも、おそらくこれと呼応すると思われる。特に後者は興味深く、ここで、竹取物語で翁が最初に結婚をせまった時、「変化の人」という解答を前以って封じられたかぐや姫が発した不婚理由の第一声が、「よくもあらぬ容貌を」であったこと（一五頁）⁽⁸⁾を想起しておくことも無駄ではあるまい。

尤も、かぐや姫の場合は、単なる女人の常套句であったのかもしれないが、源氏物語ではこの種の語は、結婚を拒否する女性が異口同音に述べるものであり、かつその女性達には多かれ少なかれかぐや姫の影が認められるところを見ると、作者の中ではこの語とかぐや姫が、かなり緊密な結びつきを有していた可能性があるからである。しかもここでは、すぐ近くに大夫の監が初めて自ら玉鬘のもとを訪れる場面が存在し、その中の「懸想人は夜に隠れたるをこそよばひとは言ひけれ、さま変へたる春の夕暮なり」（③九六頁）という表現は、明らかに竹取物語の、「そのあたりの垣にも、家の門にも、をる人だにたはやすく見るまじきものを、夜は安く寝も寝ず、闇の夜に出ても穴をくじり垣間見、惑ひあへり。さる時よりなむ、「よばひ」とは一言ひける」（一一頁）をパロディ化したものと認められるからその可能性は強い。そしてこうした竹取物語との類似もまた、この部分が小さ子神の異常成長譚であることの一つの証左となつていられると思われる。

ここで、話題が竹取物語との類似に及んだが、それは実は玉鬘巻のみではなく、十帖全体にわたって認められる。玉鬘十帖は、玉鬘巻の初瀬観音の霊験による玉鬘の六条院入りと、真木柱巻の石山観音の霊験による六条院退出という形で、人智を超えた力が最初と最後に呼応して作用したように語られ、文字通り一つのまとまりを為していることは、本章第二節でも述べたが、これはまさしく竹取物語の結構と重なるものである。しかも玉鬘巻では、玉鬘の居住場所が九条と設定されており、そこは地理的にも、説話等から窺える精神面でも、当時の人達には人の住む世界と神変不可思議な異世界が微妙に交錯する場所として理解されていたと思われることもそこで示唆しておいた⁽⁹⁾が、これも恐らく、かぐや姫がこの世界と異世界との接点である竹筒の中から発見されたことと対応しよう。さらに、野分巻に「なよ竹」の語が存する（③二八一頁）他、竹取物語の直接的影響とは断定しきれないけれども、非常に有力なもの⁽¹⁰⁾まで含めれば、そうした例はほとんど枚挙に暇がないほどで、あたかも玉鬘十帖は、源氏物語作者なりの竹取物語という感さえある⁽¹¹⁾のだが、より厳密には話型にまで溯る必要があると思う。

竹取物語と言えば天人女房譚の代表ということになるが、関敬吾はそれをさらに（1）始祖誕生型、（2）氏神型、（3）離別型、（4）再会型、（5）幸福な婚姻型、（6）養女型、（7）難題求婚型、（8）笛吹智型の八つに下位分類する⁽¹²⁾。それに従えば、玉鬘十帖の場合は、小林も説く如く⁽⁷⁾、竹取物語の前半部や、『丹後国風土記逸文』の奈具社で有名な、（6）の養女型となる。ただ小林は、玉鬘十帖に複次的な増補成立の工程史があったという立場から、三段きりかえの構想を考え、玉鬘十帖の後記挿入等の事情から、原形説話は既に造設された六条院に玉鬘が迎えられる形に変えられているとする。それに対する反証は、既に述べて来たところであるのでここで一々繰り返すことはしないが、結

論だけをもう一度述べれば、玉鬘十帖は一つのまとまりとして捉えるべきであり、後記挿入等は敢えて考える必要はないということになる。しかし最後の一条だけは強ち分らないでもない。何故なら天人女房譚養女型の話とは、特に富と密接な関係を有するものであり、前掲の竹取物語や奈具社伝説では末尾が徹底していないけれども、その一般的形は、養子を引き取って初めて養親は富裕となり、それが去った時富も同時に失うというものだからである。したがって、豪壮な六条院が完成した後玉鬘が引き取られたのでは、一見すると確かにおかしいと感じられるのだが、これは玉鬘巻で初めてそれが決定されたと見るため、前述の如くそれがもつと溯るものだとするならば、その根拠は揺らいで来るはずである。さらに富を物質的なものでなく、象徴的な「力」の問題と解すれば、この話型の大枠を示すものは玉鬘十帖に確実に存在する。それは初音巻と真木柱巻の男踏歌の記述である。

源氏物語には三つの男踏歌と、一つの擬男踏歌とも呼ぶべき場面が存するが、それは二つずつ対になり、それを重ね合わせると、その時点でのその場の「栄華」の実相が見えるよう仕組まれていることは、本章第三節で既に証したところであり、初音巻と真木柱巻のそれを重ねると、六条院の真の繁栄は玉鬘とともにあるのが明確になることもそこに述べておいた。これはまさしく天人女房譚養女型の首尾と照応し、したがって冒頭部も敢えて改変と見るには及ばないと思うが、外枠だけでは不満な向きに対して、内部徴証の一つと思われる、野分巻の夕霧の玉鬘垣間見の場面を見ておこう。

ふつう野分巻の夕霧の垣間見というと、紫上の場合を想起することであろう。しかしここでは玉鬘もまた初めて垣間見られているのであり、しかもその記述は、量的にも決して紫上に劣らない。

C かく戯れたまふけしきのしるきを、あやしのわざや、親子と聞こえながら、かく懐離れず、もの近かべきほどかはと目とまりぬ。見やつけたまはむと恐ろしけれど、あやしきに心もおどろきて、なほ見れば、柱がくれにすこし側みたまへりつるを引き寄せたまへるに、御髪のなみ寄りて、はらはらとこぼれかかりたるほど、女もいとむつかしく苦しと思ひたまへる気色ながら、さすがにいとなごやかなるさまして寄りかかりたまへるは、ことと馴れ馴れしきにこそあめれ、いであなうたて、いかなることにかあらむ、思ひよらぬ限なくおはしける御心にて、もとより見馴れ生ほしたてたまはぬは、かかる御思ひ添ひたまへるなめり、むべなりけりや、あな疎ましと思ふ心も恥づかし。

(③二七九頁)

「見やつけたまはむ、と恐ろしけれど」に、夕霧側のタブー侵犯の臭いを嗅ぎ付けることは容易だが、問題が複雑になるので今は触れない。この部分と紫上の場合との顕著な相違は、玉鬘は単独ではなく、源氏との睦み合いを覗かれることであり、しかもそれが近親相姦として執拗に位置づけられることにある。

無論これは、源氏と玉鬘の真実の関係を知らない夕霧の視点で表現されていることに由来し、たとえ結ばれたとしても、この二人はそれほどのタブー性は有していなかったと思われる⁽¹³⁾。だがそれにしてはこの執拗さは聊か異常と言わねばならず、おそらくこれは、天人女房譚を含む異族婚姻譚養女型の親子離別の一般的理由が、養親の倫理的・道徳的態度の欠如であることが影を落したのだと思われる。

尤もこの物語では、これが玉鬘の六条院退去の直接的原因とはなっていないのだが、こ

の後の、源氏が実子・冷泉帝のもとに宮仕えさせながらも引き続き玉鬘を領有し続けんと謀るという、さらなる非道德的意志を有するとされる設定も、多分その延長上のことと位置づけられるのである。その結果源氏は掌中の玉である玉鬘を失い、同時に六条院は真の繁栄を失ったという結構になっていると思われるが、そう断定するには一つ大きな障害がある。それは続く梅枝・藤裏葉巻でも依然として六条院の繁華は描かれていることである。したがって、次にはそれについて一渡り検討しておく必要があるだろう。

四

若菜巻で、六条院繁華が崩壊するとは良く言われることだが、だからと言って、そこで六条院が根底から覆ってしまったなどと理解している者は誰もいない。あくまでそれは他人の目に触れない六条院内部の問題に限定され、その外面は依然として輝きを放っていることは今さら言うまでもない。同様のことは、他の巻々についても言えるはずで、たとえそこに繁華の描写が存するとしても、それを鵜呑みにするのは危険であり、それが名実相伴った真の繁栄を意味しているか否かの判断は、詳細な分析を必要とする。こう言えば、梅枝・藤裏葉巻の場合についても、ほぼ解答したも同然で、例えば玉上琢彌が指摘したように、梅枝巻で紫上が対の上に格下げになっている事実¹⁴に六条院繁華の秘やかな凋落を読み取ることも可能なはずである。だがこれだけでは、この両巻全体を覆うには余りにも少なすぎるという向きに対しては、これまでは六条院繁華の最盛を示すものの一つとして理解されて来た、梅枝巻の薫物合わせの場面を、ここで少し検討しておこう。

これは、源氏の一人娘の明石姫君の入内準備の一環として行われたものであるが、その参加者は、源氏と四人の女人達（紫上・花散里・明石御方・朝顔齋院）であった。六条院内の催しで、かつ薫物のように季と密接に関わるものでこの構成であるならば、四人の女人達とは、それぞれの町の主人というのが当然予測されるであろう。また事実三人まではそうなのだが、問題は、残る一人が六条院外の女性で、しかも少女巻冒頭以来久しく登場しなかった朝顔だという点にある。

これについては、次の明石姫君の裳着の場面で、腰結役が秋好中宮であるから、重複を避けたという見方も出来ようが、では何故その代わりが朝顔でなければならなかったかという疑問も残り、今一つ釈然としない。さらに問題となるのは、各人の合わせた薫物の季が、もう一つしつくりしないことである。

源氏の最初の依頼では、各人二種ずつの薫物を合わせるということだったが、それにも拘らず紫上は三種、花散里は一種合わせたことは本文に明示されている。しかし判者の螢兵部卿官が選んだのは各人一種ずつであるから、それがそのままそれぞれの人物を象徴すると理解すると、朝顔は黒方で冬、源氏は侍従で秋、紫上が梅花で春、花散里は荷葉で夏、明石御方は薫衣香で無季となる。六条院体制に最後まで従順であった紫上・花散里の二人が、自己の季と合致しているのは如何にも順当と言ったところだが、注目すべきは、秋好の代わりと目される朝顔が冬を合わせており、秋は源氏が合わせていることである。

想像を逞しくすれば、秋、冬自体に衰退のイメージを読み取りたいが、たとえそこまで深読みせずとも、四季の町に、それを司る女人を住ませ、さらにそれを源氏が統括するのが六条院の本来あるべき姿とすれば、ここにはそのようなものはや存在せず、源氏はその季を司る者として他の女人達並に格下げされている。否、正確に言えば唯一人別格の女人は存在するのであり、それは無季を合わせた明石御方であることは容易に察しが

つこう。

後に、源氏の邸は全て明石御方の一族の手に帰してしまうこと（匂宮⑤二〇頁）に象徴される如く、源氏の権勢を内部から蚕食する明石一族の果たした役割は大きい。これについては第三章第四節で論述する。ここでは取り敢えず、早くも梅枝巻で、源氏と明石御方との間に地位の逆転が見られること、そして、梅枝・藤裏葉巻の六条院の栄華とは、結局明石一族の血を引く姫君の入内に付随するものであったことが認められれば良い。

これにより、両巻の栄華描写の実相は大半明らかとなったはずだが、もう一つだけ、純粹に源氏自身の問題と認められる、准太上天皇位を得ることについても少し考察しておこう。

この際最大の障害となるのは、肝腎の准太上天皇位が如何なる性格を有するのかわからないことである。しかし、たとえそれがどのようなものであったとしても、次のような文脈中で語り出されていることは見逃してはなるまい。

D 明けむ年四十になりたまふ。御賀のことを、朝廷よりはじめてまつりて、大きな世のいそぎなり。

その秋、太上天皇にならずらふ御位得たまうて、御封加はり年官、年爵などみな添ひたまふ。
(③四五四頁)

新全集の表記に従ったためこのような形となったが、言うまでもなく元は段落などなく、この二つは連続している⁽¹⁵⁾。周知の如く源氏の年齢は、桐壺巻の元服時に十二歳とされた後一切示されず、ここで初めて三十九歳と明かされる。現行年立は、全てここから逆算されるが、ならばここで、源氏の年齢を幾つと設定することも、理論的には可能だったはずで、何故それが老境一步手前の三十九歳でなければならなかったかが一つの疑問となるはずである。仮に、源氏物語がこの巻で終結していたら、三十九歳という年齢は、確かに大団円の一つの要素たり得ただろうが、実際は終結しないのであり、しかも今まで幾つか触れて来たことなどから、この時点では既に作者は、若菜以降を書き継ぐ意図を有していたと思われるので、三十九歳は逆に、この先源氏には衰退の道しか残されていないことの予告と見るべきなのではなからうか。

この論の冒頭でも述べたように、ここで予告された「御賀」が実際に展開され、しかも源氏の置かれた位置を浮き彫りにしているのが若菜上巻であるのだから、その可能性は充分に濃いと言えよう。したがって、このような事象を孕む文脈中に存する以上、准太上天皇位が如何程高いものであっても、それは空洞化されており、決して手放しで繁栄が語られていたとは言えないのである。

以上の如く見て来れば、梅枝・藤裏葉巻に於ける六条院の栄華は、通常信じられているほど華やかなものではなく、中心を喪失した、言わばがらんどうの栄華であることがほぼ納得できたと思う⁽¹⁶⁾。言うまでもなくその中心とは玉鬘のことであり、このことによつて源氏は、玉鬘を掌中にしていた時のみ六条院の主宰者たり得、玉鬘の飛翔とともにその地位を失ったと断定することが可能となるのである。

玉鬘十帖のこうした構造は、既述の如く、天人女房譚養女型の話型に他ならず、第二段で明らかにした、定位性を有しながらも浮動性を有するという玉鬘の両義性も、実はここから胚胎したものと考えられるのである。そして、こうした神話に淵源を持つ権威を光源氏に与える女人ということで、玉鬘は末摘花・花散里と共通性を有するのであり、それ

故その居住場所は、当初から六条院丑寅の町と決定されていたのだと思われる。さらに言えば、玉鬘はこうした力を有し、その存在はほとんど六条院の繁栄と等価なものであったが故に、玉鬘が成長、自立性を強めていくに従って、源氏を圧迫、相対化し、老いを口にさせる可能性が生まれてゆくのだと言えよう。何故なら、ジョーカー或いはスペードのAのように、巨大な正はまた同時に負でもあるからであり、玉鬘の有する両義性とはこままで及ぶものであったのである。

五

随分迂遠な考察を展開して来たけれども、これでどうやら、若菜上巻の最初の四十賀で源氏に老いを自覚させるのは、何故玉鬘でなければならなかったかという、この論の冒頭で提示した疑問に答えられそうである。それは、六条院の真の繁栄と等価な存在であった玉鬘が、今や完全に源氏の手の内を離れたのを明示することが、源氏の衰微と、見せかけだけの繁栄を続ける六条院の実相を暴露するのに最も有効な手段だったからである。かく捉えれば、正編に於ける玉鬘の最後の登場が、源氏に自己の衰弱を痛烈に認識させた柏木の死の場面である（柏木④三一八頁）のも、極めて象徴的と言えるであろう。かくして玉鬘十帖は、源氏の栄華の実相を明かす目的で、遠く若菜巻をも射程に入れながら、天人女房譚養女型の話型を借りて構築されたと考えられるわけである。

注 (1) 武者小路辰子「若菜巻の賀宴」(『源氏物語 生と死と』 武蔵野書院 昭63)。

(2) 川名淳子「若菜巻 光源氏四十賀について(一)―紫上主催の賀を中心に―」、
「同(二)―玉鬘主催の賀を中心に―」(王朝物語研究会編『研究講座 源氏物語の視界4〈六条院の内と外〉』 新典社 平9)。

(3) 吉海直人「北の方時代」(『源氏物語研究而立篇』 影月堂文庫 昭58)。

(4) 藤本勝義「六条院四季の町の植物設定をめぐって―玉鬘物語の構想に関する一私見―」(『文学・語学』 昭46・9)。

(5) 玉上琢彌『源氏物語評釈』第五卷一二二頁(角川書店 昭56)。

(6) 三谷邦明「玉鬘十帖の方法―玉鬘の流離あるいは叙述と人物造型の構造―」(『論集中古文学―源氏物語の表現と構造』 笠間書院 昭54)。

(7) 小林茂美「玉鬘―物語展開の原動質から―」(『源氏物語講座』第四卷 有精堂 昭46)。

(8) 以下竹取物語の本文引用は新潮日本古典集成による。

(9) 他に、藤井貞和も、有精堂の『源氏物語講座』第四卷(昭46)「玉鬘」で、玉鬘の九条居住を、「忌み籠り」の期間と位置づけている。

(10) 他に、Bの引用文で藤本が指摘した、玉鬘は「呉竹」とも関係が深いこと、胡蝶巻に、玉鬘を「竹の子」に喩えた歌、「ませのうちに根深く植ゑし竹の子のおのが世々にやしひわかるべき」が存在する(③一八二頁) こと等も挙げられる。

(11) 『国文学』(学燈社 昭62・11)「共同討議・玉鬘十帖を読む」の中の後藤祥子も、同様の趣旨の発言をしている。

(12) 関敬吾『昔話の歴史』(同朋舎出版 昭57)。

(13) 藤井貞和は「タブーと結婚」(『源氏物語の始源と現在―定本』に於いて、二人が結ばれると大祓祝詞中の、「母と子と犯せる罪」に抵触するとするが、後に

『源氏物語必携Ⅱ』の中で自ら述べた如く、これは当時それほど意識されていない。

(14) 玉上琢彌『源氏物語評釈』第六卷三一二頁(角川書店 昭55)。

(15) 例えば、財團法人古代學協會・古代學研究所編『大島本 源氏物語』(角川書店 平8)では、第五卷五五四頁。

(16) 同様の指摘は河添房江も、「梅枝卷の光源氏」(『源氏物語表現史 喩と王権の位相』 翰林書房 平10)でしている。

第五節 まとめ

以上で玉鬘の機能の側面についての論述は完了したが、特に第二、三節は、玉鬘十帖の外にも存在する「初瀬」と「石山」、男踏歌の用例も押さえ、かつその性質についての説明を分かりやすくするために、冒頭を玉鬘十帖以外の例から始めざるを得なかった事情もあるので、今一度簡略にまとめておこう。

第二節で明らかにしたように、源氏物語に於いては「初瀬」と「石山」は一見対立するように描かれており、玉鬘十帖に於いてもそれは例外ではない。また第三節で明らかにしたように、源氏物語に詳細な描写のある三つの男踏歌の行事は、初音巻と真木柱巻、同じく初音巻と竹河巻が対となるべく仕組まれているのだが、これら二つを勘案すれば、第一節で述べたように、玉鬘十帖の始発である玉鬘巻・初音巻と終結である真木柱巻は、これら二つの事象によって明確に呼応するのであり、言わば一つの閉鎖空間を作り上げるよう構築されているということである。そしてその空間内で玉鬘の機能は遺憾なく發揮されているわけだが、それは何かと問えば、二つの男踏歌の対比が表している如く、源氏から鬚黒への栄華の移動である。だがそれはより正確には源氏から鬚黒へと栄華が移動したわけではなく、栄華は常に玉鬘と共にある。それを示すのが「初瀬」と「石山」の呼応で、この玉鬘十帖の入り口と出口にそれぞれ存する二つの霊験譚的な構造は、物語の始発では「竹中生誕」という神秘的な現象により女主人公を物語中に招き入れ、終末では「昇天」により退場させるという竹取物語の構造と、女主人公の移動の方向性まで一致している。つまり源氏物語の作者は、自分なりの竹取物語を描くことによつて、かぐや姫が翁に与えた「黄金」と同様なものを玉鬘が源氏に与えていることを匂わせようとした、それが玉鬘十帖というわけである。

この、玉鬘という一登場人物だけでなく、「初瀬」と「石山」の呼応、そして男踏歌の対照という装置も援用して一つのテーマを表そうとする方法、これが本章の名とした「単一人物と他要素の連関による表現法」の意味であるが、これに該当する例は、今のところ玉鬘しか見出せていない。玉鬘十帖と同じく始発と末尾が呼応する帚木三帖中に登場する空蟬・夕顔、同じく呼応する「初瀬」と「石山」が配置される宇治十帖後半の女主人公・浮舟は当然ながら有力な候補だが、前者は単一の人物ではない。複数の人物が連関して一つのテーマを表していると考えことは勿論出来るが、それは本論文の後の章の話題である。また、後者はなるほど単一の人物ではあるが、その担わされているテーマ、それは女人は如何に生きるべきかだと思われるが、もしそれが正しいならそれは宇治の大君から、或いはもつと遡って正編の女性から連関するもののもうでもあり、やはりこの例として数える訳にいかないのである。

このように思考を廻らせていくと逆に、玉鬘十帖が如何に特異な世界を構築しているかが浮き彫りにされてくるような思いがするが、本論文の主題はそこにある訳ではなく、源氏物語が如何に作中人物を利用してテーマを浮き立たせているか、その方法を探るといふことであるから、見出すのが困難な例に拘ることはせず、さらに多様な方法を次節以下で検討していくことにしたい。

第二章

人物の連関による表現法

第一節 序―統合体的存在としての紫上

前章第五節でも述べたように、「単一人物と他要素の連関による表現法」の例は、今のところ玉鬢しか見出せないが、複数人物なら該当例は多数存在する。例えばこれも前章第五節で挙げた、空蟬と夕顔、或いは大君・中の君と浮舟も皆そうである。しかしこれらの例は私見では、電池の直列・並列ではないが、登場時点がずれることによって一つのテーマをリレーのように受け渡すパターンと、複数の人物が一つのテーマを同時に支え合う、二つの形式が存在するように思われる。先に挙げた例で言えば、空蟬と夕顔、或いは大君・中の君と浮舟が前者（これを本論文では仮に「連鎖」と呼称する）であり、大君と中の君がもし宮家の娘の生き難さというテーマを担わされているとすれば、それは後者のパターン（同じくこれを「連鎖」と仮称する）ということになる。直列・並列」という言い方からすると、順序が逆のような感もあるが、次章の第一節でも述べるように、これまでの研究史に於いても「連鎖」については割合に蓄積があることにも鑑み、本論文では先ず「連鎖」、次章で「連鎖」、そして第四章ではその二つのパターンの複合と思われる表現について考察するという手順で行きたいと思う。

そこで先ず本章は並列的人物「連鎖」の例ということになるのだが、先にも例示したように、それは宇治の大君・中の君のパターンでも一応は説明可能だが、源氏物語に少し詳しい向きならお分かりのように、中の君は大君と対等に扱える程の存在感が無いので、かなり難しい。そこで本章では、その代表例と思われる紫上を取り上げてみたいと思う。紫上については今更説明の必要はないと思うが、十歳での物語登場以来、四十三歳で死去するまでの三十三年の長きに亘りほとんど出ずっぱりで物語に登場し続ける。壮大なテーマを担わされるにふさわしい存在である。

それを一言で言い表すのはかなり乱暴なことは承知しているが、説明の都合上敢えてしてしまえば、「政略結婚が普通であった平安の貴族社会で、ただ愛情のみによって結ばれる夫婦関係はあり得るか」ではなかったかと思う。その結論に至る過程は次節で、紫上の最大の特徴と思われる、源氏との間にあれほどの愛情がありながら子供がいなかったことと絡めて説明するが、もしその結論が正しいとすれば、それはやはり平安時代に於いてはかなり成立が難しかった（注）。そのため源氏物語作者は、紫上を支える役目を多くの作中人物に与えたと思われるが、本章ではその三種のパターンの代表と目される六条御息所、葵上、花散里の三名を取り上げる。すなわちそれが第三、第四、第五節である。一通り説明し終わった後、まとめの意味を兼ねて、それらの人物の位置づけ及び全体的な意味性を第六節で辿り直してみたい。

注 藤本勝義「うますめ不生子あま紫上――源氏物語の深層――」（『源氏物語の想像力 史実と虚構』 笠間書院 平6）も同様のことを述べる。

第二節 紫上の造型

一

紫上造型の最大の特徴として挙げられるのは、あれほど源氏に愛されていながら、その間には子供がないということであろう。勿論彼女には藤壺の「ゆかり」という特徴もあるが、それは女三の宮とて同じであり、彼女一人の特徴というわけではないからである。また、源氏自身の言葉^①にもあるとおり、彼には元来子供が少なく、他にも子の無い夫人というのとはたくさんいるのではあるが、紫上ほど源氏に愛された夫人というのは、他には存在しないからでもある。しかし、それが例えば盈虚思想や、源氏と藤壺との犯しに対する因果応報というのでは、聊か古代的に過ぎようし、登場人物をやや実体化しすぎている嫌いもある。本論文でも述べているように、源氏物語は所詮作り物語にすぎないのであり、そこに登場する人物達はあくまで実在しないものであるから、余り実体化しすぎるのは危険なのである。したがって、この理由としては、当然構想的なものが求められるべきと思うが、その観点から提出された答えで、比較的近年のものとしては、鷲山茂雄の論^②が挙げられる。けれど、この論で出された、紫上腹に男御子が生まれることは、姫君誕生より大分魅力のないことであることはいまでもないという解答は、何故そう言えるのかの説明が全く無いため、良く分からない。しかも、その前提となる、「明石姫君が后がねとして登場させられている以上」その誕生以後、紫上に姫君を儲けることは考えられないという理由も、本論文第三章第四節で述べるようなことがあるから、全く分からないというわけではないけれども、これだと明石側の都合で全てが決まってしまったことになり、何故紫上という女性を創造したのが不明になってくる。具に考えるとかなり難いのかもしれないが、明石御方を藤壺の「ゆかり」と設定してしまうことも、全く不可能ではなかったように思われるからである。けれども、この二人の登場は、周知のように若紫という同じ巻であるから、この二人は最初から分離されることが決まっていたと思われる。ならば当然、「子の無い意味」についても、明石側からだけでなく、紫上側からも理由が求められてしかるべきであろう。本節ではそれを、紫上造型上の一特徴として位置づけてみることに主眼がある。

二

本節で提出している課題に迫る最大の手がかりは、当時子供を産むことが如何なる意味を有していたかであると思うが、これに対する解答は少なくとも二つある。

一つは、清水好子を代表^③とする諸先学によって説かれてきたことで、平安時代の妻は、子を産むことよって「子の母」として、一門中に公然とした場が与えられるというものである。今でも多少残存しているが、当時結婚は家と家との結びつきという色彩がより強かったから、子の誕生はすなわち両家のさらなる結合と一門の繁栄を意味することになり、この現象はむしろ当然とも言えるけれども、この物語の場合はさらに明白なる証拠がある。宇治八の宮の娘・中の君の場合である。

中の君は宮家の血筋であり、後見が特に無く^④、夫の愛情のみが頼りであるという点で最も紫上に近いが、その詳細な比較は第四段以降に譲ることとし、今は子の有無とその地位の問題に焦点を絞るけれども、その端的な現れは宿木巻にある。

A かくて三年になりぬれど、一ところ（匂宮）の御心ざしこそおろかならね、おほかた

の世にはものものしくもてなしきこえたまはざりつるを、このをり（妊娠ガ判明シタ時）ぞ、いづこにもいづこにも聞こしめしおどろきて、御とぶらひども聞こえたまひける。
⑤四七〇頁

結婚して三年も経つというのに、親に認められない形で結ばれた中の君は世間に一向認知されなかった。それが妊娠を機に手のひらを返したように変わるのも正にこの故だと思われるが、さらにこれが実際の出産を経ると、人々の気持ちはより大きく変化する。

B 御みづからも、月ごろ、もの思はしく心地のなやましきにつけても、心細く思しわたりつるに、かく面だたくいまめかしきことどもの多かれば、すこし慰みもやしたまふらむ。大將殿は、かくさへおとなびはてたまふめれば、いとどわが方ざまはけ遠くやならむ。また、宮の御心ざしもいとおろかならじ、……
（宿木⑤四七四頁）

C 宮も、あだなる御本性こそ見まうきふしもまじれ、若君のいとうつくしうおよすけたまふままに、外にはかかる人も出で来まじきにやと、やむごとなきものに思して、うちとけなつかしき方には人にまさりてもてなしたまへば、ありしよりはすこしもの思ひしづまりて過ぐしたまふ。
（浮舟⑥一〇八〜九頁）

Bの前半は中の君自身の心、後半は薫のそれであるが、これから理解されるように、出産後の世間の扱いは、中の君の悩みを一瞬消すほどのものであったし、あれほど執拗に中の君に言い寄った薫も、半ば諦めの境地に達している。子を儲けるということは、人々にこれほど意識の変革を迫るくらいに強力なのである。そしてそれは当然夫である匂宮の場合も同様であり、それを示すのがCの引用文なのであるが、これらより、子を産むとその女性の地位が飛躍的に上がるという先程の指摘の正しさは、充分窺えるところであろう。子を産むことが有する意味性の第二は、その女性との宿縁の確認である。これについては、上坂信男が既に詳細に説いている⑤が、端的には注(1)に掲げた光源氏の言葉を引き出した、その直前の夕霧の言葉が挙げられる。

D 「かやうのこと（自身ノ後世ヲ弔ウコト）、もとよりとりたてて思しけるは、うしろやすきわざなれど、この世にはかりそめの御契りなりけりと見たまふには、形見といふばかりとどめきこえたまへる人だにものしたまはぬこそ、口惜しうはべりけれ」
（幻④五四一頁）

これは当の紫上に対する評言であるが、先程のCの引用文も、そうしたものの一つとして数えられようし、他に、朧月夜に対する濤標巻での朱雀院の言葉、「などか御子だに持たまへるまじき。口惜しうもあるかな。契り深き人（源氏）のためには、いま見出でたまひてむと思ふも口惜しや。…」②二八一頁）や、何より有名な、冒頭の、「前の世にも御契りや深かりけん、世になくきよなる玉の男御子さへ生まれたまひぬ」①一八頁）という表現等もあり、この物語の中にこうした思想が存在することはほぼ間違いない。否むしろ、第一と第二は別の事象ではなく、宿縁の確認がなされるが故に子を産んだ女性の地歩が確定されるのであると捉えた方が正しいかもしれないが、だとすれば紫上に子を与えなかつたのは、世俗的な意味でも宿縁的にも、この物語の作者が紫上に、安定した地位を与えることを欲しなかつたからだという答えは比較的容易に導けよう。但し問題は、このことによりどのような表現効果が生まれるかである。続いてそれを見てみよう。

三

若菜上巻で女三の宮が降嫁してくるまで、紫上は長く光源氏の正妻格⑥であり、また

その降嫁後も、変わらぬ愛を捧げられたが、夫・光源氏がそうであったように、彼女もまた幸せな一生を送ったわけではなかった。そのことは若菜下巻(④一九八〜九頁)に、彼女自身の言葉、「心にたへぬもの嘆かしさのみうち添ふや、さはみづからの祈りなりける」を以て語られているが、彼女の嘆きは、おそらく女三の宮降嫁以降に限定されるものではないだろう。

彼女の出自は、兵部卿(後に式部卿)宮の娘と、割合高いものではあったが、正妻の子ではなかった。尤も、この物語に於いては、後見としての皇族の力の無さを表す記述が見する⁽⁷⁾から、たとえそうであったとしても彼女の地位がどれほどの高さになったかは聊か疑問があるが、正妻の子でない彼女は、その勢力を憚り、父とも満足に会えない状態であったのだから、その境遇の酷さは明らかであろう。さらに、当時、経済的基盤であった母方は、一応、故按察大納言の娘ではあったが、若紫巻に、「十ばかり⁽⁸⁾にて殿に後れたまひしほど」とある(①二〇八頁)ことより、おそらく兵部卿と結ばれる以前に父を亡くしているし、同じく故按察大納言の娘であった桐壺更衣が、宮中であれだけの迫害を受けているのだから、その地位の軽さは推して知るべしであろう。しかも紫上の場合、その母すらも亡くしているのであるから、良く言われるように彼女の地位は、継子いじめ譚の姫君ほど悪かったのである。

そんな彼女の境遇も、光源氏と結ばれてからは幾分好転したように思われるかもしれないが、近年良く問題にされているように、この物語は大体に於いて光源氏に味方する視点で語られているから、それが世間一般の評価と一致していたかどうかは甚だ疑問である。現に紅葉賀巻には、葵上に仕える女房の感想として、「今までその人とも聞こえず、さやうにまつはし戯れなどすらんは、あてやかに心にくき人にはあらじ」というのがあった(①三三四頁)。無論これは、紫上にとつては敵方に当たる者の評言であるから、その分いくらか割り引かなければならないが、それにしてもこの言を引き出した、この直前にある紫上の嫉妬の形態というのは、当時としては聊か問題のあるものであった。

Eやがて御膝によりかかりて寝入りたまひぬれば、いと心苦しうて、「今宵は出でずなりぬ」とのたまへば、みな立ちて、御膳などこなたにまゐらせたり。(中略)いとはかなげにすさびて、「さらば寝たまひねかし」と、あやふげに思ひたまひつれば、：

(①三三三〜四頁)

現代人の感覚で捉えれば、何とも微笑ましい限りだが、これはやはり、清水好子が説いた⁽⁹⁾ように、「いざとなれば、がばと身を投げて行手を遮る捨身の戦術。良家のお姫様にはとてもできぬしぐさである」(六七頁)と理解した方が正しいと思われる。つまり、これも最近良く指摘される⁽⁹⁾ことだが、現代人が感じる紫上の魅力というのは、当時ではむしろ育ちの悪さを露呈してしまうマイナス面に他ならないということなのである。

このような面を数多く持つ、結婚直後の紫上の客観的評価が、高いものであったとはどうしても思えないが、それも源氏の手によって矯正され、次第に「理想的な妻」に仕立て上げられていく。但し、この場合注意しなければならないのは「理想」という語の内実で、これは当然源氏、ひいては当時の社会(さらに言えば「男社会」)の「理想」であって、当の女性がそれを幸せと感じていたかどうかとは全く無縁ということである。例えば、同じく紫上の嫉妬であっても、先程から少し時間が経過した花宴巻では次のように描かれている。

F日ごろの御物語、御琴など教へ暮らして出でたまふを、例のと口惜しう思せど、今はいとようならはされて、わりなくは慕ひまつはさず。
①三六一頁

傍線部の辺りに動物に対する訓練のような感覚を受けてしまうのは、或いは論者だけかもしれないが、いずれにせよこれが自然な人の情と呼べないことだけは確かである。教育者としての源氏の腕の確かさが窺えるところだが、教育というのは、教える側の優秀さだけではなく、受け手の資質と努力も要求されるはずである。紫上の資質については、その設定上疑いを挟む余地は無いが、努力についてはどうだろう。無論これも、紫上が理想的な人物として設定されているということで、大半は説明が付くが、果たしてそれだけの理由であるのだろうか。本節最後で述べるように、紫上は最後まで源氏を愛していたと思われるから、残りの理由の一半は、夫への愛に求めたいが、後の一半は別なところにあるのではなからうか。

この物語を何度読み直しても良く分からないことの一つに、源氏と新枕を交わして拗ねていたはずの紫上が、何をきつかけとして機嫌を直したかがある。信じていた男に無理矢理処女を奪われた女性が、如何なる経緯でその男を許せるかなどということは、男である論者には一生分からない⁽¹⁰⁾ことかもしれないが、少なくとも物語中には、賢木巻の、次のようなものしか見出せない。

G 例ならぬ日数も、おぼつかなくのみ思さるれば、御文ばかりぞしげう聞こえたまふめる。

(源氏) 行き離れぬべしやと試みはべる道なれど、つれづれも慰めがたう、心細さまさりてなむ。聞きさしたることありて、やすらひはべるほどを、いかに。

など、陸奥国紙にうちとけ書きたまへるさへぞめでたき。

浅茅生の露のやどりに君をおきて四方の嵐ぞ静心なき

などこまやかなるに、女君もうち泣きたまひぬ。御返り、白き色紙に、

風吹けばまづぞみだる色かはる浅茅が露にかかるささがに

とのみあり。

②一一七〜八頁

場面は、桐壺帝が退位した後、世の中がだんだんと思うように進まなくなってきた源氏が、藤壺に近づこうとしてそれも失敗し、聊か世を拗ねた感じで雲林院に籠もっているところであるが、傍線を引いた箇所から窺えるように、この時は既に紫上の機嫌は直っている。しかし、重ねて言うが、これより以前に、紫上が機嫌を直した等という記述は存在しない。ならば、この源氏の手紙と和歌によって紫上の機嫌は一瞬にして直ったか、或いは、少なくともこの頃に、源氏を受け入れることが出来る素地が、彼女の中で醸成していたからだとも解釈する他は無いが、その際気になるのは引用文の前半である。

そこでは源氏の雲林院滞在が、普通ではないほど長期に亘りつつあることが先ず語られ、次いで源氏自身による手紙という形で、どこまで本気であるかは聊か怪しいけれども、源氏が出家も考えているらしいことが仄めかされる。その直後に紫上が機嫌を直したことが語られるとあっては、経済上の理由がかなり大きいのではないかと思われる。つまり、ここで源氏に捨てられてしまったのは、身寄りのない紫上としては他に頼る者も無いのであり、拗ねている場合などではないと判断して慌てて機嫌を直したというわけである。無論これには、乳母の少納言あたりの入れ知恵もあったと解しても良いが、いずれにせよこれが紫上の立場を端的に表すものと思われるのである。

すなわち、源氏以外に経済的基盤を持たない彼女は、源氏に逆らうことなどとても出来ないというのが本当のところ、この辺り、第四章第二節で考察する、己の矜持を守るために男を拒否し得た女性達より厳しいものが感じられるのであるが、それというのも、自分の子供の存在を含めて、彼女には源氏以外に頼る者が無いからである。つまり、子供が無いということは、当時の女性をここまで追い込むものであるわけだが、それでは経済面以外はどうであろうか。次段以降では、紫上と境遇が似ている宇治中の君と比較することによって、それを焙り出してみることとする。

四

本節第二段で少し触れたように、この物語で紫上と最も境遇が似ているのは宇治中の君であるが、勿論両者には相違する点も存在する。その最大のものの子供の有無である。

子を産むことによって中の君の地位がどれだけ上昇したかについては既に見たので、ここでは繰り返さないが、紫上にはこのようなことがなかったため、当然その地位は上昇しない。しかし、そのようなことを言うと、紫上には絶大な権勢があったと思う向きがあるかもしれないが、それについては若菜下巻の、紫上自身による思いを中心とする一つの証言がある。

H 対の上、かく年月にそへて方々にまさりたまふ御おぼえに、わが身はただ一ところ（源氏）の御もてなしに人には劣らねど、あまり年つもりなば、その御心ばへもつひにおとろへなん、さらむ世を見はてぬさきに心と背きにしがな、とたゆみなく思しわたれど、さかしきやうにや思さむとつつまれて、はかばかしくもえ聞こえたまはず。内裏の帝さへ、（女三ノ宮ニ）御心寄せことに聞こえたまへば、おろかに聞かれたてまつらんもいとほしくて、（女三ノ宮ニ）渡りたまふこと、（紫上ト）やうやう等しきやうになりゆく、さるべきこと、ことわりとは思ひながら、さればよとのみやすからず思されけれど、なほつれなく同じさまにて過ぐしたまふ。春宮の御さしつぎの女一の宮をこなたにとりわきてかしづきたてまつりたまふ。その御あつかひになん、つれづれなる御夜離れのほども慰めたまひける。 （若菜下④一七七〜八頁）

物語はこの後、夕霧によって引き立てられる花散里の姿へと続いていくから、女三の宮の兄である「内裏の帝」の名が挙がっているとはいえず、「さへ」という語が示すようにそれは付け加えて、「ただ一ところ」以外の人とは、我が子（或いは父を含む）と推測される。しかし、そのようなものを持たない紫上は、いつまで経っても源氏の愛しさを感ずるものが無いのであり、しかもそれは、ここにも書かれているように、いつ無くなるか分からない頼りないものであるから、絶えず不安に襲われ続けなければならぬのである。すなわち紫上は、前段で考えてきたことを勘案すれば、表面的にはどう見えようと、結婚以来心の安まることは一度も無かったと思われるのであるが、こうしたことは当然、紫上の自信の無さとなって現れてくる。

朝顔に対して紫上があれほど恐怖を抱いたのは、自分とほぼ同等の身分を有する朝顔と源氏の間に子が産まれることによって、源氏と自分との結びつきが、宿命的に否定される可能性を思ったためと考えられることは、既に上坂によって説かれている⁽⁵⁾が、確かに身分的に大きな懸隔が存するとはいえず、この女三の宮の場合も、源氏も聊か拍子抜けするほどに、紫上は身を引くことばかり考えている上に、その辺りの機微については次節で詳述するけれども、紫上が初めて発病するのも、予想以上に女樂が成功し、その殊勲者と見

なされる女三の宮の所に、褒美として源氏が泊まった晩であった。

このように見てくると、紫上が如何に頻繁に不安に襲われたか良く理解できようが、一般論としてこのような時、女性是我が子に救いを求めるようである。現にHの引用文でも、そのことは書かれているが、その女一の宮に関しては、夕霧巻にも長い心中思惟がある。

I女ばかり、身をもてなすさまもところせう、あはれなるべきものはなし、もののあはれ、をりをかききをも見知らぬさまにひき入り沈みなどすれば、何につけてか、

世に経るはええしきも、常なき世のつれづれをも慰むべきぞは、おほかたものの心を知らず、言ふかひなき者にならひたらむも、生ほしたてけむ親も、いと口惜しかるべきものにはあらずや、心のみ籠めて、無言太子とか、小法師ばらの悲しきことにする昔のたとひのやうに、あしき事よき事を思ひ知りながら埋もれなむも言ふかひなし、わが心ながらも、よきほどにはいかでたもつべきぞ、と思しめぐらすも、今はただ女一の宮の御ためなり。

(④四五六〜七頁)

人によつては源氏の心中とも解する所(り)ではあるけれども、その後の注釈書でも特に訂正はなされていないし、私見によつても、「(女性方)あしき事よき事を思ひ知りながら埋もれなむも言ふかひなし」とは、男性では思ひにくいのではないかと判断するので、従来通り紫上の心中として扱うが、そうすると、H同様、ここでも紫上の意識は、既に源氏ではなく、養女である女一の宮に向かっていることになる。これらにより、先程述べた一般論は、決して現代人だけでなく、紫上にも当てはまるものであることを証明し得たと思われるが、考えてみると紫上は、自分より一つしか年下でない秋好中宮(当時は齋宮女御)を始めとして、明石姫君、この女の一宮、匂宮と、実に多くの子供を育てている。このことは紫上が、源氏の正妻格として立派に機能していたことも意味しようが、また同時に紫上の不安の多さも物語つていよう。しかもその子供達は、誰一人として紫上と血が繋がっていないのである。紫上の不安を完璧には紛らすことが出来なかつたであろうことは想像に難くないが、物語上の表現としては、薄雲巻に次のようなものがある。

J何ごととも聞き分かで戯れ歩きたまふ人(明石姫君)を、上はうつくしと見たまへば、
をちかた人のめざましきもこよなく思しゆるされにたり。いかに思ひおこすらむ、我にていみじう恋しかりぬべきさまをとうちまもりつつ、ふところに入れて、うつくしげなる御乳をくくめたまひつつ戯れたまへる御さま、見どころ多かり。御前なる人々は、「などか同じくは」「いでや」など語らひあへり。(②四三九〜四四〇頁)

現代的感觉からすれば、これもまた微笑ましい日常生活の一齣であると思うが、その中にも、紫上に仕える女房達が抱いた感想が孕まれることは否めまい。ましてや当人の気持ちに於いてはなおさらであろう。尤も、この時点では紫上もまだ二十四であるから、それは、さほど深刻なものではなかつたろうが、紫上は以後、同じ状態で年を加えていかねばならなかつたのである。その晩年は如何に淋しいものとして創造されていたかは容易に察しがつこう。

このように、子供の存在は、単に経済的安定を意味するだけでなく、女性にとつては「心の避難所」的役割をも果たしていることと捉えることが可能なのであるが、しかも当時は、女は子を産むことにより一門の榮えを支えていくという思想もあり、現に光源氏も、実は自分の息子である冷泉帝の治世はともかくとして(しかし、それも表面的には秋好の力によるものに見せかけている)、次の今上朝では、娘の明石を入内させることによつてその権

勢を繋いでいる。ということとは、この点に於いても紫上は源氏の役に立っていないのであり、心ある女人として造型されたはずの紫上が、これによっても苦しんだであろうことは、やはり容易に想像がつく。

既に第三段に、紫上晩年の言葉である「心にたへぬもの嘆かしさのみうち添ふや、さはみづからの祈りなりける」を引用して示したように、紫上の人生が如何に苦悩の連続であったかを見てきたが、そのことが彼女に何をもたらしたか。次段ではそれに迫ってみたい。

五

前段では主に、「心の避難所」としての子供の役割に注目してきたが、それと同じ役割を果たすものとして、文字通り「所」領の問題が考えられる。そしてこの点も、紫上と中の君の大きく異なるところである。

周知の如く中の君には、父、さらには姉から譲られた、宇治の邸という個人的所領があった。尤も、当時は匂宮の邸になっていた二条院に引き取られた後は、古系図等に「ふるさと離るる中の君」とも称されるように、宇治の邸に戻ることは二度と無かったが、事ある時は次のように考え、自分の心を慰めることが出来たとある。

Kなほ、いかで忍びて（宇治二）渡りなむ、むげに背くさまにはあらずとも、しばし心をも慰めばや、憎げにもてなしなどせばこそ、うたてもあらめ、……

（⑤四二二頁）

場面は宿木巻で、匂宮が夕霧の六の君に婿取られ、夜離れが続いたところである。つまり、実際に帰るか否かはまた別問題で、いざとなったら自分には帰れる所があると思えるだけでも、精神的に大きな余裕を生むのであり、これが、子供と同様、経済面以外での所領の効果であると思うのだが、紫上にはこれが無かった。しかし、そんなことを言うとその二条院自体が源氏から贈られた紫上の所領であり、匂宮は彼女から贈られ、彼女が病氣になった時、最後にはそこに戻って精神の安定を図ったではないかと思われる向きもあるかもしれない。しかし、如何に名義は自分のものになった（¹）とはいえ、元は夫の所有であった邸で、どれほどくつろげるものであるかは想像するに余りある。すなわち、この点に於いても紫上は、中の君より劣位に置かれていたことになるのである。

さらに、この二人が相違する点の第三としては、夫に対する信頼度が挙げられる。端的には総角卷の次のような記述に見受けられるように、中の君は、最後には夫の匂宮を信じられるように描かれている。

L 正身は、たまさかに対面したまふ時、限りなく深きことを頼め契りたまへれば、さりともとこよなうは思し変らじと、おぼつかなきもわりなき障りこそはものしたまふらめと、心の中に思ひ慰めたまふ方あり。

（⑤二九九頁）

母・明石中宮の監視が厳しく、なかなか中の君の許に通えない匂宮と薫は、宇治逍遙を口実に、八の宮邸を訪れようとしたけれども、中宮の意を受けた夕霧の息子達に邪魔されて、泣く泣く戻っていった直後の描写で、この直前に語られる、妹のことを不必要に心配するあまりに、やがて自滅していく大君の姿とは全く対照的である。

尤も、紫上とて、源氏を完全に信用できなくなることはなかったろうが、若葉上巻に次のように語られる如く、女三の宮の降嫁後は、何となく疎外感を抱いてしまうことになったのは事実なのである。

M いといたく（源氏ガ）心化粧したまふを、例はさしも見えたまはぬあたりを、あやし

と見たまひて、思ひあはせたまふこともあれど、姫宮の御事の後は、何ごとも、いと過ぎぬる方のやうにはあらず、すこし隔つる心添ひて、見知らぬやうにておはす。

(若菜上④七九〜八〇頁)

このように見てくると、中の君の場合は、紫上と比べて三重ぐらいの安全弁が張り巡らされていることが分かるのであり、宿木巻の有名な草子地、「来し方忘れけるにやあらむ」(⑤四〇四頁)は、その表明なのではないかと思われるのだが、これが却って災いして、彼女はこれといった心の成長を遂げられなかった。新しい女主人公として浮舟が要請されねばならなかった由縁であると思うが、紫上の場合はそのようではなかったことは、例えば若菜上巻の次のような記述を見れば明らかであろう。

Nすこしほほ笑みて、「みづからの御心ながらだに、え定めたまふまじかなるを、ましてことわりも何も。いづこにとまるべきにか」と、言ふかひなげにとりなしたまへば、恥づかしうさへおぼえたまひて、頬杖をつきたまひて寄り臥したまへれば、硯を引き寄せて、

目に近く移ればかはる世の中を行く末とほくたのみけるかな

(④六四〜五頁)

女三の宮の降嫁から三日、宮の体面上この日までは夫である源氏は毎日通わなければならぬが、しかし明日からはとっておきながら、それでは宮の父・朱雀院に聞こえが悪いなどと、言い訳だか己の心の乱れの表明だか分からない言葉を続ける源氏に対して取った紫上の態度がこれであるが、傍線の部分に仏像の笑みを感じてしまうのは、決して論者だけではないはずである。彼女はさらに晩年に至ると次のような高みに至る。

○しばしにても後れきこえたまはむことをばいみじかるべく思し、みづからの御心地には、この世に飽かぬことなく、うしろめたき絆だにまじらぬ御身なれば、あながちにかげとどめまほしき御命とも思されぬを、年ごろの御契りかけ離れ、思ひ嘆かせたてまつらむことのみぞ、人知れぬ御心の中にもものあはれに思されける。

(④四九三頁)

御法巻、紫上の死の直前の記述であるが、見て分かるように、彼女は己の最大の欠点であった子の無いことも最後には肯定する心境に達し、あれほど彼女を裏切り続けてきた夫・光源氏をも包み込んでいられる。紫上がこれほどの人間的成長を遂げられたのも、見てきたように子供の存在も含めて、彼女には何も縋るものが無かつたためと考えられる。つまり、紫上を、女性から見ても「理想的」、すなわち真の理想的存在として育て上げるには、子供を含めた全ての係累を、あらかじめ断ち切っておく必要があつたわけである。それが彼女に子供が与えられなかつた理由であると思うのである。

注(1) それは、かりそめならず命長き人々にも、さやうなること(子供ヲ儲ケルコト・

論者注) おほかたすくなかりける、みづからの口惜しさにこそ。(幻④五四一頁)

(2) 「玉鬘の登場——付・紫上には何故子供がなかつたか——」(『平安朝文学研究』昭47・8)。

(3) 『源氏の女君(増補版)』(塙書房 昭54)

(4) 正確には中の君には薫という後見が存在するが、中の君の姉・大君という最愛の女性を失った薫は、その面影を求める余り当時もう人妻であつた中の君にまで言い寄っており、余り氣を許せる存在でなかつたので、このように言つたとしても過

言ではあるまい。

- (5) 上坂信男「宿縁について―藤壺のばあい、紫上のばあい―」(『平安朝文学研究』昭56・7)
- (6) 平安時代の結婚制度は、私的に確認した上でも、工藤重矩の説(『平安時代の結婚制度と文学』 風間書房 平6)が一番正しいように思われる。すなわち、一夫多妻というのは本当は誤りで、少なくとも法令上は、一夫一妻多妾だということである。したがって、本論文に於いてはその理解を採用するが、それでも紫上は正式な妻ではないから、「正妻格」なのである。
- (7) 例えば、紅葉賀巻で桐壺帝が藤壺を中宮にした(①三四七頁)のも皇族には政治力が無いから(源氏の公事知りたまふ筋ならねば)だし、末摘花も常陸宮の娘でありながら、あれほどまでに没落している。
- (8) 同じ青表紙系本文でも、榊原家本・肖柏本・池田本等では「十二」とある由であるが、論旨には関わらないはずである。
- (9) 例えば、原岡文子『源氏物語』の子ども・性・文化― 紫の上と明石の姫君―(『源氏研究』第1号 翰林書房 平8・4)。
- (10) 妙なものを引いて恐縮だが、この物語を女性が少女漫画化した作品『あさきゆめみし』では、この理由を、源氏が裳着の儀に託けて、紫上と父を再会させてくれたためと、はつきり描いている(講談社ミミ・コミックス第3巻一〇〇頁)。これだと大変分かり易く、しかもありそうなことでもあるのだが、周知の如くこのような場面は原作には無い。
- (11) 丸山キヨ子「紫上小論― 紫上理解に関わる三ヶ所の解釈を中心に―」(『香椎潟』 昭57・3)。
- (12) 二条院の所有名義が紫上であったことは、須磨巻で源氏が須磨に旅立つ時、名義を紫上に書き換えたことが語られ(②一七六頁)、源氏の帰京後は、再び書き換えたと語られないことよりほぼ間違いは無い。

第三節 六条御息所の機能

一

六条御息所は、物の怪と化して光源氏の全生涯にわたり祟り続けるという、源氏物語中でも特異な人物である。そしてその物の怪事件が極めて構想的なものであることは、既に大朝雄二の手により明らかにされている⁽¹⁾。大朝の見解は大旨首肯し得るものではあるが、葵巻と若菜下巻の物の怪事件をやや安易に分断したことについては、若干の疑問が提出できる。確かにこの二つは、一方は生霊事件で、もう一方は死霊事件であるから、大朝が説く御息所の心理描写の有無という位相差を認めねばならないことは言うまでもない。だがまたこの二つはともに物語の構想上の問題であるという、基本的には同じ性格を有することは大朝も認めているのだから、それを統一的に把握する立場も、当然存在して良いはずである。そこで本節ではそうした観点から、二つの物の怪事件をもう一度洗い直してみるところから論を始めたが、するとそこには意外な側面が浮かび上がってくる。紫上と六条御息所の深い関係である。

二

葵巻の物の怪事件は、紫上の最大のライバル二人を、相殺の形で物語から消去し、代わって紫上を源氏の妻として位置づけるためのものであることは、既に大朝も説いているところで⁽²⁾、先ず間違いはないだろう。だがここで見落してはならないのは、六条御息所が源氏のもとから排除している女人は、自身と葵上の二人だけではなく、朝顔もまたそれに含め得るということである。

朝顔は徹頭徹尾源氏拒否を貫いた女性であるが、その理由は物語中ではあまり明らかにされていない。唯一それらしきものが見られるとすれば、それはこの葵巻にある「いかで人に似じ」⁽³⁾ (②一九頁) という言葉ぐらいなのであるが、この「人」というのは、直前で源氏との恋に苦悩する様が描かれる、六条御息所を指すらしいことは、古注以来動かない。つまり朝顔は六条御息所を反面教師的に捉えて源氏拒否の意志をますます固めるよう物語では描かれているわけであり、換言すればこれは、間接的にはあるが、六条御息所が朝顔もまた、源氏のもとから排除していると言うことが可能であろう⁽⁴⁾。この朝顔が後の朝顔巻で紫上を最も震撼させる女性となることは周知の通りであり、朝顔が源氏と結ばれなかった理由は、ひとえにその源氏拒否にかかっているわけであるから、ここで御息所は、逸早くその可能性を摘み取ってしまったとも言えるのである。すなわちここで御息所は、自身も含めて紫上にとって脅威となる女性三人を、直接或いは間接に源氏のもとから排除していると言え、この要請が物語にとって如何に大きなものであったかが窺える。そこで注意しなければならないのは、物の怪の正体がまだ分からない時点で、葵上方の人々があれこれ詮索する場面の中に、次のような言葉が存することである。

A「この御息所、一条の君などばかりこそは、おしなべてのさまには思したらざめれば、恨みの心も深からぬ」
(②三二頁)

ここで「一条の君」、つまり紫上が挙げられねばならない理由とは一体何であろうか。無論葵上方の人々が、紫上がまだ十四歳の、ほとんど子供同然の有様であることを、知らないで発せられた言葉として設定されていることは言うまでもない。だが、だからと言って、作り物語という虚構世界で、何かがなされることの意味を、そう軽々に見過ごしてし

まってはならないだろう。しかもこの場合は、前後の脈絡から言ってもこの「二条の君」の出現は如何にも唐突で、この後には二度とこの名が挙げられることはないのだからなおさらである。それどころかこの後の部分では、「過ぎにける御乳母だつ人、もしは親の御方につけつつ伝はりたるもの」(②三二頁)とか、「この(御息所ノ)御生霊、故父大臣の御霊」(②三五頁)などと物の怪の正体が様々に取り沙汰されて、紫上である可能性のみが巧みに消去され、代わって六条御息所である可能性が次第にクローズアップされて来る。これではまるで、葵上に取り憑いた物の怪の正体は紫上ではないかという嫌疑を、作者が逸早く消し去っているようではないか。つまり、この時点で紫上の名を挙げても、事情を良く知る読者は誰しも一瞬にしてまさかと思うし、続く部分で別の人物の容疑が濃くなっていけば、最切に挙げられた人物のことなど皆忘れてしまふという仕組みなのである。だがだからこそ却って、紫上が理想的女性であるとか、まだ子供であるとかいった先入主をすべて取り払ったところに見えて来る、この紫上と六条御息所の意外なつながりという点は、決して見落してはならないのである。そして紫上と六条御息所の物の怪が何か特別な関係にあるのではないかと思われる表現は実はここだけではない。源氏と女三の宮との新婚三日目の晩を描く若菜上巻に、次のような場面が存在する。

B わざとつらしとはあらねど、かやうに(紫上ガ)思ひ乱れたまふけにや、かの御夢に見えたまひければ、(源氏ハ)うちおどろきたまひて、いかにと心騒がしたまふに、
鶏の音待ち出でたまへれば、夜深きも知らず顔に(女三の宮ノモトヲ)急ぎ出でたまふ。
(④六八頁)

ここでは御息所の物の怪が出現しているわけではないし、それどころかその名は出されもしない。しかしそれでもなお小西甚一は、「これは、生霊といふべきものではなからうけれども、何か六条御息所を思わせるところがある」と評する(まじし、それは首肯すべきであろう。この部分についての解釈は後に譲るが、これまでの考察で言い得ることは、葵巻の生霊事件を見直すと御息所の物の怪と紫上の意外に深いつながりが見えて来ることと、それは遠く若菜巻にまで及んでいるらしいことの二点なのである。

三

若菜下巻の物の怪事件が結局何であったのか、葵巻のように一言でまとめることは容易ではない。そこで非常に俗な発想をして、この事件で一番利益を得たのは誰かと発問するところから考察を始めてみよう。二人の妻が物の怪に取り憑かれ、しかもその混乱の最中にそのうちの一人には裏切られ、遂にはそれを失ってしまう光源氏、一度は仮死状態にまで陥ってしまった紫上、物の怪によって遂には出家させられてしまう女三の宮と、数え上げてみると、葵巻とは違い、この事件で利を得た者など一見誰もいないかのよう思われる。しかし他の二人の打撃が回復不能であったのに比して、紫上のそれはやや程度が軽いことから窺えるように、この件で意外に利を得ているのは、実は紫上なのである。

紫上が、後に六条御息所の物の怪の仕業と判明する病に倒れたのは、六条院の女樂が終了した次の日の晩である。この時源氏は、予想以上に巧みに琴を演奏した女三の宮を賞しにそのもとへ行き、不在であった。紫上は自分の病を源氏に秘すよう女房に命ずるのだが、翌朝、折から手紙を寄こした明石女御を経由して源氏に伝わり、源氏は慌てて戻って来る。

この流れが前掲Bの場面と極めて類似するものであることはすぐ気づかれよう。このように紫上が変調をきたすのは常に源氏が不在の時であり、それにより源氏が女三の宮のも

とから狼狽して戻って来るといふパターンが繰り返されていることを先ず確認しておかなければならない。紫上が実在の人物なら、これはさしずめ神経性の病ということにもなるが、勿論紫上は虚構の人物であるから、これは物語がそういう構造となっているのだと解する他はない。

紫上の病は回復せず、遂には二条院へと移ることになる。この時ほとんどの人が紫上と行動を共にし、六条院は人少なくなるのだが、この隙が柏木と女三の宮との密通を招く伏線となっていることは、既に数多く指摘されている⁽⁵⁾。しかし、それと同時に、ここで六条院に於ける紫上の地位の重さが、さりげなく再確認されていることも忘れてはならない。

C 御琴どももすさまじくて、みな引き籠められ、院の内の人々は、みなある限り二条院に集ひ参りて、この院（六条院）には、火を消ちたるやうにて、ただ、女どちおはして、人ひとり（紫上）の御けはひなりけりと見ゆ。
(④二一五頁)

すなわちこの表現により、実質的にはともかく、外見的にはそれまで六条院の中心であった女三の宮が、その地位からすつかり引きずり降ろされ、代わつて紫上が浮上して来るのとともに、それが女三の宮と柏木との密通を招くものともなっているという機微を、押えておかねばならないのである。

柏木との密通を犯した女三の宮は、半病人の如くになり、源氏は六条院に呼び戻される。するとまた紫上が変調をきたしたとの報せ——もつとも今度のはその最たるものである死亡の報せなのであるが——が入り、源氏は二条院へと急行する。その眼前にいよいよ六条御息所の物の怪が登場するわけだが、この物の怪の言葉は聊か奇妙である。

D 「中宮の御事にても、いとうれしくかたじけなしとなむ、天翔りても見たてまつれど、道異になりぬれば、子の上までも深くおぼえぬにやあらむ、なほみづからつらしと思ひきこえし心の執なむとまるものなりける。その中にも、生きての世に、人よりおとして思し棄てしよりも、思ふどちの御物語のついでに、心よからず憎かりしありさまをのたまひ出でたりしなむ、いとうらめしく。今はただ亡きに思しゆるして、他人の言ひおとしめむをだに省き隠したまへとこそ思へ、とうち思ひしばかりに、かくいみじき身のけはひなれば、かくところせきなり。この人（紫上）を、深く憎しと思ひきこゆることはなけれど、（源氏ハ）まもり強く、いと御あたり遠き心地してえ近づき参らず、御声をだにほのかになむ聞きはべる。……」
(④二三六〜七頁)

これによれば、紫上は御息所に何の恨まれるところもなく、源氏は神仏の加護が強くて御息所が取り憑けなかつたために、代わりに取り憑かれたようなことになる。これは極めて異常なことではあるまいか。

論理的に言つても、物の怪が取り憑くのは恨みに思っている人物というのが順当だし、同じ六条御息所の物の怪でも、葵上や女三の宮の場合は正しくそうである。では何故紫上だけが例外なのだろうか。大朝はこれで「紫上とは無関係であることがはっきり」し、「源氏だけの過去に関わる特定な物の怪であることによつて、源氏に働きかけた運命であることが何よりも鮮明になる」と述べる⁽⁶⁾が、これはむしろ、六条御息所は間違つても紫上を恨んだり出来ないような関係にあることを明かしてしまっているものではないだろうか。前述の如く、六条御息所の物の怪は、葵巻では明らかに紫上に利するように働いていたし、この若菜下巻でもそれに端を発する紫上の病は、これまでのところやはり紫上に益

しているように思われる。もしそうであるなら、この物の怪の言葉も、このように解する方がより自然というものであろう。

では何故ここでは、仮死とは言え、「死」にまで紫上を追い込まねばならなかったのかという問いに対しては、次のように答えることが可能であろう。既述の如く、紫上の病には、女三の宮のもとにいる源氏を紫上の所に引き戻すという作用があるが、その基本的性格はここでも変化していない。しかし、久々に対面した正妻が、真実体調がすぐれないように見え、それを自身の夜離れ故と誤解した源氏は、いとおしさと遠慮で、すぐには二条院へ戻れそうになかったと述べられている。その源氏をして全てを捨てて二条院へと急行させ、しかもその行為を世間からも指弾されないようにする方途は、もはや紫上の死ぐらしか残されていなかったであろう。また、だからこそ紫上の死は、蘇りの可能な「仮死」でなければならなかったのである。その上この事件は、六条院に新たな隙を生んでいる。

Eかの人(柏木)は、わりなく思ひあまる時々は夢のやうに見たてまつりけれど、宮は、
尽きせずわりなきことに思したり。
(④二四三頁)

柏木と女三の宮との密通は一度ではなかった。確かに、源氏に対する最大の罪であるところの薫は、初回の逢瀬で生まれたのではあったが、結局この二人の仲は、この時は発覚するには至らなかった。源氏が全てを知るのは、この、後の方の逢瀬で交わされた柏木の文によるのであり、それによって源氏と女三の宮は決定的な破局を迎えてしまうわけであるが、それを導いているのがこの紫上の仮死事件であることは、重々注意しておかなければならない。この構造は、前の紫上の発病の時も同じであり、併せ考えれば、六条御息所の物の怪に端を発するこの巻の紫上の病が、如何なる役目を果たすためのものであるかが見えて来よう。それは源氏と女三の宮を完全に引き離し、源氏を紫上のもとに返すためのものだったのである。

若菜上巻で源氏のもとに降嫁して来た女三の宮は、紫上より遙かに身分が上であり、しかも紫上自身は知らないが、宮もまた「紫のゆかり」の一人ということ、紫上にとつては真に脅威的な存在であった。尤もその実体はさほどでもなく、紫上が案ずるには及ばないことは、新婚四日目の朝、源氏のもとに届いた宮からの文によって、紫上自身も知るところとなる。そういう意味では、降嫁後三日目の晩を描くBの場面は、言わばまだ未知の脅威的存在であった女三の宮に対する、紫上の恐怖心の最後の発動とでも言うべきものなのである。ところがこうした三者の平衡状態も、七年にわたる源氏と女三の宮との結婚生活の中で、徐々に崩壊して来たらしい。

F内裏の帝さへ、(女三の宮ニ対スル)御心寄せことに聞こえたまへば、おろかに聞か
れたてまつらむいとほしくて、(源氏ガ)渡りたまふこと、(紫上ト女三の宮ト)
やうやう等しきやうになりゆく、さるべきこと、ことわりとは思ひながら、さればよ、
とのみやすからず(紫上ハ)思されけれど、なほつれなく同じさまにて過ぐしたまふ。

(若菜下④一七七頁)

これは、紫上が発病する直前に行われた六条院女樂の開始の直前にあるものであり、しかも女樂の時には源氏は琴を教えるという名目で、ほとんど女三の宮に付き切りであった。となれば、新婚直後の危機を一応回避した紫上の発病が、何故この時でなければならなかったかという理由は、自ずと明らかであろう。今度の危機はそう容易く回避することは出来ないであり、そのための苦肉の策がすなわち紫上の病なのであった。しかも、もしそ

れがごく普通の病だったとしたら、女三の宮を密通に導けたかもしれないが、源氏との仲を完全に断つことができたかどうかは疑問である。女三の宮は、「いみじき過ちありとも、心弱くゆるしつべき御ありさま」（柏木④三〇三頁）であり、その美は出家してもなお失われるものではなかったことは、折に触れて述べられている。それ故源氏が二度と女三の宮に近づかないようにするためには、どうしても女三の宮の「出家」という形が必要だったのであり、宮をそこに追い込むための物の怪の存在が不可欠だったわけである。しかし、苟も紫上が源氏物語随一の理想的女性として造型されているからには、Bのような描き方ならある程度許容されるにしても、それ以上直接的に紫上に手を下させることは不可能だったろう。そこで代わってその役割を担うことになったのが、六条御息所ではなかったか。その証拠に御息所の物の怪は、この場合は宮が出家すると、調伏されてもいないのに勝手に出現し、勝ち鬨を上げて退場した後には、その言葉通り二度と物語には登場しない。紫上が六条御息所の物の怪に憑かれる形となっているのは、人を呪わば穴二つと言うか、その方が、御息所の物の怪が紫上の願望を果しているのだということが隠蔽できるからであり、それ故御法巻における紫上の死の場面では、それがこの物の怪によるものではないことが、敢えて明らかにされているのではなからうか。

G さぎさぎもかくて生き出でたまふをりならひたまひて、御物の怪と疑ひたまひて、夜一夜さまさまのことをし尽くさせたまへど、かひもなく、明けはつるほどに消えはてたまひぬ。
（④五〇六頁）

かく見て来れば、六条御息所の物の怪は、葵巻と同様、この若菜下巻においても源氏を紫上に近づけながら、紫上にとって最大の脅威となる女性を、源氏のもとから排除するという役割を果していることが、ほぼ明らかにしたのではないかと思う。換言すればこれは、六条御息所の物の怪は、理想性を保持するために、自身では嫉妬の情を露わにしたり障害を排除したりすることが不可能な紫上に代わって、その願望を実現する役割を一貫して果しているということなのである。そしてそれを象徴的に示しているのが度々取り上げたBの場面なのであって、勘の良い読者ならあの場面ですれ以降の物語展開を予測しても良かったのである。六条御息所の物の怪が葵巻では生霊で、若菜下巻では死霊だという相違が見られるのは、既に大朝も気づいているように(7)、一にかかつて物の怪が自分自身をも排除する必要があったか否かによるのであり、敢えて言ってしまうと、この両場面の差異はそれしか存在しないと思う。それでは一体何故紫上の願望を果すのが六条御息所の物の怪でなければならなかったのか。この問題に対して大朝は、御息所には一貫して「物の人」という性格が付与されていたからだという解答を出した(8)が、これでは若菜下巻の場合は説明可能でも葵巻の場合は不可能である。それ故この問いに対する解答は、新たなものが求められねばならないと思うのである。

四

これまでの考察では、主として六条御息所の物の怪に憑かれた人物を中心に見て来たが、物語には源氏の妻妾の一人であるにも拘らず、御息所の物の怪に崇られなかった者もいる。そのような者は、紫上にさほどの脅威を与えなかった人物ということ、皆一様に説明がつくと思うが、そうした説明では若干問題となる人物が唯一人存在する。それは以前から何故御息所に崇られなかったかが種々取り沙汰されている明石御方である。確かに御方は紫上とは比べものにならない身分の低さで、その点に関しては全く紫上の脅威にはならな

かったと断してもよいのであるが、御方は唯一つ紫上よりも勝った点を有していた。それは実子の存在である。理想的な源氏の妻と言われる紫上にも、源氏との間に子が無いという大きな欠点が存在することは、物語内では自他ともに認めるところであり、数多くの源氏の妻妾の中でも、とりわけ明石御方を目の敵にしているように描かれるのも、そこに根ざしているらしい。しかしながら、源氏と紫上との紐帯をより理想的なものとするために、紫上に実子を与えないことが物語に要請される場所である（前節参照）以上、このことが抜本的には改善されるはずもなく、ここに明石御方が六条御息所の物の怪に祟られる可能性は確かに存在するのである。にも拘らず御方は物の怪に全く祟られていないので、御方と御息所が実は同族であったのではないかなどということが説かれたりもする⁽⁹⁾のだが、それは物語に決定的な証拠が無いことだから何とも判断が下せない。むしろここで注意しなければならぬのは、紫上の欠点を蔽うための策として案出されたと思われる、紫上が養子を迎えるという設定であると思う。

紫上は、死ぬ間際の匂宮に至るまで、実に多くの子供を引き取って育てており、その中には御方の娘の明石姫君の顔もある。これが源氏の実子を有する明石御方を、それを持たない紫上の下に位置づける苦肉の策だというのは容易に察しがつくのだが、この際見落してはならないのは、この姫君が薄雲巻で紫上のもとに引き取られる以前にも紫上は養女を迎えており、それによって御方と微妙なバランスをとり合っていた節があるということである。その養女こそ誰であろう、後に秋好中宮と呼ばれる、六条御息所の娘なのであった。

尤も秋好は表面的にはあくまでも源氏の養女として迎えられたことになっており、紫上のためなどは物語は一言も語っていない。だが、源氏に引き取られた秋好が、数多いる妻妾の中で結局誰の世話を受けたかということは、薄雲巻で源氏が姫君を引き取るべく明石御方を説得する、「かしこ（紫上）には年経ぬれどかかる人もなきが、さうざうしくおぼゆるままに、前斎宮（秋好）のおとなびものしたまふをだにこそあながちに扱ひきこゆめれば、……」（②四二八頁）という科白から明らかである。しかも、この前斎宮を源氏に託す時の母御息所の言葉というのが、Dで見た死霊の言葉とほぼ同程度に、奇妙なところを有するものである。

H「いと難きこと。まことにうち頼むべき親などにて見ゆづる人だに、女親に離れぬるは、いとあはれなることにこそはべるめれ。まして、思ほし人めかさむにつけても、あぢきなき方やうちまじり、人に心もおかれたまはむ。うたてある思ひやりごとなれど、かけてさやうの世づいたる筋に思しよるな。うき身をつみはべるにも、女は思ひの外にても思ひを添ふるものになむはべりければ、いかでさる方をもて離れて見たてまつらむと思つたまふる」
（濔標②三一頁）

たとえ遺言などなくとも娘の面倒は見るともりだったのだから、今はもう心配してくれるなという源氏の言葉に、御息所はまず「いと難きこと」と応ずる。続いて御息所は自分の辛い体験からして娘に同じ思いはさせたくない、だから決して娘を源氏の「思ほし人」とはしてくれないと述べ、この辺は如何にも御息所ならではの発言と共感し得るものであるのだが、この言葉の奇妙な点は、最後の「いかでさる方をもて離れて見たてまつらむと思つたまふる」の部分に存在する。これを素直に解釈すれば、諸注釈が主旨そのように解している、「娘には一生独身を守らせたい」という意になると思うが、物語ではこの直後に源氏と藤壺の間で、秋好は冷泉後宮に入内することが決定され、絵合巻ではそれが実現

されて、御息所の意向は全く無視された形となっている。にも拘らず、それを御息所が怨みに思ったなどとは一向語られないどころか、Dの死霊の言葉によれば、御息所は源氏の処置に感謝してさえいるらしい。これはどう考えても奇妙なことであり、もしこれが単なる作者のミスでないとする——しかし事が直後で決している以上その可能性はあまり考えられないが——六条御息所の言葉の真意は、とにかく娘を源氏と結ばせずに養女として迎えさせることであつたのであり、最後の部分はそれが若干強くなりすぎてしまったのだとでも解する他はあるまい。換言すれば、御息所としては娘が源氏とさえ結ばなければ、後は誰と結ばれても良かったのだということにもなるが、これが紫上にとつて極めて都合の良い思考であることは察しがっこう。

この濡標という巻は、明石巻で一旦別れ別れとなつた源氏と明石御方の間に子が誕生し、しかも二人は住吉で邂逅してますますその結びつきを強めるという、紫上にとつては非常に不都合な巻である。源氏の子を生めない紫上を御方と対抗させるには、せめて紫上にも后がねとなる養女を与えるぐらいのことしかできないのだが、それを住吉での源氏と御方の邂逅の直後に行っている人物が六条御息所であることは、やはり特筆に値する。しかもこの際注意しなければならないのは、後の玉鬘の場合のように、養女自身が源氏の恋愛の対象となつたり、もしくはその母が新たに源氏と関係を結び得る女性であつたとしたら、却つて紫上のライバルを増やすだけの結果になりかねないことで、その可能性だけはあらかじめ何としても摘み取っておかなければならないのである。そういう意味でも、かつて源氏と別れた形となつている六条御息所は最適任で、しかも御息所はこの巻で死去するのであり、その遺言は源氏にとつて千金の重みを有するものとなるだろう。濡標巻に於ける六条御息所の再登場と死去、及びその遺言の意味とはこのようなものであつたと思われるのだが、そうだとすれば御息所はここでもまた紫上に奉仕するかのようには働いていることになる。

無論これは、秋好は明石姫君が入内し得る年齢に達するまで源氏の政権を支えるために養女となつたという、これまでの見方を真つ向から否定しようというものではない。むしろこれらのことは皆、秋好が源氏の養女となることの一要素であるということを前提として、今は敢えてその一部分だけを強調した物言いをしているわけだが、こう見て来ると、どうやら六条御息所は、物の怪となつていて時だけでなく、実体として存在する時も紫上を補助しているように思われる。これを裏返せば、六条御息所は初めから紫上を補助する役割を有する人物として造型されているのではないかということになる。つまり、御息所は、理想的女性として造型された紫上からは、必然的に切り捨てられねばならなかつた激しい嫉妬や人に対する恨み、果てはその人を源氏のもとから排除したいと願うような、言わば心の「闇の部分」を一手に引き受けて、紫上のためにそれを代行するという、紫上の影とでも呼ぶべき機能を有する人物なのではないかということなのである。そしてこう考へて初めて、前段で発した、物の怪となるのは何故六条御息所でなければならなかつたかという問いに対する、的確な解答が得られるように思うのである。

五

以上、六条御息所が初めから紫上を補助する機能を有する人物として造型されたと考えられることについて、物語を辿りながら粗々述べて来た。無論これは御息所の一側面を特に強調して論じて来たにすぎず、これで六条御息所の全てを述べ尽したとは思っていない。

しかし実在の人物を理解するにも何年も要することがあるように、これだけ緻密な源氏物語の登場人物を一挙に把握することは不可能で、残されたのは一つ一つの側面を検証して最後にその総体としてそれを捉えるという、長くて迂遠な途だけだと思う。本節もそうした過程の一環であるわけだが、たとえわずか一側面のことであっても、それが物語の全体に亘って新たな可能性を開くものであれば、それなりの価値を有するのではないかと思う。そこで最後にそうした例を二つほど挙げて、本節の結びとすることにす。

その一つは夕顔巻の物の怪の問題である。周知の如くこの巻については、色々と成立の問題も絡むのだが、今はしばらくそれは置こう。この物の怪の正体には古来様々な説があり、もうほとんど議論も出尽くしたかの感もあるが、六条御息所を紫上の影的人物と理解すれば、なお一つの問題が浮び上がる。それは、源氏が夕顔を最初に連れて行こうとしたのは、「なにがしの院」ではないことである。

I なほ誰となくて、二条院に迎へてん、もし聞こえありて、便なかるべきことなりとも、さるべきにこそは。わが心ながら、いとかく人にしむことはなきをいかなる契りにかはありけん、など(源氏八)思ほしよる。(①一五四頁)

源氏が最初に考えたのは自邸の二条院であった。それが、実際に行動に移されるまでのごくわずかの時間の中で、一体いつ「なにがしの院」にすり変えられたのかは定かでないが、いずれにせよ、ここで一旦源氏が二条院に夕顔を迎える気になったと語られていることは、もつと重視されても良いと思う。これは、それまでの夕顔に対する源氏の感溺から当然予想される帰結であり、もしそうなった場合のことをここで想定してみるのも強ち無駄ではないだろう。夕顔は当然源氏の正式な妻妾の一員となったであろうが、夕顔の素姓を知った遙か後に、過去を振り返って感慨を述べた源氏の言葉が、「(夕顔ガ)世にあらましかば、北の町にもものする人(明石御方)の列には、などか見ざらまし」(玉鬘③一二六頁)であるから、その地位がどれほどのものとなったかは聊か疑問であるにせよ、次の若紫巻で登場し、二条院に迎えられることになる紫上にとっては、かなりの障害となったろうことは確実に言える。そしてまさにその瞬間に物の怪が発動し、夕顔が命を落としたことは、重々注意しなければならないと思う。すなわち、この物の怪の正体も「なにがしの院」の妖物として巧みにカムフラージュされた六条御息所で、御息所はここでもまた、まだ登場せぬ紫上のために、秘かにその障害を排除しているのではないかということなのである。と言うより、ここで夕顔という障害が排除されて初めて登場が可能となったのが紫上であると言った方が、真相により近いかもしれない。ともあれ、そのように考えることが、夕顔も紫上も六条御息所と関係が深いとされる、坂本共展の指摘¹⁰⁾に、聊か付加するところがあるように思う。

二つめは続編の捉え方である。大朝も述べている(II)ように、薫はある意味では六条御息所の死霊に導かれていると言うことが可能である。本節で考察したように、六条御息所が紫上の闇の部分を引き受ける人物だとすると、薫は紫上の闇の後継者と言い換えることが出来、二条院を正當に受け継いだことに端的に示される如く、紫上の光の後継者とも言い得る匂宮とは、まさに好一對と把握することも可能なのである。つまり、これまでは匂宮と薫は源氏の光と影の分身であり、紫上のそれは宇治の三姉妹に認められるというのが一般的理解であったと思うのだが、実は匂宮と薫についても紫上の分身であることが言えるのではないかということなのである。そしてそのように捉えた方が、薫が関係する女性

を次々に不幸に陥れていく理由、特に一人目の大君は亡くなり、二人目の中の君は危うく助かり、三人目の浮舟は出家するという、奇しくも六条御息所の物の怪が取り憑いた三人の女性、葵上、紫上、女三の宮と相似した軌跡を辿ることの理由が求められるように思うのだが、それについては第三章第二節の1で、詳しく言及することとしたい。

注(1) 大朝雄二「葵巻における長篇構造」、「六条御息所の死霊」、「光源氏物語の構想——六条御息所の死霊の意味——」(『源氏物語正篇の研究』第十二、十七、十八章 桜楓社 昭50)、「六条御息所の苦悩」(『講座源氏物語の世界』第三集)。

(2) 注(1)前書、第十二章及び後書。

(3) 加納重文「紫上」(『源氏物語の研究』第二編人物論第一章 望稜舎 昭61)も同様の指摘をする。

(4) 小西甚一「苦の世界の人たち——『源氏物語』第二部の人物像——」(『言語と文芸』昭43・11)。

(5) 注(1)前書、第十七、八章及び小学館新編日本古典文学全集『源氏物語』第四卷二一五頁頭注二〇等。

(6) 注(1)前書、五四一頁。

(7) 注(1)後書。

(8) 注(1)前書、五三九頁。

(9) 坂本和子「光源氏の系譜」(日本文学研究資料叢書『源氏物語Ⅳ』所収 有精堂 昭57)。

(10) 坂本共展「六条御息所」(『源氏物語必携Ⅱ』)。

(11) 注(1)前書、第十七、八章。

第四節 葵上の機能

一

葵上は源氏よりも年上で、その年齢差は四歳である。こう書き出すと、何を今更当然なことをと思うかもしれないが、これはそんなに当然ではない。何故なら、葵上が初めて登場する桐壺巻では、次のように述べられているに過ぎないからである。

A その夜（源氏元服ノ夜）、大臣の御里に、源氏の君まかでさせたまふ。作法世にめづらしきまで、もてかしづきこえたまへり。いとさびはにておはしたるを、ゆゆしうつくしと思ひきこえたまへり。女君は、すこし過ぐしたまへるほどに、いと若うおはすれば、似げなく恥づかしと思ひたり。
(①四七〜八頁)

括弧に注を付したように、本当は源氏元服から続く長大な場面の一節である訳だが、そこに葵上の姿はないので省略した。これを見て直ちに理解されることは、二人の年齢差が幾つであるかは何処にも描かれていないということであろう。それが具体的に表わされるのは、七巻も後の紅葉賀巻まで待たねばならない。

B 内裏より、大殿にまかでたまへれば、例の、うるはしうよそほしき御さまにて、心うつくしき御気色もなく苦しければ、「今年よりだに、すこし世づきてあらためたまふ御心見えば、いかにうれしからむ」など聞こえたまへど、わざと人すゑてかしづきたまふと聞きたまひしよりは、やむごとなく思定めたることにこそはと、心のみおかれて、いとど疎く恥づかしく思さるべし、しひて見知らぬやうにもてなして、乱れたる御けはひにはえしも心強からず、御答へなどうち聞こえたまへるは、なほ人よりはいとことなり。四年ばかりがこのかみにおはすれば、うちすぐし恥づかしげに、盛りにととのほりて見えたまふ。何ごとかはこの人の飽かぬところはものしたまふ、わが心のあまりけしからぬさびに、かく恨みられたてまつるぞかし、と思し知らる。同じ大臣と聞こゆる中にも、おぼえやむごとなくおはするが、宮腹にひとりいつきかしづきたまふ御心おごりいとよなくて、すこしもおろかならぬをばめざましと思ひきこえたまへるを、男君は、などかいとさしもと馴らはいたまふ、御心の隔てどもなるべし。
(①三二二〜三頁)

最初は書かれていなかったことを、遑って書くのがこの物語の常であるから、これもそうだと解する向きもあるが、では何故この場所でなければならなかったか。こうした疑問を發したのは別にこれが初めてというわけではない。既に藤村潔の論がある(1)からである。そこで藤村は、これが葵上の父・左大臣と類似することを説くのだが、確かにそうした一面があることも否定できないものの、その意見に全面的には承服できない理由は、葵上についてはもう一つ気になる疑問点があるからである。それは、若菜下巻で、出家を望む紫上の気持ちを紛らすために源氏が語った、若き日に出会った女人達に関する思ひ出話の中の次のような一節である。

C 「……大将の母君を、幼かりしほどに見そめて、やむごとなくえ避らぬ筋には思ひしを、常に仲よからず、隔である心地してやみにしこそ、今思へばいとほしく悔しくもあれ、また、わが過ちにのみもあらざりけりなど、心ひとつになむ思ひ出づる。うるはしく重りかにて、そのことの飽かぬかなとおぼゆることもなかりき。ただ、いとあまり乱れたるところなく、すくすくしく、すこしさかしとやいふべかりけむと、思

ふには頼もしく、見るにはわずらはしかりし人ざまになむ。……」 (④二〇八頁)

源氏と葵上との関係を良く知る人にとつては、これもまた特に目新しいことを語っている訳ではないかもしれない。なのに殊更この部分に心惹かれる理由は、葵上は何故ここまですわられて物の怪となつて出て来ないのだろうなどと夢想してしまうからである。と言うのは、この後引き続き組上に載せられた六条御息所は、周知のように物の怪となつて現れ、しかもその理由の一つとしてこの時の会話を挙げているからなのである。

D 「……その中にも、生きての世に、人よりおとして思し棄てしよりも、思ふどちの御物語のついでに、心よからず憎かりしありさまをのたまひ出でたりしなむ、いと恨めしく。今はただ亡きに思しゆるして、他人の言ひおとしめむをだに省き隠したまへ、とこそ思へ、とうち思ひしばかりに、かくいみじき身のけはひなれば、かくところせきなり。……」 (若菜下④二三六〜七頁)

尤も六条御息所は、この物語で幾度となく物の怪となつて現れているから自ずと話は別だ、彼女は成仏していないのだから仕方ないのだという言い方も或いは出来るかもしれない。しかし、それなら葵上は果たして成仏していると言ひ得るのかと言へば、それは多分に危ういのである。と言うのは、妊娠中に死ぬことの罪深さは、宇治の中の君によつて語られているからである。

E このなやましきこともいかならんとすらむ、いみじく命短き族なれば、かやうならんついでにもや、はかなくなりなむとすらん、と思ふには、惜しからねど、悲しくもあり。また、いと罪深くもあなるものを、など、まどろまれぬままに思ひ明かしたまふ。 (宿木⑤四一三頁)

ただ、言うまでもなく葵上が亡くなったのは妊娠中ではなく、無事夕霧を産み落としてからである。しかし、それは出産後間もなくのことであつたし、その死に様は六条御息所の物の怪に憑り殺されるという、文字通り「横様なる死」であつたわけであるから、彼女が成仏してない可能性というのは、かなりの程度あると思うのである。従つて、先程の問の答えを、その人物が成仏したか否かなどという相違に安易に求めるわけにはいかない。しかも、死後、人に噂話をされて物の怪となつて居るのは、この物語の場合、ドロドロした怨念を抱えている者ばかりではない。あの源氏の理想の恋人・藤壺でさえそうなのである。

F 入りたまひても、宮の御事を思ひつつ大殿籠れるに、夢ともなくほのかに見たてまつるを、いみじく恨みたまへる御気色にて、「漏らさじとのたまひしかど、うき名の隠れなかりければ、恥づかしう。苦しき目を見るにつけても、つらくなむ」とのたまふ。 (朝顔②四九四〜五頁)

但し、ここは源氏の夢うつつの中にその姿が現れたのであるから、厳密に言えば物の怪とは異なるかもしれない。しかし、「いみじく恨みたまへる御気色」或いは、省略してしまつたが、続く部分にある「おそはるる心地して」などの言葉から、極めてそれに近いものという理解は成り立つであろう(②)。源氏物語の美の規範とも言ふべき藤壺でさえこのような有様なのだから、逆に死後に噂されたら物の怪となつて出て来るのがこの物語の論理であるような気もしてくる(③)のだが、だとすれば、ますます疑問になるのは、では何故葵上はそうならないかである。既にCの引用文で見たように、彼女は充分に恨みに思つても良いだけの悪口を言われている。にも拘らず、彼女は頑として物の怪にならない。何

故であろうか。年齢の記載と物の怪にならないこと、一見無関係であるかのように見えるこの二つの疑問は、実はその根底において密接に繋がっており、それを明かすことが葵上の造型に迫る一つの方法であるように思われる。以下はそれについての考察である。

二

既に冒頭Aの引用文に示したように、源氏と葵上との出会いは首巻桐壺であるが、そこではわずかに「似げなく恥づかし」という心の声が描かれるだけで、彼女の姿は余りにも少ない。さらに、次に彼女の声が聞かれるのは何と第五巻若紫で、「瘧病」を癒した源氏が北山から帰ってくる場面まで待たねばならないのである。

G女君、例の、這ひ隠れてとみにも出でたまはぬを、大臣せちに聞こえたまひて、からうじて渡りたまへり。ただ、絵に描きたるものの姫君のやうに、しすゑられて、うちみじろきたまふこともかたく、うるはしうてものしたまへば、思ふこともうちかすめ、山路の物語をも聞こえむ、言ふかひありてをかしう答へたまはばこそあはれならぬ、世には心もとけず、うとく恥づかしきものに思して、年の重なるに添へて、御心の隔てもまさるを、いと苦しく思はずに、「時々世の常なる御気色を見ばや。たへがたうわづらひはべりしをも、いかがとだに問ひたまはぬこそ、めづらしからぬことなれど、なほ恨めしう」と聞こえたまふ。からうじて、「問はぬはつらきものにやあらん」と、後目に見おこせたまへるまみ、いと恥づかしげに、気高ううつくしげなる御容貌なり。「源氏ノ言葉省略」とて、夜の御座に入りたまひぬ。女君、ふとも入りたまはず。聞こえわづらひたまひて、うち嘆きて臥したまへるも、なま心づきなきにやあらむ、ねぶたげにもてなして、とかう世を思し乱ること多かり。(①二二六く七頁)

これとて、聞けるのはわずかに一言、しかも古歌を引用したらしい「問はぬはつらきものにやあらん」だけなのだが、問題は、たとえこの程度でも葵上の姿が描かれるのに何故四巻もの巻数を要したかである。と言うのは、これは最初に掲げた年齢の描かれ方と通ずるところがあるからである。しかし、この場合は若干それとは異なるのは、葵上の気持ちかもしれないものが描かれるのは、厳密に言えばこの間にも存在するということだ。但しそれは、「葵上の気持ちかもしれない」という微妙な言い回しを使ったように、例えば次のような聊か問題を孕む形である。

H 長雨晴れ間なきころ、内裏の御物忌さしつづきて、いとど長居さぶらひたまふを、大殿にはおぼつかなく恨めしく思したれど、よろづの御よそひ何くれとめづらしきさまに調じ出でたまひつつ、御むすこの君たち、ただこの御宿直所に宮仕をつとめたまふ。(①五四頁)

引用部分は有名な帚木巻の雨夜の品定め発端であるから、場面についてはこれ以上の説明は不要と思われるが、何が問題であるかも自ずと明らかであろう。これだけでは、「おぼつかなく恨めしく」思っている主体が葵上なのかその父・左大臣なのか判然としないということなのだ。しかし、葵上の場合はこの傾向はままあって言うか、はっきり言ってしまうえば引用文AとGの間は皆そうなので、敢えて勘定には入れなかったというのが真相なのである。換言すれば、葵上の思いと左大臣家の意向は、ほとんど全て一致しているということになるが、彼女のこうした傾向は既にその呼称自体が雄弁に語っているとも言える。と言うのは、他に適当なものがないので本稿でもこの女人を指し示すのに「葵上」という呼称を用いているが、この呼称は後世に考え出されたもので、本文中には何処にも無

く、物語中で最も一般的な彼女の呼称は「大殿の君」というものだからである。「大殿の君」すなわち左大臣家の姫君ということで、彼女は何処まで言っても左大臣家の一員である軀からは逃れられないのである(4)が、だからと言って、それだけで彼女の全てが説明できるものもあるまい。何故なら、それだけでは前節に掲げた二つの疑問、特に左大臣とは全く関係無さそうな後者は手つかずのまま残ってしまうし、B、Gといったごく僅かな例とは言え、彼女独自の部分も見られるからである。

これらに説明を加えるためには、たった一言とは言え彼女が初めて言葉を発したという意味で、Aより彼女を实体として捉え得るGの場面から分析するしかないであろう。そこで次節では、その中の疑問点を指摘するところから話を始めてみたい。

三

前段でも述べたように、引用文Gは、葵上の初出であるAから数えてほぼ二箇所目、実体的という点ではほとんど最初の場面であるにも拘らず、奇妙な言葉が用いられている。

「例の」というのがそれである。これによれば、せつかく源氏がたまに訪ねて来ても葵上がなかなか会おうとしなかったことが既に恒常化していたことになるが、源氏が葵上を避けているという記述はあっても、その逆のことはこれ以前には描かれてなかった。勿論ここでもこれがこの物語の常套なのだという考え方は出来るわけだが、それでは先程と同じ問いが出ることになる。すなわち、では何故それがここで語られねばならないかである。そう思っただけでお引用文を読み進むと、さらに疑問点が湧いてくる。それは源氏の言葉の中にある、「たへがたうわづらひはべりしをも、いかがとだに問ひたまはぬこそ、めづらしからぬことなれど」という部分である。

無論これは、先程挙げた地の文の「例の」という言葉を敷衍しているにすぎないのだけれど、源氏がやや年上の女性と結婚し、彼女はそれを聊か恥じているという情報以外は、葵上の素振りについて、これ以前には何ら予備知識を与えられていない読者としては、これだけ畳み掛けられては、まるでこのような態度を取っているのだから、葵上は源氏に嫌われても仕方ないのだと思ひ込まれているようなものではないか(5)。つまり、葵上は六条御息所と同様、物語に本格的に登場した時点で既に源氏との間が破局を迎えていたと語られていることになる。では何故そう語られねばならないかに思いを致す時、どうしても氣に掛かって来るのは、これが若紫巻にあるという事実なのである。

一口に若紫巻と言ってもその内容は豊富で、藤壺と源氏の、二度目ではあるけれども物語中では最初の密通描写まであるわけだが、何と言ってもその巻名から連想するのは後の紫上であろう。だとすれば、先程の事実も或いは紫上と何らかの関わりを有しているのではないかという可能性が浮かび上がって来る(6)。現に引用文Bにも、やはり紫上が二条院に引き取られたことを聞き、面白くなく思っている葵上の姿が描かれていた。或いは、次に掲げる文章など葵上の造型を典型的に表していると思うが、その中にもこの条件は同じく含まれているのである。

I かうやうに(紫上ガ身ヲモツテ源氏ヲ)とどめられたまふをりなりなども多かるを、おのづから漏り聞く人、大殿に聞こえければ、「誰ならむ。いとめざましきことにもあるかな。今までその人とも聞こえず、さやうにまつはし戯れなどすらんは、あてやかに心にくき人にはあらじ。内裏わたりなどにてはかなく見たまひけむ人をものめかしたまひて、人や咎めむと隠したまふななり。心なげにいはけて聞こゆるは」など、

さぶらふ人々も聞こえあへり。

内裏にも、かかる人ありと聞こしめして、「いとほしく大臣の思ひ嘆かるること
も、げに。(以下略)」
(紅葉賀①三三四頁)

これが葵上の造型を典型的に表しているという所以は、引用文の大半を占める会話文は結局葵上の思いではなくその女房のものということになっているのだが、この物語でも少なくとも正編は女房とその女主人は一心同体のように描かれているから、葵上のものとも解して良からうし、続いて引いた桐壺帝の言葉の中では、それが左大臣の思いとして語られている、すなわち葵上の思いイコール左大臣家の総意という図式が良く成り立っていると思うからであるが、冒頭に見られるように、そのきっかけはやはり紫上なのである。さらに言ってしまうえば、引用文Hのように、葵上の思いであるか左大臣家の総意であるか判別不能の心中思惟を除いて、葵上の心中が語られる場面は、紫上の登場する巻、それもその登場の前後とほぼ限定が可能なのである。

しかし、このようなことを言うと、それでは最初の桐壺巻はどうかという疑問が出るかもしれない。確かに、そこには紫上は登場しないけれども、その代わりと言うかそつちが本体なのだが、「紫のゆかり」である藤壺が登場する。しかも、桐壺巻の末尾近くには次のようにあった。

J 源氏の君は、上の常に召しまつはせば、心やすく里住みもえしたまはず。心のうちには、ただ藤壺の御ありさまをたぐひなしと思ひきこえて、さようならむ人をこそ見
め、似る人なくもおはしけるかな、大殿の君、いとをかしげにかしづかれたる人とは
見ゆれど、心にもつかずおぼえたまひて、幼きほどの心ひとつにかかりて、いと苦し
きまでぞおはしける。
(①四九頁)

見て分かるように、葵上は藤壺の完全な引き立て役である。その上、文中にある「さやうならむ人」が発展したのが紫上であることは明らかで、だとすると、確かに桐壺巻にはまだ紫上は登場していないが、藤壺を媒介として、葵上は早くもその間接的な引き立て役に回っているとも言えるのである。

このように見て来ると、葵上は常に紫上と対比され、その引き立て役となるよう求められ、その邪魔をしないよう造型されていると理解できるのである。そして、そのように解してこそ、これまでに提出した、葵上は何故、実質二度目の描写と思われるGで既に源氏との仲が絶望的であるとされるのか、或いはまた、Bに至ってより詳細な性格設定がなされるのかという問いに、全て合理的に答え得ると思うのである。言うまでもなく、紫上との関係が始まるのがGの若紫巻で、そこで二条院に引き取られた紫上が、次第に源氏の心中で重い比重を占め出すのがBの紅葉賀巻だからである。そこでそれぞれ、源氏と葵上との関係は紫上との障害には成り得ないこと、或いは、葵上はこのような性格だから源氏に嫌われても仕方ないことを読者に信じ込ませるのは、極めて有効な方法だと思われる。さらに言えば、源氏が紫上と新枕を交わすのは、葵巻で葵上の四十九日を済ませた直後のことであつた。

特に、この新枕が四十九日の直後というのは意味深長で、この葵巻で葵上はまるで最後の花道とばかりに、懐妊により源氏との愛が目覚めつつあることが繰り返して描写されるのであるが、その一方で、既に指摘されているように、実に早い段階からその死が匂わされている節がある。すなわち、葵上が物の怪に苦しめられていることが最初に語られる、次

のような描写の中にある傍線部がそれである(7)。

K 院よりも御とぶらひ隙なく、御祈祷のことまで思しよらせたまふさまのかたじけなきにつけても、いとど惜しげなる人の御身なり。世の中あまねく惜しみきこゆるを聞きたまふにも、御息所はただならず思さる。
(2)三三頁)

つまりこれも、この巻で度々繰り返されているように、正妻である葵上に子供が生まれれば、それで全てが決まってしまう可能性がある。それ故そこに紫上を割り込ませるには、どうしても葵上は物語から退場せねばならぬ。それも、もう一人の紫上の大きな障害である六条御息所とともに、ということなのである。

さて、今、「六条御息所とともに」という言い方をしたが、まさしく葵上と御息所は類似すると言える。そして、そのこともまた葵上と紫上との繋がり証する一助となるので、次段ではそれについて少し触れてみよう。

四

葵上と六条御息所が似ているなどという点と、意外に思う向きもあるかもしれないが、冷静に考えてみると、この二人には数多くの共通点がある。まず、二人とも大臣の娘であること、そのせいで気位高くはあるが、源氏に対しては年齢のコンプレックスを抱いていること、一方はそうはならず、またもう一方はそうなつてすぐに死に遅れたという相違はあるが、共に東宮と関係があること、源氏との実質的な関係が始まった時点で既にその仲は絶望的と語られるにも拘らず、共に一子を残し、その子達はそれぞれ源氏の栄華を形成するのに寄与していることなど、数え挙げていけば切りがないが、端的にはこの二人が原因で、源氏は桐壺帝に怒られていることが挙げられる。尤も、葵上に関してのものは、既にIにその冒頭を引用してしまったが、まだ続きはあるし、全体を六条御息所に関するものと比較したい気持ちもあるので、桐壺帝の言葉以降をもう一度次に並べて掲げてみよう。

L 内裏にも、かかる人ありと聞こしめして、「いとほしく大臣の思ひ嘆かるなることも、げに。ものげなかりしほどを、おほなおほなくものしたる心を、さばかりのこととたどらぬほどにはあらじを、なか情なくはもてなすなるらん」とのたまはすれど、かしこまりたるさまにて、御答へも聞こえたまはねば、心ゆかぬなめりといとほしく思しめす。さるは、すぎずきしううち乱れて、この見ゆる女房にまれ、またこなたかなたの人々など、なべてならずとも見え聞こえさめるを、「いかなるものの際に隠れ歩いて、かく人にも恨みらるらむ」とのたまはず。
(紅葉賀①三三四〜五頁)

M院にも、かかることなむと聞こしめして、「故宮のいとやむごとなく思し時めかしたまひしものを、軽々しうおしなべたるさまにもてなすながいとほしきこと。齋宮をもこの皇女たちの列になむ思へば、いづ方につけてもおろかならざらむこそよからめ。心のすさびにまかせて、かくすきわざするは、いと世のもどき負ひぬべきことなり」など、御気色あしければ、わが御心地にもげにと思ひ知らるれば、かしこまりてさぶらひたまふ。「人のため恥がましきことなく、いづれをもなだらかにもてなして、女の恨みな負ひそ」とのたまはするにも、けしからぬ心のおほけなさを聞こしめしつけたらむ時と恐ろしければ、かしこまりてまかだたまひぬ。
(葵②一八〜九頁)

こうして並べてみると桐壺帝は始終源氏を怒っているようだが、この二人の女性以外には余り見ない。しかも、確かにMの末尾は藤壺との密通の罪に怯える源氏の姿へと流れているが、両方とも源氏がただ黙って畏まっているせい、その姿の描写を挟んで桐壺帝の

言葉が二分されていたり、その内容も非常に似通っていたりして、決め手となる固有名詞を隠してしまえば、どちらがどちらのものか俄かには判別しにくいぐらいである。これもやはり二人の造型が極めて近いことを暗示していよう。では、これが如何なる意味を有するのかということであるが、これもこの物語の常として、答えが一つだけということは無いだろうが、少なくともその解答の一つと成り得るものの手掛かりについては、既に本章第三節で論じた。すなわち紫上との関わりである。六条御息所は一面非常に機能的人物で、紫上の影的存在であることはそこで述べたが、それに準じて考えれば、この葵上の場合もそれと同じようなことが言えるのではないかということなのである。そしてその証拠と思われるのが、前段で示した数々の事象ということになる。

つまり、六条御息所の場合は紫上に代わって障害を強引に排除していくところにその主たる役割があつたが、葵上の場合には逆に己の存在を限りなく零に近づける事によってやはり紫上のことを間接的に引き立てる役割を果たしているのではないかということなのである。この二つの役割は本来表裏を為すもので、従つてこの二人は、今普通に考えられているよりも遙かに造型的には近いのであり、その言わば種明かしみたいなものが本段で追い求めてきたことのように思うのだが、だとすればこの二人にはさらに興味深い類似点がかび上がってくる。本節冒頭に掲げた、葵上（そしてそれは六条御息所も同じであるが）は、源氏より年上とされるにも拘らず、最初はその年齢差が明示されないということである。ここに至つて漸くその問題を考察する時が来たようだ。

五

第三段でも少し触れたように、源氏と葵上との年齢差が明かされるのは、やはり紫上の重さと大いに関わりがある紅葉賀巻である。だが、この葵上が源氏よりわずかに四歳上というのは、葵上は間違つても紫上と源氏の結び付きを邪魔しないよう造型されているとすると、或いは逆効果になる可能性を秘めている。何故なら、源氏があればほど夢中になつて藤壺は、義理の母という設定とは言え、さらに上の五歳差だし、多少特殊な例かもしれないが、秋好中宮など冷泉帝より九つも上である。四歳差など、この当時では問題にもならないかもしれないのだ⁽⁸⁾。最初に設定がないのだから、この時点で二人の年齢差を何歳とすることも理論的には可能であり、事実Aだけを読んだ感じでは葵上はもう少し年上であるような印象があるのだが、何故こんなに源氏と近い年齢に葵上を設定したのだろうか。それを解く鍵はやはり六条御息所との類似という点に求められよう。

周知のように六条御息所も、その登場の当初には源氏よりも年上であることが描かれるのみで、その実際の年齢差が七歳であると明かされるのは、葵巻の次の賢木巻であるが、その記載には疑問があることも早くから指摘されている。それに対する解答も、作者の構想のミスというものまで含めて数多くあるが、後に秋好中宮となる娘との関係から⁽⁹⁾とというのが一番妥当なものはなからうか。すなわち、後に冷泉帝の中宮となる秋好の立場を考慮すれば、冷泉の十歳以上上というのは難しい。だとすれば、この時点で冷泉は五歳であるから、そこから先ず娘の年が決まり、さらにそれによって御息所の年が出るという訳である。仮にこれが正しいとすると、葵上の場合もちょうどそれと同じではなからうか。

葵巻における葵上の年齢は、源氏より四歳上という設定で二十六歳。倉本一宏の統計によれば、醍醐朝から後朱雀朝までの初産年齢が分かる者の平均は、二一・四歳だそうである⁽¹⁰⁾が、最高はどのくらいか。この物語の作者・紫式部自身が晩婚のため、通説に従つ

て彼女が天延元年生まれ(13)とすると、その第一子・賢子出産はほぼ二十八歳くらいの時となる。ただ、これは通説に従ったからで、最も早い今井源衛の天禄元年生まれ説を採れば彼女が三十歳の時となり、現に今井の著書ではそういうことになっている(14)。すなわち、彼女自身の年齢は所詮推定によらねばならないので当てには出来ないとする、道長の三女・威子の二十七歳という辺りが確認できる最高ということになるか。いずれにせよ、当時の結婚年齢・医療技術などに鑑みて、三十歳にあまり近いと難しかろう。すると、葵上のこの年齢は、源氏の表向きの長男・夕霧を産むという設定においては、ほぼぎりぎりの線だと思われる。逆に言って、だからこそ、この点については葵上を脅かすかもしれないという危険を犯しても、源氏と葵上を四歳差に留めざるを得なかったのではないかと思うのである(15)。それでは、それほどの無理を犯してまで、何故葵上に子供を産ませなければならなかったかが最後の疑問となるが、それについては段を改めて考察を加えてみよう。

六

以上のように、葵上は常に葵上の引き立て役に回り、間違っても源氏と葵上との結び付きを邪魔しない存在として造型されていると思われることを確認してきたが、初歩的な疑問として、それならば何故そもそも葵上というものを設定したかということが浮かび上がってくる。その存在が最初から無ければ、本節で考察してきたようなややこしい手続きなど、一切不要だからである。だが、光源氏にとって葵上がいらないことなど考えられない。しつこいようだが、もう一度Aに戻ってみよう。

源氏と葵上との結び付きは疑いもなく政略結婚であった。これは愛情を第一とする現代に於いては軽蔑されることかもしれないが、生まれた時から右大臣家を敵に回してしまつた光源氏にとって、その政敵である左大臣家と結び付く以外、あの時代において生きていく道が何処にあっただろう(16)。すなわち源氏は左大臣の娘・葵上と一度は結ばれねばならなかった。しかし、その存在が何時までもあったのでは葵上が割り込む隙がない。かと言って、離婚させたのではその後左大臣家と角が立つから、源氏に惜しませつつ死なせるしかない。ここまで書いてくれば、何故葵上が最後に夕霧を産むかは既に明らかだろう。勿論そのまま葵上を死なせたのでは源氏と左大臣家の繋がりが完全に断たれてしまうからで、それ故葵上は自分が消え去る時、新たな源氏と左大臣家との絆で、しかも絶対に葵上の存在を脅かさない、源氏との間の子を残していく必要があったわけである。大体葵巻での葵上の懐妊・出産というのは、結婚後九年も経っており、「めづらしくあはれ」という言葉(葵②二〇頁)を俟つまでもなく、かなり不自然なことなのである。おそらくこの年月は葵上の成長を待っていたためであろう。そしてその子が女であれば、今度は逆に左大臣家の持ち駒を増やしてしまうことになる。だから夕霧は男なのである。これはまた、子供を産めない定めにある葵上(本章第二節参照)を間接的に助ける意味もあった。何故なら、いつまでも生きている、例えば花散里あたりに産ませたとしたら、これまた葵上の地位を脅かす可能性があるからである。すなわち葵上は源氏の子を産んだ直後に死なねばならなかったのである。葵上にとつてのもう一人の脅威である六条御息所を連れて。したがって、葵巻の物の怪事件とは、どちらかが一方的に加害者ではなく、また被害者でもないという、言わば共同正犯的な事件であったと思われるのだが、その一翼を担うことが葵上に課せられた最大の使命だった訳である。そして彼女はそれを立派に全うした。それ

故、彼女はその後、絶えて物語に登場しないのであろう。

こう言ってしまうと、大朝の「葵の上の役割は光る源氏の世界が本当に自立するまでのつなぎにすぎなかった」という言葉¹⁵⁾を、別な形でなぞったことになるのかもしれないが、量の多い分だけより詳細な点にまで及べたはずである。換言すれば、夕霧を産んで死ぬのは左大臣家の娘であれば誰でも良かったのであり、葵上とは極めて機能的な存在であった。そしてそれが彼女が固有の名前を持たない理由ともなっていると思うのである。

注 (1) 藤村潔「花宴のあと」『源氏物語の構造 第二』 赤尾照文堂 昭46)。

(2) 阿部好臣「物の怪誕生 —— 柏木の位相へ」『語文』第八十八輯 日本大学国文学会 平6・3)にも同様の見解が示されている。

(3) これはまだ、あくまで予感に留まるが、この他にも桐壺院・柏木・宇治八宮などの名前を挙げる事が可能であり、少なくともこの物語の主要な人物に関しては言えると思う。大きな問題は桐壺更衣・宇治大君くらいだと思うが、彼女達はその存在が不在だからこそ、いわゆる「形代」の論理が呼び込まれて来るのである、例外とするには当たらない。聊か妙な物言いをすれば、彼女達の物の怪が実体化したのが「形代」だと思っからである。

(4) 吉井美弥子「葵の上の「政治性」とその意義」(森一郎編著『源氏物語作中人物論集 —— 付・源氏物語作中人物論・主要論文目録 ——』 勉誠社 平5)。
(5) 加納重文『源氏物語の研究』第二編 人物論 第二章 葵上(望稜舎 昭61)にも同様な指摘がある。

(6) 注(5)及び室伏信助「葵の上」『國文學』 學燈社 平3・5)にもその示唆はある。

(7) 小学館・新編日本古典文学全集『源氏物語②』三三頁頭注二四。

(8) 現に、この物語の中でも鬚黒北の方をめぐって、「年のほど三つ四つが年上は、ことなるかたはにもあらぬを」(藤袴③三四三頁)という言い回しが見られる。

(9) 大朝雄二『源氏物語正篇の研究』第十二章 葵巻における長篇構造(桜楓社 昭50)。それに対して藤村潔は、「源氏物語の構想に関する一試論」、「前坊の姫君考」(共に『源氏物語の構造 第二』に収録)で逆に六条御息所の年齢が決定してから娘の年齢が決められたとするが、それは藤村の論の前提である十年単位説を認めてからの話となるので、今のところ判断は保留しておく。

(10) 倉本一宏『栄華物語』における「後見」について(山中裕編『栄華物語研究』第二集 高科書店 昭63)。

(11) 岡一男『源氏物語の基礎的研究』(東京堂出版 昭41)。

(12) 今井源衛『紫式部』(吉川弘文館 昭60(新装版))。

(13) 他に、葵上の年齢設定については、二十五歳の厄年で死なせるはずだったのが、源氏二十歳の時に予定していた空白を一年ずらしたためにこうなったという説を、注(1)の論文で藤村潔が説いているが、これも十年単位説を前提として認めなければならない。但し、葵上の準拠が中宮定子かもしれないという部分には賛同する。

(14) 森一郎は「桐壺帝の決断」『源氏物語の方法』 桜楓社 昭55)で、この桐

壺帝の決断は「右大臣家への反抗という対立の種をまき、源氏をその渦中にまきこむ」という点では「錯誤」であったと言えるが、それが後の源氏須磨流謫を呼び込むためには必然であったとされる。その通りであろう。加納重文も注(5)の論文で述べているように、所詮この選択は「左大臣側の事情によってではなく、主人公光源氏の事情によって」決められていくのである。

(15) 大朝雄二「葵の上」(秋山虔・編『源氏物語必携Ⅱ』 學燈社 昭57)。

第五節 花散里の機能

一

花散里は、性格は控え目、容貌はどちらかと言うと良くない、目立たない女性である。そのためか、これまでの研究史では、とかく軽視されてきた嫌いがあるが、果たして彼女の位置付けとは、本当にその程度のものなのであるうか。

後にも色々と触れるところがあるが、本節を成すに当たって切り捨てねばならなかった問題の多さを見ても、花散里の重要性は充分に窺うことが出来る。夙に坂本昇（現・共展）が喝破している（¹）ように、むしろこの物語に於ける彼女の存在は非常に重いのである、それ故逆に目立ちすぎてはいけないので、そのような造型が成されていると捉える方が正しいのだと思われる。

但し坂本が、その理由を、「六條院のイメージのバランスを崩壊」させないことに求められることだけは承服できない。勿論それも含まれるのだが、花散里の登場は六條院完成の遙か以前なのであり、それ故、彼女の位置付けについては、もつと広い視野に立った検討が必要だと思うからである。

ここで結論を先に述べてしまえば、それは紫上との深い関わりということになると思われる。これは、これまでも指摘されていないことはなかった²が、その意味性の掘り下げについては今一つ不充分であったように思われる。そこで本節では先ずそれについて明らかにし、次いでそれが行きつく果てと思われる、六條院の歪みの問題に関する私見を披露するところまで及んでみたいと思うのである。

二

細かい考察に入る前に、一つの数字を挙げておきたい。それは、玉上琢彌の『源氏物語人物総覧・事項索引』による紫上と花散里の登場場面の相関についてである。それに従えば、二十一巻四十二場面に上る花散里の登場場面の中で、紫上登場の直前または直後に位置するものは、ほぼ半数の十九場面（但し、名のみで実体が登場しないものを除くと十三場面）という結果が得られる。勿論、数え方によって多少の誤差は出ようが、大体の傾向は窺えよう。これによっても、前段で述べたことは、先ず大きく誤ってはいないだろうことは納得していただけではないかと思うが、これが単に配置の問題に留まらず、内容にまで及んでいることから確認していこう。

先ずは、この物語に少し詳しい人なら誰でも思い付く、この二人のみに共通する染色の才の問題から始めたい。

A 大殿、静かなる御住まひを、同じくは広く見どころありて、ここかしこにておぼつきなき山里人なども、集へ住ませんの御心にて、六条京極のわたりに、中宮の御旧き宮のほとりを、四町を占めて造らせたまふ。式部卿宮、明けん年ぞ五十になりたまひけるを、御賀の事、対の上申し設くるに、大臣もげに過ぐしがたきことどもなり、と思して、さやうの御いそぎも、同じくはめづらしからん御家居にてと、急がせたまふ。年かへりては、ましてこの御いそぎのこと、御としみのこと、楽人舞人の定めなどを、御心に入れて営みたまふ。経仏、法事の日の御装束、祿どもなどをなん、上はいそがせたまひける。東の院にも、分けてしたまふことどもあり。御仲らひ、ましていとみやびかに聞こえかはしてなん過ぐしたまひける。

（少女③七六く七頁）

場面は六条院の造営が初めて明らかにされたところである。折しも、紫上の父・式部卿宮の五十の賀が来年に迫り、同じことなら新造なつた邸で盛大に挙げさせてやりたいと、源氏は仕事を急がせる。ここで、紫上がその準備に没頭していると語られることは当然だが、注目すべきは、夫を共有するとは言え、赤の他人である花散里も、それを喜々として分担しているとされることである。だが、それは、先程も述べたように、この二人のみが染色の才を有しているのだから、さほど異とするには当たらないと結論する向きもあるかもしれない。ただ、その場合注意しなければならないのは、それが明らかにされるのは、ここから七巻も進んだ野分巻(③二八二頁)だという事実で、それを単純にここまで遡らせることが出来るかどうかは聊か疑問がある。勿論、この時点で既に、作者の頭の中にはそれがあつたと考えることも充分に可能ではあるが、そうなると、この二人の関係は構想上のこととして捉えなければならぬことになる。段々と結論が見えてきたと思うが、先を急がず、この部分でもう一つ問題となる点を挙げておけば、先ほど述べた、夫を共有するという条件ですら、嫉妬という感情を考慮すれば、既にしてマイナスに働く要因であるかもしれないということがある。無論そうならないのは、花散里が嫉妬とは無縁の存在として造型されているからであるが、では何故そうなのかに思いを致す時、新たな問題が見えてくる。しかしそれは、後の第五段で取り上げる紫上の嫉妬と、表裏をなす問題だと思われるのでしばらく置き、ここでは紫上と花散里の奇妙な協関係のみを押えることにしよう。そして、この二人の協関係はこの後も続く。例えば、六条院の殿移りの場面もそうである。

B 彼岸のころほひ渡りたまふ。一たびにと定めさせたまひしかど、騒がしきやうなりとて、中宮はすこし延べさせたまふ。例のおいらかに気色ばまぬ花散里ぞ、その夜添ひて移ろひたまふ。春の御しつらひは、このころにあはねどいと心ことなり。御車十五、御前四位五位がちにて、六位殿上人などは、さるべき限りを選らせたまへり。こちたきほどにはあらず、世の譏りもやと省きたまへれば、何ごともおどろおどろしいかめしきことはなし。いま一方の御けしきも、をさをさ落したまはで、侍従の君添ひて、そなたはもてかしづきたまへば、げにかうもあるべきことなりけりと見えたり。女房の曹司町ども、あてあてのこまけぞ、おほかたの事よりもめでたかりける。

(少女③八〇頁)

ここにはつきり書かれているように、源氏は一度に移転をと考えていたらしいが、秋好中宮は辞退し、明石御方は遅れたので、一度に来たのは紫上と花散里のみであった。これについては、中宮側の事情(③)等、他に考えなければならぬことも幾つかあるかもしれないが、それにしても、四人のうち二人のみが一緒であったと語られるのは、聊か気になるところではある。何故なら、残りの二人は、すさまじいほどの身分上の懸隔があるから当然とも言えるが、共に来たとは決して語られないからである。否むしろ、理由はどうあれ、結果的には他の二人は源氏の意向に逆らつたという点を重く見るべきかもしれない。と言うのは、これと類似する要素が、梅枝巻の香合わせの場面に見受けられるからである。

C さらにいづれともなき中に、斎院の御黒方、さいへども、心にくく静やかなる匂ひことなり。侍従は、大臣の御は、すぐれてなまめかしうなつかしき香なりと定めたまふ。対の上の御は、三種ある中に、梅花はなやかに今めかしう、すこしはやき心しらひをそへて、めづらしき薫り加はれり。「このごろの風にたぐへんには、さらにこれ

にまさる匂ひあらじ」とめでたまふ。夏の御方には、人々の香心々にいどみたまふなる中に、数々にも立ち出でずやと、煙をさへ思ひ消えたまへる御心にて、ただ荷葉を一種合はせたまへり。さま変り、しめやかなる香して、あはれになつかし。冬の御方にも、時々によれる匂ひの定まれるに、消たれんもあいなしと思して、薫衣香の方のすぐれたるは、前の朱雀院のをうつさせたまひて、公忠朝臣の、ことに選び仕うまつれりし百歩の方など思ひえて、世に似ずなまめかしさをとり集めたる、心おきてすぐれたりと、いづれをも無徳ならず定めたまふを、「心ぎたなき判者なめり」と聞こえたまふ。

(③四〇八〜四一〇頁)

六条院のこの時の情勢を良く示すものとして、第一章第四節でも取り上げた部分であるが、問題を花散里と紫上との関係に絞ってみると、先ず沢田正子も指摘している(2)ように、順番は朝顔・源氏・(紫上・花散里)・明石御方と、またしても花散里と紫上は対になっていくということが挙げられる。そればかりでなく、源氏の依頼は各人二種ずつ合わせてくれということであった(③四〇四頁)はずなのに、この二人は三種と一種と、一見するとそれに反するようでありながら、合計すれば四種で、ちょうど釣り合いが取れるようになっていく。それはあたかも、例によって花散里が、献上の美德を働かせ、自分の分を一種、紫上に献上したかの感があるが、そんなことを言うと、では何故花散里は、次に紹介される明石御方と対にならないと言えるのかという声が聞こえてきそうである。しかし、明石御方が合わせたのは、果たして薫衣香一種だけだったかどうかは分からない。

と言うのは、例えば朝顔・源氏の場合を見れば明らかであるが、間違いない二種合わせた彼らについても、ここでは優れた方一種しか取り上げられてないからであり、明石御方についてはその伝ではなかったという保証はないからである。換言すればこれは、合わせた香の数について、ここでわざわざ言及されているのは、結局花散里と紫上の二人にしか過ぎないということにもなり、やはりそこに何らかの作為を読み取るべきであろう。ここまで言えばほぼ納得していただけたとは思いますが、次との関係でなお一言しておけば、花散里が明石御方と対にならないと考えられる理由は実はいち一つある。それは、第三章第四節でも述べるが、各人が合わせた香の季の問題である。

ここでは、視点を花散里と紫上との関係に絞っているため、あまりくたくたくは述べないが、自己に割り振られた季とずれを生じている三人の中で、一番問題なのは明石御方で、無季の香を合わせた彼女は、六条院の支配機構から抜け出しつつあることが示されているのではないかとということのだが、だとすれば、彼女が他の誰とも対になる可能性がないことは明らかであろう。そしてこのことは、裏を返せば自己の季に忠実な香を合わせているのは花散里と紫上の二人だけであることを意味し、その一対性の証拠をさらに強固にするとともに、その働きさえも窺わせる。すなわち、六条院崩壊が密かに始まったと思われるこの時点で、六条院を支えているのは、実は一見すると源氏に逆らっているように見える、この二人のみであるという事実である。しかし、これについてもさらに後に回し、ここでは、ここで生まれた今一つの問題、すなわち、この二人と明石御方との対立について先に見ておこう。

D 明石の御方に、三の宮して聞こえたまへる。

惜しからぬこの身ながらもかぎりとして薪尽きなんことの悲しき

御返り、心細き筋は後の聞こえも心おくれたるわざにや、そこはかとなくぞあめる。

薪こる思ひは今日をはじめにてこの世にねがふ法ぞはるけき (④四九七頁)

E 花散里の御方に、

絶えぬべきみのりながら頼まるる世々にと結ぶ中の契りを

御返り、

結びおく契りは絶えじおほかたの残りすくなきみのりなりとも (④四九九頁)

場面は、紫上と花散里、明石御方の関係性の差異を示すものとして古来有名な(4)、御法巻のものである。己の死期が間近に迫ったことを悟った紫上は、先ず出家を望むが、源氏に引き留められて果たせず、やむなく法華経千部供養で我慢することにする。その後、それについて明石御方、花散里のそれぞれと贈答を交わしたが、D、Eなのであるが、既に注(4)に示した如く、ここには、同じく紫上の心情を汲みながら、「後の聞こえ」を憚った明石御方と、それに全面的に和した花散里という差が、明瞭に見てとれる。尤も、明石御方ぐらゐの気の回し方は、当時としては当たり前という見解もあるうが、一方で、「死にのぞんだ紫の上の前では、どちらかというところ、いつもは才気に長けた明石よりも、花散里のつつましさをほうが、より光ってみえる、という作者の取り扱いに興味がもたれる」という意見は現代にもあり(5)、こうした見方を完全に否定することは出来ないはずである。となれば、ここもまた、紫上・花散里の一体感に対して、その二人と明石御方との、対立という言葉がきつければ齟齬と言いつても良いが、が示されている箇所として挙げる事が出来る。しかし、この要素もおおしく置き、最後の第六段で再び取り上げることにしたいと思うので御記憶願いたい。

このように辿ってくれば、花散里と紫上がほぼ一体的なものとして描かれているのは明らかで、また、だからこそ、この後の紫上の死後、源氏と花散里とのほんの僅かの贈答場面がわざわざ挿入されねばならなかった(幻巻④五三七頁。因みにこれも、源氏が明石御方と贈答して失望を感じた直後のことである)のであり、さらに進んで匂宮巻で、源氏の遺産分与が記された時、花散里が、女三の宮や落葉宮といった宮を抑えて、最初に語られねばならなかった(6)のである。言うまでもなくこれらは、本来紫上が占めるべき位置なのだ、それが存在しないため、代わってそれと一体的存在である花散里が挿入されたというわけである。しかし、後者の場合はもう一つ大きな問題を孕んでいるので、段を改めて考察を進めたい。

三

前段最後にも述べたように、光源氏死後の遺産分与の話は次のように始まる。

F さまざま集ひたまへりし御方々、泣く泣くつひにおはすべき住み処どもに、みなおのおの移ろひたまひしに、花散里と聞こえしは、東の院をぞ、御処分所にて渡りたまひにける。(⑤一九頁)

この後、話は女三の宮・落葉宮・明石御方の順で広がっていくが、本節はそれらと関わらないテーマなので省略しよう。ここに存在するもう一つの問題とは、花散里が受け継いだのは二条東院だということである。これは一見何気ないことに見えるかもしれないが、この部分も、この物語の構造を考える時、様々な示唆を与えてくれることは、第三章第四節で詳しく述べる。それ故、そういう観点でここを見直せば、これは花散里と二条東院との深い関わりを示すということは、容易に見えて来るはずである。換言すればこれは、花散里とは、いわゆる二条東院構想に深く関わる人物だということなのである。

いわゆる二条東院構想を最初に唱えたのは、高橋和夫であった(7)。高橋によれば、濔標卷の時点では六条院構想は未だなく、代わりにあったのが二条東院構想で、やがてこれが発展的に解消されて六条院が生まれたとのことである。これはその後広く受け入れられ、今日では一般的な理解となつていと思われるが、その一方ではそれに反対する意見も出され(8)、厳密な意味では帰するところを知らない。本節も、「花散里」を標榜する限り、その論戦に加わらなければならぬのかもしれないが、それにはもう一節立てるほどの紙幅が必要である。それに、その時点でその構想があつたか否かなど、所詮他人の頭の中を窺うことを意味し、水掛け論になりかねないので余りしたくない。そうは言つても、全く触れないわけにも行かないので、細かい論証は省いて結論だけ言つておけば、やはり通説で良いのではないかと思う。少なくとも、坂本が言うように、結果から考えて、それが上手く行つていればその構想はあつたと見なそうという考え方(1)は本末転倒とだけは言えるだろう。何故なら、思つていてもなかなかその通りに書けないなどということは良くあることだからである。むしろ作者は、通説通り、当初は二条東院の西の対に花散里、東の対に明石御方を住まわせるべく計画していたが、おそらく明石御方側の事情(例えば、坂本も指摘する彼女の性格との齟齬(1)、或いは構想の変更により、彼女によりふさわしい邸を作る気になつた等(本論文第三章第四節))で上手く行かず、途中で取り止めたと思うのだが、これとて所詮推測に過ぎないので、この辺りで留めることにしたい。要は、花散里と二条東院が深い関わりを持つことが確認できれば良いのである。

その二条東院の問題とは、紫上の住む二条院との名称の類似ということである。そんなことを言うと、それは同じ二条にあつたのだから当たり前だという向きがあるかもしれない。しかし、本論文で何度も繰り返しているように、この物語が作り物語である以上、偶然などということとは有り得ない。周知の如く、六条院が六条御息所の故地を利用すべくここに決められたように、二条院・二条東院にもそれなりの理由があるはずなのである(9)。だとすれば、この名称の類似にも、当然何らかの理由があると思われるが、実はこの「二条東院」というのは後世の命名で、作品中には、濔標卷にこれに極めて近い、「二条院の東なる宮」という呼び方が唯一例ある(②二八四頁)のみで、後は単に「東の院」と呼ばれている。すなわち、この呼び方から、この院は二条院に付随するものとして位置付けられていることは明らかで、ならば既に玉上が示しているような、「二条の本邸は紫の上、東の院は花散里。ふたりの手でふたつの邸は管理されていて、そのうえで全体を紫上が統轄する。そういう体制ができているのだ」との読み(10)は、当然出てくるはずのものなのだ。

つまり、花散里と二条東院が深い関係にあるという事実は、同時に新たな二つの事実を導き出す。一つは、紫上と花散里の密接な関わりは決して六条院時代に限定されるものではなく、それ以前にも遡り得るということ、もう一つは、今まで二人の関係を、便宜上「一対」とか「一体的」とかいう言葉で表わしてきたが、それは厳密には対等ではなく、花散里が紫上に従属する関係であるということである。尤も、後者については、これまでの引用文、特にC辺りにも窺えないわけではなかったが、ここに来てより明確になつてきたといったところであろう。しかし、それについても今しばらく置き、次段では残つた前者の問題、この二人の関係は一体どこまで遡り得るのかについて先に考察を進めたい。

四

第二段で検討したように、花散里と紫上との一体性というのは、六条院時代に一番顕著であり、それ故、池田がそれに限定した物言いをしてしまったのも無理はない(17)。しかし前段で検討したように、この二人のこの関係は、それ以前にも遡り得るのであり、では何処まで遡り得るのかを考察するのが本段の目的なのであるが、先に結論を述べてしまえばそれは、花散里巻で花散里が初登場する場面までであると思われる。論より証拠、先ずその場面を掲げたいところであるが、そうするとかなりの部分を引用しなければならなくなるので、しばらくは論述のみで御容赦頂きたい。

源氏物語に登場する他の女性には無く、花散里のみの特徴として先ず挙げられるのは、彼女が姉妹で登場し、かつその呼称が最初のうちは判然としないことである。姉妹で登場するのは、例えば宇治の大君・中の君など幾らもいるが、それらは今示したように、どちらがどちらであるかは呼称により判然としている。ところが花散里の場合は、少なくとも松風巻以前は、どうも彼女の姉・麗景殿女御までその呼称に含まれているらしいことは、既に坂本共展(1)等の手により明らかになった。となればそれを、彼女を特徴付ける一大表徴として認め、その意味を考察することが次なる段階だと思っただが、それについては、例えば藤村潔により、花散里は源氏の須磨行で残された女性達の総代的性格を有するからといった答えが既に提出されている(12)。

後に述べるように、確かにこうした一面も否定できないとは思っただが、これだけでは彼女の姉・麗景殿女御は別に源氏の愛人ではないという素朴な疑問が残る。では他の解答はとなると、坂本が出した、麗景殿女御は源氏の母代で、花散里は湯坐であったのである(1)というものぐらいいいか寡聞にして知らないのだが、これも物語にそう書かれているわけではないので、結局保留するしかない。するとつまるところ、島貫明子が言う、伊勢物語との関係(13)を想定するしかないのではなからうか。

花散里巻と伊勢物語の関わりと言うと、三谷邦明の論(14)が先ず頭に浮かぶ。伊勢六中段とこの巻との関係を読むその論は、それはそれとして面白いけれども、「物語を流れる主題性の面から把握すると、「ありつる垣根」と名付けられている中川の女の場面にこそ意味があつたわけである」とまで言い放たれてしまったのには、どうにも従えない。何故なら、この巻の名はあくまで「花散里」であり、それは決して中川の女のことではないからである。また、たとえこの読みに従ったとしても、先程から提出している、花散里は何故姉妹で登場するのかという問いには、依然答えられない。それをするには、やはり島貫が指摘した、この巻と伊勢初段との関わりを考えるしかないようである。

伊勢物語初段については、今さら説明する必要もないとは思っただが、主人公の男が、「ふる里に、いとほしたな」い「女はらから」を見出す話であつた。一方この花散里巻はと言えば、その巻名となつた語は、これ以前には万葉集に二例しかないもので、確たることは言えないけれども、字面から言っても、島貫が言う如く、昔は栄えていたが今はすっかりうらぶれてしまった場所のイメージというのは、先ず間違いの無いところだろう。また、花散里邸の近くを流れている中川というのも、言い伝えによっても、現在暗渠となつて残っている流路から考えても、都の東のはずれである東京極大路あたりを流れていたことは明らかである。これは確かに都の中ではあるが、東ではないが南のはずれである九条が一つの異界として見られていた可能性があることは、第一章第二節で見たし、そんなものを持ち出さなくとも、「境界」が一つの異界であることは、今日既に常識化しているよう。

なると、源氏が花散里姉妹を訪ねるこの場面は、伊勢初段と極めて類似してくるのである。

紫上の初登場の場面にも、やはり伊勢初段が踏まえられていることは、早くに玉上によって指摘され⁽¹⁵⁾、さらに三谷邦明によって深められた⁽¹⁶⁾ので、今ではもう常識になつていよう。この場合、特に興味深いのは後者の論で、そこで三谷は、伊勢初段の「女はらから」が、姉妹である場合と男の同母妹である場合の二通りの読みが成立することを指摘し、若紫巻では敢えて後者の読みを採用することによって、後の藤壺との密通事件と連接させていくことを説くのだが、だとすればこの花散里巻の場合には、そのもう一方の可能性が採用されていることになる。つまり花散里と紫上は、その初登場の場面に於いてもやはり対として設定されているということになるのだが、紫上の場合とはかく、花散里の場面では、肝腎の垣間見の要素が欠けているから、その可能性を否定する向きもあるかもしれない。しかし、そういう向きには逆に問いたいのだが、もしこの場面に垣間見があつたらどうなるか。おそらくそれは、源氏とこの姉妹が初対面であるか、或いは付き合い始めてもまだ日が浅いことを意味し、この後に延々と二人（乃至は三人）の關係が深まつていく描写が続けられねばならなかつたろう。それは、賢木巻と須磨巻との間に挿入されたようなこの巻の位置では到底不可能であり、だからこそ源氏とこの二人は旧知の間柄ということにして余分な描写を省いたのだと思われるのだが、それではそもそも、この巻のある位置が悪いのかという決してそうではない。先ほど述べておいたように、花散里には、確かに源氏の須磨行で置いていかれた女性の代役といった趣があるのであり、それをするために、急遽ここに置かれたのがこの巻であつたと考えられるからである。但しそれは、「女性達の総代的役割」とは少し異なり、やはり或る特定の女性の身代わりとして絞ることが可能であると思われる。そしてそれが顕著に窺えるのは、須磨巻の次のような箇所である。

I 荒れまさる軒のしのぶをながめつつしげくも露のかかる袖かな

とあるを、げに葎よりほかの後見もなきさまにておはすらんと思しやりて、長雨に築地所どころ崩れてなむと聞きたまへば、京の家司のもとに仰せつかはして、近き国々の御庄の者など催させて、仕うまつるべきよしのたまはず。^{(2)一九六頁}

場面は、源氏と藤壺、朧月夜、紫上、六条御息所といった面々との贈答の次に位置し、この部分最後の和歌であるわけだが、それらの風情あふれる贈答と比較すれば、これが如何に異様とも言えるものであるか理解できよう。つまり、源氏の愛人の一人にしては、この贈答は生活臭がしすぎるわけで、それ故これは、姉の麗景殿のものではないかという意見もあるくらいである。しかし、たとえそうであつたとしても、本節の趣旨と抵触しないので今は問わない。要はこうした歌は、他の誰にも読めるものではないことだけを確認できれば良いのである。では何故花散里（たとえ姉であつたとしても）だけがこうした歌を詠めたのか（或いは詠んだと語られるのか）と問えば、そこには当然、源氏の愛人達の経済状態という問題が関わつてこよう。

源氏の愛人は数多くいるが、先ほど挙げた名前に一応限定すれば、藤壺、朧月夜、六条御息所の三者については、もともと経済的には安定しているので何ら問題は無い。勿論、紫上についても無いのだが、注意しなければならぬのは、彼女の財産というのは、全て源氏に譲られたもので、手持ちのものは何一つ無いということである。それゆえ源氏は、須磨に立つ前に、全ての財産を彼女に譲つたのだが、言葉を換えて言えばこのことは、そ

うした場面がわざわざ描かれたということになる。つまり、そこで確認されたのは、紫上が如何に経済的には不如意かということなのであり、一步間違えば、彼女も花散里と同様の立場に陥る心配があつた訳である。勿論彼女は、この物語正編の理想的な女主人公であり、もし二条院がこのような姿になってしまつたら、源氏が帰ってくるという設定にも支障が出るから、こうしたことにはならないのであるが、紫上にもそうした可能性があると、いうことを示すのは、後々の展開（例えば朝顔巻等の）を考えればやはり必要であろう。そこで急遽導入されたのが花散里という存在であつたと思うのだが、そんなことを言うと、源氏の愛人で経済的に困窮したのは花散里だけではなかつた、例えば末摘花などもあるではないかという声が聞こえてきそうだ。しかし、この意見も一理ある。何故なら、末摘花と花散里にも深い繋がりがあることは既に指摘されているからである（17）。

だが、この場合はそれが適當でないのは、末摘花は実際に困窮した姿が描かれており、その代わりというのはないだろうということなのである。勿論末摘花自体も、紫上と同じく宮家の娘であるから、紫上の代役を果たしているという可能性は充分考えられるが、先ほど述べた花散里と末摘花の深い繋がりを考慮すれば、この場合も本節の趣旨には抵触しない。いずれにせよ花散里は、紫上の身代わりとなるべく急遽創造されたのであり、それ故その登場は、紫上の登場と対になる形で描かれ、分かる人には分かるような形になっているのだと思われる。また、だからこそ花散里の姉・麗景殿女御は、その存在が特に必要でなくなつた時、ひっそりと物語から消えていくのだと思われるのだが、だとすれば、この段最初に述べておいたように、この二人の対性というのは、花散里登場にまで遡ることが出来るのである。

ここでまた一つの数字を挙げておけば、第二段で紹介した玉上の書物を用いれば、花散里が、紫上の直前乃至直後に登場する十九場面（うち実体の登場は十三場面）のうち、少女巻以降の六条院時代が、約七割の十四場面（うち実体の登場は八場面）を占めるが、残りの五場面は、蓬生巻の一場面を除き、須磨・瀧標巻に集中するという結果はすぐに得られるものである。最初からこれを挙げておけば、議論はもっとスムーズだったかもしれないが、数字だけを過信するのは余り感心しないし、この分散の仕方は、再び二条東院構想の問題を呼び起こす嫌いがあつたので、敢えて後に回した次第である。

以上の如く花散里は、その登場時から物語を退場する時まで、紫上と一対的な存在として造型されていることが知られるのである。無論彼女の役割は他にもあつたであろうが、第二段で指摘したように、そうした関係性を有すると思われる場面は、彼女の全登場場面の約半数にも上るのであるから、彼女の有する役割の中で、これがかなりの部分を占めていたこともまた確かなのである。では花散里は、紫上と一対の存在として描かれることによつて、一体どのような役割を果たしているのだろうか。いよいよ二人の関係の内実に迫る時が来たようである。

五

第三段で指摘したように、花散里と紫上は、一対の関係とは言いながら決して対等ではなく、常に花散里が劣位にあるのだが、その理由の一つは、言うまでもなくこの物語正編の女主人公は紫上だからである。しかしそればかりが理由ではなさそうなのは、前段末尾で指摘した、二人の関係を示す場面として一つだけ例外的な、蓬生巻の例なのである。そこで本段ではそれを先ず掲げることから論述を始めよう。

H 卯月ばかりに、花散里を思ひ出できこえたまひて、忍びて、対の上に御暇聞こえて出でたまふ。日ごろ降りつるなごりの雨いますこしそそきて、をかしきほどに月さし出でたり。昔の御歩き思し出でられて、艶なるほどの夕月夜に、道のほどよろづのこと思し出でておはするに、形もなく荒れたる家の、木立しげく森のやうなるを過ぎたまふ。

大きな松に藤の咲きかかりて月影になよびたる、風につきてさと匂ふがなつかしく、そこはかとなきかをりなり。橘にはかはりてをかしかればさし出でたまへるに、柳もいたうしだりて、築地もさはらねば乱れ伏したり。見し心地する木立かなと思すは、はやうこの宮なりけり。
(②三四四頁)

場面は、源氏が花散里を訪ねていく途中で故常陸宮邸の前を通り掛かり、末摘花と再会するという、それなりに有名な箇所である。それ故この引用文でも、途中から末摘花の話へと流れていくが、それにしてもここにある素材は、五月雨ではないが「卯月」(夏)の雨・「月」・「橘」と、花散里を思わせるものばかりである。これは、先ほど述べた花散里と末摘花の深い繋がりへと興味を誘うが、論述が複雑になりすぎるので今回は止めておこう。しかし、或いはこの三者はワンセットと捉えなければならぬ存在なのかもしれないという可能性は確かにあり、今回はそのうちの二者にスポットを当てているに過ぎないということは御記憶願いたい。ただ、ここでは源氏は結局花散里のもとを訪れているのであり、長い挿入部分はあるけれども、ここもまた花散里登場の途次の場面として扱えると判断し、敢えて引用した次第である。

さて、この部分の問題とは、僅か一卷前の濔標巻にも、これとほぼ同じ描写が存在するということなのである。

I かくこの御心とりたまふほどに、花散里をあれはてたまひぬるこそいとほしけれ。公事もしげく、ところせき御身に思し憚るにそへても、めづらしく御目おどろくことのなきほど思ひしづめたまふなめり。

五月雨つれづれなるころ、公私もの静かなるに、思しおこして渡りたまへり。よそながらも、明け暮れにつけてよるづに思しやりとぶらひきこえたまふを頼みにて過ぐいたまふ所なれば、いまめかしう心にくきさまにそばみ恨みたまふべきならねば、心やすげなり。年ごろにいよいよ荒れまさり、すこげにておはす。女御の君に御物語聞こえたまひて、西の妻戸に夜更かして立ち寄りたまへり。月おぼるにさし入りて、いと艶なる御ふるまひ尽きもせず見えたまふ。いとどつつましけれど、端近ううちながめたまひけるさまながら、のどやかにてものしたまふけはひいとめやすし。水鶏のいと近う鳴きたるを、

水鶏だにおどろかさずはいかにして荒れたる宿に月を入れまし
といとなつかしう言ひ消ちたまへるぞ、とりどりに捨てがたき世かな、かかるこそなかなか身も苦しけれ、と思す。

「おしなべてたたく水鶏におどろかばうはの空なる月もこそいれ
うしろめたう」とは、なほ言に聞こえたまへど、あだあだしき筋など疑はしき御心ばへにはあらず。年ごろ待ち過ぐしきこえたまへるも、さらにおろかには思されざりけり。「空ながめそ」と頼めきこえたまひしをりのことものたまひ出でて、「などで、たぐひあらじとみじうものを思ひ沈みけむ。うき身からは同じ嘆かしさにこそ」と

のたまへるも、おいらかにらうたげなり。例のいづこの御言の葉にかあらむ、尽きせずぞ語らひ慰めきこえたまふ。(②二九七〜九頁)

比較すれば明らかのように、この二つは、最初に紫上が絡んでくるところから素材の点まで、瓜二つと言って良いほどそっくりである。しかも年立を考えてみれば、この二つは僅かひと月ほどしか違わないことになるから、ここは当然、何か理由あつてのことと考えねばならない。先ほどから繰り返しているように、それを、花散里と末摘花の深い関係を示すものとして処理することも勿論できる(17)。しかし、それ以外の理由を求めらば、これまで見てきたように、紫上にとつて花散里が、多分に機能的存在であるからではなからうか。そしてそれを示す徴表は、この二つの部分にも幾つか指摘できると思うのである。

例えば、既に指摘したが、この二つの場面は共に紫上絡みで幕が上がる。特に興味深いのはHで、ここで源氏は、花散里を訪ねるのに紫上の許可を貰っているが、彼女はそれの時少しも嫉妬をしない。Iの場合はこれほど明確ではないが、やはり同様のことがあつたと思われ、それを暗に示すのが、最初の三行の描写ではないかと思うのである。可愛い(それが逆に魅力となる)嫉妬で有名な紫上としては、これは大変珍しいことで、この辺り、聊か疑問となるであろう。そして、このことは今少し明瞭な形で朝顔巻に現れる。

J 「この数にもあらずおとしめたまふ山里の人こそは、身のほどにはややうち過ぎもの心など得つべけれど、人よりことなるべきものなれば、思ひあがれるさまをも見消ちてはべるかな。いふかひなき際の人はまだ見ず。人は、すぐれたるは難き世なりや。東の院にながむる人の心ばへこそ、古りがたくらうたけれ。さはたさらにえあらぬものを。さる方につけての心ばせ人にとりつつ見そめしより、同じやうに世をつつましげに思ひて過ぎぬるよ。今、はた、かたみに背くべくもあらず、深うあはれと思ひはべる」など、昔今の御物語に夜更けゆく。(②四九三〜四頁)

場面は、末尾にある如く、朝顔との誤解が解けた後、源氏が、紫上を慰めるべく、雪まろばしを見ながら、二条院で今昔の女性関係を語る一節である。ここでも花散里は、明石御方とともに語られていることに先ず注意を払いたい。それについては次段で述べる予定なので後に回そう。後半の花散里についての部分は、出だしこそ源氏は、紫上に随分気を使っている(18)けれども、末尾などではかなりずうずうしいことを言っているようにも思われるが、それでも紫上は嫉妬しない。尤もこの場面では、明石御方に対する紫上の反応も描かれてはいないのだが、それは源氏の言葉に、「この数にもあらずおとしめたまふ山里の人」という表現があり、彼女に対しては、紫上が始終嫉妬していることが分かるから、同じ伝にはいかなないのである。すると、この場面で疑問として残るのは、紫上は何故花散里に限つては嫉妬しないのだろうかということだけなのである。

勿論その理由は、花散里の存在が、紫上にとつて全く脅威とならないからではあるが、そうなるに気にかかるのは、これらの場面には全てそれがかつきり明示されているということなのである。I、Jに関しては読めば分かると思うが、Hに関しては、まだ引用してない部分にあるので、次にそれを掲げよう。

K かの花散里も、あざやかにいまめかしうなどはなやぎたまはぬ所にて、御目移しこよなからぬに、咎多う隠れにけり。(②三五二頁)

前にも述べたように、末摘花の長い挿話部分を間に有するHの場面は、実はこうやって終結する。それ故、これもまた花散里関連の場面の一つとして数えても良いと判断したの

であるが、花散里の所も末摘花ときほど変わらないとは、考えてみればすさまじい物言いである。勿論これは邸についての批評ではあるが、衣装調度にもその人の人柄が現れると考えるのが当時の常識であるから、これは、後の少女巻で夕霧により、花散里の容貌が聊か劣っているとされる(③六七〜八頁)ことの先蹤ではないかと思われる。だとするとこれらの場面は、花散里が紫上よりかなり劣った存在であることを、繰り返し読者に印象付けていることになるのだが、それが一番はつきりしているのは螢巻の、花散里が住む六条院夏の町で、競射が行われた夜の場面であろう。

L 今はまだおほかたの御睦びにて、御座なども別々にて大殿籠る。などでかく離れそめしぞと殿は苦しがりたまふ。おほかた、何やかやとも側みきこえたまはで、年ごろかくをりふしにつけたる御遊びどもを、人づてに見聞きたまひけるに、今日めづらしかりつることばかりをぞ、この町のおぼえきらきらしと思したる。

その駒もすさめぬ草と名にたてる汀のあやめ今日やひきつるとおほどかに聞こえたまふ。何ばかりのことにもあらねど、あはれと思したり。

にほどりに影をならぶる若駒はいつかあやめにひきわかるべき

あいだちなき御言どもなりや。「朝夕の隔てあるやうなれど、かくて見たてまつるは心やすくこそあれ」と戯れ言なれど、のどやかにおはする人ざまなれば、静まりて聞こえなしたまふ。床をば譲りきこえたまひて、御几帳ひき隔てて大殿籠る。け近くなどあらむ筋をば、いと似げなかるべき筋に思ひ離れはてきこえたまへれば、あながちにも聞こえたまはず。

(③二〇八〜九頁)

先程も述べたように、ここは、源氏と花散里が既に男と女の関係に無いことを、一番詳細に述べた部分であり、その理由は、坂本が言うように、この日競射が花散里の主催で行われたからで、彼女の存在を目立たないようにさせるには、こうした描写を延々と繰り返すしかなかった(1)というもので良いであろう。だが厳密には、これに類する描写は、これ以前にも薄雲巻と初音巻にあった。

M 東の院の対の御方も、ありさまは好ましくあらまほしきさまに、さぶらふ人々、童べの姿などうちとけず、心づかひしつ過ぐしたまふに、近きしるしはこよなくて、のどかなる御暇のひまなどにはふと這ひ渡りなどしたまへど、夜たちとまりなどやうにわざとは見えたまはず。ただ御心さまのおいらかにこめきて、かばかりの宿世なりける身にこそあらめと思ひなしつつ、ありがたきまでうしろやすくのどかにものしたまへば、をりふしの御心おきてなども、こなたの御ありさまに劣るけちめこよなからずもてなしたまひて、悔りきこゆべうはあらねば、同じごと人参り仕うまつりて、別当どもも事怠らず、なかなか乱れたるところなくめやすき御ありさまなり。

(薄雲②四三七〜八頁)

N 夏の御住まひを見たまへば、時ならぬけにや、いと静かに見えて、わざと好ましきこともなく、あてやかに住みなしたまへるけはひ見えわたる。年月にそへて、御心の隔てもなく、あはれなる御仲らひなり。今はあながちに近やかなる御ありさまももてなしきこえたまはざりけり。いと睦ましく、ありがたからむ妹背の契りばかり聞こえかはしたまふ。

(初音③一四六〜七頁)

これだけ執拗に繰り返されれば、花散里の存在が薄いものと感じられるのは頷かれよう。さらに付け加えれば、この物語で花散里は六首(但し、そのうち一首については異説があ

ることはGで述べた)の和歌を詠んでいるが、うち五首までは贈歌であるから、放っておけば読者に、それほど控え目な印象を残すはずがないのである。にも拘らず、花散里の印象が現在広く信じられている通りなのは、ひとえにこれらの描写の力によるのであるが、だとすればそこに、何らかの作為を想定しなければならぬ。それが、本節で追い求めてきた紫上との関わりだと思ふのである。何故なら、これらの場面は皆、紫上が何らかの形で不安定な状況に追い込まれた時のこととして説明できるからである。

例えば、H、K、Mの場面は、源氏が須磨から帰ってきて、新しい体制固めが行われた時期であるし、そういう意味ではNの場面も同様であろう。特にMの場面は、明石姫君を紫上が引き取った直後で、御方と紫上が一番紛糾していた時期でもあった。さらにLは言を俟たない。六条院全盛の様を示すため、四季それぞれの町で行われる行事を順次語っていくという玉鬘十帖の方法上仕方無かつたこととは言え、この場面で紫上の最大の障害となつているのは花散里自身なのである。それ故、他の何処よりも念入りに、彼女が紫上と対立する存在とはなり得ないことが語られねばならなかつたのだが、だとすれば、花散里の存在は常に紫上に規制されていることになり、これは正しく分身の關係と言えるであろう。そしてそう捉えた方が、この二人が互いに嫉妬をしない理由、及び、本来紫上が育てるはずであつた夕霧を花散里が引き受けた理由、或いは、H、Iに見られるように、花散里の存在が多分に機能的である理由等々がすっきりと理解できるように思ふのである。すなわち花散里は、何らかの理由で紫上が安定しない状況の時に現れ、その状況を分け持つことによつて紫上の安定を図ることを主要な任務として造型された人物で、紫上の分身であるが故に、うかつに出すとその存在が前面に出過ぎてしまうので、常に目立たぬよう規制を掛けられているのではないかということなのである。

六

本章第三節で、六条御息所を紫上の分身として捉え、その機能を、理想的人物として造型された紫上では決して表明できない闇の側面を肩代わりするものとして論じた。本節はその続きとして、花散里の機能を、紫上の苦悩を共に背負うものとして位置付けてみたわけだが、六条御息所とは異なり、花散里の場合はこれに近いことまで従来も言われている。そこで最後に、これの延長線上に位置する六条院の歪みの問題まで話を広げたいと思ふのだが、それをするにはその前に、最近出されている、六条院は歪んでいないという意見(19)に一言しないわけにはいくまい。

結論から述べてしまえば、やはりそれらには従えないと思ふのだが、と言うのは、勅撰集等に於ける春秋重視をその根拠とするそれらの説では、春を司る紫上が「南の上」乃至「南の御殿」とされ、夏を司る花散里が「東の御方」と呼ばれるという、この物語に於ける呼称の問題が説明できないからである。また、詳しくは拙著第2部第2章第1節で明らかにしたように、源氏は結局己の老いに敗れるのであるが、それもまた六条院の歪みによつて、循環する季、つまりは「時」の支配に失敗したからであると実に分かりやすい。すなわち、これが作者の意図したことであると思われ、それ故、六条院は歪んでいるという前提で話を進めるが、従来この理由としては、三谷栄一の戌亥信仰説(20)や、林田孝和の鬼門を醜い女性で塞ぐ説(21)等、主に民俗学的見地からしか与えられてこなかつたように思ふ。これらの説は、皆それなりに見るべきものはあるものの、何分作品中に書かれていないことなので、断言できない憾みが残る。そこでもっと作品に根ざした解答はな

いものかと思うのだが、良く考えてみると六条院の歪みは、花散里と紫上が、本来位置すべき場所を入れ替えていることに起因する⁽²⁾、つまりは、花散里と紫上との関係に由来するものであるから、本節で繰り広げてきた考察が役立つのではないかと思うのである。

見てきたようにこの二人は、質的には等しいのであるから、それらが各々の場所を入れ替えていても、さほど異とするには当たらない。一見すると逆らっているようでありながら、その実源氏の世界を支えているこの二人の姿は、既に第二段でも見たところである。それ故この場合は、そこでも触れた、紫上と明石御方との緩衝材という、花散里の役割が優先されたのではないかと思われる。

と言うのは、六条院があるべき姿と実際のそれとを思い描いて見れば明らかな如く、その二つの大きな相違は、本来隣合わせに位置すべきだった紫上と明石御方が離れているということだからである。無論このことは、同じく対角線上に位置する花散里と秋好についても言えるわけだが、秋好が源氏の愛人ではなく、この二者の間に、取り立てて愛憎関係を考慮する必要がない以上、特に問題としなくても良いであろう。ところが、紫上と明石御方についてはそうはいかない。Bの引用文にある言葉ではないが、「あてあてのこまけ」にまで思いが及ぶこの物語の作者が、それに気がつかないわけが無い。それを避けるためにも六条院は歪んでいるのだと思われるが、この可能性はさらに新たな読みまでも導く。それは、紫上と明石御方とのもう一つの障壁となっている秋好とは、一体何者かということである。

無論彼女は源氏の愛人ではない。しかし同時に六条御息所の娘でもあり、その御息所もまた紫上との分身的存在であったとすれば、拙著第1部第2章第3節でも説いた如く、その娘である彼女もその可能性を有する。しかも秋好は紫上の養女でもあったわけだから、その可能性はますます強く、六条院とは言わば、紫上を中心に、その分身的女性を両翼に配し、明石御方を包囲しているように見えてくる。このことをさらに深読みすれば、源氏の義母にゆかりの女性達が、実母にゆかりの女性を取り囲んでいる構図と言い換えることも出来よう。何故なら、紫上・明石御方については今さら言うまでもないが、秋好は先ほど述べた繋がりから、そして花散里は、坂本共展が想定した⁽¹⁾ように、姉・麗景殿女御が源氏の母代であったとしたら文句は無いが、たとえそうでなかったとしても、麗景殿は常寧殿を挟んで弘徽殿と対称に位置するから、やはり藤壺に近い存在なのである⁽³⁾。すなわち、六条院物語とは、初め藤壺ゆかりの女性達によって鎮められようとしたが上手くいかず、源氏の実母の血を引き、正当な権利を有する女性であるところの明石御方の手によつて逆転されていく話と捉えることが可能なのであるが、その辺りの経緯は、第三章第四節に述べるので、花散里の存在を考察するということは、かくも根深い問題に行き当たる可能性があることを示したところで、本節の叙述を終わることにしたい。

注(1) 坂本昇『源氏物語構想論』(明治書院 昭56)第三章「花散里と聞こえし御方」。

(2) 例えば、坂本昇「紫上と花散里」(『中古文学』第三十三号 昭59・5)、沢田正子「花散里の君―虚心の愛―」(森一郎編著『源氏物語作中人物論集』 勉誠社 平5)等。

(3) 玉上琢彌は、「あるいは、中宮ともあろうものが他の人たちといっしょではないやだという婉曲な抗議であったかもしれない」と述べている(『源氏物語評釈』

第四卷 四六五頁。

- (4) 花散里は明石上にはかはりて思ひめぐらさすたゞありによき人也此哥もその心見えたり(源氏物語古注集成8『弄花抄』二二二頁 桜楓社 昭58)。
- (5) 玉上琢彌『源氏物語評釈』第九卷 五三頁。
- (6) 因みに、玉上琢彌も、このことに関してはやや疑問を持っているらしい(『源氏物語評釈』第九卷 二〇四頁)。
- (7) 高橋和夫「二条院と六条院―源氏物語に於ける構想展開の過程について―」(『源氏物語の主題と構想』 桜楓社 昭41)。
- (8) 池田義孝「源氏物語の方法―二条の東院と六条院―」(『国語と国文学』 昭44・6)。以下、池田の論とはこれを言う。なお、注(1)の坂本論文も同じ立場で書かれている。
- (9) 二条院に関しては、断定するほどの材料を今持たないが、光源氏の祖父・故按察大納言の邸であつたらしいので、宮中に参内しなければならぬ当時の貴族達の平均的な居住地、及び、源氏物語最初の左右両大臣家の位置などによると思う。
- (10) 『源氏物語評釈』第四卷 四五五頁。
- (11) 注(2)の論によると坂本は、注(1)に掲げた著書を上梓した後、拙論と同じく、登場時から花散里は、紫上と対になって造型されていたと訂正したらしい。しかし、詳細は本節と異なるので、このまま論述を続けることにする。
- (12) 藤村潔「花散里の場合」(『源氏物語の構造』 桜楓社 昭41)。
- (13) 島貫明子「源氏物語における伊勢物語の影響―「女はらから」の問題をめぐって―」(『緑岡詞林』第十七号 青山学院大学日文学院生の会 平5・3)。
- (14) 三谷邦明「花散里巻の方法―〈色好み〉の挫折あるいは伊勢物語六十段の引用―」(『物語文学の方法Ⅱ』 有精堂 平元)。
- (15) 『源氏物語評釈』第二卷 二五〜二八頁。
- (16) 三谷邦明「藤壺事件の表現構造―若紫の方法あるいは〈前本文〉としての伊勢物語―」(『物語文学の方法Ⅱ』)。
- (17) 例えば、上坂信男『古代物語の研究』四一三頁(笠間書院 昭46)等。
- (18) 新全集本②四九三頁頭注二三。
- (19) 例えば、渡辺仁史『源氏物語』の六条院について―四季の町の配列―(『中古文学』第五十三号 平6・5)等。
- (20) 三谷栄一「日本文学に於ける戌亥の隅の信仰」(『日本文学の民俗学的研究』 有精堂 昭35)。
- (21) 林田孝和「源氏物語の醜女―末摘花・花散里の場合―」(『源氏物語の精神史研究』 桜楓社 平5)。
- (22) 残りの二者、秋好と明石御方は、その占める位置が理想より四十五度ずれているという現象はあるものの、それは縦横に道路が走る平安京の構造上仕方ないことであるから、特に問題がないはずである。
- (23) 吉田真澄「源氏物語に関する一考察―花散里巻の方法について―」(『青山語文』第十九号 平元・3)。

第六節 まとめ

以上、子供も財産も後見人さえもなく、夫との愛だけによる結びつきという、およそ夫婦間の結びつきとしてはこの上もなく純粹で理想的に造型された紫上と、それを支える女性達を見てきたが、まとめを兼ねて確認しておく、六条御息所は、性格さえも理想的に設定され、自身で邪魔者を排除するとなると物語のリアリティが極端に失われる紫上に代わってそれを行う、言わば紫上の影的役割を担うものとして、葵上はそれとは異質で、自身の存在を限りなく無に近づけることによって間接的に紫上を助ける人物として、そして花散里は、文字通り紫上を脇から支える役目を与えられる一方、その存在自体が紫上の障害とならぬよう、常にバイアスをかけられた存在として造型されたのではないかということである。先にも述べたようにそれは、源氏と紫上のような結びつきというのは平安時代には極めて希有なことであつたからで、それを少しでも自然に現出させるには、これぐらいの手続きが必要であつたのではないかと思うのである。

言つてみれば紫上も含めてこれらの女性達は、その一つのテーマを現出させるために、或る統合的な存在を分割してそれぞれの人物と成したものと捉えられるのであるが、比喩的に言えばその「或る存在」というのは、ユング心理学で言う「太母(グレートマザー)」のようなものと捉えても良いかもしれない。ユング派心理学者を表明する河合隼雄の『昔話の深層』(集英社文庫 平6)「第二章 グレートマザーとは何か」に依れば、「母性はその根源において、死と再生の両面性をもつて」(四八頁)おり、その根源的母性をユング心理学ではグレートマザーと呼称するのであるが、例えばイザナミノミコトも生と死の両面を有しているように、日本の昔話にもそれは認められる。そう考えると、紫上と六条御息所及びここで取り上げた他の女性達を統合した人格がもし存在するならば、これと極めて近いイメージとなることは容易に理解されようが、同じく河合に依れば、『ヘンゼルとグレーテル』の母と魔女のように、昔話に於いてこのグレートマザーは、しばしば別の人格としても登場すると言う(第三章 母親からの心理的自立——ヘンゼルとグレーテル)。本章に於ける作中人物の捉え方は、これと近いものがあるのだが、勿論平安時代の作者がユング心理学など知るはずもない。だが、『古事記』『日本書紀』ともに登場するコノハナノサクヤヒメと姉のイワナガヒメ、或いは、『古事記』のみしか登場しないが、オオクニヌシを死から救ったウムガイヒメとキサガイヒメのような例も存在するから、複数の人格が統一されて一つの働きを成すという考え方は、そう疎いものではなかったはずである。それゆえ本論文ではそうした視点で源氏物語の作中人物を分析しているのだが、その例は、第一節で挙げた宇治の大君・中の君姉妹の他にも、枚挙に暇がないほど考えられる。例えば、物語でも初めから並称されている、薫と匂宮もそれとして数えられないことはないのだが、本論文で注目する、宇治十帖中での物の怪的役割という観点では、二人が果たしている時期にずれがあると考えられるので、「縦」の「連鎖」として扱ったまでである。源氏物語に於ける並びの巻論ではないけれども、人物連鎖の縦横も、判断が難しいものがある。そういう意味では、このような人物関係の全き考察を行うには、本章のような「連鎖」という観点の他に、「連鎖」という観点からの考察も必要なのである。次章を書かねばならない所以である。

第三章

人物の連鎖による表現法

第一節 序―連鎖的存在としての薫・匂宮、夕霧・柏木、光源氏・冷泉・明石姫君

前章第六節でも述べたように、源氏物語の作中人物の関係性としては、「横」の「連関」と「縦」の「連鎖」の二形式が考えられる訳だが、後者の例は前者より多いかもしれない。第一章第五節で名前を挙げた空蟬と夕顔もその一例だし、『古代物語の研究』で上坂が扱った末摘花と花散里、或いは、いわゆる「形代」の関係にある女性達、第四章で取り上げる予定の「拒否する」女性達と「忌避する」女性達等、これ全て「連鎖」の関係と言うことが出来る。最後に挙げた「拒否する」女性達と「忌避する」女性達は、また別のニュアンスが絡んでくると思われるので後に回したが、そういう意味では本章が扱うべき人物は事欠かない。しかし逆に言えばこれは、この分野には研究が蓄積されていて、なかなか新味が出せないことをも意味する。そこで本章では、人物自体は既に取り上げられているにせよ、その機能については余り言及されていないという面からのアプローチを試みる。それが、第二節で取り上げる、宇治十帖での物の怪的役割を果たす薫と匂宮であり、第三節、夕霧のワンポイント・リリーフとしての柏木であり、第四節、「玉」のネットワークとしての光源氏・冷泉・明石姫君である。

それぞれの詳細は、その節に依っていただきたいが、最初に一言しておけば、これも前章第六節で述べたように、薫と匂宮は確かに同時に物語に登場し、活躍時期もほぼ一致しているから、「連関」の例として取り上げられることも勿論可能であるが、そこから導き出される、光源氏(或いは紫上という可能性もあることは、前章第三節でも言及した通り)の明るい側面の継承者である匂宮と、同じく暗い側面の継承者である薫という理解は既に通説となつていると思われるから、それ以外の側面を追求した結果が第二節なのである。なお、その役割を追求していくと、どうしても宇治十帖の成立という問題と関わらざるを得ないので、この節に関しては例外的に二つの項目に分けた。

また、薫と匂宮の場合とは違い、物語に於ける登場時点は異なるものの、その活躍時期はほぼ重なる夕霧と柏木の場合は、一見すると「連関」の例として扱った方が適当という感があるかもしれないが、第三節で述べるように子細に検討していくと、その役割を果たす時期に微妙なずれがあるので、本論文では「連鎖」の例として取り上げた。

第四節の光源氏・冷泉・明石姫君は、確かに同時に存在している時期もあるが、作中人物が物語でも一番注目される時の一つと思われる誕生の時間にはずれがあり、しかもそこには全て「玉」の比喩が使われていること、この三人が単なる親子を越えた「同族」であることに着目すれば、そこには「玉」の比喩の「継承」が見て取れるのではないかと思ひ、やはりこの章に入れた次第である。

最後に他の章での慣例に従い、第五節で本章のまとめをしてみよう。

第二節 薫と匂宮

1 物の怪の役どころの分担

一

入水に失敗し、横川僧都達に救出された浮舟は、二か月経っても正気を取り戻さなかった。それを案じた妹尼は、兄に再度の下山を要請し、僧都の懸命の加持祈祷によって、浮舟に憑いていた物の怪は遂に姿を現わす。

A「おのれは、ここまで参で来て、かく調ぜられたてまつるべき身にもあらず。昔は、行ひせし法師の、いささかなる世に恨みをとどめて漂ひ歩きしほどに、よき女のあまた住みたまひし所に住みつきて、かたへは失ひてしに、この人は、心と世を恨みたまひて、我いかで死なん、といふことを、夜昼のたまひしに頼りを得て、いと暗き夜、独りものしたまひしをとりてしなり。されど観音とさまかうさまにはぐくみたまひければ、この僧都に負けたてまつりぬ。今はまかりなん」とのしる。「かく言ふは何ぞ」と問へば、憑きたる人ものはかなきけにや、はかばかしうも言はず。

(手習⑥二九四頁)

最後の辺り、柏木巻での六条御息所の死霊の科白を思わせるこの物の怪の言葉は、それ以来、絶えて物の怪らしい物の怪と直面することもなく、すっかり安心しきっていた我々読者を、源氏物語が蔵している太古の闇の前へとふいに引き据え、再び慄然とさせる。しかもこの言葉は、物語の構造に於いても様々な問題を投げかけるものなのである。

例えばそこにある「かたへ」という語は、大君を指すとしか考えられないから、「姫宮のなくなる時には格別あやしい出来事はなかったが、この物の怪の話が本当なら、姫宮の死もこの法師のせいだったのだ」(1)ということになる。つまりこの言葉は、今までの我がの読みを、全く修正するよう迫るものなのだ。

尤もこれは、前巻蜻蛉では完全に入水したと思われた浮舟が、実は生きていたとされる手習巻中に存在するものであるから、単に後から付加されただけという可能性も勿論ある。しかし、線条的にしか展開できない物語という形式に於いて、後から書かれたことが前の部分を塗り変えていくのは或る程度仕方のないことで、現にこの物語に於いても他にもこのような例は多い。

例えば、柏木と女三の宮の密通を知っていたのは、光源氏の他には小侍従一人と正編ではされていたのに、続編になると弁も知っていたとされること然り、北の方の死後、八宮はすっかり聖の暮らしに成り果てていたはずであったにも拘らず、後には認知されぬ浮舟という子がいたとされることもまた然りである。だが、その度に我々はそれを受け容れて来たのだから、これだけを拒否することも出来ないであろう。それに、一見すると単に精神的に追い詰められたためとしか見えない浮舟の入水や大君の死についても、詳細に読み直せば、物の怪が介在していた可能性が全く語られていなかったわけでもないのである。

特に、浮舟の場合はかなり顕著で、まず薫との関係の始まりにしてからが、思わず薫が「楚王の台の上の夜の琴の声」と誦じてしまう有名な場面(東屋⑥一〇〇頁)を中心として、数々の不吉な事象に彩られており、夕顔巻との類似を考え併せれば、まさに怪異とは歩一歩程の近さであると言えよう。さらに話が進んで、三角関係により憔悴していく浮舟に対して、母や乳母は度々物の怪を心配している(2)。無論これは、病の原因をすべて物

の怪に求める当時としては当然のこととも言えるが、後述するように前後の文脈を辿れば、単にそれだけでもなさそうである。

また大君の場合も、確かにあからさまな怪異が語られることはないものの、それにしても幾つか不審な点も残るのである。まず、薫と大君の実質的な関係の開始と目される、総角巻冒頭近くの、二人が初めて実事なき一夜を過ごした後の薫の言葉、「暁の別れや、まだ知らぬことにて、げにまどひぬべきを」(⑤二三九頁)は、一般的には『花鳥余情』が挙げる、「まだ知らぬ暁起きの別れには道さへまどふものにぞありける」という歌を踏まえると説かれるのだが、これは夕顔巻の光源氏の歌、「いにしへもかくやは人のまどひけんわがまだ知らぬしのめの道」(①一五九頁)を意識していると見る方が良いのではないかと思われ、だとすれば大君と浮舟はともに薫との関係の開始の時点に於いて、不吉な夕顔巻の影を引きずるといふ共通点を有することになる。またこのやや後に、薫一向になびこうとしない大君を評して、「何か、これは世の人の言ふめる恐ろしき神ぞつきたてまつりたらむ」と、女房が私語く場面(⑤二五四頁)もあった。尤も、この時はもう一人の女房によって、「あな、まがまがし。なぞの物かつかせたまはむ」(同頁)と、それは即座に否定されてしまうのだが、この会話によって浮かび上がって来た、不気味な憑きものの雰囲気だけは、完全には払拭できずに残存する。そしてそのように考えれば、大君の死の描写中にある、「世の中をことさらに厭ひ離れねとすすめたまふ仏などの、いとかくいみじきものは思はせたまふにやあらむ、見るままにもの枯れゆくやうにて、消えはてたまひぬる」(⑤三二八頁)という部分も、或いは「仏」以外の何者かのしわざであったかとも思われて来るのである。

以上のように、この手習巻の物の怪の言葉とそれ以前の物語を結ぶ回路は、全く開かれていなかった訳ではない。だとすれば、この言葉によって新たに浮かび上がって来る文脈は、他にも幾つかあるはずで、その中でも続編の世界を貫き、特に重要だと思われる薫と匂宮について、ここで見直しを図ろうとするものである。

二

さて、この言葉自体の詳細な分析に入る前に、浮舟がこの物の怪をどのように捉えていたかを見ておこう。何故なら、そこにこの問題を解く第一の鍵が隠されているからである。

Bただ、我は限りとて身を投げし人ぞかし、いづくに来にたるにかとせめて思ひ出づれば、いとみじとものを思ひ嘆きて、皆人の寝たりしに、妻戸を放ちて出でたりしに、風ははげしう、川波も荒う聞こえしを、独りもの恐ろしかりしかば、来し方行く末もおぼえで、簀子の端に足をさし下しながら、行くべき方もまどはれて、帰り入らむも中空にて、心強く、この世に亡せなれと思ひたちしを、をこがまして人に見つけられむよりは鬼も何も食ひて失ひてよと言ひつつくづくとゐたりしを、いときよげなる男の寄り来て、いざたまへ、おのがもとへ、と言ひて、抱く心地のせしを、宮と聞こえし人のしたまふとおぼえしほどより心地まどひにけるなめり、知らぬ所に据ゑおきて、この男は消え失せぬと見しを、つひに、かく、本意の事もせずなりぬると思ひつつ、いみじう泣くと思ひしほどに、その後のことは、絶えていかにもいかにもおぼえず、……

(手習⑥二九五〜七頁)

混濁した意識の中で、浮舟は必死にこれだけの事を跡付けた。中でも一番重要なのは、浮舟にはこの物の怪が匂宮だと思われたということである。従来この理由としては、「浮

舟にはそのとき（句宮が宇治川を渡って連れ出した時・著者注）の官能的な陶醉感が強くしみついているので」⁽³⁾といったことが挙げられて来たが、物語を詳細に辿り直してみると、どうも理由はそれだけではない。と言うのは、句宮と物の怪は、実は意外に関係が深いからである。浮舟と句宮の出会いの場面を振り返ってみよう。

浮舟は継子だという一事を以て、婚約者の少将を常陸介の実娘にとられてしまった。ために、介邸にしばらくなくなった浮舟は、姉の中君を頼って、その邸で暮らすことになるが、中君が洗髪のため不在であった夕まぐれ、句宮が新参女房と間違えて、浮舟の部屋に入ってしまったことから二人の仲は始まった。この時は乳母の活躍で、浮舟は危うく事無きを得たが、その時乳母は、「降魔の相」で句宮をにらみつけたという（東屋⑥六六頁）。勿論これは大変怒ったことの謂であるわけだが、かと言って、全編中これ一例という事情に鑑み、不動明王等が悪魔を降服する際の忿怒の相というこの語の原義を全く忘れ去ってしまったてはならないだろう。既に玉上琢彌も、「まことに乳母には、かの美しき宮が魔と見えたことであろう」、「そしてその「降魔の相」は成功した。魔は去ったのである」⁽⁴⁾等と評しているように、ここでは句宮が「魔」として位置づけられてしまっているということなのである。そしてこれは、浮舟が宇治に逃れて行った後も変わらない。続いて浮舟巻を見てみよう。

ふとした偶然から、句宮は浮舟が宇治に隠れ住んでいることを知り、はるばる訪ねていく。そして薫のふりをすることにより、まんまと浮舟の寝所に忍び込むことに成功するのだが、一夜明けて真相を知った右近が、それを隠蔽すべく、その日、石山詣でへと誘いに来た浮舟の母に宛てた手紙は、次のようなものであった。

C 昨夜より穢れさせたまひて、いと口惜しきことを思し嘆くめりしに、今宵夢見騒がしく見えさせたまひつれば、今日ばかりつつしませたまへとてなむ、物忌にてはべる。かへすがへす口惜しく、ものさまたげのやうに見たてまつりはべる。

（⑥一三一頁）

語るに落ちたというべきか、今回の浮舟不参の真相は、何か―勿論ここでは句宮―のしわざであることを、自然と浮かび上がらせてしまっている面白い文面なのであるが、なお興味深いのは、それが「もの」と呼称されている点である。無論右近には全くその気はなかったであろうが、表現の構造として、ここでも句宮が、「物の怪」として絡め取られてしまっていることは事実なのである。そしてそれは何も右近だけには限らない。前述したように、この巻では浮舟の母や乳母も度々物の怪を疑っているが、煎じ詰めれば、それらはすべて句宮を指しているに他ならず、この巻では句宮は、言葉の重層という魔術によって、徹底的に「物の怪」として絡め取られていくのだと言えよう。そしてそれは実は、こうした直接的表現のみに止まらない。

例えば、既に完訳日本の古典の脚注（⑩七七頁一八）にも指摘があるように、浮舟にとって句宮は、常に面影となつてまとわりつく人物なのである。そこには、新全集本で言うところ、⑥一四四・⑥一五七と当該⑥一八七頁の、都合三か所⁽⁵⁾が指摘されているが、さらに一か所（⑥一九二頁）付け加えることも可能であり、その頻度の高さは充分窺えよう。そしてその脚注には、「句宮への断ちがたい執着」と書かれているのだが、これは聊か現代風な見方ではなからうか。何故なら、恋しい人が面影に見えるというのは、本来はその人を恋しく思っているためではなく、その人が恋しく思っているからで、この物語の有様

から考えても、やはりそのように捉えるべきであろう。すなわち、この脚注は、「句宮の断ちがたい執着」とあるべきで、この辺り句宮の魂は、浮舟恋しさのあまり身体から抜け出して、常に浮舟の側に寄り添っているかの如く描かれていることになるが、ここから物の怪までの距離は、歩一步の所であると言えよう。因みに薫の方は、この巻一度も面影となっていない。

さらに、この巻でも最も有名な、句宮が浮舟を橘の小島に誘う場面も、その例として挙げることが可能である。周知の如く八宮邸は、宇治川の都側に位置していたが、句宮のこの行為によつて、浮舟は遂に向こう岸に渡つてしまう。換言すれば、これは浮舟が異郷へ行つてしまったことを意味し、そこにこの場面が「死」へと通ずる(6)という読みが成立する所以もあるのだが、だとすれば浮舟をそうした「死」へと誘つたのは句宮だという設定も、何やら暗示的なものがあるう。しかも、後に実際に物の怪が出現した時、浮舟が思い浮かべたのがこの時のことだとすれば、そこにも何か回路が開いているということになる。

この他にも、追い詰められた浮舟に向かつて右近が発する慰めの言葉、「……右近はべらば、おほけなきこともたばかり出だしはべらば、かばかり小さき(浮舟ノ)御身ひとつは(句宮ガ)空より率てたてまつらせたまひなむ」(⑥一八七頁)や、薫の警護が強化された後に浮舟に会いに来た句宮が犬に吠えつかれる場面(⑥一九〇頁)等も、これらのことと強ち無関係とは思えない(7)といった些末な証拠は、多数挙げることが可能ではあるが、煩雑になりすぎるので今は省略する。ただ、これら全てを勘案すれば、浮舟との関係に於いて、句宮は絶えず物の怪的位置付けを与えられて来たという言い方をすることは許されよう。無論これは、句宮が実際に物の怪になつていよう描かれているという意味ではなく、既に何度か繰り返したように、あくまで表現上の問題である。手習巻で浮舟が、物の怪を句宮と知覚するのも、おそらくその延長線上に位置することと思われるが、では、本項の標題である「物の怪」というのは句宮の謂かと言うと、そうではない。何故ならこれは浮舟の視線に従つて見た時に浮かび上がつて来る物の怪の姿で、物の怪自身の言葉によるものではないからである。ここに於いて漸く、その言葉を分析する時が来たようだ。

三

その言葉によれば物の怪は、自分を、「昔は、行ひせし法師の、いささかなる世に恨みをとどめて漂ひ歩」いた者だと規定している。そこからこの物の怪は、『今昔物語集』巻第二十一「染殿后、為天宮被嬖乱語第七」等に登場する、紺青鬼のようなものとされるのが、古注以来一般的だが、この考え方はどうもすつきりしない。と言うのは、その紺青鬼も、また有名な久米仙人などもそうなのだが、一般にこのタイプの物の怪は、先に女人を見て墮落が始まるからで、この話のように、何の関係もない女人に寄り憑くことは、話型から言つても余り考えられない。そしてもう一つは、引用文最後にあるように、憑坐の力が弱いとかで、この物の怪の正体は、結局最後まで確定できなかったことが気にかかるからである。特に後者は不思議なこと、この物の怪は調伏された以上、「何の某」と名を名乗つてから退散しても良かったはずである。ところがそうは書かれていないというところに、逆にこの物の怪の正体を確定したくないという作意があるのではないかと考える余地が生じる。そこで、これが物の怪の言葉だということをしばし忘れて読み直してみると、どうもその前半は薫のことを言っているのではないかと見えて来る。

尤も、こうした考え自体は別に突飛ではなく、池田和臣も同様の見解を示す⁽⁸⁾のだが、それに付け加えたい部分も多くあり、また、本論文の流れの中で語っておかねばならないこともあるので、以下、論者なりに再考することとした。

まず「昔は、行ひせし法師」というのが前世で法師であったという意味ならば、薫には多分にその可能性がある。その証拠は、彼の名の由来ともなった、その体香である。薫の美質を数え上げる時、その体香については欠かせないが、その最高の讃辞は東屋巻にある。

D 「経などを読み、功徳のすぐれたることあめるにも、香のかうばしきをやむことなきことに、仏のたまひおきけるもことわりなりや。薬王品などにとりわきてのたまへる牛頭梅檀とかや、おどろおどろしきものの名なれど、まづかの殿の近くふるまひたまへば、仏はまことしたまひけりところおぼゆれ。……」
(⑥五五頁)

この女房の言葉は、そこにもある通り、『法華経』薬王菩薩本事品第二十三の、「若有人。聞是薬王菩薩本事品。能随喜讚善者。是人現世口中。常青蓮華香。身毛孔中。常出牛頭梅檀之香。所得功徳。如上所説」(引用は岩波文庫本下巻二〇六頁による。但し新字体に改めた)を踏まえたものであるが、これに依れば、薫の前世の功徳は測り知れないものとなり、法師であった可能性は大である。

また、次の、「よき女のあまた住みたまひし所に住みつきて」の部分も、「住みつく」とは必ずしも「定住することだけを意味するのではなく、広く男が女に通うことをも言うことを思えば、夫婦関係ではないが、八宮の姫君達のもとへ通う薫は、まさしく該当するのである。さらに、先程の話型の話とも相俟って、どうもこの辺り垣間見の臭いが濃厚なのであるが、後の「かたへ」という語が示すように、ここでは大君と中君が対にして捉えられているのだとすると、この二人がそろった所を垣間見しているのもやはり薫であり、かつそれをしたのは薫だけなのである。しかも薫は、橋姫巻と椎本巻の二度、これを行っているが、特に前者は、それまで一応道心一途であった薫の心を大きく動揺させるきっかけとなっており、この物の怪の語った道筋とほぼ一致して来る。

尤もこの言葉は、次の「この人は」から、明らかに薫から離れて行くのであるから、この物の怪の正体は、実は薫の身体から抜け出した魂だなどと言おうとしているわけでは毛頭ない。ただ、前段で指摘し得た、表現構造がその人物を、「物の怪」として絡め取ってしまうような機構、それがここにも存在するのではないかということなのである。そして薫の場合、その最大級のものは、中君が薫に浮舟を紹介する、あの有名な部分に存在する。

E 「思うたまへわびにてはべり。音なしの里求めまほしきを、かの山里のわたりに、わざと寺などはなくとも、昔おぼゆる人形をも作り、絵にも描きとりて、行ひはべらむとなん思うたまへなりにたる」とのたまへば、「あはれなる御願ひに、また、うたて御手洗川近き心地する人形こそ、思ひやりいとほしくはべれ。黄金求むる絵師もこそなど、うしろめたくぞはべるや」とのたまへば、(中略)「人形のついでに、いとあやしく、思ひよるまじきことをこそ思ひ出ではべれ」とのたまふけはひのすこしなつかしきもいとうれしくあはれにて、「何ごとにか」と言ふままに、几帳の下より手をとらふれば、いとうるさく思ひならるれど、いかさまにして、かかる心をやめて、なだらかにあらんと思へば、この近き人の思はんことのあいなくて、さりげなくもてなしたまへり。
(宿木⑤四四八〜九頁)

F 「世を海中にも、魂のあり処尋ねには、心の限り進みぬべきを、いとさまで思ふべき

にはあらざなれど、いとかく慰めん方なきよりはと思ひよりはべる。人形の願ひばかりには、などか山里の本尊にも思ひはべらざらん。なほ、たしかにのたまはせよ」と、うちつけに責めきこえたまふ。(中略)「……これをいかさまにもてなさむと嘆くめりしに、仏にならんは、いとよなきことにこそあらめ、さまではいかでかは」など聞こえたまふ。(同⑤四五―二頁)

E、Fは本来一まとまりの箇所なのだが、全てを引用するには長すぎるため、便宜的に二つに分け、論旨に直接関わらない部分を省略した。

周知の如く、登場のこの部分から、浮舟は、「人形」、「仏」などの不吉な語によって規定され、その運命が定められていくのだが、その際見逃してはならないことは、薫の持ち出したこれらの語を、常に悪く取りなしているのは中君の方だということである。

このことについては、既に鷲山茂雄が少し触れている⁹⁾が、私見とは途中から相違して来るので、以下詳細に見ていこう。

薫がEで使った「人形」は、「昔おぼゆる」という語が形容しているように、大君を偲ぶ似姿ぐらいの意味であったはずだが、それを「うたて御手洗川近き心池する人形」と取りなしてしまったのは中君である。無論「人形」という語自体に、「水に流される」というイメージが付着していることは否定できないし、中君はそれを拡大したにすぎないのだから、少なくとも薫は悪い意味でこの語を持ち出したのではなかった。

それはFの場合も同様で、薫の持ち出した「山里の本尊」という語は、浮舟を大君の故地に大切に置いて崇めようぐらいの、むしろ良いイメージが感じられるのに対して、中君の取りなした「仏」という語は、出家、或いは悪くすると死といった、悪いイメージの方が強く感じられる。そしてこの構造は、明らかにこのこと呼応すると思われる、東屋巻の次の箇所でも同じである。

G恨みきこえたまふことも多かれば、いとわりなくうち嘆きて、かかる御心をやむる禊をせさせたまつらまほしく思ほすにやあらん、かの人形のたまひ出でて、「いと忍びてこのわたりになん」とほのめかしきこえたまふを、かれもなべての心地はせずゆかしくなりたれど、うちつけにふと移らむ心地、はた、せず。「いでや、その本尊、願ひ満てたまふべくはこそ尊からめ、時々心やましくは、なかなか山水も濁りぬべく」とのたまへば、はてはては、「うたての御聖心や」と、ほのかに笑ひたまふもをかしう聞こゆ。「いでさらば、伝へはてさせたまへかし。この御のがれ言葉こそ、思ひ出づればゆゆしく」とのたまひても、また涙ぐみぬ。

見し人の形代ならば身にそへて恋しき瀬々のなでものにせむと、例の、戯れに言ひなして、紛らはしたまふ。

「みそぎ河瀬々にいださんなでものを身に添ふかけとたれか頼まん引く手あまたに、とかや。いとほしくぞはべるや」とのたまへば、「つつひに寄る瀬は

さらなりや。いとうれたきやうなる、水の泡にも争ひはべるかな。かき流さるるなでものは、いでまことぞかし、いかで慰むべきことぞ」など言ひつつ、暗うなるもうるさければ、かりそめにもしたる人も、あやしく、と思ふらむもつつまじきを、「今宵はなほとく帰りましたまひね」と、こしらへやりたまふ。

(⑥五二―四頁)

初めに出て来る「人形」は、「襖」という語から「水に流される」というイメージが強くあるが、これは中君の心中である。ここから彼女の心の中では、浮舟Ⅱ人形Ⅱ「水に流される」という図式が、しつかりと出来上がってしまったことが窺える。次に出て来る「本尊」という語は、薫の会話文中に使われており、河内本では「仏」になっているらしいが、後文との繋がり上、いずれにしてもそれほど悪い意味は読み取れない。その歌に用いられている「形代」は、その語自体から不吉なイメージは拭いきれないにしても、「見し人の形代」と続くここでは、大君の代わり程度の意味であるし、「なでもの」は、「瀬々」という語から「水」のイメージは強いのだが、それは「恋しき瀬々」の「瀬々」なのであり、しかもその前の「身にそへて」という言葉から、玉上琢彌のように「いつも傍に置いて（姫宮が）恋しい折々の、その恋しさを移すなでものにしましょう」という解釈¹⁹も成立し、「水に流されるもの」というイメージは大分薄まっていると言えよう。それに對して中君は、「瀬々にいださんなでもの」と応じた。こうした切り返しは答歌の常とは言うものの、ここに至れば、どうもそれだけではないらしいことは察しがつこう。しかもこの後には、引歌表現とは言え、『伊勢物語』第四十七段の、「大幣の引く手あまたになりぬれば思へどえこそ頼まざりけれ」まで付加される始末なのである。

このように見て来れば、浮舟に、「水に流される人形」というイメージを必死に付与しようとしているのは中君だということはほぼ認められるであろう。これは何も中君は浮舟に對して悪意を抱いていたのだなどと言わんとしているわけではなく、浮舟を人形として絡め取っていく原動力は中君の発する言葉の方にあるという構造を重視したいということなのである。

そして、中君がこうした言葉を発する理由は、Eの引用文中の傍線部分に書かれているように、何とかして薫の心を冷まさせて平穏な暮らしを取り戻したいという強い願望にあるわけだが、それと対応し、しかもそれがより細密に満かれたのがGの引用文中の傍線部Aと思われる。これは勿論、『伊勢物語』第六十五段の、「恋せじと御手洗河にせしみそぎ神はうけずもなりにけるかな」を踏まえた、類型的表現ではあるわけだが、ここでは恋に苦しむ男が自身とする、自発的な襖であったのに対して、ここでは中君が薫の熱を冷ますためにさせたいと願う、他律的な襖になっていることに先ず注意したい。その上、「思すにやあらん、かの人形のたまひ出でて」と続く文脈からは、浮舟という人形につけて、薫をも「水に流してしまおう」という中君の意図が読み取れ、当の薫もそれは感じている。それが同じくGの引用文中にある、傍線イの部分であるわけだが、するとここでは、薫は中君から、人形に駆り移して祓う災厄とあまり変わらない扱いを、間接的にせよ受けたことになり、換言すればこの時の薫は、物の怪と大差ない位置づけがなされていたと言えよう。

こう見て来れば、薫は、匂宮と同様宇治十帖の中で、巧みに「物の怪」として象られているという物言いは、ほぼ許されるであろう。それではこの二人は、宇治十帖の世界で「物の怪」として並存しているのかと言うと決してそうではない。その答えはあの手習巻の、浮舟が見た物の怪の、表面的な姿は匂宮であったが、物の怪自身の言葉によるその正体は、薫のように思われるという構造に既に明かされているのであるが、次段ではそれについて少し考察してみよう。

四

“物の怪”としての薫と匂宮の關係を知るためには、これまで掲げて来た引用文からも窺えるように、東屋巻はやや混在するが、それを除けば、各々が“物の怪”として描かれる部分は、ほぼ画然と区分けされていることに、まず注目しなければならない。薫が“物の怪”として描かれるのは、例の手習巻の物の怪出現の場面を除けば宇治十帖前半にほぼ限られ、既に第二段でも触れたように、浮舟巻では面影にもなっていない。対して匂宮の“物の怪”化が始まるのは、見て来たように、浮舟との出会い以降のことである。尤も匂宮の場合は大君の死の直後に、中君が、彼のせいで姉が死んだと思う場面（総角⑤三三〇頁）があり、これなど強いて考えれば物の怪的位位置づけの場面と言えないこともない。しかし、この時点で責められるべきはむしろ、全ての原因を作った薫であり、宮の責任は問えないと思うので、そこまで深読みする必要はあるまい。すなわち、薫は前半、匂宮は後半と、分担して“物の怪”としての役所を果たしており、東屋巻を除いて並存は無いと、二人の關係は纏められる訳だが、この現象を説明する一つの仮説としては、東屋巻辺りを境として、本来薫が果たすはずであった役割が匂宮に移されたというものが考えられよう。これは、この巻を挟んで存在する二つの三角關係に於いて、二人の攻守が入れ換わっていることから裏付けられるのであるが、なお雄弁にそれを物語るのは、柏木との類似という問題である。

宇治十帖後半に及んで薫が色濃く柏木化して来ることは、第五章第二節2に述べるので、ここでは詳述はしない。ただそれが、ちょうど今問題にしている、宿木巻辺りからであることだけは確認しておこうと思う。ところで、柏木と言うと、女三の宮との仲を源氏に知られるきっかけになった、「言葉づかひきらきらと粉ふべくもあらぬ」（若菜下④二五三頁）手紙が頭に浮かぶが、匂宮と浮舟の仲が薫に発覚したのも、やはり手紙がきっかけであった。尤も、後者の場合は実際に文面が読まれた訳ではないのだが、その代わり匂宮が読んでいた浮舟からの手紙は、「紅の薄様にこまやかに書きたる」（浮舟⑥一七二頁）ものであり、他と紛れようがないという共通点を有するものなのである。

このように、発覚という一点に於いて、匂宮と浮舟との關係は、柏木と女三の宮との關係と類似して来るのであるが、それでは薫の場合とは言うのと、中君との間には結局何もないのであるから、発覚などということ自体有り得ないが、それでも二人の間に交わされた手紙に言及する部分は、まるで意図されたものであるかのように存在する。

H常に心をかけて、しるきさまなる文などやあると、近き御厨子、小唐櫃などやうの物を、も、さりげなくて探したまへど、さる物もなし、ただ、いとすくよかに言少なにてなほなほしきなどぞ、わざともなければ、物にとりませなどしてもあるを、……

（宿木⑤四三七〜八頁）

これは、中君に迫った薫が、懷妊のしるしの帯のために自制する有名な場面の直後で、その時ついた薫の移り香により、匂宮が中君に疑いの心を抱くところである。匂宮のこの、手紙に対する異常な執着は、相手が柏木の血を引く薫であることと相俟って、読者である我々に、柏木と女三の宮の關係発覚場面を思い起こさせるに充分なものとなっていよう。そしてそう気づけば、片や、意図せざる間に動かぬ証拠の手紙を見つけてしまった者と、こなた、必死に意図するもの一向に証拠の手紙を見つけれない者という具合に、この二つが正確な反転形を為していることは、直ちに知られることなのである。そしてこの、“正確な反転”というのは、全く類似するとほぼ同義であることは言うまでもない。

このように、薫と匂宮は、「女性との関係の発覚」という一点に於いて、共に柏木的色彩を濃く有するのだが、この問題でさらに重要なことは、反転の関係はこの両者の間でも、やはり成り立っているということなのである。匂宮と柏木の場合は類似、薫と柏木の場合には反転という関係から、この結論は当然導かれるところではあるのだが、これらの記述が存在するのが、これまでも度々その名が挙がって来た、宿木巻と浮舟巻だという事実に気づけば、この問題はそう軽々に見過ごしにはできない。すなわち、どのような事象を取り上げても、前に述べたように、薫と匂宮の役割は東屋巻辺りを軸として反転しているとしか捉えられないのであるが、それが共に柏木性を有するということに、この二人が根底に於いて等質であることが証されているわけである。そして、この二人が等質であるが故に、役割の委譲もスムーズに行くのであるが、さらに等質であるということは、二人が同一人格の二分割にすぎないことをも表している。このことは、これまでにも、主として分身論の立場を中心として度々言及されて来ているので、今更事新しく言い立てるには及ばないかもしれないが、今ここで改めてそのことを思い起こさないと、あの手習巻の物の怪の描写は、完全には理解できないのである。つまり、外見を眺めた浮舟には匂宮に見えたが、その言葉から割り出せる物の怪の正体は薫であるという、あの描写の構造自体が、宇治の世界に於ける薫と匂宮の関係を、端的に表徴していると言えるのである。無論重きを為すのは、正体と思われる薫の方なのであり、このことから、宇治の世界で本来物の怪的役割を果たすのは薫であったと考えられるという、前の仮説は証明されると思われる。すなわち、この点に於いても、第五章第二節2に述べる、薫が主で匂宮が従という関係は生きているわけだが、では何故薫が、「物の怪」としての役割を果たさねばならなかったのか。最後にそれについて考察してみよう。

五

第三段でも触れたように、薫の最大の美質はその体香であり、彼の名前も、そこに由来することは間違いないが、これも多数指摘されているように、そうであるにも拘らず、彼の体香は彼にとってマイナスに働くことがしばしばである。例えば、薫はそのために忍び歩きもできず（尤も、道義的には良いことかもしれないが）、前述したように、中君に近づけば、その移り香により、匂宮の嫉妬をかきたて、却って彼女を失う結果になってしまい、果ては浮舟の女房に、匂宮との微妙な差異を嗅ぎ分けられる鼻を持った者がいなかったため、匂宮に浮舟を奪われるということまで起こってしまう。言わば薫は、体香という十字架を、生まれつき背負わされているようなものであるが、その意味で興味深いのは、橋姫巻の、姫君達を垣間見させた褒美として薫に着物を貰い、却って困惑する宿直人・鬘鬘の姿である。

I 宿直人、かの御脱ぎ棄ての艶にいみじき狩の御衣ども、えならぬ白き綾の御衣のなよなよといひ知らず匂へるをうつし着て、身を、はた、えかへぬものなれば、似つかはしからぬ袖の香を人ごとに咎められ、めでらるるなむ、なかなかところせかりける。心にまかせて身をやすくもふるまはれず、いとむくつけきまで人のおどろく匂ひを失ひてばやと思へど、ところせき人の御移り香にて、えも濯ぎ棄てぬぞ、あまりなるや。

(⑤一五二頁)

彼の姿は薫の雛型とも言うべきものであるが、この引用文最後辺りには、何となく六条御息所の影がある。そしてこの連想は、おそらくそう的外れなものではないだろう。もと

もと、薫が六条御息所の物の怪に導かれている面を有することは、夙に大朝雄二が指摘したところ（リ）であり、本論文でも第二章第三節で触れた。片や魔除けの芥子の香、片や牛頭梅檀を思わせる妙香と、一見すると天と地ほどの開きがあるように見えるが、その実二人とも香に苦しむという共通点を有するのであり、これもまた薫が六条御息所の系譜を引くことを証する。そしてそれを示す表徴は他にも存在する。それは前段でも触れた、薫の柏木性ということである。

薫が、その出生時に於いて御息所の物の怪に領導される面を有することは既に述べたが、そのことはすなわち、その両親である柏木と女三の宮も、多分にその物の怪に操られていることを意味する。その物の怪により出家させられてしまったと明記されている女三の宮についてはともかく、柏木の方には納得いかない向きも多いと思うので一言しておく、確かにそれは、物の怪出現などというあからさまな形こそとっていないが、やはり本文中にはそれらしきものが描かれている。

J陰陽師なども、多くは、女の霊とのみ占ひ申しければ、さることもやと思せど、さらに物の怪のあらはれ出で来るもなきに思ほしわづらひて、かかる隈々をも尋ねたまふなりけり。
（柏木④二九三頁）

原因不明の病に苦しむ息子の柏木を案じた致仕の大臣は、すぐれた修験者を可能な限り集めたが、その占いの結果がこれであった。新全集を初めとして多くの注釈書は、この部分が葵巻での六条御息所の物の怪の描写と類似していることを指摘する（同頁頭注一八）のだが、次の柏木の科白中の、「何の罪とも思しよらぬに。占ひよりけむ女の霊こそ、まことにさる御執の身にそひたるならば、厭はしき身をひきかへ、やむごとなくこそなりぬべけれ」という言葉に引かされて、皆一様に女三の宮のことだとしている。しかし、これは単なる柏木の誤解に過ぎないのであり、多分この、修験者達の探り当てた「女の霊」の正体は、六条御息所の物の怪であったと解して良いであろう。それ故、柏木もまた六条御息所の物の怪に操られていたと言えるわけだが、言うまでもなく薫は、柏木の血を引く者というだけでなく、前に述べたように、続編、それも特に宿木巻以降に於いて、急速に柏木色を濃くしている。これはまさに、今まで述べて来た薫の「物の怪」化とびったり歩調を合わせた動きであり、とても無関係とは思えない。すなわち薫の柏木化は、柏木という存在を媒介にして、この辺りから薫と六条御息所の物の怪の結びつきがより強くなって来た表徴ではないかと考えられるわけであり、またそのように把握した方が、先に指摘した、浮舟巻での匂宮と柏木の唐突な類似を、最も上手く説明できるように思うのである。

以上のように、薫と六条御息所の物の怪との繋がりは、続編になっても続いているどころかますます強くなっていると考えられるのであり、そこにこそ、宇治の世界で、薫が「物の怪」として象られていく所以があるのだと思われるが、そうしたことを頭に置いて、最後にもう一度Aの引用文を見てみよう。

既に第一段で述べて置いたように、この物の怪の言葉は明らかに柏木巻での六条御息所の死霊の科白を思わせる。そして、見て来たように、この言葉の指すところが薫であるならば、この類似もまた決して偶然ではなく、薫と六条御息所の物の怪との親近性を示すものということになる。尤も、この言葉の類似は、物の怪というものの類型ではないかとの意見もある（ロ）が、引用の織物と言われるこの物語に於いて、「今はまかりなん」と「今は帰りなむ」（柏木④三二〇頁）という、ほとんど同一とも言えるほど類似する二語の牽

引力は決して無視できないと思うし、これまでの考察結果から考えても、とてもそうは思われない。すなわち、この手習巻の物の怪の描写は、これ一つで宇治の世界に於ける薫と匂宮の関係及び薫の位置付けという、まさに続編の骨格とも言うべきものを、鋭く浮かび上がらせているものである。そして、この薫と六条御息所の親近性が、故意か偶然かは定かでないが、薫が関わる三人の女性―大君・中君・浮舟―が、順に死亡・危機回避・出家と、明らかに六条御息所の物の怪が憑いたと特定できる三人の女性―葵上・紫上・女三の宮―と全く同じ軌跡を辿る所以であろう。では何故それが途中で匂宮に切り変わるのかまで本当は解答しなければならぬが、それは宇治十帖の成立という、別の大きな問題に発展してしまうので、次項で改めて言及することとしたい。

注 (1) 玉上琢彌『源氏物語評釈』第十二卷三七六頁。

(2) (母) あやしきことかな、物の怪などにやあらむ(浮舟⑥一六四頁)、(乳母)

「あやしくてのみ臥させたまへるは、物の怪などのさまたげきこえさせんとするにこそ」(同⑥一八二頁)。

(3) 新全集⑥二九六頁頭注一一。

(4) 『源氏物語評釈』第十一卷三九八頁。

(5) 正確には、新全集で言う⑥一六〇頁に該当する所も挙げられており、四箇所なのだが、その部分で「面影」になっているのは匂宮ではなく浮舟であり、新全集ではその箇所が削られているのでこういう言い回しにした。

(6) 新全集⑥一五〇頁頭注一一。

(7) 特に後者、犬が魔物の正体を見破るといふ話は、有名な『任氏伝』を始めとして、『日本霊異記』上巻「狐為妻令生子縁 第二」等にも見られる。なお、新全集の「漢籍・史書・仏典引用一覧」では、その部分、源氏物語作者が『和漢朗詠集』下巻、田家の都良香の作を思い浮かべたかとしているが、その犬は訪問者を喜び迎えているかのような感もあり、余り似ていないと思われる。

(8) 池田和臣「手習巻物怪攷―浮舟物語の主題と構造」(中古文学研究会編『源氏物語の人物と構造』笠間書院 昭57)。

(9) 秋山虔編『源氏物語事典』(學燈社 平元・5)中の「源氏物語表現・発想事典」の「形代」の項。

(10) 『源氏物語評釈』第十一卷三七〇頁。傍点引用者。

(11) 大朝雄二『六条御息所の死霊』、「光源氏物語の構想―六条御恩所の死霊の意味―」(源氏物語正篇の研究)第十七、十八章 桜楓社 昭50)。

(12) 藤井貞和「憑く文学―『源氏物語』論のために―」(『文学』 昭57・11)

2 宇治十帖に於ける交錯

一

今さら言うまでもないことだが、源氏物語の宇治十帖をどう理解するかは大変難しい。作者が正編とは異なるのではないかということも古くから言われているし、浮舟構想が最初からあったかどうかもまた疑問視されている。前者については、同一人の手になると、今のところ思っているが、作者が誰か等ということは、基本的には副次的問題であるから、ここで真剣に論ずる必要は無いだろう。しかし後者は、構想のねじれということになるから、宇治十帖の全体を把握しようとする時には、避けては通れない問題となる。ただ、これについては、早くに森岡常夫が断を下し⁽¹⁾、それを小穴規矩子が補強して⁽²⁾以来、宇治十帖開始の時点では、まだ浮舟構想は無かったというのが定説化しているのですが、ここでもそれに従って記述を進めていくが、その屈折が男性主人公の側でも見られるのではないかという観点で書いたのが前項であった。と言うのは、既に玉上琢彌も指摘している⁽³⁾ように、宇治十帖後半の匂宮像には、多分に「物の怪的色彩が見受けられるのだが、これは薫にも見られるのであり、それどころか前半にまで遡ってみると、本来その物の怪の役割を果たすはずだったのは薫であったと思われ、それが物語のねじれに伴って、東屋巻辺りで匂宮に移譲されたふしがあるからである。ところが、前項では結局、視点の混乱を防ぐため、成立の問題にまでは触れなかったので、聊か舌足らずなものになってしまった感も無くはない。それを受けた本項を書かねばならない所以だが、この問題はつまるところ構想論ということになる。それはすなわち作者の脳裏を窺う行為であり、完全には実証しきれない部分を残すことは初めから目に見えている。しかし、出来得る限り源氏物語の構造を明らかにしたいという本論文の目的に鑑みても、省略する訳にはいかないだろう。そこで、極力客観的に進めていくことに留意し、考察を始めることとしたい。

二

前項では薫と匂宮に問題を絞ったため、その交錯は東屋巻辺りと述べた訳だが、中の君物語と浮舟物語の結節点が宿木巻辺りにあるだろうことは今日ほぼ定説化している。薫と匂宮の問題も当然これに絡むものであるから、それを示すはつきりした記述が無いというだけで、その節目を宿木巻と見ても差し支えはない。「辺り」という曖昧な語を用いておいた所以であるが、そこでここではそれを取り巻く状況を広く視野に収めるという意味で、中の君物語と浮舟物語の関係についても一度洗い直してみたい。

浮舟構想以前には、中の君入水構想とも呼ぶべきものがあつたと思われることは、早くに藤村潔が述べ⁽⁴⁾、これも定説化しているが、その詳細は吉岡曠により次のように示されている⁽⁵⁾。

現行の物語で、浮舟が登場してくる宿木巻の半ばあたりまでは、旧中の君物語も、女の二の宮と薫との縁談、中の君の懐妊などを除いて、ほぼ同じ経過をたどって進行したであろうことは容易に想像がつく。すなわち、夕霧は六の君をいったんは薫にと志したが、薫が一向に乗り気にならないので、再び匂宮との話が復活し、やがて婚礼の日がくる。結婚後も匂宮の中の君に対する愛情はおとろえないが、中の君は煩悶する。一方、薫が大君の形代として中の君を慕う気持も次第につのり、匂宮の猜疑を招くま

でに至る。現行の物語では、ここで浮舟が登場し、三者の緊張関係をいったんそらすことになるが、もとの物語では、結婚生活の幻滅と愛情の板ばさみに耐えかねた中の君が故郷に帰る決心をし、薫の手引きでそのことが実現するのである。先の中の君の歌（後述の「ながむれば」の歌―引用者注）と、現行の物語でも、匂宮の婚礼前後に中の君が宇治行きをくり返し薫に頼んでいるのがその一証である。再び宇治の人となった中の君はやがて薫と結ばれ、薫と匂宮との役どころが浮舟物語とは逆になるが、浮舟の置かれた状況とはほぼ同じ状況のもので、入水の決意が固められる。

ずいぶん長く引いてしまったが、基礎的確認事項となるもので御寛恕願いたい。重要なのは、中の君入水構想は、「薫と匂宮との役どころが」「逆になる」他は、現在浮舟物語に見られるのとはほぼ同様の結構を有していたと思われる点だ。ここで吉岡が証拠とする「先の中の君の歌」とは、古くは『玉の小櫛』が、「あの月も^{々々}あれば、我も今山里を出てゆけども、行末いかならん、京にすむことわびしくて、又山里にかへるやうにやなりなんと、あやふくおぼせる也、次の語にてよく聞こえたり、注ども、言外の意を得ず」と注する⁽⁶⁾、中の君が宇治出発に当たって詠んだ次のようなものである。

A 七日の月のさやかにさし出でたる影をかしく霞みたるを見たまひつつ、いと遠きにならはず苦しければ、うちながめられて、

ながむれば山より出でて行く月も世にすみわびて山にこそ入れ

さま変りて、つひにいかならむとのみ、あやふく行く末うしろめたきに、年ごろ何ごとをか思ひけんとぞ、とり返さまほしきや。
(早蕨⑤三六三〜四頁)

この「さま変りて」の部分に、さらに宣長は、「匂宮に迎へられて、今はかく京に出れども、もし後に見捨てられて、我身の有さまかはりて又宇治へかへることやあらん、末つひにいかならんと、歌の餘意をのべたる語也」という注を加えている⁽⁶⁾が、これと「世にすみわびて山に」入る「月」にほの見える真如の月のイメージ、或いは浮舟の素姓を弁の尼に聞きに、宇治へ行って来た薫に宛てた中の君の手紙の中の、「ことさらに、また、巖の中もとめんよりは、荒らしはつまじく思ひはべる」という言葉（宿木⑤四六四頁）等が相俟って、中の君出家の可能性は無かったか。さらに薫と中の君が結ばれるのは、本当に中の君の宇治帰還以後なのだろうか等の、若干の疑問点は提出できるものの、吉岡の予想はほぼ首肯できるものと思われるので、以後中の君入水構想についてはこれに従うことにする。

次はその構想が何時浮舟構想に切り替わったかであるが、これについて論じた著名なもの、小穴の宿木巻説と藤村の早蕨巻説であろう。しかし、このうちの藤村の説については、既に吉岡が詳細に反論しており、吉岡が挙げる多くの理由は、どれも充分首肯し得るものであるから、どうもこの説は成り立たないのではないかと思う。それ故、論者は、早蕨巻の時点では、まだ浮舟構想は無かったという立場に立つが、その問題になるのは、藤村も注目した、中の君付きの女房大輔の君の存在なのである。先ずそれを見てみよう。大輔の初出は、藤村も指摘したように、早蕨巻である。

B 日暮れぬべしと、内にも外にもよほしきこゆるに、心あわたたく、いづちならむと思ふにも、いとほかなく悲しとのみ思ほえたまふに、御車に乗る大輔の君といふ人の言ふ、

あり経ればうれしき瀬にもあひけるを身をうち川に投げてましかば

藤村は、この巻では既に浮舟構想が始まっていると見るので、これを、「作者が中君の門出に贈ったひそやかな祝福」とするのだが、先述したようにそれが成り立たないとする、ここで大輔は何故登場しなければならなかったか。続いてその足跡を辿ってみよう。

早蕨巻以降で大輔の名が見られるのは、次のような箇所である。

まずは宿木巻で、薫が中の君に迫りながらも「しるしの帯」に触れることによって自制止、後見だけは続けるという場面で、その品物は「大輔の君とて、おとなおとなしき人の、睦まじげなるに遣はず」と記され(5)四四〇頁)、薫と中の君の間の連絡係を勤めていたのがこの女房であることが知られる。

次に、中の君から浮舟の存在を知らされた薫が、その素姓の詳細を弁の尼から聞く場面で、「……先づころ、京より、大輔がもとより申したりしは、かの君なん、いかでかの御墓にだに参らん、とのたまふなる、さる心せよ、などはべりしかど、まだ、ここにさしはへてはおとなはずはべめり」と述べられ(5)四六一頁)、中の君と浮舟を繋ぐパイプ役を果たしているのも、この大輔であることが分かる。これは次の東屋巻でも、浮舟を預かるよう中の君を説得することにも現れ(6)四〇頁)、藤村も指摘するように、結果的に浮舟と男君の出会いを招来するよう働いている。

ただ、ここで薫と言わずに男君という言葉を用いたのは聊か訳がある。と言うのは、大輔が浮舟と結び付けているのは、薫ではなく、匂宮であるふしがあるからである。何故なら、匂宮が偶然浮舟を見つけるきっかけになった、中の君の洗髪の時、出て来て匂宮を慰めたのも、他でもない、この大輔であった。

C タつ方、宮こなたに渡らせたまへれば、女君は御泔のほどなりけり。人々もおののうち休みなどして、御前には人もなし。小さき童のあるして、(匂宮)「をりあしき御櫛のほどこそ、見苦しかめれ。さうさうしくてやながめん」と聞こえたまへば、「げに。おはしまさぬ隙々にこそ例はすませ、あやしう、日ごろ、ものうがらせたまひて。今日過ぎば、この月は日もなし、九十月はいかでかはとて、仕まつらせつるを」と、大輔いとほしがる。(東屋6)五九〜六〇頁)

大輔は中の君の側近女房であるから、この位の事は半ば当然だという見方も勿論出来ようが、ここで登場する右近も、わざわざ大輔の娘と書かれている(6)六二頁)のは何か意味ありげであるし、この後ここから逃れて、浮舟が宇治にすることを、匂宮が知るきっかけとなった手紙も、大輔宛であった事が語られるに及んではなおさらである。

D 「宇治より大輔のおとどにとて、もてわづらひはべりつるを、例の、御前にてぞ御覽ぜんとて取りはべりぬる」……女君、いとかたはらいたく思して、「文は大輔がりやれ」とのたまふ、御顔の赤みたれば、宮、大将のさりげなくしなしたる文にや、宇治の名のりもつきづきしと思し寄りて、この文を取りたまひつ。(浮舟6)一〇九〜一一〇頁)

無論これとて、大輔は浮舟と中の君のパイプ役を果たしていたのだから当然だという見方も出来る訳で、全ては状況証拠にすぎないが、これだけ材料が揃い、しかも逆に、藤村が言うような、大輔が薫と浮舟を結び付けている直接的証拠は特に見出せないとなれば、このように考えてもそれほど不自然ではないのではなからうか。

しかしながら、前述したように、早蕨巻の時点ではまだ浮舟構想は無かったとすれば、

この役割が、大輔本来のものであったとは考えられない。ならば何故あの時点で大輔が登場しなければならなかったのかと言えば、考えられる可能性はこれとはちょうど逆の、薫と中の君の取り持ち役ということである。そしてこれを窺わせる記述は現在の物語中にも存在する。前述の宿木巻前半の記載がそれである。つまり、大輔はもともと、尼になったため宇治に残らなければならなかった弁の代わりに中の君と共に京へ行き、そこで薫と中の君を結び付ける役割を果たすために創造されたのだが、それが構想の変更に伴って浮舟と匂宮を結び付ける手段として利用されるようになり、やがてはその娘の右近（さらにこれは、藤村が考察したように、浮舟付きと思われる右近に姿を変えていくと思われる）にその役割を譲り渡したと思量される訳である。では何故弁の君は尼になってまで宇治に残らねばならなかったかと言えば、これもまた同断であろう。

中の君が宇治から出発する時、玉上は弁の尼について「作者に何か魂胆があるのでないか。弁の尼に、も一度活躍させようというつもりがあるのではないか」と注している（ア）が、玉上ならずとも「こはそう感じられるところではある。それではその役割はと言えば、現在の物語では薫と浮舟の取り持ち役、及び浮舟を宇治に迎える役ということになるが、浮舟構想が無かった時点では、これは当然無かったはずである。ではその手掛かりはと言うと、次に挙げる、弁と中の君との別れの場面でありそうである。

E (中の君)「しほたるるあまの衣にことなれや浮きたる波にぬるるわが袖

世に住みつかむことも、いとありがたかるべきわざとおぼゆれば、さまに従ひてここをば散ればてじとなむ思ふを、さらば対面もありぬべけれど、しばしのほども、心細くて立ちとまりたまふを見おくに、いとど心もゆかずなむ。……」など、いとなつかしく語らひたまふ。

(早蕨⑤三六〇〜一頁)

すなわち、やがては宇治に戻って来る中の君を迎え取る役目というわけであるが、こう見てくると、弁にしろ大輔にしろ、中の君入水から浮舟入水へと構想が移り変わるに従って入れ替わった、中の君↑浮舟、薫↓匂宮の間を、本来関わるはずであった人物とは全く反対に関わっていることが分かるのである。そしてこういう人物はいま一人挙げられる。原題（「右近と侍従」）の割には藤村が右近ほどには論じなかった侍従である。

周知の如く、侍従の初出は東屋巻で、その辺りの記述、特に、本当は縁起でもなかったのだけれども、それが分からなかった侍従が、薫の朗詠を聞いた時の反応、「かの弓のみ引くあたりにならひて、いとめでたく思ふやうなりと、侍従も聞きみたりけり」（⑥一〇一頁）を考えれば、侍従はそのまま薫びいきになりそうなものだが、藤村も述べているように、現実には匂宮びいきになっている。これが何故かと考えれば、実は侍従が実際に活躍し出す時の、浮舟巻の記述が怪しいということになる。

大輔宛の手紙により、浮舟が宇治に隠れていることを知った匂宮が、そこに忍んで来たのは二回。一度目は右近一人でその場を切り抜けたが、浮舟を橘の小島に連れ出された二度目ともなると、右近一人の力では隠しおせもならず、遂に侍従が仲間に引き入れられることになる。注意すべきは、その時の記述が、「同じやうに睦ましく思いたる若き人の、心ざまも奥なからぬを語らひて」とされるのみで（⑥一四九頁）、これが侍従であることは、なお数行進まねば分からない書き方になっていることである。ここではここが初出の女房と何ら変わりのない書かれ方と評さねばならないが、裏を返せばこれは、右近と同様侍従も、この巻で設定し直されたのかもしれない可能性を語るものなのである。

こうして、中の君物語と浮舟物語に絡む三人の女房を見てきたわけだが、その結果はいずれも当初に予定されていたものとは全く逆の相手と関わっていると思われるということになった。この意味するところを探るには、次に進んで、宿木巻の記述を見るしか方法は無い。

三

早蕨巻まで浮舟構想が無かった以上、その開始は次の宿木巻から、というのが論理的必然ではあるが、そう断言するには聊か躊躇いが残る。と言うのは、その前半ではまだ大君と中の君は似ている（「声なども、わざと似たまへりとおおぼえざりしかど、あやしきまでただそれのみおぼゆる」・⑤三九三〜四頁）とされるのを始めとして、物語は中の君を執拗に追い詰めるからである。吉岡もそうであったし、本項でもそれを行ったが、中の君入水構想を再現するのに、早蕨巻だけでなく、宿木巻前半の記述も用いることに、それは何よりも雄弁に語られているであろう。中で最も長大なものは、匂宮と夕霧六の君との結婚間も無い頃の中の君の心中を語る、次のような場面である。

F 幼きほどより、心細くあはれなる身どもにて、……このふしの身のうさ、はた、言はん方なく、限りとおおぼゆるわざなりけり、ひたすら世に亡くなりたまひにし人々よりは、さりとも、これは、時々もなどかほとも思ふべきを、今宵かく見棄てて出でたまふつらさ、来し方行く先みなかき乱り、心細くいみじきが、わが心ながら思ひやる方なく心憂くもあるかな、おのづからながらへば、など、慰めんことを思ふに、さらに姨捨山の月澄のぼりて、夜更くるままによるづ思ひ乱れたまふ。松風の吹き来る音も、荒ましかりし山おろしに思ひくらぶれば、いとどかになつかしくめやすき御住まひなれど、今宵はさもおぼえず、椎の葉の音には劣りて思ほゆ。

山里の松のかげにもかくばかり身にしむ秋の風はなかりき
来し方忘れにけるにやあらむ。

老人どもなど、「今は入らせたまひね。月見るは忌みはべるものを。あさましく、はかなき御くだものをだに御覧じ入れねば、いかにならせたまはん。あな見苦しや。ゆゆしう思ひ出でらるることもはべるを、いとこそわりなく」とうち嘆きて、……

「いでや、中納言殿のさばかりあはれなる御心深さを」など、その昔の人々は言ひあはせて、「人の御宿世のあやしかりけることよ」と言ひあへり。 (⑤四〇三〜五頁)

そうは言ってもこの巻冒頭近くには、「口惜しき品なりとも、かの御ありさまにすこしもおぼえたらむ人は、心もとまりなんかし」という薫の心中があつて (⑤三八二頁)、それは『岷江入楚』の箋以来「浮舟の事をかくへき序也」と解釈され (⑤)、また小穴が説くように、女二の宮は浮舟構想のために創造されたとか考えられないとなれば、やはりこの巻開始の時点では、既に浮舟構想があつたと判断せざるを得ないのである。それではこの矛盾を一体どう解消すれば良いかという疑問に、正面から取り組まれたのは池田和臣であった (⑤)。池田は、Fの傍線部のように、この巻での中の君の深刻な心理は皆、「浮舟登場という安全弁を施された上で描写されている」とし、それでも中の君を追い詰めなければならなかった理由は、「新たな登場人物浮舟を、中君の心理的必然性において登場せしめるという方法的もくろみであつた」と解釈する。これはかなり説得力のある見解であり、一応納得出来るものだが、では何故Fの傍線部に見られるような草子地が書かれてしまふのかという問いに対する、「新たな人物の登場を、薫と中君の関係およびその内的必

然にしようとしたため、はしなくも、描写機能と構想との葛藤が生じた」からという解答
辺りになると、聊か承服出来ない。草子地くらしい、その気になればいつでも削除出来るの
ではないか等と考えると、「描写機能と構想との葛藤」なるものの実体が判然としないか
らであり、第一これでは先に挙げた、宿木巻冒頭ではまだ中の君と大君が似ていると語ら
れることの意味が説明出来ないだろう。さらにこの巻で、薫が一度、危ういところまで中
の君に迫りながら、中の君による浮舟紹介は、それをいったん語り収めて、改めてまた同
様の場面を作り出されねばならなかったことも、池田は同様の理由によるものだが、
それが余り理解出来ないこともある。それ故これは別の理由を求めた方が良いと思われる
のだが、それを知る手がかりは、池田も簡単には触れながら、余り深くは論じなかった、
Fの部分とその直前の句宮の科白、「ひとり月な見たまひそ。心そらなればいと苦し」(⑤
四〇二頁)から導かれる、中の君物語と竹取物語との関係を考える必要があると思う。

四

中の君物語と竹取物語との関係について述べられた論と言えば、最近のものとしては井
野葉子のもの⁽¹⁰⁾が挙げられる。それによれば、中の君物語が竹取物語を踏まえて成立し
ていることに間違いはなく、それは中の君に、「昇天できずに世俗をさすらかぐや姫」
の問題を担わせるためであったと説くが、Fの場面が八月十六日であったことを思えば、
それはまことに肯われる見解であると言えよう。中の君の嘆きは、まさに月に帰りそびれ
たかぐや姫の嘆きなのであり、そこに浮舟との繋がりが見られると言う井野の見解も、こ
れまた首肯される場所である。しかし、実際には井野の論ではそこまで述べていないの
で、ここで少しそれについて考えてみよう。

浮舟物語が竹取物語を踏まえていることについては、既に多数の先学の論があるので、
今更ここで繰り返す必要はあるまい。そしてそれを示す多くの徴表の中で、最も重要なも
のは、浮舟が例によって独詠歌を詠む、次の場面であると思う。

G 月の明き夜な夜な、老人どもは艶に歌よみ、いにしへ思ひ出でつつさまさまの物語
などするに、答ふべき方もなければ、つくづくとうちながめて、

われかくてうき世の中にめぐるとも誰かは知らむ月のみやこに

(手習⑥三〇二〜三頁)

浮舟の嘆きは、まさに帰還出来ないかぐや姫のそれであり、ここに中の君と通じるもの
が見受けられるが、注目すべきは、ここでは「京の都」が「月のみやこ」と詠われている
事実である。すなわち、杉山康彦も指摘している⁽¹¹⁾ように、ここには都を異界視する思
想が見受けられるということなのである。

後藤祥子も述べている⁽¹²⁾ように、「月のみやこ」という語は「三代集」には先蹤は無
い。ただ源氏物語中には、光源氏が須磨で詠む、「見るほどぞしなぐさむめぐりあは
ん月の都は遙かなれども」がある(須磨②二〇三頁)ものの、既に奥津春雄も述べる⁽¹³⁾
ように、この二つは都に対する意識が聊か相違し、須磨巻の例を、完璧な異界意識とまで
は呼べないであろう。となれば、物語はここに至って初めて、都を異界として認識するよ
うになったと言えようが、ここで気づかねばならないことは、これは宇治を異境と見てい
た中の君物語と、方向性が全く反対となっている事である。無論、中の君も都世界に溶け
込めないものを感じていたから、その意味では中の君にとっても都は異界であったかもし
れないが、中の君の場合浮舟と決定的に異なるのは、最後まで宇治が魂の原郷、すなわち

故郷であり続けたことで、それ故中の君にとつての月の都は、やはり宇治であったと見るべきであろう。尤も、杉山も述べるように、この逆転の方向性は未だ不安定ではあるが、かつて島内景二も指摘した⁽¹⁴⁾ように、浮舟物語に中の君物語の反転が感じられることは事実なのである。

無論こうした考えは、浮舟物語が開始された当初には、出家の構想まではなかったのだとなれば、主張しづらい。確かに蜻蛉巻を読む限りでは、浮舟生存を示唆する何の徴証も見受けられないと思うし、本項で扱っている問題以上に決め手が無いので、ここでは一切論じないが、女一の宮物語の構想が存したことも言われている。しかしそれにしては浮舟は当初から、繰り返しその出家が語られ過ぎていくように思う⁽¹⁵⁾のである。

先ずは浮舟の母・中将の君が中の君に浮舟を託す時の科白。

H こまかにはあらねど、人も聞きけりと思ふに、少将の思ひ悔りけるさまなどほのめかして、「命はべらむ限りは、何か、朝夕の慰めぐさにて見過ぐしつべし。うち棄てはべりなん後は、思はずなるさまに散りぼひはべらむが悲しきに、尼になして深き山にやし据ゑて、さる方に世の中を思ひ絶えてはべらましなどなん、思うたまへわびては、思ひよりはべる」など言ふ。
(東屋⑥四八頁)

次は薫を垣間見た中将の君に中の君が彼を勧めるところ。

I 君は、忍びてのたまひつることを、ほのめかしのたまふ。「思ひそめつること、執念きまで軽々しからずものしたまふめるを、げにただ今のありさまなどを思へば、わづらはしき心地すべけれど、かの世を背きてもなど思ひよりたまふらんも、同じことに思ひなして、試みたまへかし」とのたまへば、「つらき目見せず、人に侮られじの心にてこそ、鳥の音聞こえざらん住まひまで思ひたまへおきつれ、げに、人の御ありさまはひを見たてまつり思ひたまふるは、下仕のほどなどにて、かかる人の御ありに馴れきこえんは、かひありぬべし。……」
(東屋⑥五五〜六頁)

そしてその直後の中将の君の辞去の言葉。

J 明けぬれば、車など率て来て、守の消息など、いと腹立たしげにおびやかしたれば、「かたじけなくよろづに頼みきこえさせてなん。なほ、しばし隠させたまひて、巖の中にともいかにとも、思ひたまへめぐらしはべるほど、数にはべらずとも、思ほし放たず、何ごとをも教へさせたまへ」など聞こえおきて。
(東屋⑥五六〜七頁)

I、JはHの記述を受けたものであるし、これらにそう深い意味を持たせてはいけないのかもしれない。しかし、実際に浮舟が出家するときの科白、「幼くはべりしほどより、ものをのみ思ふべきありさまにて、親なども、尼になしてや見ましなどなむ思ひのたまひし」(手習⑥三三五〜六頁)等も、これらを受けたものであることは明らかであるから、そう一概に否定できまい。また、第二段でも述べたように、旧中の君構想にも中の君出家の可能性があり、しかも旧中の君構想と浮舟構想は基本的には同じだとすれば、その可能性はますます強くなるのである。そしてさらにその段後半で考察したように、二つの物語は女房などという端役に至るまで逆転しているという関係であれば、この二つの物語は総体として鏡像のように逆転した関係にあると断じて差し支えない。先にも述べたように、本来薫が果たす予定であった¹⁶物の怪的¹⁷役割を途中で匂宮が受け継いだと前項で述べたのは、このような考えに基づくものであったが、この関係はこの二つが交錯する宿木巻まで反映していると思われるのである。

宿木巻の対称性については、その後半に位置する薫と女二の宮の結婚と同じように、前半には匂宮と六の君の結婚が存するという言葉で、早くに小穴も示唆している。また、第三段で挙げた、浮舟が紹介されるまでに、危ういところまで薫が中の君に迫る、ほとんど同じ様な状況が二度繰り返されるという池田の指摘も、それとして数える事が可能であろう。さらに、同じ段で、宿木巻前半ではまだ、大君と中の君は似ていると語られていることを指摘したが、ちようどそれと呼応するかのように、中の君自身の言葉ではあるけれども、後半では「形見など、かう思ひのたまふめるは、なかなか何ごともあるまじくもて離れたりとなん、見る人々も言ひはべりしを」と語られ(⑤四五〇頁)、やはりこの証拠とすることが出来るのである。特にこの大君と中の君との類似は、宇治十帖開始の時点では異なることとされていた(橋姫⑤一三九頁等)二人が、大君死後、具体的には早蕨巻から類似が語られ始め、浮舟構想の導入と共に再び離れだし、ついには大君・浮舟は父親似、中の君は母親似と語られる(東屋⑥七三頁)ことによつてそれが決定的になることは、既に良く知られているが、その屈折点がこの宿木巻の、しかも中程にあることは、注目すべき事実であろう。それ故この宿木巻の対称構造というのは、ほぼ間違いなく言えると思うが、これはこの巻が、中の君入水構想から浮舟物語へと移行する、準備のための巻であることを意味しよう。

作者の心に何時浮舟構想が胚胎したかは、今となつてはもう明かしようもないが、それまでであった中の君入水構想を捨て、しかもそれと全く逆の方向性を有する浮舟構想へと変えるには、心情的にもかなりの準備を必要としたであろう。それが宇治十帖中でも一、二を争う、宿木巻の長さの所以であると思うが、それだけかけて作者は、それまで中の君のものであつた運命を、一つ一つ浮舟に移し変えていったのである。これが、その時点では既に中の君入水構想が存在しないにも拘らず、この宿木巻ではまだ中の君を追い詰め続けなければならなかつた(但しそれ故それを匂わす草子地を書かざるを得なかつた)所以だと思ふのだが、その最たるものが、この巻中程にある、中の君による浮舟紹介の時の、中の君の態度であろう。

K「限りだにある」など、忍びやかにうち誦じて、「思うたまへわびにてはべり。音なしの里求めまほしきを、かの山里のわたりに、わざと寺などはなくとも、昔おぼゆる人形も作り、絵にも描きとりて、行ひはべらむとなん思うたまへなりにたる」とのたまへば、「あはれなる御願ひに、また、うたて御手洗川近き心地する人形こそ、思ひやりいとほしくはべれ。黄金求める絵師もこそなど、うしろめたくぞはべるや」とのたまへば、「そよ。その工匠も絵師も、いかでか心にはかなふべきわざならん。近き世に花降らせたる工匠もはべりけるを、さやうならむ変化の人もがな」と、とぎまかうざまに忘れん方なきよしを、嘆きたまふ気色の心深げなるもいとほしくて、いますこし近くすべり寄りて、「人形のついでに、いとあやしく、思ひよるまじきことをこそ思ひ出ではべれ」とのたまふけはひのすこしなつかしきもいとうれしくあはれにて、「何ごとにか」と言ふままに、几帳の下より手をとらふれば、いとうるさく思ひならるれど、いかさまにして、かかる心をやめて、なだらかにあらんと思へば、この近き人の思はんことのあいなくて、さりげなくもてなしたまへり。

(中略)

「世を海中にも、魂のあり処尋ねには、心の限り進みぬべきを、いとさまで思ふべきにはあらざなれど、いとかく慰めん方なきよりはと思ひよりはべる。人形の願ひばかりには、なかは山里の本尊にも思ひはべらざらん。なほたしかにのたまはせよ」と、うちつけに責めきこえたまふ。(中略)「……これをいかさまにもてなきむと嘆くめりしに、仏にならんは、いとよなきことにこそはあらめ、さまではいかでかは」など聞こえたまふ。

(⑤四四八〜四五二頁)

大変長いけれどもひとまとまりの、しかも非常に緊迫した部分なので、長々と引いてしまったが、ここで浮舟を人形と規定しているのは中の君も薫も共通しているが、それを水に流す、或いは死といった、より悪いイメージに取りなしているのは中の君の方だということは、既に前項でも述べた。これにより、もとの君が辿る予定であった運命はすっかり浮舟に駆り移されてしまったのか、これ以後、前述したように、大君と中の君の間は離れたのである。その意味では、池田が指摘した、この直前にある、物語が一旦語り収められる次のような記述を、その対称軸として想定しても良いであろう。

Lこの君(薫)しもぞ、宮に劣りきこえたまはず、さまことにかしづきたてられて、かたはなるまで心おごりもし、世を思ひ澄まして、あてなる心ばへはこよなけれど、故親王の御山住みを見そめたまひしよりぞ、さびしき所のあはれさはさまことなりけりと心苦しく思されて、なべての世をも思ひめぐらし、深き情をもならひたまひにける。いとほしの人ならはしやとぞ。

(⑤四四二頁)

池田はこれが語り収めであることは指摘しながらも、それ以上のことは何も言わなかったが、この部分の存在意義は、こういう所にあるのではないかと思う。このように、如何なる面を辿っていても、宿木巻の対称性は裏付けられる訳である。

六

以上、中の君物語と浮舟物語の関係、及びそれと対応するであろう宿木巻の対称構造について述べてきたが、まだ一つ言っておかなければならないことがある。それは巻名ともなった「宿木」についてである。周知の如く「宿木」とは、「寄生木」とも書き、他の植物に寄生する木のことであるが、実はこの語は源氏物語全体でもわずかに四例を数えるのみであり、しかもそれらはすべてこの宿木巻以降にしかない。

先ずは、宿木巻の巻名ともなった、薫が浮舟の素姓を聞くために宇治へ行き、弁の尼と唱和する場面。

M やどり木と思ひいでは木のもとの旅寝もいかにさびしからまし

と独りごちたまふを聞きて、尼君、

荒れはつる朽木のもとをやどり木と思ひおきけるほどの悲しさ

(⑤四六二〜三頁)

次は、薫が浮舟を初めて宇治に伴い、これもまた弁の尼と唱和する場面。

N (弁の尼) やどり木は色かはりぬる秋なれどむかしおぼえて澄める月かな

と古めかしく書きたるを、恥づかしくもあはれにも思されて、

(薫) 里の名もむかしながらに見し人のおもがはりせるねやの月かげ

わざと返り事とはなくてのたまふ、侍従なむ伝へけるとぞ。

(東屋⑥一〇一〜二頁)

さらに、浮舟を失った薫が、真相を知るために来た宇治で独詠歌を詠む場面。

○ われもまたうきふる里を荒れはてばたれやどり木のかげをしのばむ

……尼君に消息せさせたまへれど、「いとものもゆゆしき身をのみ思ひたまへ沈みて、いとどものも思ひたまへられずほれはべりてなむ、うつぶし臥してはべる」と聞こえて出で来ねば、しひても立ち寄りたまはず。
(蜻蛉⑥二三七頁)

これまでは単純にN、OはMを受けたものとされてきたが、それだけにしてはこの三つは、浮舟物語の予告・開始・一応の結末と、余りにも所要所に適合し過ぎていて、第一それだけでは何故これほど「宿木」に執着して贈答を続けなければならぬのか説明できない。これらはすべて弁がらみの場面であり、しかも弁はOの後全く物語に登場しなくなってしまうから、これらだけでも弁の役割が知れようというものだが、それについては既に述べたので、ここでは繰り返さない。しかしそれに絡んだ視点が、この三つの場面を理解するには必要なのではないかと思う。それはつまり、この三つの場面で「宿木」に該当するのは誰かということである。

Mの場合は、過去にここに泊まった記憶ということであるから、大君乃至中の君を意味しよう。この二人は共に薫と一夜を過ごしたことがあるからこれ以上は特定できないし、またその必要もないだろう。Nの「やどり木」は、「色かはりぬる」とあることより、宇治の姫君が浮舟に変わったことを意味しているし、Oは、「かげをしの」ぶとあるから、大君か、その時点では死んだと思われていた浮舟が該当すると考えられるが、この前後の文脈からすれば、後者の方が蓋然性が高いであろう。するとこの三つは、東屋巻の二重性を帯びたものを接点として、最初から順に、ここで考察してきたような、中の君物語から浮舟物語の移り変わりを、端的に示していることになる。すなわち、或る意味ではこれらの歌を含む巻々全てが一つの巨大な「宿木巻」とも見得るのであり、「宿木」というのは宇治十帖後半を理解するキーワードで、それは文字通り中の君物語に浮舟物語を接いだ結節点を示すのである。

注 (1) 森岡常夫「宇治十帖の構成」『文学』昭12・10。

(2) 小穴規矩子「浮舟物語の構想」『国語国文』昭31・5)及び「源氏物語第三部の創造」『国語国文』昭33・4)。以下、小穴の論とはこれを言う。

(3) 玉上琢彌『源氏物語評釈』第十一巻三九八頁(角川書店 昭43・3)。

(4) 藤村潔「橋姫物語と浮舟物語の交渉」『源氏物語の構造』桜楓社 昭41・1)。以下、藤村の論とはこれを言う。

(5) 吉岡曠「中の君の都移り」『講座源氏物語の世界』第八集 有斐閣 昭58・6)。以下、吉岡の論とはこれを言う。

(6) 『本居宣長全集』第四巻四九〇頁(筑摩書房 昭44・10)。

(7) 玉上琢彌『源氏物語評釈』第十一巻六九頁(角川書店 昭43・3)。

(8) 『源氏物語古注集成』14・三三四頁(桜楓社 昭58・2)。

(9) 池田和臣「浮舟登場の方法をめぐって―源氏物語による源氏物語取―」『国語と国文学』昭52・11)。以下、池田の論とはこれを言う。

(10) 井野葉子「中の君物語における竹取引用」『国文学研究』平元・6)

(11) 杉山康彦「かぐや姫と浮舟―物語の他者・他者の物語―」『文学』昭63・

10)。以下、杉山の論とはこれを言う。

- (12) 後藤祥子「手習いの歌」『講座源氏物語の世界』第九集 有斐閣 昭59・10)。
- (13) 奥津春雄「月の都―紫式部の『竹取物語』撰取の方法―」(『国文学研究』 昭46・3)。
- (14) 島内景二「源氏物語における表現とその基盤―匂宮・空蟬・大君をめぐって―」(『国語と国文学』 昭56・7)。尤も島内は、大君物語と浮舟物語について述べたのだが、大君と逆ということは、中の君とも逆ということなので、こう把握しても差し支えないと判断した。
- (15) 近年、原陽子も、浮舟物語の始発部に既に手習巻以降の影が読み取れることを指摘した。「浮舟物語のことは―宿命を形成するもの―」(早稲田大学大学院中古文学研究会編『源氏物語と平安文学』第2集 早稲田大学出版部 平3・5)。

第三節 夕霧と柏木

一

A 中将、いとこまやかに聞こえたまふを、いかでこの御容貌見てしがなと思ひわたる心にて、隅の間の御簾の、几帳は添ひながらしどけなきを、やをら引き上げて見るに、紛るる物どもも取りやりたれば、いとよく見ゆ。かく戯れたまふけしきのしるきを、あやしむわざや、親子と聞こえながら、かく懐離れず、もの近かべきほどかはと目とまりぬ。見やつけたまはむと恐ろしけれど、あやしきに心もおどろきて、なほ見れば、柱がくれにすこし側みたまへりつるを引き寄せたまへるに、御髪のなみ寄りて、はらはらとこぼれかかりたるほど、女もいとむつかしく苦しと思ひたまへる気色ながら、さすがにいとなごやかなるさまして寄りかかりたまへるは、ことと馴れ馴れしきにこそあめれ、いであなうたて、いかなることにかあらむ、思ひよらぬ限なくおはしける御心にて、もとより見馴れ生ほしたてたまはぬは、かかる御思ひ添ひたまへるなめり、むべなりけりや、あな疎ましと思ふ心も恥づかし。

(③二七八〜九頁)

周知の如く夕霧が、野分巻で源氏と玉鬘の恥態を目撃し、源氏批判の心を抱く場面である。最初から長々と引用して恐縮ではあるが、夕霧による源氏の相対化を、最も端的に表わすところとして抜いてみた。しかし、野分巻では全体が、主として夕霧の視点で描かれ、光源氏を相対化するものであることは、夙に伊藤博により明らかにされている⁽¹⁾。ただ、主に傍線を付した部分に窺えるように、それは様々な柳がはめられ、完全なものとなつてはおらず、やがてその役目は柏木が受け継いでいく⁽²⁾ということも、今日に於いてはほぼ常識化しているよう。本節でも、それに敢えて異を唱えるわけではないが、たとえそれを認めたとしても、それで全ての疑問が氷解するわけではない。例えば夕霧巻に次のような箇所があるからである。

B 「……さてをかしきことは、院の、みづからの御癖をば人知らぬやうに、いささかあだあだしき御心づかひをば大事と思ひて、戒め申したまふ、後言にも聞こえたまふめるこそ、さかしだつ人の己が上知らぬやうにおぼえはべれ」とのたまへば、「さなむ。常にこの道をしも戒め仰せらる。さるはかしこき御教へならでも、いとよくをさめてはべる心を」とて、げにをかしと思ひたまへり。

(④四七一頁)

場面は、落葉宮のところから帰ってきた夕霧が、雲居雁の待つ自邸にはさすがに行きづらく、養母の花散里のもとに一旦身を寄せ、そこで思わず源氏批判をしてしまったという部分である。花散里という人は、おとなしいには違いないけれども、時々はつとするようなきついことも言う人で、源氏の問いに答えたとは言え、螢巻では、源氏の弟・螢宮に対しても辛辣な批評を加えている⁽³⁾から、この程度のことを言つても、さほど異とするには当たらないかもしれないし、夕霧はその尻馬に乗っただけなのかもしれない。しかし、ここに源氏批判が存することは、厳然とした事実であるし、何より宇治十帖の先蹤とも言われるこの巻が、「夕霧」という名でここに控えている意味は大きい⁽⁴⁾。しかも夕霧は、その巻名に呼称が由来する、この巻の主人公なのだ。たとえ不完全な形でも、ここに源氏批判が存在することの意義は大きいと思うし、特にこの箇所の場合は、横笛巻に類似する所が見られるからおさらである。

C さかし、人の上の御教へばかりは心強げにて、かかるすきはいでや、と見たてまつり

たまふ。

(④三六六頁)

夕霧が源氏に、落葉宮とは余り深く付き合うなど釘を刺され、思わず抱いた感慨である。この時はまだ、夕霧巻と比べれば、二人の仲はそれほど深刻なものではなかった。にも拘らず、これほど類似した表現が見受けられ、しかもそれを発展させる形で後の夕霧巻が展開していくとすれば、この二人の関係が、物語にとつて、如何に根源的なものか察しがつこう。だが、その詳細に関しては後に述べる。今はただ、若菜巻以降も、光源氏相対化の装置として、夕霧が生き続けていることが確認されれば良いのである。

最初に掲げておいたように、今の常識では、野分巻で夕霧の中に生まれた源氏相対化の芽は、やがて柏木に譲られることになっている。だが、今見てきたように、若菜巻以後も夕霧は光源氏相対化の役割を果たしているとすれば、それは一体どう理解したら良いのだろうか。いつの間にかそれは夕霧に戻されたのであろうか。だとしたら、それは何時どのようなきつかけで。或いは、もつと根源的な問題として、それではそもそも夕霧と柏木は、造型上いかなる関係になるのだろうか、などといったことが次々疑問になってくる。本節では、それらの問題について答えようとするものである。

二

本節で先ず行なおうとするのは、夕霧が光源氏相対化の役割を果たしている範囲の認定である。が、それには若干の条件が付与される。と言うのは、拙著第2部第2章第1節で結論づけたように、若菜巻ですら、隠然たる存在としては、夕霧の光源氏相対化は続いていると思われるからである。しかしながら、それはあくまで隠然たるものに留まり、物語の表面に表われることは無い。そして、本節では何処までも物語の表現に拘ってみたいと思っている。一応その部分は、通説どおり柏木がその役割を担っているとしよう。すると、前段でも触れておいたように、夕霧がその役割を果たしているのはその前後ということになるわけだが、その範囲は何処から何処までか。

若菜巻以前から始めると、既にAに掲げておいたように、様々な枷がはめられているとは言え、野分巻がそれに該当することは動かない。それではその巻よりさらに若菜よりには無いのかと言うと、これも有名な、藤袴巻の、玉鬘の処遇を巡る、内大臣(昔の頭中将)の名を借りた夕霧の源氏批判が挙げられよう。

D「内々にも、やむごとなきこれかれ年ごろを経てものしたまへば、えその筋の人数にものはしたまはで、棄てがてらにかく譲りつけ、おほぞうの宮仕の筋に領ぜんと思しおきつる、いと賢くかどあることなりとなんよろこび申されけると、たしかに人の語り申しはべりしなり」と、いとうるはしきさまに語り申したまへば、げに、さは思ひたまふらむかしと思すに、いとほしくて、「いとまがまがしき筋にも思ひよりたまひけるかな。いたり深き御心ならひならむかし。いまおのづから、いづ方につけても、あらはなることありなむ。思ひ限なしや」と笑ひたまふ。

御気色はげざやかなれど、なほ疑ひはおかる。大臣も、然りや。かく人の推しはかる、案におつることもあらましかば、いと口惜しくねぢけたらまし、かの大臣に、いかでかく心清きさまを、知らせたてまつらむ、と思すにぞ、げに宮仕の筋にて、げざやかなるまじく紛れたるおぼえを、かしこくも思ひよりたまひけるかなとむくつけく思さる。

(③三三六〜三七頁)

ここで源氏は、ほとんど凶星を刺され狼狽している。若菜以前で、これだけ人に追い詰

められた源氏が描かれるのは珍しいと思うが、その「人」というのが夕霧であることは、重々押さえておかなければなるまい。しかしながら、若菜以前で夕霧が源氏批判をしている記述は、これが最後である。ただ、「箇所」にこだわることも、この場合何処まで有効であるかも聊か疑問であるし、この次の、主に鬚黒一家の悲劇を描く真木柱巻や、既に第一章第四節で見たように、もはや実質は無いとは言え（或いは無いが故に余計）、表面的には繁栄の絶頂を迎えようとしているかのように見える六条院を描かなければならなかった梅枝・藤裏葉巻⁽⁵⁾では、話題の性質上、源氏批判者としての夕霧を登場させにくかった事情も充分窺えるところであるから、もう少し範囲を広げ、若菜巻ぎりぎりも捉えても、大過はあるまいと考える。それでは若菜以降は何処からか。

若菜以降で夕霧が光源氏批判をしている箇所は、あからさまなものに限っては、Cの横笛巻の例まで待たねばならない。しかし、柏木と女三の宮の関係をうすうす察した夕霧が、そのことを源氏に匂わせ、その反応を窺おうとするのまで含めて良いならば、それは柏木巻まで遡る⁽⁴⁾（三二七頁）。つまり、こうして範囲を限定していくと、夕霧が光源氏を相對化する者としての役割を直接に果たしていないのは、代わって柏木がその役割を果たしていると言われる若菜上下巻に限られるのだ。これではまるで柏木が、野球で言うところのワンポイント・リリーフの如き存在に見えてくるが、その感覚は正しいと思われる。そのことを次段で考察してみよう。

三

柏木を光源氏の分身の一つと捉え、その対立を源氏の人格完成の一階梯と位置付けたのは島内景二であった⁽⁶⁾。だが、そうした一面を否定することは出来ないものの、島内が描く図式は、柏木が頭中將を相對化している場面が物語に明示されていないという憾みがあり、すると、源氏と柏木が素直に対偶の関係になり得るのかどうか聊か疑問にもなっており、一概には従えない。しかし、光源氏・夕霧・柏木の三者が分身の関係にあることを指摘されたのは、秀逸と言えらるだろう。何故なら、夕霧と柏木の関係は、以下の如く考えられるからである。

柏木が物語に初登場するのは少女巻であるが、そこでは夕霧との仲を割こうと、雲居雁を連れにきた内大臣のお供の息子の一人として、名が出ているのみである。したがって、彼の実質的初登場は、玉鬘が自分の実の妹と知らないうちの求婚者として、胡蝶巻ということになるのだが、既に指摘されている⁽⁷⁾ように、彼のこの出方は聊か興味深い。と言うのは、彼の弟で、彼の死後、家を継ぐことになる紅梅に関しては、賢木巻で早くも言及があるにも拘らず、長男であるはずの柏木については、妙に遅いということになるからである。ただし、賢木巻に於いても、紅梅は次男と明記されているから、構想の変更といった問題ではなさそうだが、柏木という存在を解説する一つの手掛かりとはなりそうである。すなわち、胡蝶巻の時点では、後に夕霧に代わって光源氏を追い詰める役割を担うことまで予定されていたかどうかは定かでないが、玉鬘の求婚者の一人というのが、柏木に最初に与えられた使命であるのは間違いないところなのである。では、それは如何なる意図を有していたかと問えば、恐らく藤袴巻以降の夕霧との立場の逆転を狙ったものだろう。

夕顔の娘である玉鬘は、実際は内大臣（昔の頭中將）の子であるが、源氏の意向で、その娘として六条院に引き取られる。それ故、最初、事情を知らないうちは、柏木が玉鬘に求婚することになるのだが、行幸巻で玉鬘の素姓が明かされた後は、それはそのまま沙汰

やみになった。代わって、今度は夕霧が、実は他人と知ることによって、次の藤袴巻で玉鬘に懸想をしかけることになる。これを二人の立場の逆転と呼ぶのだが、この設定を生かすために柏木が利用されたであろうことは想像に難くない。では、何故それが他の内大臣の息子、例えば紅梅ではいけなかったかに思いを致す時、この時点で既に、その人物は夕霧に代わってやがて死去することが予定されていたので、読者に馴染み深い人物をそれに当てることが出来ず、新しい人物を作り出したのだという考えがふとよぎるが、もとより証明出来ることではない。だが柏木は、その最初から夕霧と深い関わりがあったのだとだけは言えるはずである。そして、そのような目で物語を辿り直せば、他にも幾つか興味深い点が見つかる。例えば、光源氏の老いに関する描写がそれである。

源氏が、当時老人の仲間入りと見なされていた四十歳を迎えるのは若菜上巻である。が、その老いの描写は、第一章第四節で見たように、厳密には玉鬘十帖から始まる。その初例である常夏巻の場合には、夕霧と、内大臣の他の息子達はその場にいるが、何故か柏木だけいない(③二二三〜七頁)。これは、その時点ではまだ、源氏を追い詰める役割を担っているのは夕霧だったため、対照的な存在である柏木はいないということなのではなからうか。

尤も、そこでの話題は、そそっかしくも柏木が迎えてしまった近江の君のことを、何とかして聞き出して笑い者にしてやろうという、源氏の嫌味な企みであるから、当人がその場にいらない方が何かと聞きやすいということもあつただろう。また、二箇所目の篝火巻の場合は、柏木もちゃんとその場に存在するのであるから、これだけでは深読みの誘りを受けるかもしれない。しかし、「盛り過ぎたる人」(篝火③二五九頁)と、「何となく翁びたる心地して」(常夏③二二四頁)とでは、老いの描写としてどちらがより深刻か、或いは、篝火巻では老いの描写はそれ一箇所であるに対して、常夏巻ではもう一例、「やうやうかやうの中に厭はれぬべき齢にもなりにけりや」(③二二七頁)もあるなどという、聊かこじつけめいたことまで持ち出さなくとも、何やら気になる現象ではあるう。しかも常夏巻の場面は、ここでは近江の君のことではあるが、源氏が夕霧に、「朝臣や、さやうの落葉をだに拾へ」(③二二六頁)と声を掛ける箇所まで登場するのだからなおさらである。

説明するまでもないとは思いますが、後に夕霧は、柏木の未亡人・落葉宮を實際に娶っている。と言うより、或いはこれは、やがては夕霧と結ばれるはずであつた「落葉」を、先に娶ってしまったのが柏木だと言つた方が正解かもしれない。言うのは、落葉宮は、若菜下巻の柏木の歌、「もろかづら落葉をなににひろひけむ名は睦ましきかさしなれども」(④二三三頁)が命名の由来であり、そうなるとこれは作者の手になる可能性が大(8)だからで、しかも、「落葉」は、源氏物語中にはこの二例だけしか存在しないからである。

そもそも落葉宮は、朱雀院の第二女であり、同じく第三女である女三の宮とは分身の関係にあると考えられるばかりでなく、実際に柏木は女三の宮の代わりとして落葉宮を頂いている。言うことは、落葉宮を娶る者というのは、やや劣るかも知れないが、源氏とほぼ互角の力を有することを意味しよう。これが、第一段で軽く触れておいた、この物語に於ける落葉宮の根源的意味であり、それ故柏木・夕霧は、源氏相対化が可能であつたと思われるのだが、だとすれば、このこともまた、この二人の深い繋がりを示唆するものとして数えることが可能なのである。

夕霧と柏木の深い関係は、これだけでもかなり明らかになってきたと思うが、論を強化

するためなお類似点を数えれば、女三の宮に言い寄るといふ、大それた望みを一向に捨てない柏木をたしなめる、若菜下巻の小侍従の次のような言葉も挙げられる。

E「いと難き御事なりや。御宿世とかいふことはべなるを本にて、かの院の言に出でてねむごろに聞こえたまはんに、立ち並び妨げきこえさせたまふべき御身のおぼえとや思されし。このごろこそ、すこしものものしく、御衣の色も深くなりたまへれ」

(④二一九頁)

この最後の部分など、六位の緑の袖故に、雲居雁との仲を割かれた夕霧の姿(少女③五七頁)が髣髴として来ないだろうか。尤も、袍の色が身分を表わした当時に於いては、こうした表現は常套とも言え、これだけではやはり深読みの謗りを受けるかもしれない。しかし、少女巻で夕霧と雲居雁との仲を取り持ったのも小侍従という女房らしい⁹⁾し、源氏物語に於いて小侍従という女房が登場するのもこの二人に限られる。その上、片や雲居雁、もう一人は女三の宮と、それぞれ相手の女性の乳母子であることまで共通するとすれば、この可能性は無下に否定することは出来ないはずである。だとすれば、この若菜下巻冒頭近くに、次のような語りがあることも、聊か意味ありげに思われる。

Fこの君たち(柏木ト夕霧)、御仲いとよし。さる仲らひといふ中にも、心かはしてねんごろなれば、はかなきことにても、もの思はしくうち紛るることあらんを、いとほしくおぼえたまふ。

(④一五四〜五頁)

と言うのは、玉鬘十帖を読み進めてきた者にとつては、夕霧と柏木の仲が良いというのは既定の事実であるわけで、今さら何故事新しく語られねばならないかが判然としないからである。この二人が対となるべく柏木が造型されたのであろうことは既に述べたが、とすればこれは、その関係がここでも続いていることの確認か、もしくは、想像を逞しくすれば、この巻での源氏の相対化の役割が、夕霧から柏木に受け継がれたことを宣言するもののように思われる。そしてそのような見方をすれば、柏木の死後、落葉宮の面倒を見るように柏木に遺言された夕霧が、初めて宮邸を訪れた時、「あはれ、故殿の御けはひとこそ、うち忘れては思ひつれ」と言つて、その家の女房が泣く様がわざわざ描かれる(柏木④三二八頁)のも、同様に見過ごしてはならない点なのである。

ここまで来れば、夕霧と柏木が分身の関係にあると見なした島内の見解を、何故秀逸と評したかお分かり頂けたと思う。まさしくこの二人は分身の関係にあるのであり、それ故柏木を夕霧のワンプイント・リリースの如く使うことが可能だったと思われる。さらに島内は柏木と光源氏の分身関係まで述べるが、そこで島内が挙げた証拠は全て首肯できるものであるし、先にも少し触れたように、もともと相対化などというものは、或る意味でそれとほぼ等価だからこそ可能だと言えよう。様々な枷がはめられているとは言え、夕霧が光源氏を相対化することが出来たのも、彼が光源氏の子供(親子というのは生物学的に言っても分身の関係である)だったからのはずである。ならば、柏木が、夕霧と同じく光源氏を相対化し得た時点で、この二人の分身関係は当然想到すべきものであった。したがつて、こうした結論を出すだけなら、何もここまで事々しい検証は必要なかったとも言え、本節が価値を生み出すには、その先へと話を進めねばならないであろう。

柏木と夕霧が分身ということになれば、次いで気になるのはその交錯である。先にも述べたように、この二人が親友という設定であるのは、源氏読者にとっては周知の事実だし、それを物語自身が規定している部分もまた掲げた(F)。それ故この二人が顔を合わせる

場面は、この物語に於いてはかなりの数に上るのだが、若菜以前では、一巻前の藤裏葉巻が最後で、以後では、柏木の病床を見舞うという形で、一巻後の柏木巻が最初と、第二段で求めた、光源氏相対化の交錯の範囲と一致する。

尤もこの二人は、若菜上下巻でも全く顔を会わせていないわけではないのだが、それは多分、本節冒頭で述べたように、この二巻に於ける光源氏相対化の担い手の複雑さと、軌を一にしているのだろう。何故ならそれらは、上巻の、あの有名な六条院蹴鞠の場面を代表として、他には、紫上主催の源氏の賀¹⁰、下巻では、巻冒頭の、六条院での競射の記事と、紫上死去が誤報され、弔問客が集まる場面という具合に、みな光源氏相対化の節目と思われる場面に現れ、しかも、二人が対照的に描かれるという共通性があるからである。

例えば、若菜上巻に存する源氏の四つの四十の賀が、全て源氏の老いを確定していく(源氏を相対化していく)ものであることは、第一章第四節及び拙著第2部第2章第1節で既に論じたが、紫上主催のその中では、この二人が揃って「入り綾」を舞い、そこにいた人は皆、この時から二十二年前に当たる紅葉賀巻で、源氏と当時の頭中将の二人が「青海波」を舞ったのを偲んだとある(④九五頁)。言うまでもなくこれは、その間に積もった歳月の重さを感じさせるものであり、この二人が対となってそのきっかけを作っていると言えるのであるが、ただこの場面では、それは、そういうふうには進んでいかない。その後が続けられる言葉は、「権中納言(Ⅱ夕霧)、衛門督のまた劣らずたちつづきたまひにける、世々のおぼえありさま、容貌、用意などもをさをさ劣らず、官位はやや進みてさへこそなど、齢のほどをも数へて、なほさるべきにて昔よりかくたちつづきたる御仲らひなりけり」とめでたく思ふ(同頁)だからである。つまり、せつかくのきつかけは、源氏・頭中将両家のますますの発展へと解消されてしまうのであり、これがこの巻の基調であることは、拙著第2部第2章第1節で既に明らかにしたが、だからこそ、この二人の存在は、決して軽視してはならないと思われる。そこでこの二人の位置づけであるが、既にその用語を用いたように、「対」でも別に構わないとは思っているのであるが、この二人が源氏と頭中将に準えたことに鑑みれば、より厳密には「対照」と捉えるべきであろう。

次に位置するのは、上巻末尾の、六条院での蹴鞠の場面(④一三六〜一四七頁)であるが、これは余りにも有名なので、今さら説明する要もないと思ひ飛ばすと、その次に控えているのは、下巻初めの、同じく六条院での競射の記事(④一五三〜一五五頁)となる。この記事は、位置的に言っても、蹴鞠の時にそれが既に約されていたという点でも、蹴鞠の場面と連続したものと捉えられると思うが、それを証するかのように、蹴鞠の場面と同様、柏木は、垣間見た女三の宮の姿の虜となり、今にも光源氏世界を侵犯しそうだし、それに対して夕霧は批判的である。つまり、ここに於いてもこの二人の描かれ方は、対照的と言えるのである。

このように辿ってくると興味深いのは最後の紫上の死去誤報場面で、周知の如く、ここでは夕霧の方が取り乱しており、柏木がそれを冷静に見つめる、すなわち前場面とは逆の対照性が成立しているが、その柏木が出した結論は、「わがあやしき心ならひにや、この君の、いとさしも親しからぬ継母の御事にいたく心しめたまへるかな」(④二三九〜二四〇頁)であった。勿論これは正解で、どんなに偉そうに柏木を批判しようとも、夕霧も同じく六条院世界の侵犯者であることが、両者の類同性から再確認されているわけであり、しかもこの直後に柏木と女三の宮の密通が発覚するという構造は秀逸と言えよう。その意

味でここよりさらに興味深いのは、このやや後に位置する、二人が当然会ったはずであるのに物語は一切黙して語らない、六条院での朱雀院五十の賀の試楽の場面なのである。

女三の宮宛ての自分の手紙が、光源氏の手握られたと知った柏木は、恐ろしさの余り彼を避けるようになる。しかし、音楽に特に堪能な彼無くしてはと、源氏に名指しで招かれた柏木は、その時ばかりはさすがに断りきれず、六条院で行なわれた朱雀院五十の賀に向いた。そこで対面した源氏が柏木に依頼した言葉は、次のようなものである。

G 「……大将は、公方は、やうやうおとなぶめれど、かうやうに情びたる方は、もとよりしまぬにやあらむ。かの院、何ごと心及びたまはぬことはをさをさなき中にも、樂の方のことは御心とどめて、いとかしこく知りとのへたまへるを、さこそ思し棄てたるやうなれ、静かに聞こしめし澄まさむこと、今しもなむ心づかひせらるべき。かの大将ともろともに見入れて、舞の童べの用意、心ばへよく加へたまへ。……」

(④二七七頁)

聊か妙なものを引いて恐縮だが、この物語を漫画化した作品『あさきゆめみし』は、この後夕霧が、「ちよつと見てくれないか」と柏木に声を掛ける場面を描いている(11)。しかし、この源氏の言葉を素直に辿っていけば、むしろこうある方が自然だろう。だが、先ほども述べたように、物語ではそういう場面は一切無い。

この理由としては、ここで二人が会う場面を描いては、柏木の様子が異常なことが当然二人の話題に上ったであろうから、柏木を破滅に追いやるのに不都合があつた等が最も安易なものとして考えられる。しかし、Fの、柏木がいよいよ夕霧の役割を受け継いだことを宣言するかのような場面を経、先程の、柏木と女三の宮の密通の本質を確認するかのような紫上死去誤報場面を配置した後にこの部分が続くという流れを押さえれば、まかり間違つてもここで二人を会わせるわけにはいかなかった、と言うのは、もしここで二人を再び接触させたら、余りにも夕霧の本質が明らかになりすぎてしまうからという積極的な意味合いを、ここに読み取つても良いのではないかと思う。それ故それは、柏木が単独で破滅していくことが決定された、一卷後の柏木巻の、死の床にいた柏木を夕霧が見舞う場面まで持ち越されなければならなかつたと思うのだが、このように考えてくるとこの二人の交錯は、実に綿密に計算されていることになる。そしてこのような複雑なことが為されなければならなかつた所以は、先にも述べたように表向きのことではあるが、若菜辺りでの源氏の力が、まさに絶頂であつたことが挙げられよう。

力の絶頂にあるものと対立することは、たとえそれに勝てたとしても、対立者もまた深く傷つく。これが自然の法則であると思うが、この物語に於いては光源氏は唯一の絶対者であるから、彼に挑むことは、正しくその者の破滅を意味する。ところが、冷泉帝が数えられない以上、源氏に最も近い力を有する彼の子息は、夕霧しかいなかったわけで、みすみす破滅すると分かっている戦いに、夕霧を送り出すことは、やはり躊躇されたのである。そこで利用されたのが、夕霧の分身として造型されていた柏木で、彼は見事にその役を果たすと、再びそれを夕霧に戻したのである。その時にはさしもの光源氏の力も衰えているし、また、ひとたび柏木によつて壊した源氏の権威を、完膚無きまで叩き潰す必要も無かつた。否むしろ、それは出来なかつたと言う方がより正解に近いかもしれない(12)。何故なら、それ以後でも、あれだけ夕霧等に源氏批判を続けさせておきながら、ついに止めを刺すことはしなかつたのだから。したがって、若菜巻以降、再び夕霧に光源氏相対化

の役割が戻ってきて、彼は安泰というわけである。

以上が、若菜巻を中心とした、光源氏の権威の失墜の経緯であると思うのだが、勿論これは、もう一つの可能性、紫上を汚したくなかったからこのような構図が採られたのだという見解を否定するものではない。と言うより、紫のゆかりである点で、女三の宮もまた紫上のワンポイント・リリースであるわけで、若菜巻とは、夕霧と紫上のワンポイント・リリース同士が密通して破滅した、代理戦争的な巻と位置付けることが出来ると思うのだが、そこまで考えが及んだら、この時期源氏に逆らいながら、家庭不和は招いたけれど、破滅までには至らなかつた者が一人いたことを思い出さねばなるまい。そこで次段では、その男、鬚黒について考察を進めることにしよう。

四

前段末で鬚黒を、絶頂期に源氏に逆らいながら、破滅までには至らなかつた男と呼んだが、そのためか鬚黒は夕霧と良く似ている。共に近衛の武官であるし、他に薫もそう言われる⁽¹³⁾が、「まめ人」と呼ばれることもまた共通している。さらに、前段終わりで少し触れたように、鬚黒は、玉鬘を迎えたことによりもとの北の方に実家に戻られているが、夕霧も、落葉宮との一件により、雲居雁から同じ憂き目に遭わされている。そしてそれは、描写まで類似したものである。

鬚黒ともと北の方との間に起こった事件で、特に有名なものは、物の怪に取り憑かれたもと北の方が、玉鬘のもとに行こうとしている鬚黒に、火取の灰を浴びせる場面であると思うが、それを思わせる場面は夕霧と雲居雁の間にもある。夕霧巻で夕霧が、一条の宮に引き取った落葉宮の許に行こうとするシーンである。

Hなよびたる御衣ども脱いたまうて、心ことなるをとり重ねてたきしめたまひ、めでたうつろろひ化粧じて出でたまふを灯影に見出だして、忍びがたく涙の出で来れば、脱ぎとめたまへる単衣の袖を引き寄せたまひて、

「なるる身をうらむるよりは松島のあまの衣にたちやかへまし

なほうつし人にては、え過ぐすまじかりけり」と、独り言にのたまふを立ちとまりて、

「さも心憂き御心かな。

松島のあまの濡れ衣なれぬとてぬぎかへつてふ名を立たためやは」

うち急ぎて、いとなほなほしや。(④四七五〜六頁)

確かにここには物の怪の存在など無いが、傍線部分にそれを思わせるものはあろう。それだけでなくとも究極の家庭崩壊にまでは至らない夕霧の場合は、それほどどろどろしい描写は望むべくもない。ならば、外出用の着物に香を焚き染めることを発端とするこの場の雰囲気は、鬚黒の場合とほとんど同じとまで言っても良いと思う。勿論、源氏の場合にも、類似した場面が若菜上巻(④六三〜四頁)にあるが、前段でも言及した如く、源氏との類似なら一向に問題はなく、それどころか、源氏・夕霧・鬚黒の三者の繋がりをも、むしろ強化する証拠となってくれるであろう。

鬚黒と夕霧の関係性を示すと思われる証左は、物語中にあと一箇所求めることが可能である。それは藤袴巻の次のような一節である。

I 月隈なくさし上がりて、空のけしきも艶なるに、いとあてやかにきよげなる容貌して、御直衣の姿、好ましく華やかにていとをかし。宰相中将のけはひありさまには、え並びたまはねど、これもをかしかめるは、いかでかかる御仲らひなりけむと、若き

人々は、例の、さるまじきことをもとりたててめであへり。

大将は、この中将は同じ右の次将なれば、常に呼びとりつつ、ねむごころに語りひ、大臣にも申させたまひけり。
(③三四二頁)

中程に切れ目があるように、これは元来二つの段落であるものを、説明の都合上無理に繋いで引用したのだが、前の段は、一つ前の行幸巻で、内大臣(昔の頭中将)の娘と明かされた玉鬘の所へ父の使いで柏木がやって来たという話である。「宰相中将」というのは、言うまでもなく夕霧のことであるから、やや柏木が劣り様であるとは言え、ここでもまた柏木と夕霧の類似性が語られているわけで、そういう意味でも興味深い箇所ではあるが、さらに意味深長なのは、その直後に鬚黒までもが語られていることなのである。「この中将」というのは、次いで「右の次将」とあることより、良く考えれば柏木のことと決められる。しかし、この書き方が大変紛らわしいものであると感じるのは論者だけであろうか(因みにこの時源氏は太政大臣)。そこに、直前で語られている夕霧と柏木の等質性という条件を加味すれば、鬚黒もまたその仲間に取り込まれているとも読めるわけで、案外この描写はその辺りを計算して為されたのではないかと思われるのである。

以上の如く見てくれば、柏木と同様、鬚黒もまた夕霧の分身であることは、ほぼ納得していただけたのではないかと思う。だとすれば、鬚黒が何故、第一章第四節で述べたように、六条院栄華そのものとも言える玉鬘を、ああも容易く手に入れることが出来たかも、極めて分かりやすくなるはずである。すなわち、鬚黒もまた夕霧の分身の一人であったが故に、どうにか光源氏の相対化も可能であったわけだが、絶頂期に源氏に逆らうことは、鬚黒にとっても荷が重く、それまでであった家庭の幸福(たとえそれが曲がりなりのものであったとしても)を失わなければならなかった。しかし、光源氏の絶対的権威は、その程度ではまだ潰れることが無かったため、それをより徹底的に果たすべく、鬚黒より強力な破壊者が招請された。言うまでもなくそれは柏木で、彼は鬚黒よりもっと近しい夕霧の分身であるが故のことであった。光源氏の、絶対的とも見えた権威は、このように何重にも張り巡らされた機構によって、徐々に失墜させられていったと考えられるのである。

五

以上、光源氏相対化の経緯を、著者なりに粗々辿り直してきたが、それは、これまで言われて来たように、単純に夕霧から柏木へと役目が譲り渡されただけでなく、柏木の死後再び夕霧に戻されており、柏木は言わばワンポイント・リリーフとでも言うべき地位を占めていると思われること、さらにそのライン上には鬚黒もまた位置付けられるらしいことなどを概ね説明し得たつもりである。

それにしてもさすがに源氏物語。あれほど絶対的に見える光源氏の権威を、誰もが納得できる形で失墜させるために、これだけ複雑な手順を踏んだのである。勿論、この他にもその「手順」はあるだろうが、本節がそれに迫る一助となれば幸いである。

注 (1) 伊藤博「『野分』の後―源氏物語第二部への胎動―」『文学』 昭42・2。

(2) 高橋亨「源氏物語の内なる物語史」(『源氏物語の対位法』 東京大学出版会 昭57)。

(3) 「御弟にこそものしたまへど、ねびまさりてぞ見えたまひける。年ごろかくをり過ぐさず渡り睦びきこえたまふと聞きはべれど、昔の内裏わたりにてほの見た

てまつりし後おぼつかなし。いとよくこそ容貌などねびまさりたまひにけれ。帥親王よくものしたまふめれど、けはひ劣りて、大君けしきにぞものしたまひける」(③二〇七〜八頁)

- (4) 源氏物語の巻名が全てこの物語の作者によるものとは軽々に断定できないが、少なくともこの巻に関してはそう考えられることは、既に玉上琢彌が「源氏物語の巻名その他―河海抄疏―」(『源氏物語研究』 角川書店 昭41)に於いて述べている。

- (5) 同様の言い回しは、河添房江も、「梅枝巻の光源氏」(『源氏物語表現史 喩と王権の位相』 翰林書房 平10)でしている。

- (6) 島内景二「柏木物語の成立」(『源氏物語の話型学』 ぺりかん社 平元)。なお、島内は、光源氏の第一次の相対者として頭中将を位置づけるが、常に源氏に負け続ける頭中将と、曲がりなりにも追い詰める夕霧・柏木とは自ずと位相を異にすると思ひ、本論文では頭中将は数えていない。

- (7) 高橋亨「源氏物語の〈ことば〉と〈思想〉」(『源氏物語の対位法』)。

- (8) 玉上琢彌「源氏物語作中人物呼び名の論」(『源氏物語研究』 角川書店 昭41)も同様な見解を採る。

- (9) このことは、小田由紀江「王朝物語の女房の造型」(『中古文学論攷』第十五号 早稲田大学大学院中古文学研究会 平6・12)も指摘している。

- (10) 他にも、玉鬘主権の源氏の賀にも来ていた可能性が高い(柏木は明らかに来ている)が、前節で明らかにした理由からか、ここでは夕霧の存在感が極めて薄く、祝いの「籠物」だけ送って自身は来ていない可能性もある(前節で引いた、玉鬘の子供と比較しての源氏の発言からすると、そのような感が強い)ので、それは入れなかった。

- (11) 大和和紀『あさきゆめみし』第九巻(講談社 mimi コミックス 平元)三九頁。

- (12) 注(6)の島内の論にもその示唆はある。

- (13) ただし、薫もまた近衛の武官であるから、夕霧・鬘黒は、やがて薫へと発展するもの(源氏世界を代表する匂宮のライバルであるのがその現れ)と捉えた方が良いのかもしれない。しかし、そこまで手を広げると論が余りに拡散してしまうので、本節では夕霧と鬘黒の関係に限定する。

第四節 光源氏・冷泉・明石姫君

一

光源氏没後の世界を描く匂宮巻には、次のような一節が存在する。

A 二条院とて造り磨き、六条院の春の殿とて世にののしりし玉の台も、ただ一人の末のためなりけりと見えて、明石の御方は、あまたの宮たちの御後見をしつつ、あつかひきこえたまへり。
(⑤二〇頁)

すなわち、光源氏亡き後、その財産の主要な部分を相続したのは、他でもないこの明石御方であったというわけだが、それでは何故そうなり、またそれがここで語られなければならないのだろうか。四つあった六条院の町の住人のうち、紫上は早く亡くなり、花散里には実子がなく、秋好中宮は、源氏と直接的な血縁関係が無い上に冷泉院に入内しているので、残った明石がそれを継ぐのが、一見当然のような気もするが、事はそう単純ではない。何故なら、六条院はもとも秋好中宮の母である六条御息所の邸跡を取り込んで造営され、秋好中宮の実家としての役割も果たしたのであるから、彼女が相続するという可能性も考えられないわけでもない（¹）し、花散里が養子とした夕霧は、表向き光源氏の長男（実際は次男）であり、彼が全部受け継いでもおかしくはないからである。さらに出家したとは言え光源氏の正妻で、春の殿の住人でもあった女三の宮の息子である薫もいる。どうもそうすんわりいくものとも思えない。無論今を時めく今上の中宮である明石姫君の存在が最大の決め手になったのであるが、それとてこの物語が作り物語である以上、何故明石姫君が中宮にならねばならなかったのかが問われねばならないだろう。つまりこの一言は、一見何でもなさそうなことに見えながら、実は今まで普通に信じられてきた光源氏世界を、根本的に問い直すことを迫るものなのである。そこで本節ではもう一度原点に戻って、六条院の真の主は誰かを考え直してみることしよう。

二

六条院の完成は少女巻であるが、その実質的な描写が開始されるのは、その次の玉鬘巻とそれ以後の巻々、いわゆる玉鬘十帖であることは、今さら言うまでもないだろう。その十帖では、源氏は玉鬘という存在のお陰で、俗に言う六条院栄華の体現者となり得ていたことは、既に第一章第三・四節或いは、拙著第2部第2章第1節等で明らかにした。そしてその玉鬘十帖が終わったところ（正確には玉鬘を鬚黒に奪われてしまった真木柱巻を含む）から源氏の凋落が始まることもまたそれらに述べておいたが、それが明石姫君の入内を語る梅枝巻であることを、最初に押さえておかなければならない。尤もこれは、源氏の益々の繁栄を語ると捉えられていることが多いのだが、明石姫君の入内準備の一環として書かれている薫物合わせを読めば、そう単純には言えないことも、第一章第四節で指摘しておいた。ただこれは最初の確認事項となるので、煩を厭わずもう一度見ておこう。

梅枝巻で源氏が依頼したのは、各人二種の薫物であったが、実際は紫上は三種合わせ、花散里は一種しか合わせていない。しかし、判者の螢兵部卿宮が選んだのは、各人一種ずつであるから、それがそれぞれの人物の特性を示すと理解すると、朝顔は黒方で冬、源氏は侍従で秋、紫上は梅花で春、花散里は荷葉で夏、明石御方は薫衣香で無季という季節の香を合わせたことになる。秋、冬という季節自体にも衰退の象徴性を読み取りたいところだが、そこまでせずとも、朝顔という、六条院外の人物まで呼び込まなくては、この薫物合

わさが成立しなくなっていること、及び紫上と花散里以外は自己の季に忠実ではなく、特に六条院の主宰者であるはずの源氏が、季の一つでしかない秋の香を合わせていることが問題なのである。

そもそも六条院とは、各季節に彩られた女性を、源氏がその頂点に立つて領導していく理想郷⁽²⁾であったはずである。ならばこの変化が如何に大きな意味を有するかは自ずと明らかというものであろう。源氏は既に一つの季を主宰する力しかなく、代わって六条院すべての上に君臨する力を得たのは、一つの季に縛られない、無季の香を合わせた明石御方であることが、この梅枝巻の薰物合わせで示されるのである。

この一つの季に縛られない浮遊性は、第一章第四節で証した、それまでの巻に登場し、やはり六条院栄華を領導していたと考えられる、玉鬘とも相通するのだが、そもそも明石御方は、冬の御方とは言いながら、最初から必ずしも冬に縛られてはいない⁽³⁾のである。尤も、これ以前はそのことや、それが如何なる意味性を有するかなどは必ずしも明らかにされてはいなかったのだが、玉鬘がいなくなり、源氏が六条院支配の切り札を失ってしまったこの時に、分かる者には分かる形で示唆されるのが、この薰物合わせだと思われるのである。そしてそれは二巻後の若菜巻に至ってより明らかとなる。続いてそれを見てみよう。

三

若菜上巻に至り、六条院が内部崩壊を始めること、及びその一環として、これまでの光源氏の一生を相対化してしまふ、明石入道の長い夢語りが挙げられることは、もはや広く認められるところであろう。その夢語りは、明石女御の出産を契機として始められるのだが、それ自体が既に源氏の相対化に大きく寄与するものであることについても既に拙著第2部第2章第1節で述べた。それは、年立上の多少の無理を犯しても、源氏に孫を抱かせることによる、老いの確認である。そして、それに続く入道の夢語りを讀んだ後、源氏は次のような感慨を抱く。

B あやしく、ひがひがしく、すずろに高き心ざしありと人も咎め、また我ながらも、さるまじきふるまひを仮にてもするかなと思ひしことは、この君の生まれたまひし時に、契り深く思ひ知りにしかど、目の前に見えぬあなたのごとは、おぼつかなくこそ思ひわたりつれ、さらば、かかる頼みありて、あながちには望みしなりけり、横さまにいまじき目を見、漂ひしも、この人ひとりのためにこそありけれ、いかなる願をか心に起こしけむ」
(若菜上④一二八頁)

これによれば、源氏は自己の運命が、明石一族によってねじ曲げられているのを認めただけであるが、やはり心のどこかではそれを認めたくない思いが働くのであろう、この言葉とは全く逆の行動をとる。それが下巻の住吉詣である。

「このたびは、この心をばあらはしたまはず、ただ、院の御物詣にて出で立ちたまふ」
(④一六八頁) とある如く、この住吉詣では、その真の意味を隠して、あたかも源氏自身の願解きのように装われたものであった。しかし、既に鈴木日出男が指摘している⁽⁴⁾如く、この住吉詣での世界は、そこに属せる者と属せない者とが和歌によって画然と分けられている。尤も、それによれば明石女御まで属せない方に入ってしまうことにはなるのだが、幼い頃から紫上に育てられ、明石一族としての記憶を持たないこの姫君を例外とすれば、源氏以外の源氏世界の者は誰一人この世界に入れていないことになり、この参詣の中心がどこにあったかは自ずと明らかであろう。

にも拘らず、木村正中は同じく鈴木の指摘を踏まえながらも、この時明石御方の存在が希薄であったことを主因として、私見と全く逆の結論を出している⁽⁵⁾。しかし、以下に挙げる理由から、それにはやはり従えないのである。

第一に、この参詣の中心が、源氏と明石尼君の贈答の側にあることは、木村自身も認めているのだし、確かにここでは明石御方の影は薄い⁽⁶⁾が、その代わり明石尼君の存在が奇妙に重い。これは彼女が明石御方の代役を果たしていることを雄弁に語るものだと思われるし、見方によっては尼君の方が、入道まで含めた明石一族の意志を代表するにはより相応しいとも言えよう。

木村は他に、その見解を支えるものとして、これ以後明石一族関係の記述が減少することも挙げている。しかしその理由は、実質はともかく⁽⁶⁾、ここで明石尼君が「幸ひ人」⁽⁴⁾（一七六頁）と規定されてしまったためと考えられる。宇治の中の君もそうであったが、幸福な者はストーリーを開拓していくエネルギーを失うというのは、万古不変の文学の原理である⁽⁷⁾（第五章第一節参照）。その証拠として挙げられるのが、御法巻や幻巻に登場する明石御方の姿で、木村も述べているように、以前からそれはやや冷たい印象しか与えないと評されてきたが、それは彼女がすっかり自己の世界に充足してしまい、他者に対してそれほどの配慮が出来なくなっている、或いはする必要がなくなっているからなのである。

以上、どのように検討しても、この住吉詣での場面は、やはり明石一族が中心となっていると考えるのが自然だと思われるのであり、ここに至っては、既に源氏ですらもその中に取り込まれていると言うことも可能なのである。

さて、これほど強大な明石一族の権勢の出所は、初めに触れたように、言うまでもなく明石女御の存在にあるが、この明石女御というのは後世の読者がつけた便宜的な呼称であり、実際には本文には出てこない。「昔の御宿直所、淑景舎を改めしつらひて」（梅枝巻⁽⁸⁾③四一四頁）とあるように、彼女は正確には桐壺女御であった。この呼称がこの物語の首巻桐壺を呼び起こすものであることは、既に阿部好臣が説いており⁽⁹⁾、以下の記述は、しばらくそれと相似線を描くことになるが、聊か見解を異にする部分もあるので、このまま叙述を進めることにする。

四

周知の如く源氏物語は、桐壺更衣と帝の悲恋物語から始まる。そしてその結果、この物語の主人公、光源氏が誕生するのであった。

C 前の世にも、御契りや深かりけん、世になくきよらなる玉の男御子さへ生まれたまひぬ。
(桐壺①一八頁)

しかし、その後も更衣に対する迫害は強く、遂に彼女は、光源氏が三歳の時亡くなってしまふ。彼女の父は大納言で亡くなってしまったので、この世の最高権力を有する帝の力を以てしても、遂に女御と呼ばせられないままであった。その代わり帝は、死後彼女に従三位を与える。人間としての彼が為し得る精一杯の形であった。

D 内裏より御使あり。三位の位贈りたまふよし、勅使来て、その宣命読むなん、悲しきことなりける。女御とだに言はずなりぬるがあかず口惜しう思さるれば、いま一階の位をだにと贈らせたまふなりけり。
(①二五頁)

亡くなった大納言の「宮仕の本意」⁽¹⁰⁾（①三〇頁）が具体的にはどんなものであったかは、

遂に物語に語られていないので、はっきりと断定することは出来ない。しかしこの時代、娘を入内させた貴族で、皇統に連なることを夢見ないものは誰もいないだろう。しかもこの巻ではまだそうなっていないが、彼が後に「按察大納言」という呼称を与えられることからそれは類推し得るのだが、それについては後に触れる。だがその期待を担った光源氏は、臣籍降下という形で皇統から閉め出されてしまった。

それ故源氏物語は、王権回復の物語として読めるわけだが、その最初の階梯が、藤壺との「もののまぎれ」であったことも、やはり言うまでもないことであろう。その結果として二人の間には、後に帝となる冷泉が生まれる。しかもこの冷泉について、面白い比喻表現が見られることは、既に藤井貞和によって指摘されている(8)。「玉」の比喻である。しかし、藤井が取り上げているのは、引用文E、Fの、冷泉の場合のみであり、私見によればこの問題は、もっと深いものがあると思われるので、以下、聊か敷衍してそれを述べてみよう。

これもやはり力の限界から、桐壺帝は、最愛の息子である源氏を皇位につけることは出来なかった。そのことを内心長く不満に思っていた桐壺帝は、誰にも指弾されない藤壺を母とした、源氏と瓜二つの子、冷泉が生まれた時、これで思いが果たせると喜んだ。その時の記述が紅葉賀巻にある。

E 源氏の君を限りなきものに思しめししながら、世の人のゆるしきこゆまじかりしによりて、坊にも据ゑたてまつらずなりにしを、あかず口惜しう、ただ人にてかたじけなき御ありさま容貌にねびもておはするを御覧ずるまに、心苦しく思しめすを、かうやむごとなき御腹に、同じ光にてさし出でたまへれば、瑕なき玉と思しかしづくに、宮はいかなるにつけても、胸の隙なくやすからずものを思ほす。(①三二八〜九頁)

しかし、この引用文末尾にもあるとおり、冷泉の出生の秘密を知る藤壺にとっては、その「源氏と似ている」ということが、逆に心配の種なのであった。

F いかうしもおぼえたまへるこそ心憂けれと、玉の瑕に思さるるも、世のわづらはしさのそら恐ろしうおぼえたまふなりけり。(賢木②一一六頁)

つまり冷泉は、表面的には「瑕なき玉」だが、その実体は「瑕」ある玉だという、両義的な「玉」だったわけである。ところでこれ以前に「玉」で譬えられていた人物が一人いたことを思い出していたきたい。Cにあるように、その人物こそ誰であろう、冷泉の父・光源氏なのである。これは決して偶然ではない。

何故ならこの物語の中に「玉」という用例は、「薬玉」、「夜光りけむ玉」まで含めて、全部で二十一例ほどあるが、そのうち人の比喻として用いられるのは七例(9)で、その内訳は、冷泉、明石女御が二例ずつ、後は源氏、玉鬘、浮舟が各一例となり、限られた人物しか用いられてないからである。このうち玉鬘は、その呼称及び幼名かとも言われる「藤原の瑠璃君」(玉鬘③一一二頁)から、「玉」に縁が深いことは明かであるし、その繁栄の象徴としての力源はここに由来すると思うのだが、ここでそれを繰り返す必要はないだろう。同様に、浮舟の場合は玉鬘との繋がりがから説明できると思うのだが、それについても既に第一章第二節で触れたので、ここでは除外すると、残りの人物すべては血縁関係にあることは見てとれよう。すなわち、「玉」の比喻が用いられる人物は、ほぼこの一族に限られるのであり、ここに「玉の系譜」とも言うべきものを見出すことが出来るということなのである。

周知の如く「玉」とは王権と深い関わりを有するものなのであり、ここに皇統を目指すこの一族の強い意志が明瞭に表されている。したがって、桐壺更衣の無念を晴らすべく、源氏の次に期待されたのは、阿部が言う(7)ように紫上ではなく、冷泉と考えるべきと思われる。

光源氏という「玉」に「瑕」があったか無かったか。それは言葉で物語中に書かれることは遂に無かったが、母方の身分の低さから、東宮になることは世人が許さないという物語状況から考えれば、答えは自ずと明らかであろう。それ故源氏は、前述の如く、皇統からはじき出されてしまい、次いでその期待を担った冷泉は、一応皇統譜に連なることは出来たが、見てきたように不完全な「玉」でしかない彼は、所詮長くそこに連なることは不可能だった。故に、この一族の血を楔のように長く皇統の中にうち込むためには、より完璧な「玉」が要請されるわけだが、言うまでもなくそれが次の「玉」、明石女御なのである。そこで次にはその様相について見ることにしよう。

五

明石女御が最初に「玉」に譬えられたのは、彼女がまだ姫君の時代、別れに臨んで入道の心情が叙せられる時であった。

G 若君は、いともいともうつくしげに、夜光りけむ玉の心地して、袖より外に放ちきこえざりつるを、……
(松風②四〇三頁)

この「夜光りけむ玉」とは、『岷江入楚』によれば、「海竜王」の玉だと言う(10)。だとすれば、これは正しく「完璧」と言えよう。しかし、もし明石女御に「瑕」があるとすれば、それはやはり母方の身分の低さであろう。そしてこれは単なる推測ではなく、女御入内の時の母・御方の思いとして、本文中にもはっきり書かれている。

H その夜は、上添ひて参りたまふに、御輦車にも、立ちくだりうち歩みなど人わるかるべきを、わがためは思ひ憚らず、ただかく磨きたててまつりたまふ玉の瑕にて、わがかくながらふるを、かつはいみじう心苦しう思ふ。
(藤裏葉③四五〇頁)

しかし御方が、自分を犠牲にしてまで育んできた女御の気品は、もはやそれを「瑕」とはしなかった。

I いどみたまへる御方の人々などは、この母君のかくてさぶらひたまふを、瑕に言ひなしなどすれど、それに消たるべくもあらず。
(藤裏葉③四五二頁)

かくて完全無欠な「玉」となった明石女御は、やがて子沢山の中宮となり、皇統譜に深く根を下ろして、続編では押しも押されもしない存在として物語世界に君臨する。だが同時にこれは、光源氏の母・桐壺更衣の無念を晴らすことでもあった。と言うのは、前にも述べたように、彼女は、更衣が望んでもなれなかった桐壺女御として出発し、彼女が辿った軌跡は、更衣及びその一族が願ってやまなかったものだと考えられるからである。

このように源氏物語正編の世界は、地上の最高権力を以てしても為し得なかった桐壺更衣を女御に上げることを果たし、その怨念を晴らしていく一族の物語と捉えられるわけだが、それではその役割を果たすのが何故明石女御でなければならなかったかと言えば、彼女は単に源氏の娘、ただというだけではなかったからである。

J 「……いかにものしたまふ君ぞ。故母御息所は、おのがをぢにものしたまひし按察大納言のむすめなり。……」
(須磨②二二頁)

源氏が須磨に来たことを知った明石入道が漏らした有名な科白の一節であるが、ここに

書かれているように、桐壺更衣の一族と明石一族は、もとは同族であった。つまり明石女御は、父方から言っても母方から言ってもこの一族の血を引いていることになるが、彼女の力は単に血が濃いというところから来るだけではない。明石入道はこうも言っている。

K「桐壺更衣の御腹の、源氏の光る君こそ、朝廷の御かしこまりにて、須磨の浦にもおしたまふなれ。吾子の御宿世にて、おぼえぬことのあるなり。……」

(須磨②二一〇頁)

すなわち、源氏が須磨まで流れてきたのは、すべて自分の娘の明石御方の宿世によるものというわけであり、勿論これだけでは老法師の勝手な言いぐさということにもなりかねないが、この場合はそうではない。何故なら次の明石巻に、次のような入道と源氏の会話があるからである。

L「いととり申しがたきことなれど、わが君、かうおぼえなき世界に、仮にても移ろひおはしましたるは、もし、年ごろ、老法師の祈り申しはべる神仏の憐びおはしまして、しばしのほど御心をも悩ましたてまつるにやとなん思うたまふる。……」

(中略)

「横さまの罪に当たりて、思ひかけぬ世界に漂ふも、何の罪にかとおぼつかなく思ひつるを、今宵の御物語に聞きあはすれば、げに浅からぬ前の世の契りにこそはとあはれになむ。などかは、かくさだかに思ひ知りたまひけることを、今までは告げたまはざりつらむ。……」

(②二四四〜六頁)

入道の言葉はKと概ね同じで、これだけでは自分の側からの一方的な見解を繰り返して述べているにすぎないと取れるかもしれない。しかし、単に相づちをうつつばかりではなく、「かくさだかに思ひ知りたまひけること」と、相手の言い分をほぼ認めてしまっている源氏の言葉は注目すべきで、これではここに、この件に関して両者の見解が一致したことを語っていると理解する他はない。換言すれば、この時既に源氏の運命は、明石一族によってねじ曲げられていた。いや、そう見るのは実は少し正しくない。見てきたように入道の言葉は、これまでの物語の流れを正確に位置付けている。ならば、ここで新たに「按察大納言」と呼び直される桐壺更衣の父も、「宮仕の本意」などという抽象的な思考の持ち主ではなく、はっきりとした家の意志を持つ者として捉え直されたと見るべきである。何故なら、この物語における「按察大納言」とは、娘の入内によって家門の繁栄を図るイメーヂを帯びたものであることは、夙に上坂信男によって指摘されている⁽¹⁾からである。そしてその瞬間、この一族は、同じく皇統に強い執着を持つ明石一族に包摂されていく。それがこの場面の論理だと思ふのだが、それ故源氏の運命が曲げられているとしたら、それは単に明石一族によってではなく、桐壺・明石一族とでも呼ぶべき、巨大な一族の意志によってと捉えた方が、より正しいと言えるであろう。すなわち、より完全な「玉」である明石女御を生み出そうという、この一族の冥々の力は、光源氏をも組み敷いて続いているということになる⁽²⁾。尤も、若菜下巻に至ってもないのであるから、源氏自身は、実際にはそうした意識を抱いてないであろう。つまりここから先は、源氏の意識上のことは皆錯覚で、真実はその陰にあるというのが、物語の構造となっていくと思うのだが、だとしたら、最初に提起した六条院の真の主は誰かという問いには一体どう答えれば良いのだろうか。次にはそれについて考えてみよう。

六

木村正中も指摘している⁽⁵⁾ように、明石女御は、遂には「六条の女御」(若菜下④一六五頁)と呼称されるに至る。これは六条院を代表する女御という意味であろうが、今まで見たことから考慮すれば、それは、木村氏のように彼女が六条院に取り込まれてしまったと見るべきではなく、むしろ逆に彼女の存在そのものが六条院となってしまったと見るべきであろう。すなわち、冷泉帝が退位し、今上帝が即位して、明石女御が東宮の女御から帝の女御に上がったこの時、六条院は完全に明石一族のものとなってしまったことを示すが、明石女御のこの呼称だと思ふのである。それではいつからそれが始まったかと言えば、実はその始発から六条院は明石のものだったと考えられる。

第一段にも述べたとおり、そもそも六条院は、四方四季の邸にその季を司る四人の女性を住まわせ、それを源氏が統轄する体裁をとっていたが、一人だけそれに従わないよう描かれている女性がいた。それが他でもない明石御方であったわけである。しかし、その浮動性だけでは納得できない向きは、そもそも四方四季の御殿は誰のものであったかを考えてみるが良い。言うまでもなくそれは海竜王の御殿であるわけだが、だとすれば、「海竜王の后になるべきいつきむすめなり」(若紫①二〇四頁)と評される明石御方が、最も縁深い人物である⁽¹³⁾ことは、見易い道理であろう。因みにこの例も含めて、源氏物語の中では、「竜」または「竜王」の用例は全部で四例あるが、うち二例は手習巻で引かれる竜女成仏の話(⑥三四六頁)と明石巻で神々と同列に祭られる竜王(②二二七頁)であって、光源氏を指した例は無い。それに対して明石一族は、御方の娘の明石女御までが、前段で見たように、「夜光りけむ玉」⁽¹⁴⁾海竜王の玉に譬えられる。そして何より残った一例、須磨巻末の嵐の夜に、異形のものが迎えに来た夢を見て、源氏が「さは海の中の竜王の、いといったうものめでするものにて、見入れたるなりけり」(②二一九頁)と思う場面は、やがて明石から舟が来て、源氏はそれに迎えとられるという、この後の展開を考えれば、やはり明石一族を意味していると思われるのである。すなわち、明石一族が海竜王の一族であることは、物語の実に最初から、示唆されているのであった。

したがって、繰り返すことになるが、六条院の真の主は、最初から、海竜王の一族たる明石御方なのである。それが、多分、彼女が最初は二条東院の東の対の住人として予定されていながら、結局それは実現されないのに、六条院が完成するや否や、一番後とは言え、早々に移り住んできたり、源氏の死後、その遺産のほとんどを受け継いでしまう理由なのである⁽¹⁴⁾。

七

以上、六条院の真の主は、明石御方、もしくはその一族と思われることについて縷々論述してきた。つまり、一般に信じられている、六条院の主は光源氏であるというのは、源氏がまだ玉鬘という「玉」を有していて、自身が「海竜王」となり得ていたかもしれない期間はまだしも、それを失ってしまった後は、彼自身も含めた我々の錯覚にすぎないということなのである。そう思ってみれば、藤裏葉巻で源氏が准太上天皇位を受けるのも、所詮は引退した天皇扱いと取れなくもないし、潜在王権という立場から見れば、こうして皇権に取り込まれてしまったことが、果たして源氏にとって本当にプラスになっているのかどうか、大いに疑問があるう。しかも、その直後に、当時としては老人の仲間入りであった四十に源氏がなると書かれることも、やはり問題と思われることは、第一章第四節等でも書いたところである。すなわち、如何様に見ても、源氏の力の絶頂は、長くとも玉鬘

十帖で終わったと見られるのだが、それにも拘らず読者がそうでないような錯覚を抱くのは、ある意味では仕方がない。と言うのは、先程の准太上天皇位もそうであったが、この物語のあちこちには、読者にそれを感じさせないような仕掛けが施されているからである。そこで最後に、そうした中から、明石一族に関わるものを一つ検討して本節の叙述を終わることにする。それは明石女御の呼称である。

「明石女御」という呼称は実際には無いことは第三段で触れた。そして彼女の正式名称は桐壺女御であると思われることから、それ以後の考察が始まったのであるが、実はこの「桐壺女御」という呼び方も実際には無い。入内前後の彼女の呼称は、梅枝・藤裏葉巻では「御方」(各巻一例)、若菜上下巻に至っても、「桐壺御方」或いは「淑景舎」といった、桐壺関係の呼称が両巻合わせて七例、「女御」或いは「女御の君」といった、女御関係の呼称が両巻合わせて三十例数えられるのみである。

こうして見ても、若菜巻になって彼女が「桐壺女御」であることを、急に強く印象付けられる仕組みとなっていることは容易に領けようが、さらに言えば、若菜上巻の桐壺関係の呼称五例は、すべて女御の出産にまつわる記述中で用いられている。その異常に若い出産の意味するところは、やはり第三段で触れたが、それはこうして、彼女の呼称を辿っても見えてくるものである。そしてその頂点として、前段でも挙げた「六条の女御」という呼称が来る。と言うのは、これはその子が遂に東宮となったことを告げる記述と共にあるからである。そして、これを境として、以後物語中で彼女に対し、桐壺関係の呼称は用いられないとなれば、それらの呼称が本節で考察してきたような意味を有すると思われることもまた、容易に首肯されるであろう。そしてこれも第三段に掲げたように、その初例が梅枝巻にあることも、重々忘れてはならない点なのである。

しかし、繰り返しにはなるけれども、ここまで源氏を追いつめながらも、明石女御を「桐壺女御」と呼称した例だけは無い。(ここまで来れば、それが何故かに答えることは簡単で、もしそうした呼称が一例でもあれば、本節で考察してきたようなことは、誰でも容易に考えたであろう。しかし、この物語が「源氏」物語である以上、それをあからさまにするのは作者の欲するところではなかった。それ故それは密かに隠され、ただ分かる者には分かる形で、光源氏の表面的栄華は描き続けられたのであった。

注 (1) 現に藤井貞和「光源氏物語主題論」(『源氏物語の始源と現在―定本』 冬樹社 昭55)は、このように結論する。

(2) 秋山虔「玉鬘をめぐって」(『源氏物語の世界』 東京大学出版会 昭39)等。

(3) 熊谷義隆「明石君と季節―『冬の御方』考―」(『山形女子短期大学紀要』

昭58・3)、「源氏物語の四季」(源氏物語講座5『時代と習俗』 勉誠社 平3)。

(4) 鈴木日出男「源氏物語の和歌」(『源氏物語の探究』第五輯 風間書房 昭55)。

(5) 木村正中「住吉詣 明石一族の宿運(2)」(『講座源氏物語の世界』第六集 有斐閣 昭56)。

(6) 原岡文子「幸い人中の君」(『源氏物語両義の糸』 有精堂 平3)及び注(5)。

(7) 阿部好臣「明石物語の位置―桐壺との関わりにおいて―」(『語文』 昭51・7)。

(8) 藤井貞和「神話の論理と物語の論理」(『源氏物語の始源と現在―定本』)。

- (9) 葵上が亡くなった時にも、「袖の上の玉の砕けたりけむよりもあさましげなり」(葵②五〇頁)という表現が見られるが、これは葵上〓玉を意味しているわけではないと見て、採らなかつた。
- (10) 源氏物語古註釈叢刊第七卷二二七頁。
- (11) 上坂信男「源氏物語の人物描写」(『源氏物語講座』第七卷 有精堂 昭46)。
- (12) 日向一雅「光る源氏論への一視点―「家」の意志と王権と―」(『源氏物語の主題―「家」の意志と宿世の物語の構造』 桜楓社 昭58)も同様な発想をしているが、明石一族を光源氏の栄華に寄与する存在ととられているところが本節と決定的に異なる。
- (13) 元吉進「六条院構想にみる紫式部の方位感覚」(『学苑』 昭62・1)も同様の指摘をしている。
- (14) 東原伸明「明石の君―その転換点・二条東院から六条院へ―」(今井卓爾・鬼束隆昭・後藤祥子・中野幸一編集『物語を織りなす人々』(『源氏物語講座』2) 勉誠社 平3)も同様な指摘をしているが、副題の如く、東原の論の関心は明石御方の移転の辺りにあり、「玉のネットワーク」という視点もないので、異なる論として認識した。

第五節 まとめ

前章での「横」の「連関」に続き、本章では「縦」の「連鎖」の中で、これまで余り指摘されていなかった例を見てきたが、まとめの意味を兼ね、軽く振り返っておこう。

第二節では、これまで分身の関係であることは多々指摘されてきた薫と匂宮について、二人はどのように分身としての役割を果たしているかに注目した。前章でも述べたように、二人がほぼ同時に登場することから、並列的「連関」を果たしている部分も勿論あるが、ここでは宇治十帖全体の結構との関わりから、敢えて「連鎖」の関係にスポットを当ててみた。その、宇治十帖全体の結構との関わりの解説が2の部分であるが、そちらはあくまで結構の解析を主とするため、「人物論」としては、やはり1の部分の主眼となろう。そこで明らかにしたのは、宇治十帖に登場する女性、特に浮舟を追い詰める物の怪の役割を果たす匂宮と薫の姿である。その役割を本来果たすのは、前章第三節でも言及したように、六条御息所の物の怪に導かれて誕生したふしのある薫のようで、事実物語の叙述を分析していくと中の君の物語まではそのように読めるのだが、手習巻の浮舟の述懐に依れば、彼女に取りついた物の怪は匂宮の姿をしていたことになっている。これすなわち、宿木巻辺りで二人の役どころが交替したからで、そのように理解すれば、これは正しく「連鎖」の例となる。

また第三節の夕霧と柏木の関係はさらに複雑である。今までの理解では、玉鬘十帖以降、光源氏批判者の役割は夕霧から柏木に移譲されたことになっていたはずだが、夕霧巻の存在等を考えるとそう単純には言えないはずで、柏木が光源氏を相対化している範囲を厳密に確定していくと、それは僅かに若菜上下巻に限られる。換言すれば、玉鬘十帖の後、いったん柏木に移譲された光源氏批判の役割は、若菜巻終了後、再び夕霧に戻されている訳で、これは、単なる直線的受け渡しではない、役柄の自由なやりとりの例として教えられるはずである。

或る意味それがさらに複雑化したのが第四節で取り上げた光源氏・冷泉・明石姫君の関係で、これら三者は誕生時に皆「玉」の比喻を持ち、最初は「瑕」のある「玉」であった存在が、長い年月をかけて「瑕」のない「玉」、完璧を生み出すことにより、「桐壺・明石一族」とでも呼称すべき巨大な一族の遺志を実現していく過程を描く方法たり得ていると言えるのである。尤も、その注で幾つか指摘したように、これまでもこれに近いことはかなり言われてきた。言わばその総合化がこの第四節ということになるが、それは、理系の諸科学と違い、客観化が非常に困難な文学という学問に於いて、かなり客観度が高い証拠なのだろうと理解している。

以上で、源氏物語に於ける複数人物を関係させる二つの方法と思われる、「連関」と「連鎖」について一通り説明したが、この物語にはさらに高度な、人物を関連させる方法が存在するのではないかと思われる。それが次章で取り上げる「複数の人物連鎖とその統合による表現法」である。続いてそれを見てみよう。

第四章

複数の人物連鎖とその統合による表現法

第一節 序―「拒否」と「忌避」の定義

前章までに、源氏物語に於ける「単一人物と他要素の連関による表現法」、「人物の連関による表現法」の三つについて説明してきたが、この物語には今一つ、第三のものをさらに深化させた方法が存在すると思われる。それが本章で扱う「複数の人物連鎖とその統合による表現法」であるが、この例として、「拒否」する女性達と「忌避」する女性達の「連関」が挙げられる。

次節の冒頭でも述べるように、空蝉・朝顔・宇治の大君と、源氏物語には実に多くの主人公を拒否する女性達が登場するが、言ってみればこれがこの物語で一番顕著な「連鎖」の実例である。ところが、これまではその「連鎖」の概念が存在しなかったため、それらの女性の拒否理由は個別のものが考察されてきたが、それが真実個別のものであれば、これほど類似した人物を繰り返し登場させる必然性はなかったはずで、となればこれは、その繰り返しによって表したいテーマが何かあったはずである。それに迫ってみたのが次節なのであるが、その結論を先取りして述べてしまえば、「拒否」する女性というのは、心底相手の男性が嫌いであった訳ではなく、むしろどちらかと言えば好きなくらいであるが、相手の男性が自分と比較して余りにも立派すぎるため、不用意に近づくと自分という存在が消えてしまいそうに感じたため、近寄ることも出来ず、かと言って本心ではその男性が好きなため離れることも出来ず、中途半端に距離を保とうとしたのがその行為であり、それを仮に「拒否」と命名してみた訳である。

またこの物語にはこれとは別に、最初こそ男性を「拒否」するものの、その男性の力に負け、結局は結ばれてしまうタイプの女性達も描かれている。そう言うそれは「拒否」ではないと言われそうで、実際そうでもあるのだが、だからと言ってその女性たちが結ばれて良かったと感じているかと言うと、そうは描かれていない。別にその女性の一人として数えている訳ではないけれども、一つ比喻を用いると、第一章第三節で触れた如く、鬚黒と結婚したからといって玉鬘が安定を得られなかったように、男性と結ばれて全ての問題が解決する訳ではないからである。ならばそのタイプの女性も、「拒否」する女性に準じて考えるべきだというのが論者の主張で、余り適当とは思われないが、他に思い当たらないのでこれを仮に「忌避」する女性と呼称することにした。それらの女性を描くことによつてどのようなテーマを示したか逼迫たのが第三節である。なお、本章で「拒否」する女性に分類した明石御方や落葉宮は、実はこちらではないかと思う向きもあろうが、そこで示した「忌避」する女性の定義を厳密に当てはめれば、その二人の属するのはこちらではない。その辺りは第三節の叙述を参照してほしい。

そして本節最初でも述べたように、これら二つの「連鎖」は単独に意味を有するのみならず、それを統合的に連関させたところにも意味が生ずる構造となっているらしい。それこそが、これほど類似する二つの「連鎖」を設定した所以であると思われるのだが、それについては第四節でまとめてみたい。

第二節 「拒否する」女性の連鎖

一

源氏物語には数多くの、結婚を「拒否する」女性が登場する。こう言われて誰しも即座に思い浮かべるのは、正編では朝顔、続編では宇治の大君といったところであろう。しかし、私見によればこの他にも、空蝉や落葉宮、それに結婚前の明石御方も加え得る。これらの女性を加えることは、人によっては大いに異論のあるところであろうが、本節章が徐々に明らかにしていくように、これらの女性も、心情的にはむしろ先の二者に近い。それ故、本節では、取り敢えずこの五人を「拒否する」女性と認定し、以後の話を進めていくが、それを前提にしたところで問題になってくるのは、何故この物語には、これほど繰り返して「拒否する」女性が登場するのかわである。

一々名前は挙げないけれども、これについては従来、それぞれの女性を個別に取り上げ、その理由が検討されてきたと思う。しかし、この物語が作り物語である以上、そういう捉え方は正しくないのではあるまいか。何故なら、作り物語に登場する人物達は、皆作中人物なのであり、現実世界に生きる人間達のように、偶然その場に居合わせるなどということとはあり得ない。ならば、これだけ似た状況の人物達が登場するということは、その繰り返しに何らかの意図するところがあったと捉えるのが、作り物語読解に於ける正しい発想法だと思ふからである。特に、この物語は、誰かと誰かが似ているという、いわゆる「形代」(この意味でこの語を使用するのは、本来は不適切と思われることについては拙著第3部第1章で述べた)の方法で紡がれていることは、現在広く認められているところであるから、似た方法が、他の人物達にも使われていると考える方が、より自然だと思ふのである(1)。

それ故、本節ではそうした観点でこれらの女性達の拒否理由を検討していくが、すると、過たずそこにはある共通項が浮かび上がってくるのである。だがそれは、実際の例を見てからの方が納得されると思うので、早速分析を始めることにしよう。

二

「拒否する」女性として先ず取り上げるのは、それらの中で最初に登場することもあって、空蝉ということにしたいのだが、すると、彼女は人妻なのだから源氏を拒否するのは当然だという異論が聞こえてきそうである。しかし、既に指摘がある(2)ように、人妻の倫理意識などというものが、この時代にもう存在していたのか否かは甚だ疑問である上に、具体的な箇所は後に引用するが、本文中の何処を探しても、空蝉の拒否理由に、そのようなものは見当たらない(3)。それ故、増田繁夫などは、「空蝉は光源氏と逢ふことを拒否したのではなくて、その逢ひ方を問題にしてゐる」のであり、強く抵抗し、抗議するのは、「身を墮としたが故に一層鋭くなつてゐる空蝉の身分意識からで」、拒否するのは、「いまの身の上ではいささかも望ましい事態が期待できないといふもっぱら自己の今後についての功利的な判断からであつて」「残念ではあるが与えられた宿命を受け入れる他ない」と自覚したからであると述べているほどである(4)が、後に掲げる引用文から見ても、この方がよほど正しい捉え方である。

そこで、本段では一切の思い込みを排除し、虚心に空蝉の拒否理由を探るところから始

めるが、それには物語本文を眺めるのが一番である。続いてそれを掲げよう。

A「いとかくうき身のほどの定まらぬありながらの身にて、かかる御心ばへを見ましかば、あるまじき我頼みにて、見直したまふ後瀬をも思ひたまへ慰めましを、いとかう仮なるうき寝のほどを思ひはべるに、たぐひなく思うたまへまどはるるなり。よし、今は見きとなかけそ」
(帚木①一〇二頁)

B心の中には、いとかく品定まりぬる身のおぼえならで、過ぎにし親の御けはひとまれる古里ながら、たまさかにも待ちつけたてまつらば、をかしようやあらまし。しひて思ひ知らぬ顔に見消つも、いかにほど知らぬやうに思すらむ、と心ながらも胸いたく、さずがに思ひ乱る。とてもかくても、今は言ふかひなき宿世なりければ、無心に心づきなくてやみなむ、と思ひはてたり。
(帚木①一一一頁)

Aは会話文でBは心中思惟と、聊かレベルは異なるが、見ての通り、内容はほぼ同じであるから、一括して扱っても支障は無いと考える。そしてこれが、空蟬の、源氏拒否の理由を示すメインの部分ということになるのであるが、言うまでもなくここは、増田も詳細に分析したところでもあり、傍点を付して示したように、増田の結論中にも見られる「身」、「身のほど」、「宿世」などという単語が踊っている。中でも注目すべきは、「身」、「身のほど」という語の集中であると思うが、実はこれらの語の分布については、藤田加代による精細な調査が既にある(5)。しかもその調査は、空蟬の場合のみに留まるものではなく、この物語の主要人物全体にわたるものであり、物語全体の構造を把握したいという本節を執筆するに当たって大いに参考になったものであるから、ここでそれと関わると思われる藤田の結論を、三つほど紹介しておこう。

(1) 自意識としての宿世意識を持つている人物は当然ながら光源氏が第一位であるけれども、空蟬は薫と並んで第二位であり、それに関する形容語は「憂し」、「心憂し」、「心得ず」、「いふかひなし」の四つであること。

(2) 光源氏・頭中将・朱雀・夕霧・冷泉・八宮・薫といった男性主要人物たちが「身」に対するよりも「世」に対して深い嘆きを寄せるのに比して、紫上・明石御方・六条御息所・空蟬・落葉宮・大君・浮舟等女性主要人物の大部分は、「世」に対する以上に「身」に対して詠嘆、苦悩、感慨を寄せる比率が高く、特に空蟬の場合は、「世」意識が稀薄でありながら、「身」の「憂さ」がすべての認識の基盤にあり、明石御方にも自虐的なまでの「身」意識があること。

(3) 「身」に寄せる想念は、『源氏物語』においては、主として自己存在の弱小性と無力さを実感したとき表白される。特に身分意識によるものが圧倒的に多く、受領社会に生い立った——または属する——明石御方・空蟬・玉鬘・浮舟たちは、平安貴顕との接触の中で、「思はずなる」不幸を体験するとき、多く「世」をでなく「身」を思うこと。

藤田の出した結論は他にもあり、また、ここに付した番号は私のものであるが、本節の叙述と関係するのは先ずこういったところとなる。このうち、最も注目したいのは(2)で、私に調査したところでも、「身」意識の分布が、空蟬と最も類似するのは明石御方であり、それが、大方の常識に反して彼女を「拒否する」女性の一員として数え、後に扱う所以なのであるが、それとて空蟬のように、「世」意識一例に対して「身」意識十例などという極端な偏りを示すわけではない。そこで、その分布状況を、さらに詳細に調査して

みると、「世」は、初音巻で二条東院に引き取られていた空蟬を源氏が久々に訪れ、昔話のついでに、空蟬が継子の河内守に懸想されたことを仄めかすと、空蟬がそれを恥ずかしく思うという場面に登場(③一五七頁)し、無論その語は河内守との仲を意味する。すなわち、空蟬にたった一例しかない「世」という単語も、「世間一般」という広い意味では使用されていないのであり、彼女はあくまでも「個」の世界に生きていることが窺えるのであるが、ではそれを強く表すであろう「身」の分布はどうかというと、次の如くである。

先ず、最も多数を占める「身」の用例は、帚木巻七例、空蟬巻・関屋巻各一例と分布しており、関屋巻の例は、初音巻と同じく河内守の懸想に対するもので、「うき宿世ある身」(②三六四頁)という具合に表現されている。また、残りの一例は「身のほど」という単語で、引用文Bに見られる如く、やはり「うし」という語が冠せられている。

このことから二つの結論が直ちに導けると思うが、その一つは、空蟬が源氏に対して抱く想念は、皆「身」に関するものばかりということである。それはおそらく、藤田が出した結論(3)と大きく関わっており、増田が感じ取った空蟬の強烈な身分意識(4)も、このことに由来するところが大きいと思われるが、それをさらに明瞭に示すものとしては、次のような空蟬の科白が挙げられる。

C「現ともおぼえずこそ。数ならぬ身ながらも、思しくたしける御心ばへのほどもいかが浅くは思うたまへざらむ。いとかやうなる際は際とこそはべなれ」

(帚木①一〇一頁)

「奥なる御座」に源氏に無理矢理連れ込まれた時の言葉であるが、細かく分析するまでもなく、自分はこんな扱いを受けても良い身分ではないという、空蟬の誇りは充分感じられるはずである。すなわち、空蟬の身分意識とは、単なる卑下ではなく、その根底には誇りがあるということであるが、彼女はもともと中納言兼衛門督の娘で、「思ひあがれる気色に聞きおきたまへるむすめ」(帚木①九四頁)とされていたことを思えば、さほど奇異には当たらない。換言すれば、空蟬の源氏「拒否」は、彼女の誇りによるものであるということにもなるが、これは本節末尾でもう一度問題にするので御記憶願いたい。

さらに第二は、第一のことと深く関わっているのだが、空蟬の「身」に寄せる思いは帚木三帖に集中しているということである。これは実は他の人物にも当てはまることで、例えば落葉宮の「身」の全用例は夕霧巻に存在するし、紫上の場合、そのほとんどが若菜上下巻に集中するという具合に、各人物の「身」意識の用例は、古来その人物が最も良く描かれていると言われる巻々に集中する。だから空蟬の場合は帚木三帖というのは、一見何の不思議も無いように思われるかもしれないが、空蟬の場合難しいのは、関屋巻とて、彼女が主人公的役割を果たす巻には違いないからである。尤も、どなたもお分かりのように、関屋巻と帚木三帖では、長さに於いては比較にならないから、これも大した問題でないと捉えることも勿論可能ではあるが、逆に言えば、それほど執拗に、空蟬の姿を描き込もうとしたのが帚木三帖だということにもなる。「身」意識が「個」意識に通ずると言う所以であるが、では空蟬の場合、それはどのようなものであったのか。先の引用文に加えて夕顔巻のものも掲げ、分析してみよう。

D かの伊予の家の小君参るをりあれど、ことにありしやうなる言つてもしたまはねば、うしと思しはてにけるをいとほしと思ふに、かくわづらひたまふを聞きて、さすかにうち泣きけり。遠く下りなんとするを、さすかに心細ければ、思し忘れぬるかここに

るみに、「うけたまはりなやむを、言に出でてはえこそ、

問はぬをもなどかと問はでほどふるにいかばかりかは思ひ乱るる

益田はまことになむ」と聞こえたり。めづらしきに、「これもあはれ忘れたまはず、「生けるかひなきや、誰が言はましごとにか、

うつせみの世はうきものと知りにしをまた言の葉にかかる命よ

はかなしや」と、御手もうちわななかるるに、乱れ書きたまへるいとどうつくしげなり。なほかのもぬけを忘れたまはぬを、いとほしうもかしようも思ひけり。かやうに憎からずは聞こえかはず、け近くとは思ひよらず、さずがに言ふかひならずは見えてまつりてやみなんと思ふなりけり。

(①一八九〜一九〇頁)

順番で行けば前のものが当然先だが、説明の都合上、このDから先ず見ていくことにしよう。場面は夕顔巻の終わり近く、光源氏と空蟬の仲が一応の終息を迎える直前の部分だが、一見して誰もが気づくことは、波線を付したように、わずかこれだけの範囲で三度も「さすがに」という言葉が出てくることであろう。このことは玉上琢彌も勿論気づいており、この巻の始めにも、「さすがに、絶えて思ほし忘れなんことも、いと言ふかひなくかるべきことに思ひて、……」とある(①一四六頁)ことも紹介され、「これが、この女の本心であり、真情である。とつおいつして決定しえない性格である。ここにも、くり返して『さすがに』という語が出てくる。空蟬を象徴する如くである」という評をつけている(6)が、この語は他に、引用文Bや、帯木巻の巻名ともなった歌を源氏と贈答する場面(「女も、さずがにまどろまざりければ」①一一二頁)等、空蟬にとって重要と思われる箇所には必ず現れるようであるから、正しく彼女を象徴する語と言えるように思われる。しかし、私見によれば空蟬を象徴する語はこればかりではなく、次のようなものも加えることが可能である。

その一つは逆接の接続助詞で、引用文Aの傍点部や、次に掲げる引用文などに見受けられる。

E 女も並々ならずかたはらいたしと思ふに、御消息も絶えてなし。思し懲りにけると思ふにも、やがてつれなくてやみたまひなましかばうからまし、しひていとほしき御ふるまひの絶えざらむもうたてあるべし、よきほどに、かくて閉ぢめてんと思ふものから、ただならずながめがちなり。(空蟬①一一七〜八頁)

さらにA、B、Eの傍線部を見れば明らかのように、空蟬の心中表現には反実仮想も非常に多い。言ってみればこれが、空蟬を象徴する第三の表現特徴なのであるが、少し考えればお分かりになるように、この三つは実は別物ではない。全て逆接を基本とするからである。ではやはり、この三つは「とつおいつ」する空蟬の心情を表現したものかと言えば、それは当たらないように思われる。第三の反実仮想は、目前の現実の認識と、そうでない状態の仮想とが同時並行的に行われているはずだからである。すなわち、これら三つの特徴による空蟬の心理表現は、拙いながらも、人の心の二層性を表そうと試みたものと解釈できるのであるが、それがこの物語の中で、徐々に深められていく様相は、拙著第3部第3章で述べたのでそれを御参照いただき、ここでは空蟬の場合に限定すれば、それは空蟬の本心と、それを抑えようとする心を示すということの良いだろう。では空蟬の本心とは何かということは、先程紹介した玉上が、正にその言葉を使っているものでそれに譲るが、にも拘わらずそれを抑えようとした理由は、これまで引用した部分を統合して読めば、増

田に近く解釈する他は無かろうと思う。すなわち、空蟬は内心光源氏に非常に惹かれていたのだが、現在の自分ではあまりにも身分差があるため、近づくと自分の卑小さをより強く思い知らされそうで近づけなかった。だからと言って、源氏にすっかり遠ざけられるのも嫌であり、適当な距離を保ちつつ関係を続けようとしたという、かなり利己的なものが見えてくる。しかしこれは空蟬のみに止まるものではなく、例えば宇治の大君などもそうである。その拒否の理由は、既に千原美沙子による詳細な分析があり(②)、私見に於いても全くその通りであると思われるし、手順として次段で触れなければならないから、今ここで詳しく繰り返し返すことはしないけれども、全てを大君の利己的な愛に帰すその結論は、大君にとつて聊か厳しすぎるような印象を持つやもしれないが、本文を辿る限り必然の帰結なのである。だとすれば、最初に掲げた拒否する女性達のうち、最初に位置する空蟬と、最後に位置する大君には、「利己的な愛」による男性「拒否」という共通点が指摘できるわけだが、これは実は他の女性達にも共通する。次段でそれを見てみよう。

三

次に取り上げる女性は、登場順に従って朝顔からとしたいが、朝顔の源氏「拒否」の理由の最初の断片は、噂だけでなく彼女が実際に登場する葵巻に現れる。

F かかることを聞きたまふにも、朝顔の姫君は、いかで人に似じと深う思せば、はかなきさまなりし御返りなどもさをさなし。さりとして、人憎くはしたなくはもてなしたまはぬ御気色を、君も、なほことなりと思しわたる。(②一九頁)

場面は葵巻冒頭近く、六条御息所が、源氏の表だった愛人として一向扱われないので苦しんでいると語られた直後に位置する。朝顔の「拒否」理由は、傍線部としか考えられないが、これだけでは判然としないので後に回し、今はその後ろの部分に注目する。源氏からの頼りには返事を出さないけれども、かと言って冷たく突き放すわけでもないという朝顔の態度は、空蟬や大君のそれと正しく通ずるものがあるが、それというのも朝顔もやはり内心では源氏に惹かれているからである。

G 式部卿宮、棧敷にてぞ見たまひける。いとまばゆきまでねびゆく人の容貌かな。神などは目もこそとめたまへ、とゆゆしく思したり。姫君は、年ごろ聞こえわたりたまふ御心ばへの世の人に似ぬを、なめならむにてだにあり、ましてかうしもいかで、と御心とまりけり。いとど近くて見えむまでは思しよらず。若き人々は、聞きにくきまめでできこえあへり。(葵②二六頁)

場面はFから若干進み、葵祭りの勅使に選ばれた源氏の晴れ姿を、朝顔が父・式部卿宮とともに見物するところであるが、「姫君は」以下に、朝顔の源氏に惹かれる心は明らかである。にも拘わらず、「いとど近くて見えむまでは思しよらず」なのである。前段最後で纏めた「適当な距離を保ちつつ関係を続けよう」という利己的な言葉が思い出されるであろうが、では何故朝顔は源氏にこれ以上近寄りたくないのか。その理由は、朝顔が一且物語の背後に退いた後、再び現れる朝顔巻に今少し詳細に書かれている。

H げに人のほどのをかしきにもあはれにも思し知らぬにはあらねど、もの思ひ知るさまに見えたてまつるとて、おしなべての世の人の、めできこゆらむ列にや思ひなされむ、かつは軽々しき心のほども見知りたまひぬべく、恥づかしげなめる御ありさまをと思せば、なつかしからむ情もいとあいなし、よその御返りなどはうち絶えて、おぼつかなかるまじきほどに聞こえたまひ、人づての御答へはしたなからで過ぐしてむ、

年ごろ沈みつる罪失ふばかり御行ひをととは思したてど、にはかにかかる御事をしも、もて離れ顔にあらむも、なかなかいまめかしきやうに見えきこえて、人のとりなさじやはと、世の人の口さがなさを思し知りにはあねど、かつはさぶらふ人にもうちとけたまはず、いたう御心づかひしたまひつつ、やうやう御行ひをのみしたまふ。

(②四八七頁)

葵巻で選ばれた齋院は、桐壺院の第三皇女であったから、賢木巻での桐壺院の崩御とともに退任し、代わって選ばれたのが朝顔であった。その朝顔も朱雀帝の退位とともに退任し、昔を忘れられない源氏が再び懸想を始めるというのがこの巻であるが、引用文冒頭の、「げに人のほどのをかしきにもあはれにも思し知らぬにはあねど」から、朝顔もまた未だに源氏に心惹かれていることは明白であろう。けれど、彼女が取った源氏に対する態度は波線の如きものであり、一口に言えばこの二人の関係は、昔と何も変わらない。ただ、前述の如く朝顔の場合は、一旦齋院という神に仕える存在となつていから、少なくとも朝顔巻の源氏拒否は、それによるものだという意見もある(⑧)ので、それについても一言しておかなければなるまい。

物語に型があることを認めるには吝かでないけれども、この場合までそれに当てはまるか否かは聊か疑問である。三谷栄一は、「なべて世のあはればかりをとふからに誓ひしことと神やいさめむ」という朝顔の歌(朝顔②四七四頁)を抛り所としてそれを言うが、これは先に、「人知れず神のゆるしを待ちし間にこころつれなき世を過ぐすかな」という源氏の歌がある(②四七四頁)からであろう。つまり、神を最初に持ち出したのは源氏の方で、その答歌であるから朝顔は同じ単語を使ったに過ぎないとも理解できるわけで、そう思うとHの引用文に於いても、自分の齋院時代を、この当時の常とはいえ「年ごろ沈みつる罪」と捉え、現在はそれを軽めるべく仏道修行をしているというのも聊か気になる。いずれにせよ、当の本人に投げかけた言葉を真の拒否理由と判断するのは躊躇いがあるわけで、そこで、朝顔の少ない心中表現を辿っていくと、次のようなものに行き当たる。

I昔、我も人も若やかに罪ゆるされたりし世にだに、故宮などの心寄せ思したりしを、なほあるまじく恥づかしと思ひきこえてやみにしを、世の末に、さだ過ぎつきなきほどにて、一声もいとまばゆからむ、……
(朝顔②四八五頁)

これは、二人の関係が煮詰まり、源氏に最終的な拒否を与える直前の朝顔の心であるが、御覧のようにここには神に対する畏怖など微塵もない。あるのはただ自分の老醜に対する恐れのみであるが、それについては後に述べよう。ここではただ、朝顔の源氏拒否が、神によるものではなさそうだとすることが理解できれば良いのであるが、それではその真の理由は何であろうかということ、やつとHの引用文に戻れるわけである。そこにはまだ一箇所触れていない部分がある。言うまでもなく傍線を付した部分のことであるが、これはFの傍線部と同じものではなくはなかるうか。

Fの傍線部にある「人」は、小学館の旧全集(⑨)以外は最新の注釈書に至るまで、ほとんど例外なく六条御息所のことと書かれており、この箇所に限ってはそれでも良いかと思われるのだが、その背後にはもっと深いものが隠されているように思う。何故なら、もしそれだけの意味なら、「いかでかれに似じ」でも良さそうな気がするからで、それがそうなっていないのは、この「人」がもっと広い範囲を意味しているからではなかるうか。それがつまりHの「おしなべての世の人」で、そう捉えると、朝顔巻で朝顔が最終的に源氏

を拒絶する歌が「あらためて何かは見えむ人のうへにかかりと聞きし心がはりを」である(②四八六頁)ことも、極めて興味深い事象となつてこよう。すなわち、朝顔の源氏拒否の理由は、Hの傍線部にある如く、他の女性と同列には見られたくないという極めて誇り高いものから来ているわけで、だからこそIの末に見られる如く、老醜が恐ろしいのであるが、この論理は正しく宇治大君のものでもある。続いてそれを見ておこう。

四

朝顔と同じく、落ちぶれたとはいえ宮家出身の大君の矜持は枚挙に暇がないほどで、薫との縁を洩る理由の一つも、自分がしたのでは世話人を立てて婚姻するという当時の正式な形が取れないからである(総角⑤二四〇頁)。だが、そんな彼女にもやはり自分の美貌にはコンプレックスがある。

J我もやうやう盛り過ぎぬる身ぞかし、鏡を見れば痩せ瘦せになりもてゆく、おのがじしは、この人ども(老女房達)も、我あしとやは思へる、後手は知らず顔に、額髪をひきかけつつ色どりたる顔づくりをよくしてうちふるまふめり、わが身にては、まだいとあれがほどにはあらず、目も鼻もなほしとおぼゆるは心のなしにやあらむ、とうしるめたう、見出だして臥したまへり。恥づかしげならむ人に見えむことは、いよいよかたはらいたく、いま一二年あらば衰へまさりなむ、はかなげなる身のありさまを、と御手つきの細やかにか弱くあはれなるをさし出でても、世の中を思ひつづけたまふ。

(総角⑤二八〇～二八二頁)

場面は中の君と匂宮の新婚三日目の夜。その準備で沸き立つ女房達の姿に、大君が抱いた感慨がこれであるが、では何故誇り高いはずの彼女がこんな感慨を抱かなければならぬいかというと、傍点を打った部分に手掛かりがある。すなわち、薫がそれ以上に立派だからである。

薫の造型については第5章第二節の2で扱う予定であるので、ここではその詳細は省くけれども、薫は生まれた時から「恥づかしき人」と規定されており、巻が進むにつれてその程度は落ちるが無くなることはない。現に大君も何度かそれをしていくけれども、J以外で特に重要と思われる部分は、自分の代わりに中の君に薫をと決心する、聊か遑つたところであろう。

Kこの人(薫)の御さまの、なめぬにうち紛れたるほどならば、かく見馴れぬる年ごろのしるしに、うちゆるぶ心もありぬべきを、恥づかしげに見えにくき気色も、なかなかいみじくつつましきに、わが世はかくて過ぐしはててむ、……(総角⑤二四〇頁)

薫が並の男だったら結婚したかもしれないけれども、そうではないので却ってこのままの方が良いという大君の思ひは、正しくそのことの表白であるが、ここまで考慮が及んだ時、源氏の場合もやはり「恥づかし」が使われていたことに気づくのである。引用文H、Iがそれで、特にIは、それと同義と思われる「まばゆし」まで使用されている。朝顔が、如何に源氏を「恥づかしき人」と意識しているか良く分かる。朝顔ほどの身分の人が源氏を「恥づかし」と認識するのは少し不思議かもしれないが、如何に宮家の生まれとはいえ、朝顔巻ではもはや落ちぶれている(10)し、何よりGに見られるように、朝顔自身も源氏を並の男ではないと認めているからである。

この並の男ではないという認識は「拒否する」女性の問題を考える場合重要で、源氏にしる、夕霧にしる、薫にしる、「拒否」された男性は皆並の男ではないのである。そうい

う意味では面白いのは匂宮で、彼は一見並の男ではなさそうだが、不思議なことに「拒否」されたことなど一度も無い。そんなことを言うと、宮の御方、中の君、小宰相などの名前を挙げ、匂宮も拒否されているではないかと思われる向きもあるかもしれない。しかし、この三者とも己の誇りから宮を「拒否」しているわけではなく、宮の御方は、匂宮個人というよりも結婚そのものに対する畏れから、残りの二者は、匂宮の心が移ろいやすいという噂によって忌避しているのであって、当然適当な距離を取ってこの関係を続けたいという願望もなく、ここで扱っている者達とは異なるのである。残る問題は、夕霧は本当に落葉宮に「拒否」されていると言えるのかであろうが、落葉宮の造型については拙著第2部第2章4で述べたが、テーマの関係上「拒否」に関することだけは、ここで少し触れておこうと思う。

五

「故君（柏木）のことなることなかりしだに、心の限り思ひ上がり、御容貌まほにおはせずと、事のをりに思へりし気色を思し出づれば、まして、かういみじう衰へにたるありさまを、しばしにても見忍びなんやと思ふもいみじう恥づかし。」

（夕霧④四八〇～一頁）

場面は宮と夕霧が遂に結ばれた夜のもので、一応傍点は打っておいたが、それさえも不要なくらい、宮が、立派な夕霧に対して自分の老醜を恥じていることが分かるであろう。しかし、他の女性と違ってこれは関係が出来てしまった後なので、聊か事情が異なるのだと思われる向きもあるかもしれない。そこで、遡ってもう一つ、同様な宮の思いを揚げておこう。

M 集まりて聞こえこしらふるに、いとわりなく、あざやかなる御衣ども人々の奉りかへさするも、我にもあらず、なほいとひたぶるにそぎ棄てまほしう思さるる御髪をかき出でて見たまへば、六尺ばかりにて、すこし細りたれど、人はかたはにも見たてまつらず、みづからの御心には、いみじの衰へや、人に見ゆべきありさまにもあらず、さまざまに心憂き身を、と思しつづけて、また臥したまひぬ。 （夕霧④四六三頁）

今度は大和守に説得されて夕霧の待つ一条宮に帰る直前の場面であるが、この二つを並べてみれば、宮の老醜に対する畏れは、夕霧に見られて突然始まったのではなく、宮の意識に絶えず沈潜されていたものであることは窺えよう。落葉宮の夕霧拒否の理由は、宮が一度は結婚を経験している分だけ他の女性ほど単純にはいかないが、皇女不婚の常識（1）から、二度も結婚など出来ないという誇りがあることは先ず間違いない（12）。さらに、夕霧の妻・雲居雁が前夫・柏木の妹なので、その実家に対する遠慮があることも何度か語られてはいる。だがこの、自分が夕霧ほどの立派な男性に釣り合うほどの若さではないという宮の畏れも、その一つとして数えられるのではなからうか。何故なら、Lを読む限り、自分の容貌に対する宮のコンプレックスが、夕霧との出会い以前の、柏木生存時からあったことは確かだからである。そうは言っても、薫とは異なり、夕霧は主人公級の扱われ方などほとんどされていないから、本当に夕霧は、それほど素晴らしい存在として描かれているのかと、疑問を持つ向きも或いはあるかもしれない。しかし、そうした向きには、少なくともこの落葉宮問題に関しては、彼は主人公として描かれており、たぶんそれ故であるろうが、次のような例を最上として、柏木巻末から夕霧巻にかけては、彼の美質は何度も賛美されていることを思い出して頂きたい。

Nいとめでたくきよらに、このごろこそねびまさりたまへる御盛りなめれ。さるさまのすき事をしたまふとも、人のもどくべきさまもしたまはず、鬼神も罪ゆるしつべく、あざやかにもの清げに若う盛りにはほひを散らしたまへり、もの思ひ知らぬ若人のほどに、はた、おはせず、かたほなるところなうねびとどのほりたまへることわりぞかし、女にて、なかめでざらむ、鏡を見ても、なかおごらざらむ、とわが御子ながらも思す。
(夕霧④四七一―二頁)

一条宮には迎え取ったものの、落葉宮の頑強な抵抗にあり、夕霧はまだ関係を結べない。しかし、源氏を含めた世間はそう見ず、お説教をしてやろうと父は子呼び出すが、夕霧の余りの美しさにさすがの光源氏も何も言えなくなるというのがこの場面である。少女巻での大学入学の件でも知れるように、息子に対する厳しさでは定評があり、雲居雁との結婚の時には、夕霧の着物にまであれこれ口を出す(藤裏葉③四三五―六頁)光源氏が、これほど手放して息子を褒めるのも珍しいが、換言すればこれは、作者が光源氏に、自分の後継者として夕霧を一旦は認めさせたということであろう。尤も、続編を見れば明らかのように、この試みは上手くいかなかったらしいが、本節のテーマに於いては重要であり、後で触れる予定であるので、この夕霧の主人公性については、ぜひ記憶に止めておいて頂きたい。ただ、落葉宮の場合は、彼女が夕霧に惹かれていたかどうかまで疑問を挟む向きもあるかもしれないので、それについても触れておく必要があるだろう。

何度も言うが落葉宮は、他の「拒否する」女性とは違って未亡人であったから、その「拒否」理由と同様そのことについても、はっきり書かれていないわけではないが、それを窺わせる記述は実は何箇所か存在する。例えば先に掲げたMなどもその一つで、夕霧が本当に嫌いなら、このような思考は生まれまい。また、これも詳しくは拙著第2部第2章4で扱ったが、横笛巻で夕霧に誘われ、彼女が想夫恋を合奏してしまふ(④三五五頁)のも、光源氏の言うとおおり、本当に嫌なら、たとえ夕霧に何と思われようと、断つてしまうことも出来たと思われ、やはりこの一つとして数え得る。しかし、もう少し直接的なものと望む向きには、夕霧巻④四〇三頁「年ごろもむげに見知りたまはぬにはあらねど、知らぬ顔にのみもてなしたまへるを」というのを紹介しよう。一条御息所が病気で臥せているので落葉宮に近づく機会を得た夕霧が、いよいよ積極的な行動を起こすという場面に位置するが、この部分に新全集は、「夕霧はすでに意中をほのめかしている。(中略)宮は、柏木の冷淡さを嘆いていただけに、夕霧の心寄せには、喜びも感じたであろう。しかし今、露骨な求愛に接すると、人目・世間体へのはばかりが優先して心を閉ざすほかない」という、誠的確な注をつけられる(注二九)。落葉宮自身がそれを意識していたかどうかには難しいところもあるが、自分に好意を向けてくる亡夫の友人をいつまでも通わせておくこと自体にそもそも問題があったのである。こう解釈される余地は幾らでもある。すなわち、無意識のうちであったかもしれないが、落葉宮にもやはり、このままの状態で夕霧と関係が続けたいという願望があったことになり、この点でも他の「拒否する」女性と、何ら変わりはないのである。

このように考えれば、その後その男性と結ばれたかどうかには何の関わりもなく、「拒否する」女性に見受けられる要素は皆同じということになる。本節で、その辺りを敢えて厳密に区別していないのは、こうした所以によるものなのであるが、一例だけでは納得しかねる向きに、やはり最後はその男性と結ばれた明石御方の場合も見ておこう。

明石御方の造型について詳しいのは、何と言っても阿部秋生の『源氏物語研究序説』（東京大学出版会 昭37）だろう。その「明石の君の結婚」の章の中にも「躊躇」という節は存在するし、微視的に見れば明石御方にも、「結婚拒否」の性格が指摘できることは、すでに篠原昭二によっても言及されている¹⁰。したがって御方の場合は、むしろ落葉宮ほど特別視する必要はないのかもしれないが、本節の流れの中に一応位置づけておく。

明石御方の源氏「拒否」の理由は、ほぼ次の心中思惟に尽きている。

〇いと口惜しき際の田舎人こそ、仮に下りたる人のうちとけ言につきて、さやうに軽らかに語らふわざをもすなれ、人数にも思されざらんものゆゑ、我はいみじきもの思ひをや添へん、……と思ひて、ただこの浦におはせんほど、かかる御文ばかりを聞えかはさむこそおろかならね、年ごろ音にのみ聞きて、いつかはさる人の御ありさまをほのかにも見たてまつらんなど思ひかけざりし御住まひにて、まほならねどほのかにも見たてまつり、世になきものと聞き伝へし御琴の音をも風につけて聞き、明け暮れの御ありさまおぼつかからず、かくまで世にあるものと思したづぬるなどこそ、かかる海人の中に朽ちぬる身にあまることなれ、など思ふに、いよいよ恥づかしうて、づゆもけ近きことは思ひよらず。

（明石②二五三―四頁）

源氏が須磨から明石に移った最初の秋、既に手紙を交わしていた源氏は、淋しさに耐えかね、入道に娘を寄こすよう申し入れるが、それに対して本人である明石御方が抱いたのがこの思いである。今までの分析を大成したような部分であるとはすぐ理解されると思うが、波線を付した部分に明らかのように、御方はこれ以上源氏に近づくことは望んでいないけれども、かと言って別れたいわけでもない。つまり、つかず離れずの関係を続けたいわけで、その理由は、あちこち卑下らしきものも存在するが、「朽つ」という語から明らかのように、自分は海人と同列ではないという思いが根底にはあるからで、つまりは傍線を付した部分がその本音であろう。阿部は先程の書でこの部分に、「拒むものと求めるものとは別のものではない。等しく彼女の身体の中の名門の血が、恥をうけることを拒否すると同時に、音に聞こえた源氏の風貌に、ほのかにでも接すること、かうしてかりそめにも言問はれることを光栄だと思つてゐるのである」という的確な評をつけている（七八〇頁）が、「源氏」の部分で他の男性に変えればこの論理は、今まで見てきた他の「拒否する」女性のものとも何れも変わらない。そればかりか、傍点を打って示したように、キードワードと思われる「恥づかし」まで存在する。これでは何故御方を他の女性と切り離さねばならないのが分からないのである。

それ故本節では、最後にその男性と結ばれたからと言つて、落葉宮や明石御方を特別扱いしてこなかったのであるが、勿論これには理由があるであろう。しかし、叙述の都合上それは本節末尾に述べることにして、ここではもう一度、「拒否」される男性は源氏・夕霧・薫の三人だけであつて、匂宮などは入っていないことを確認したいが、ここまで辿ってきた以上、この理由については薄々察しのつくことと思ふ。すなわちこれは聖性、言い換えれば主人公性と深く関わっていることなのである。続編の主人公については第五章第二節の2で詳しく検討するが、今ここで一言だけ述べておけば、匂と薫、同じような名を持ちながら、薫の香は天然のものであるに對して匂のそれは所詮人工のものであるというように、二人の聖性には自ずから差が存在する。それ故薫が「恥づかしき」人物とされ、

女性に「拒否」されるのに対して、匂宮は「恥づかし」と評されることすら無いのも、さほど奇異には当たらない。いわば女性に「恥づかしく」思われ、「拒否」されるのは、主人公としての条件のようなもので、だからこそ光源氏は一番その人数が多いのだと思われるが、では何故そういう男性は「拒否」されねばならないのだろうか。段を改めて考察を進めてみよう。

七

本節ではこれまで、源氏物語に於ける「拒否する」女性の全てを取り上げ、その共通性を剔抉してきたが、そうすると聖性、すなわち主人公性の強い男性ほど女性に「拒否」されやすいということになってしまいそうである。普通に考えればこれはおかしな話であるが、やはりそこには理由がある。大君の場合から先ず見ていこう。

次に掲げる引用文に象徴的に現れているように、大君の場合に特徴的なのは、薫を「こしらへ」ようという表現である。

P 中納言(薫)の、とざまかうざまに言ひ歩きたまふも、人の心を見むとなりけり、心ひとつにもて離れて思ふとも、こしらへやる限りこそあれ、ある人のこりずまに、かかる筋のことをのみ、いかでと思ひためれば、心より外に、つひにもてなされぬべかめり、(中略)なほ我だに、さるもの思ひに沈まず、罪などいと深からぬさきに、いかで亡くなりなむ……

(総角⑤三〇〇頁)

中の君と結ばれた匂宮は、本心では宇治に通いたいのだが、身分柄なかなかそれが出来なかった。そこで薫と一計を案じ、紅葉狩りを口実として宇治を訪れるが、思わぬ大人数となったために、やはり八宮邸を訪ねることが出来ない。そこで泣く泣く通りすぎることになるのだが、そんなこととは知らない宇治の姫君達、特に頭でしか男女関係を捉えられない大君の方は、あらぬことまで色々と考えて苦しむ。この部分はそれが薫にまで向けられたところで、傍線を付したように、ここにも「こしらふ」がある。

先にも述べたように、この薫を「こしらへ」ようというのは大君の心中に非常に多く見られる表現で、総角巻一卷の中でも、複合動詞まで含めて四例数えることが可能である。特にPではもう「こしらへ」る限界で、これ以上生きていると「心より外に」「もてなされ」るに違いないから、そうならないうちに死にたいというのだから、如何に大君が薫との関係に於いて主導権を握りたがっていたかが痛切に知られるであろう。そしてこの女性の主導権、言い換えれば主体性というのが、聖性を持つ男性が「拒否」される主たる原因だと思われるのである。

これまで辿ってきたように、空蟬から始まって、「拒否する」女性というのは皆、相手が嫌いだからではなく誇りからそれを行っていた。しかも彼女たちが望んだのは、つかず離れずという大変利己的な形の関係であり、紛れもなくそれは、自分が主体性を持ち続けたいという欲求に他ならない。だがそれは、相手と一定の距離を保っている時のみ可能なのである。何故なら、彼女たちの相手は、如何なる貴顕をも屈服させるほどの聖性を有した、この物語の主人公たちだからで、その貴顕よりも卑小かもしれない彼女たちは、彼らに近づきすぎると、ちょうど日の光のもとでは全ての星が見えなくなるように、自分という存在を失ってしまうことを本能的に察知しているからである。そのため彼女たちは、ぎりぎりの抵抗を続けるのだが、その際自己への思いに深く沈潜する。これが、「拒否する」女性に「身」の用例が多い理由であり、明石御方や落葉宮のように、このタイプの女性で

も、結婚すると途端にそれが減少する(3)理由だと思われる。そしてこれがまた、「拒否する」女性がこれほど繰り返して描かれねばならなかった所以であったのでもなからうか。すなわち、女性という存在を深く突き詰めるにはこのタイプを描くのが一番なのであり、おそらくそれ故、このタイプには、初期の女性でもしばしば続編の女性、特に浮舟を先取りしたような表現が見られる。例えばそれは、第二段で取り上げた空蟬の心の表現や、「人がらのたをやぎたるに、強き心をしひて加へたれば、なよ竹の心地して、さすがに折るべくもあらず」というその様子(帚木①一〇一〜二頁)、或いは「いさりせし影わすられぬ篝火は身のうき舟やしたひきにけん」という歌を詠んだ明石御方(薄雲②四六六頁)のことである。第二段でも述べたように、最初の問題は後に詳しく述べるところがあるので基本的にはここでは省略するが、その究極の形は浮舟の心理表現に見受けられるし、浮舟ばかりとは限らないが、彼女もまたかぐや姫の姿を色濃く映していることは有名な話である。また、明石御方の歌について言えば、確かにこれは源氏と結ばれた後のことではあるけれども、六条院に引き取られる直前、言い換えれば、明石御方が源氏と距離を有しているぎりぎりのところの歌であり、しかも、これだけ長い源氏物語に於いても、「うき舟」という単語は、浮舟自身が詠んだ歌(浮舟⑥一五一頁)とこれの唯二つしかないのであるから、やはりそこには何らかの関係性を読み取らざるを得ない。尤も、早くに高橋亨が看破したように、「明石の君は自己の存在を「浮き(憂き)舟」ととらえきっているのではない」(14)という面は確かにあるのだが、第二段でも述べたように、それは空蟬の心理描写も同様である。つまり、様々な試行を繰り返しながらも、究極の自己意識の表現を目指すというのが、「拒否する」女性の連鎖を辿ることによって見えてくるものなのである。

八

本節では「拒否する」女性の連鎖を、究極の自己表現を獲得するための試行として捉えてきたが、その中には遂にその男性と結ばれてしまった者もいる。そこで最後にはそれについても一言しなければならぬであろうが、それはさしたる大事とも思えない。何故なら、この時代の女性に、最後まで男性に抗い続けるための、如何なる手段があったのだろうか。人妻という、一見確たる立場を有する空蟬でさえ、夫の死後には、結局源氏の庇護下に入ってしまった。朝顔ぐらいの身分と格式、しかも中年の源氏という理想的な分別ある理解者でも持たない限り、大君のように死にでもしなければ、彼女たちに逃れる術はなかったように思われる。それ故、結婚したかどうかには、それほど厳密な線は引けないのであり、藤田の調査結果にも、時折「拒否する」女性以外が混じっているのだと思われるが、考えようによつては、たとえ一旦でも「拒否する」ことが出来た女性よりも、最初から男性の庇護下に置かれ、反抗することもままならない女性が自己意識に目覚めた場合の方が、数段辛いと言えるかもしれない。そこで次節では、そういう女性たちについて考察してみることとする。

注(1) 完全に一致するわけではないが、上坂信男が説く「人脈」の方法というのが、

これに近いかもしれない。上坂信男『古代物語の研究』(笠間書院 昭46)参照。

(2) 藤井貞和「タブーと結婚」(『源氏物語の始源と現在』——定本) 冬樹社 昭

55)。

(3) 秋山虔「源氏物語の世界形成」(『国文学』 昭47・12)、増田繁夫「空蟬と夕

- 顔——処世のかしこさとつたなさ——」（『源氏物語の探求』五 風間書房 昭55）、同「品定まれる人、空蟬」（『講座源氏物語の世界』一 有斐閣 昭55）。
- (4) 概ね、注(3)の増田の論の前者によったが、他に、「浮舟の出家」（『源氏物語と和歌 研究と資料』武蔵野書院 昭49）も参照した。
- (5) 藤田加代「『世』意識と『身』意識からみた不幸観」（『「にほふ」と「かをる」風間書房 昭55）。
- (6) 玉上琢彌『源氏物語評釈』第一卷四七〇頁（角川書店 昭39）。傍点は原文のまま。
- (7) 『源氏物語講座』第四卷 各巻と人物Ⅱ（有精堂 昭46）大君・中の君の項。
- (8) 三谷栄一「源氏物語における物語の型」（『源氏物語講座』第一卷 有精堂 昭46）。
- (9) これのみ「世間の女性、具体的には六条御息所」と注釈され、本節ではこれに賛同することになるわけだが、その後、その注釈者達に鈴木日出男が加わった完訳日本の古典では「御息所をさす」、新全集では「具体的には六条御息所をさす」とあるから、今でもこの解釈であるかどうかは微妙である。
- (10) 篠原昭二「結婚拒否の物語序説——朝顔の姫君をめぐって——」（『へいあんぶんがく』 昭43・9、日本文学研究資料叢書『源氏物語Ⅳ』 有精堂 昭57所収）が、この機微は詳しい。
- (11) 今井源衛「女三の宮の降嫁」（『源氏物語の研究』 未来社 昭37）、後藤祥子「皇女の結婚 落葉宮の場合」（『源氏物語の史的空間』 東京大学出版会 昭61）。
- (12) これに関しては、母の一条御息所の言葉ではあるが、「ただ人だに、すこしよろしくなりぬる女の、人二人と見る例は心憂くあはつけきわざなるを、ましてかかる御身には、さばかりおぼろけにて、人の近づききこゆべきにもあらぬを」（夕霧④四三五〜六頁）という証言がある。
- (13) 因みに、明石御方の「身」「身のほど」の全用例の八割弱（心中表現量でも約八割）、落葉宮の場合は全用例（心中表現量では約九八パーセント）が、結婚前の卷々に存在する。
- (14) 高橋亨「闇と光の変相——源氏物語の世界」（『源氏物語の対位法』 東京大学出版会 昭58）。

第三節 「忌避する」女性の連鎖

一

前節で論者は源氏物語に繰り返し登場する「拒否する」女性達を取り上げ、彼女達の「拒否」理由は自己同一性に関わるもので、その証拠に彼女達は皆一様に「身」「身の程」意識が強いという旨のことを、藤田加代の論(1)を援用しつつ述べた。しかし、「拒否する」女性達のみでは、藤田が「身」意識が多い女性として挙げる紫上・六条御息所・宇治中の君・浮舟等の女性が含まれないことになる。このうち中の君については、例えば前章第二節の2でも掲げた、次のような箇所象徴される如く、確かに「身」意識の個数こそ多いものの、その深刻度は極めて薄く、他の女性達とは一律に論じられないと考える。

A 幼きほどより、心細くあはれなる身どもにて、……このふしの身のうさ、はた、言はん方なく、限りとおぼゆるわざなりけり、ひたすら世に亡くなりたまひにし人々よりは、さりとも、これは、時々もなかはとも思ふべきを、今宵かく見棄てて出でたまふつらき、来し方行く先みなかき乱り、心細くいみじきが、わが心ながら思ひやる方なく心憂くもあるかな、おのづからながらへば、など、慰めんことを思ふに、さらに姨捨山の月澄のぼりて、夜更くるままによるづ思ひ乱れたまふ。松風の吹き来る音も、荒ましかりし山おろしに思ひくらぶれば、いとのだかになつかしくめやすき御住まひなれど、今宵はさもおぼえず、椎の葉の音には劣りて思ほゆ。

山里の松のかげにもかくばかり身にしむ秋の風はなかりき

(宿木⑤四〇三〜四頁)

波線を付したように、この部分だけで中の君の「身」意識は三箇所も認められるが、傍線部のように、最後にそれらは語り手により揶揄され、決して深刻になっていかないのである。大体中の君は、頭でしか男を知らない大君とは異なり、当初から或る意味楽観的である。

B 正身は、たまさかに対面したまふ時、限りなく深きことを頼め契りたまへれば、さりともこよなうは思し変はらじと、おぼつかなきもわりなき障りこそはものしたまふらめと、心の中に思ひ慰めたまふ方あり。(総角⑤二九九頁)

匂宮は中の君と結ばれても、身分柄なかなか宇治には通えないのだが、やつと紅葉狩を口実に訪れるよう画策したところ、夕霧に察知されて邪魔をされ、やむなく素通りした後の中の君の気持ちを引用した。引用文の後、「ほど経にけるが思ひいれたまはぬにしもあらぬに、なかなかにてうち過ぎたまひぬるを、つらくも口惜しくも思ほゆるに、いともものあはれなり」と確かに続くのだが、所詮「思ひいれたまはぬにしもあらぬ」にであり、これが原因で病の床に臥し、やがて衰弱死してしまう大君とは雲泥の差がある。そんな中の君の「身」意識が増え出すのは、夕霧六の君との結婚で匂宮の足が再び遠ざかり、その隙を狙って薫が言い寄り、そうした運命を疎ましく思うようになってからであって、内心では男主人公に惹かれつつも、余り近寄ると自分を失いそうな恐怖を覚えることにより、適度な距離を保とうとする「拒否する」女性の論理とは、これまた異なるのである。

しかもそれらをひっくり返して、中の君は最後に次のような境地に達する。

C……わが身のありさまは、飽かぬこと多かる心地すれど、かくものはかなき目も見つ

べかりける身の、さははふれずなりにけるにこそ、げにめやすきなりけれ、……

(東屋⑥七〇頁)

引用は、縁談に破れ、娘が消沈しているだろうと心配した母・中将の君により、異母姉・中の君の許に預けられた浮舟に、そうとは知らない匂宮が言い寄り、やつとの事で難を逃れた浮舟を慰めようと中の君が自分の部屋に招き、浮舟を見た中の君が抱いた感慨であるが、見ての通り中の君はここで、今までの全ての苦勞を肯定してしまっている。正に究極の樂觀主義といったところである。これは恐らく前章第二節の2で述べたところをまた別の側面から証するものと思われるが、いずれにせよ中の君の「身」意識の多さは単に個数だけで、それほど問題とはならないことは、これらによって明らかであろう。

しかし残りの女性達については、このような単純な図式は成り立たない。では前節のよくな考え方が間違っていたかと言うと、そんなことはない。最初に名前を挙げた中の君以外の女性達にはまた別様の論理が透き見えるからである。その最も顕著な例と思われる紫上から見ていこう。

二

紫上の「身」意識の集中は女三の宮降嫁時に始まる。この現象がなかなか興味深く思われる所以は、紫上が生きた人間らしくなってくるのは朝顔巻からと良く言われる(2)からである。だがその巻には「身」意識の用例はない。つまり「身」意識に限定すれば、そうした表現が発生するのは脅威が現前してからと言えるのであり、以下その意味性へと迫っていくのだが、先ずはその初例と思われるものから見ていこう。

D 心の中にも、かく空より出で来にたるやうなることにて、のがれたまひがたきを、
憎げにも聞こえなさじ、わが心に懼りたまひ、諫むることに従ひたまふべき、おのが
どちの心より起これる懸想にもあらず、堰かるべき方なきものから、をこがましく思
ひむすぼほるるさま世人に漏りきこえじ、式部卿の宮の大北の方、常にうけはしげな
ることどもをのたまひいでつつ、あぢきなき大将の御事にてさへ、あやしく恨みそね
みたまふなるを、かやうに聞きて、いかにいちじるく思ひあはせたまはむ、など、お
いらかなる人の御心と言へど、いかでかはかばかりの隈はなからむ。今はさりともと
のみわが身を思ひあがり、うらなくて過ぐしける世の、人笑へならむことを下には思
ひ続けたまへど、いとおいらかにのみもてなしたまへり。(若菜上④五三〜四頁)

引用したのは源氏が初めて女三の宮のことを紫上に告げ、拍子抜けするほどあっさり承諾の返事を得た後の紫上の心中を語る箇所で、波線部分が「身」という語を含むところであるが、「わが身を思ひあがり」という表現は、直接的には「身」意識の表白となっていないことは言うまでもない。しかし、「おいらかなる人の御心と言へど、いかでかはかばかりの隈はなからむ」という、紫上には珍しい表現とも相俟って、世間体を気にする様等、「拒否する」女性の「誇り」の表現とかなり類似するものであることは理解いただけるのではあるまいか。そして、こうした紫上の「身」意識は、紫上が初めて女三の宮と対面した直後のEを経由して、頂点とも評すべきFへと達する。

E 対には、かく出で立ちなどしたまふものから、我より上の人やはあるべき、身のほどなるものはかなきさまを、見えおきたてまつりたるばかりこそあらめなど思ひ続けられて、うちながめたまふ。手習ひなどするにも、おのづから、古言も、もの思はしき筋のみ書かるるを、さらばわが身には思ふことありけりとみづからぞ思し知らるる。

(中略)

うちとけたりつる御手習を、硯の下にさし入れたまへれど、見つけたまひてひき返し見たまふ。手などの、いとわざとも上手と見えで、らうらうじくうつくしげに書きたまへり。

身に近く秋や来ぬらむ見るままに青葉の山もうつろひにけり

とあるところに、目とどめたまひて、

水鳥の青羽は色も変はらぬを萩の下こそけしきことなれ

など書きそへつつすさびたまふ。

(若菜上④八八〜九〇頁)

F「のたまふやうに、ものはかなき身には過ぎにたるよそのおぼえはあらめど、心にはぬもの嘆かしさのみうち添ふや、さはみづからの祈りなりける」とて、残り多げなるけはひ恥づかしげなり。

(若菜下④二〇七頁)

両方とも有名なところなので、くだくだしい説明は不要と思うが、Eは手習により己の意識下のものを自覚させられる場面で、三本目の波線が恐らくその具体相である。そしてFは、いわゆる「六条院の述懐」⁽³⁾のうちの一つで、光源氏が己の半生を振り返り、幼い時から人より優れた身ではあったけれども、それに比例するかのようには悲しい目にも多く遭ってきた、しかしあなたには須磨の別れの他にはそうした目を見せた覚えがないから、まるで親元で一生過ごしたかのように安泰であったでしょうという意のことを言ったあと紫上が、これもこの人に於いては珍しく、不満の色を見せたところである。言うまでもなく「祈り」という語は難解⁽⁴⁾で、的確な訳はなかなかしづらいが、紫上の必死さだけは伝わるであろう。「頂点」と評した所以である。そして、そうした「祈り」を持たざるを得なかった理由が波線を付した部分であろうが、それを具体的に述べたのがEの一本目の波線、すなわち紫上の寄る辺無さであろう。その「寄る辺無さ」が極まったものが、次に掲げる紫上発病の描写と思われる。

G対には、例のおはしまさぬ夜は、宵居したまひて、人々に物語など読ませて聞きたまふ。かく、世のたとひに言ひ集めたる昔語どもにも、あだなる男、色好み、二心ある人にかかづらひたる女、かやうなることを言ひ集めたるにも、つひによる方ありてこそあめれ、あやしく浮きても過ぐしつるありさまかな、げに、のたまひつるやうに、人よりことなる宿世もありける身ながら、人の忍びがたく飽かぬことにするもの思ひ離れぬ身にてややみなむとすらん、あぢきなくもあるかな、など思ひつづけて、夜更けて大殿籠りぬる暁方より、御胸をなやみたまふ。

(若菜下④二二二頁)

一本目の波線に「げに、のたまひつるやうに」とある如く、これはFの光源氏の言葉と直結している。その言葉を一応は肯定しながら、しかし二本目、「人の忍びがたく飽かぬことにするもの思ひ離れぬ身にて」自分は終わってしまうのか。換言すればそれは、直前にある「あだなる男、色好み、二心ある人にかかづらひたる女、かやうなることを言ひ集めたるにも、つひによる方ありてこそあめれ、あやしく浮きても過ぐしつるありさまかな」であるが、結局、どんな女でも最後は「寄る辺」というものが出来るはずであるのに、自分に限っては無い、それが「あぢきない」(『絶望的・岩波古語辞典の「あぢきなし」の語義による)と思ったことが紫上発病の原因と描かれている。すなわち結婚してもなお続く、もしくは「ものはかなき身」で結婚したことにより一層深まった「寄る辺無さ」が紫上を追い詰めた第一義であったように読めるのである。逆に言えば、そうしたものを描

きたかったが故に、紫上のこれらの描写はあるのではないか。それは、六条御息所・浮舟の「身」意識も視野に入れた時により明確になってくると思われる。先ず六条御息所から見てみよう。

三

六条御息所の「身」意識の初出は葵巻である。これは恐らく、それ以前の夕顔巻等では、もし物の怪の正体が御息所であれば、それは特例として、その存在は語られるけれども、心中までは描写されることがないためであると思われる。換言すれば御息所は、紫上とは異なり、心中描写が開始されると同時に「身」意識が語られ出すことになる。

H ものも見で帰らんとしたまへど、通り出でん隙もなきに、「事なりぬ」と言へば、さすがにつらき人の御前渡りの待たるるも心弱しや。笹の隈にだにあらねばにや、つれなく過ぎたまふにつけても、なかなか御心づくしなり。げに、常よりも好みととのへたる車どもの、我も我もと乗りこぼれたる下簾の隙間どもも、さらぬ顔なれど、ほほ笑みつつ後目にとどめたまふもあり。大殿のはしるければ、まめだちて渡りたまふ。御供の人々うちかしこまり心ばへありつつ渡るを、おし消たれたるありさまこよなおぼさる。

影をのみみたらし川のつれなきに身うきほどぞいとど知らるる

と、涙のこぼるるを人の見るもはしたなければ、目もあやなる御さま容貌のいとどしう出でばえを見ざらましかばと思さる。
(②二三〜四頁)

お分かりかと思うが、有名な車争いの直後、葵上方の下人の乱暴により、ぼろぼろになった車の姿を隠すこともならず、また傍線を付した二箇所にも表されているように、愛する源氏の姿を見たいという欲望にも勝てず、高貴で誇り高い御息所が泣きながら源氏を見守るといふ凄まじい場面である。特に前者の傍線部末尾にある「心弱し」は、ここで分析している女性達全てに該当するキーワードかと思われるが、説明の都合上、それについては後述することとしたい。

これを嚆矢として、生き霊になった時にも我が身を「うし」、「うとまし」と観じ(葵②三五頁・四二頁)、その正体を源氏に知られて京に居づらくなり、伊勢に下ることを決心したものの、いざ源氏が旅の調度を送ってくると、途端に迷いが生じる場面では「あさましき身」(賢木②九一頁)、須磨に下った光源氏に伊勢から便りを寄こす時には「罪深き身」(仏教を禁じられた伊勢斎宮にすることも無論あるが)「言ふかひなきはわが身」(須磨②一九四頁)、第二章第三節でも引用したように、娘の秋好を光源氏に託す時にも「かひなき身」「うき身」(濡標②三一頁)、そして興味深いことに物の怪になった後にも「いみじき身」等(若菜下④二三七頁)、御息所の場合は生前、死後を問わず、ほぼ全体に亘って「身」意識が散りばめられていると言って良い。これは御息所が絶えず苦しむ存在として造型されているからという言い方も勿論出来るが、先ほども述べたように、浮舟の「身」意識も視野に入れた時、また別様の解釈も可能なように思われる。続いて浮舟のそれを見てみよう。

浮舟の場合は紫上と同様、登場の半ばくらいから「身」意識が始まる。

I この人はた、いとけはひことに、心深く、なまめかしきさまして、久しかりつるほどの怠りなどのたまふも言多からず、恋し悲しと下り立たねど、常にあひ見ぬ恋の苦しさを、さまよきほどにうちのたまへる、いみじく言ふにはまさりて、いとあはれと人

の思ひぬべきさまをしめたまへる人柄なり。艶なる方はさるものにて、行く末長く人の頼みぬべき心ばへなど、こよなくまさりたまへり。思はずなるさまの心ばへなど漏り聞かせたらむときも、なのめならずいみじくこそあべけれ。あやしう、うつし心もなう思し焦らるる人をあはれと思ふも、それはいとあるまじく軽きことぞかし。この人にうしと思はれて、忘れたまひなむ心細さは、いと深うしみにければ、思ひ乱れたる気色を、月ごろに、こよなうものの心知りねびまさりにけり、つれづれなる住み処のほどに、思ひ残すことはあらかしと見たまふも、心苦しければ、常よりも心とどめて語らひたまふ。

「造らす所、やうやうよろしうしなしてけり。一日なむ見しかば、ここよりはけ近き水に、花も見たまひつべし。三条宮も近きほどなり。明け暮れおぼつかなき隔ても、おのづからあるまじきを、この春のほどに、さりぬべくは渡してむ」と思ひてのたまふも、かの人の、のどかなるべき所思ひまうけたりと、昨日ものたまへりしを、かかることも知らず、さ思すらむよ、とあはれながらも、そなたになびくべきにはあらずかしと思ふからに、ありし御さまの面影におほゆれば、我ながらも、うたて心憂の身やと思ひつづけて泣きぬ。

(浮舟⑥一四三〜四頁)

相手が「拒否」される男性の一人の薫であるとは言え、傍線を付した箇所のように、「拒否する」女性の心理を思わせるような所なので少し長く引いてしまったが、それについては後に述べよう。場面は心ならずも匂宮と関係を持ち、しかも匂宮も都に迎えることを約束してくれた直後に薫が訪ねてきた時の浮舟の様で、二度出てくる「この人」は言うまでもなく薫、「ありし御さま」は匂宮のことである。お分かりのように、浮舟の「身」意識は薫と匂宮との三角関係が成立した直後に登場する。それが、我が身を「憂し」と観ずる所以であり、この傾向は手習巻の最後の用例まで変わらない。

この現象は、これ以前の浮舟が、紫上と同様、人形のように据えられて、ほとんど心中を描写されることがないので無論関係しているのであるが、何やら興味深い共通点ではある。しかも子細に考えるとこれは六条御息所とも共通すると言える。何故なら御息所はこの二人とは異なり、詳細に語られる葵巻から既に、葵上との三角関係が成立しているからである。そんなことを言うと、それ以前の夕顔の場合も、やはり三角関係ではないかと思ふ向きもあるかもしれないが、自分の素姓さえ隠して夕顔の許に通っていた光源氏が、惟光以外の人間にその存在を明かしたとは考えられないし、百歩譲って御息所がその存在に気づいていたとしても、夕顔自身も素姓を隠していたから、世間に流布していたと思われる夕顔の身分情報から考えれば、当事者の心情はともかく、当時の常識がこれを三角関係と認めたか否かは限りなく疑問なのである。だとすれば先ほどの事象は、源氏物語で「拒否する」女性の他に「身」意識が多出する女性は、全て三角関係成立時からその意識が始まると言い換えることが出来る。では、それは何故なのか。それに答えるには、この三人に共通するもう一つの要素を視野に入れる必要があるであろう。

四

ここで論じている「身」意識が多出する三人の女性に共通するもう一つの要素とは、これらの女性もやはり一旦は男主人公を拒絶しているということである。紫上の、「うたて、例ならぬ人のかく近づきたまへるは恐ろしうて、「寝なむといふものを」とて強ひてひき入りたまふ」(若紫①二四三頁)は、子供っぽい恐れであるから論外としても、有名な「男

君はとく起きたまひて、女君はさらに起きたまはぬ朝」の箇所には次のようにある。

「かかる御心おはすらむとはかけても思しよらざりしかば、などてかう心憂かりける御心をうらなく頼もしきものに思ひきこえけむ、とあさましう思さる。」

昼つ方渡りたまひて、「なやましげにしたまふらむはいかなる御心地ぞ。今日は暮も打たでさうざうしや」とてのぞきたまへば、いよいよ御衣ひき被きて臥したまへり。人々は退きつつさぶらへば、寄りたまひて、「などかくいぶせき御もてなしぞ。思ひの外に心憂くこそおはしけれな。人もいかにあやしと思ふらむ」とて、御衾をひきやりたまへれば、汗におし漬して、額髪もいたう濡れたまへり。「あな、うたて。これはいとゆゆしきわざぞよ」とて、よろづにこしらへきこえたまへど、まことにいとつらしと思ひたまひて、つゆの御いらへもしたまはず。「よしよし。さらに見えたてまつらじ。いと恥づかし」など怒じたまひて、御硯あけて見たまへど物もなければ、若の御ありさまや、とらうたく見たてまつりたまひて、日ひと日入りゐて慰めきこえたまへど、とけがたき御けしきいとどらうたげなり。

(葵②七一〜二頁)

引用文末が「いとどらうたげなり」となっているので何となく微笑ましくなってしまうが、ここに紫上の源氏拒絶が描かれていることは疑いもあるまい。しかも同じ箇所を見れば、紫上のこの不機嫌はかなり続いたことが予測され、これが一体いつ終わったのか、また何が原因であったと考えられるかは、既に本論文第二章第二節で紫上の経済的不如意と推定した。勿論これが正しいか否か確定することは出来ないが、一つの可能性としてはあり得よう。そしてそのように考えると、既に引用した、浮舟の心中を語るIの二本目の傍線部にも、類似のことが描かれていたのが、俄に気になってくるはずである。無論これは、ともに宮家の娘ではあるが、本妻の子ではないという、二人の境遇の近さにも関わっている。しかし、源氏物語の最後、夢浮橋巻という非常に変則的な形ではあるが、浮舟もやはり薫を拒絶していることを思う時、何やら気になる類似ではある。だが浮舟の場合については、説明の都合上、後述することとしよう。

残った御息所は、後に六条院秋の町となる区画を源氏に残すほどであるから経済的不如意など無いし、現存する源氏物語には御息所が源氏を拒絶している所など一見描かれてはいないから、これら二人とは別類のように見えるかもしれない。しかし、源氏と御息所との出会いを描く本居宣長の『手枕』では、「つねに心ふかきさまを見え聞こえ給へど、女君は、なつかしからんなさけも、今はあいなくおぼさるれば、人づての御いらへはしたなからぬほどにてやみなんとおぼしとりて、さらに御心はゆるぐべうもあらざりけり」(引用は筑摩書房『本居宣長全集』別巻一(昭51)の、第四卷(昭44)の『手枕』の解題に依れば最終形態であるらしい荒木田尚賢手写本に依る。五六七〜八頁)という状態で二年ほどいたとある。これは単なる宣長の想像ではあるまい。何故なら、同じく第四卷の解題にもあるように、『手枕』は源氏物語のあちこちを切り取り、モザイクのようにはめ込んだ作品だからで、この場合もそれらしき箇所は、原文にも見出せるのである。

K 六条わたりも、とけがたかりし御気色をおもむけきこえたまひて後、ひき返しなめならんはいとほしかし。されど、よそなりし御心まどひのやうに、あながちなることとはなきも、いかなることにかと見えたり。

(夕顔①一四七頁)

引用したのは六条御息所が実体として物語に登場する、ほとんど初の場面であり、この後、御息所の女房である中将の君と源氏が朝顔の花に絡めて歌のやりとりをするという有

名な箇所でもあるが、傍線を付したように、御息所は初期に於いては源氏を拒絶していたことが、そこに明確に語られているのである。勿論これは、当初源氏物語にはそのような場面が存在したが、失われてしまったのだ等と言おうとしている訳ではない。軽々には言えない問題だが、通説通り、そのような場面は初めから無かつたし、御息所の場合は、むしろ描かれていないことにこそ意味があると考えるのが現在の論者の立場だが、特に後半については後に述べよう。

このように見てくると、本段最初に述べたように、これらの女性も男主人公を一旦は拒絶したということについては納得されたと思うが、前節で分析した「拒否する」女性と決定的に異なるのは、本節第三段まで見たように、そこで「身」意識が述べられている訳ではないということである。そしてこれが、一旦拒否しながらも結局は男主人公と結ばれてしまうという、一見すると似たような境遇でありながら、明石御方や落葉宮をこのグループに入れなかった所以であり、六条御息所が源氏を拒絶する場面は敢えて書かれていないのだと推定する所以でもある。前者から説明しよう。

明石御方や落葉宮の場合は、男主人公と結ばれる際、あれほど「身」意識に苦しむ「拒否」の姿勢を見せながら、一度結ばれてしまうと、そんな意識はほとんど見られないどころか次のような箇所まである。

L 「さも、いとやむごとなき御心ざしのみまさるめるかな。げに、はた、人よりことにかくしも具したまへるありさまの、ことわりと見えたまへるこそめでたけれ。宮の御方、うはべの御かしづきのみめでたくて、渡りたまふこともえなのめならざめるは、かたじけなきわざなめりかし。同じ筋にはおはすれど、いま一際は心苦しう」としりうごちきこえたまふにつけても、わが宿世はいとたけくぞおぼえたまひける。やむごとなきだに、思すさまにもあらざめる世に、まして、立ちまじるべきおぼえにしあらねば、すべて、今は、恨めしきふしもなし。
(若菜上④一三二頁)

M 右大臣も、「めづらしかりける人の御おぼえ宿世なり。故院だに、朱雀院の御末にならせたまひて、今はとやつしたまひし際にこそ、かの母宮を得たてまつりたまひしか。我は、まして、人もゆるさぬものを、拾ひたりしや」とのたまひ出づれば、宮は、げにと思すに、恥づかしくて御答へもえしたまはず。
(宿木⑤四七五頁)

L は明石御方、M は落葉宮の例である。L は明石女御が後の今上帝の東宮となる男の子を出産した時に、紫上と我が身を比較して抱いた御方の感慨で、傍線を付したように、「宿世」ではあるが自分を「たけく」思い、「すべて今は恨めしき節もなし」と全肯定までしてしまふ。周知の如く「幸ひ人」と呼ばれるのは明石尼君であるが、要は御方も幸せになりすぎたのである。しかしこうなると、「身」意識の深まりなど期待するべくもないことも明らかである。またMの傍線部は、囲碁の賭物にかこつけて今上帝が女二の宮を薫に賜ったのを見た夕霧が、薫をうらやむ部分に点描される落葉宮の姿であり、諸注はここを、落葉宮が心底恥ずかしがっているように取っている。体面を何より重んずる貴族の反応としては、こう取る方が自然なのかもしれないが、だとしたら夕霧は、面と向かって本人に当てこすりを言うほどサディストなのだろうか。しかも落葉宮は、雲居雁と月の半ばを分けるほど夕霧が愛している女性のはずである。となればこれは、夫婦間の軽い冗談と捉える方が正しいように思われる。だとすれば、夕霧の冗談に恥ずかしくて答えられない落葉宮は、必ずやうつむいて微笑んでいたであろうことは想像に難くない。もしそれが正解な

ら、落葉宮もまた夕霧と結ばれて幸せになってしまったのであり、やはり「身」意識の深まりなど期待できないのである。換言すれば、「拒否する」女性の描写の主眼は、男主人公と結ばれる以前（勿論朝顔や大君のような場合は、こうした言い方は適切ではないが、それが永続している状態と捉えることは可能はずである）にこそあるのであり、この節で扱っている、男主人公と結ばれた後にそれが始まる女性達とは異なるのである。ただこう言うのと聊か問題となるのは空蟬であろうが、彼女の場合、確かに源氏と結ばれてから「身」意識が深まる訳だが、一度きりの関係であって、ここで扱っている女性達のように関係が持続している訳ではないし、受領の妻という空蟬の立場を考慮すれば、これ以外の始発の形があり得たとも思えないから、例外とするには当たらない。また、そういう書き分けが意図されていたからこそ、源氏と結ばれる以前の六条御息所の拒絶場面は敢えて描かれなかったのだし、紫上その場面も、極めて曖昧な形に留まるのだと推定する。但し、拒絶の要素を全く描かなければ、こうした類同性を見て取ることが困難なので、この二人の場合はほとんど形骸化しているとは言え、そうした描写が存在するのだと思う。

さて、こうした推定が正しいとすれば、源氏物語には、「拒否する」女性とは別に、結婚後の苦悩を主題とする女性達のグループがあることになる。それを仮に「忌避する」女性達と名付けると、その存在意義は、結婚後の女性の苦悩、特に、もう一つの共通項である三角関係の苦悩を描くことにある。しかし、単純な三角関係なら、他にも類例がありそうなので、「忌避する」女性の真の意義を考えるには、紫上と浮舟には共通して見られた、もう一つの共通項、経済的不如意についても目を配る必要がある。だが、そこでも述べたように、もう一人の六条御息所には、経済的不如意など明らかにない。ではそれをどう捉えれば良いか。段を改めて追求してみよう。

五

前段でも述べたように、六条御息所の経済的不如意等は物語のどこにも書かれていないばかりか、むしろ彼女は裕福であったように読める。だが、その代わりと言っては何だが、御息所の場合は別の要素がある。そのヒントをくれるのは、これまた後代の、しかも源氏物語を漫画化した作品『あさきゆめみし』である。この中には御息所を表すキーワード的科白として「より多く愛した者が負けなのです」という言葉が二回出てくる。一つは、原作で言う賢木巻の源氏と御息所が最後の逢瀬を持つ場面（講談社 mini コミックス第3巻（昭57）九五〜六頁）で、「……わたくしは負けたのです……けっして負けてはならぬ恋だったのです……あなたに会って……魅かれていったときから……わたくしはわたくしに負けていたのです……。……より多く愛した者が負けなのです。きつとあなたもいつかおわかりになる……。」という形。そしてもう一つはそれと呼応するように、柏木巻の女三の宮出家後の場面で、「いかが……？いまこそあなたにも わたくしの味わった苦しみがおわかりになったはず……多く愛した者が負ける……その苦い敗北の味……。」と御息所の物の怪が語るのだ（第9巻（昭64）七三頁）。このように、極めて印象深い場面で、しかも明らかに呼応していることより、『あさきゆめみし』を貫く性格が見えるから、「キーワード的」と呼んだのであるが、その言葉の真意は、実は未だに読み解けていない。しかし、恋愛を男と女の争いのように捉え⁵⁾、愛することは相手に屈服すること、換言すれば相手に弱みを握られることだと言っていることのみは間違いあるまい。このように考えてくると、それは経済的不如意と極めて近いと思うのである。尤も、このような科白は

所詮原作には無いのだから、無視してしまうことも勿論可能である。しかし、『あさきゆめみし』を『手枕』と同列に論ずることには異論を挟む向きも当然あるだろうが、論者は、優された翻案家が描くことには、原作にそう思わしめるだけの何かがあると考える。そして『あさきゆめみし』は、源氏物語の漫画が数ある中で、繰り返し研究対象とされる⁶⁾ことから明らかのように、疑いもなく優れた翻案なのであり、したがってここで扱っている事柄も、やはり原作に見出せると思うのである。それは例えばKとして掲げた部分もそうであろうし、『細流抄』が源氏物語随一と称える御息所の歌「袖ぬるるこひちとかつは知りながら下り立つ田子のみづからぞうき」(葵②三五頁)もそうであろう。つまり、六条御息所には確かに経済的不如意など無かったが、その代わり「心弱さ」という弱みがあるのであり、換言すれば「忌避する」女性とは、皆一様に弱みを有するために、男の言うことを聞かざるを得なかった女性達なのではあるまいか。そして、それを以て何を描きたかったかは、「拒否する」女性・空蟬の末路が語っているように思われる。

Nかのあさましかりし世の古事を、聞きおきたまへるなめりと恥づかしく、「かかるありさまを御覧じはてらるるより外の報いはいづこにかはべらむ」とて、まことにうち泣きぬ。

(初音③一五七頁)

周知の如く、帚木巻での登場以来、義理の息子の河内守に好色な目で見られていた空蟬は、関屋巻末での夫の死後、遂に河内守に言い寄られ、それを避けるために出家したと語られたきり長く物語に登場しなかったが、六巻も離れた前巻の玉鬘巻末で、如何なる経緯か不明⁷⁾だが、源氏の邸である二条東院に引き取られていると明かされる。そしてこの場面となる訳だが、源氏が昔、空蟬に冷たくされたことを多少当てこすって、「……思し知るや。かくいと素直にしもあらぬものをと思ひあはせたまふこともあらじやはとなん思ふ」(同頁)と言ったことに対する答えがこれである。

もし、このままこの手の描写が続いていけば、空蟬も「忌避する」女性のうちに入ったかもしれない。しかし実際は、空蟬の登場はこれが最後で、以後このような描写は存在しないから、そうはなっていないのである。ここにも先ほど述べた書き分け——「拒否する」女性は男主人公と結ばれる以前、「忌避する」女性は男主人公と結ばれた後がメイン——というのが生きているように思われるが、逆に言えば、「忌避する」女性と「拒否する」女性は極めて近い存在(これが、Iのように、「忌避する」女性の描写にも「拒否する」女性の要素が見受けられる理由)なのだが、後者は前者と異なり、心強く己を貫き通すことが出来なかった(＝男主人公に負けた)が故に、男主人公と結ばれた後の苦悩を描くことを主眼として造型された女性達と纏めることが出来よう。

六

以上、源氏物語には「拒否する」女性達の他に「忌避する」女性達という一群が存在し、両者は極めて近い存在ではあるが、「忌避する」女性達は「拒否する」女性達とは異なり、己を貫ききれなかったために、男主人公と結ばれた後苦悩する姿を描くことを主眼として造型された女性達であることを粗々説明してきたが、まだ一つ問題が残っている。それは、他の女性達とは異なり、浮舟が「忌避」しているのは男主人公と結ばれた後、つまり通常とは逆ということである。しかしこの理由は、ここまでの論理を認めれば容易に見えてくるであろう。何と言っても浮舟は、源氏物語最後のヒロインなのであり、長歌の五七七にしる、物語の「とぞ(本に(は)べめる)(或いは)となむ(語り伝へたる)」にしる、

最後というのは、それを示す特殊な形をするものなのである。しかも浮舟は、恐らく源氏物語一と言って良いほど弱い存在であり、その彼女が、今にも崩れそうになりながら「忌避」し続けている。一体いつまで頑張れるのか。既に本論文第一章第二節の最後でも述べたように、源氏物語は末尾を開きつつ完結する物語なのである。

注 (1) 藤田加代 『世』意識と『身』意識から見た不幸観「『にほふ』と『かをる』風間書房 昭55)。

(2) 例えば秋山虔 「紫上の変貌」(『源氏物語の世界』 東京大学出版会 昭39)等。

(3) 阿部秋生 『光源氏論発心と出家』(東京大学出版会 昭54) 中の用語。

(4) 新全集には正しく、「祈り」は「命」の誤写かと考えたいほど難解」という頭注(二八)を付するし、それを踏まえた原岡文子「紫上の「祈り」をめぐる」(『源氏物語の人物と表現 その両義的展開』 翰林書房 平5) 等もある。また、最新の注釈である『源氏物語の鑑賞と基礎知識』34(至文堂 平16)では、鑑賞欄に長い解説を書く(一八七頁)。

(5) 『あさきゆめみし』にはまた、朝顔の結婚拒否の理由として、朝顔の母が、夫である兵部卿官が他の女性の許に通うのを表面的には笑顔で送り出しているながら、素顔を隠して戦場に赴いたという陵王の舞を深夜密かに舞っているのを目撃し、平安の世では女子もまた、素顔を隠して夫婦という「戦場」に赴かなければならないことを悟り、「女子にはまことそのような生きかたしか許されぬのでございませうか……？」という疑問を抱いたためであるとも語られている(第6巻(昭60)一四頁)。

(6) 例えば『源氏研究』第4巻(翰林書房 平11)などでも、唯一『あさきゆめみし』作者の大和紀だけ対談を特集している。なお、拙稿「大和紀『あさきゆめみし』——現代の源氏物語絵巻を探る——」(物語研究会編『物語——その転生と再生』 有精堂 平6)も参照のこと。

(7) 源氏と空蟬の仲を知っていたのは空蟬の弟の小君だけだから、源氏が如何なる理由で自分が空蟬を引き取ることの正当性を世間に納得させたかは、不明としか言いようがない。或いはこの辺りにも「作為」が存在するのかもしれない。

第四節 まとめ

以上、源氏物語には「身」意識（＝個の意識）を描くことを眼目とする女性として、「拒否する」女性達と「忌避する」女性達の二群が存在すること。前者は男性主人公と結ばれる前のそれを描くことが主眼であり、己の誇り（＝自意識）を保つために、男性主人公と適度の距離を保ちつつ関係を続けたいと描かれることを特徴とし、後者は逆に、男性主人公、換言すれば己、に敗北してしまったために、結ばれたあと必ず三角関係に巻き込まれることを特徴とし、その苦悩によって目覚めていく「身」意識を描くことを主眼とすること、等を明らかにしてきた。

しかし、最後にもう一点付け加えたいことは、これら二つの「連鎖」は決して別個に存在するのではないということである。それは、第二節の末尾で述べた、「拒否する」女性・明石御方と「忌避する」女性・浮舟との意外に近い繋がり、或いは、前節で述べた「拒否する」女性と「忌避する」女性の基本的な類似、さらには、「忌避する」女性の存在意義を暗示するかのような、「拒否する」女性・空蟬の末路の描写等からも既に窺えていたはずであるが、その最たる証拠は、夕霧巻で、実際にはまだその事実はなかったのだけでも、夕霧と落葉宮は既に関係があると、源氏も含めた世間皆が誤解した時、源氏が自分の死後の紫上に対する不安を口にしたのを聞いた紫上が抱く有名な感慨だと思う。

女ばかり、身をもてなすさまもところせう、あはれなるべきものはなし、もののあはれ、をりをかしきことをも見知らぬさまにひき入り沈みなどすれば、何につけてか、世に経るはええしさも、常なき世のつれづれをも慰むべきぞは、おほかたものの心を知らず、言ふかひなきものにならひたらむも、生ほしたてけむ親も、いと口惜しかるべきものにはあらずや、心のみ籠めて、無言太子とか、小法師ばらの悲しきことにする昔のたとひのやうに、あしき事よき事を思ひ知りながら埋もれなむも言ふかひなし、わが心ながらも、よきほどにはいかで保つべきぞ、と思しめぐらすも、今はただ女一の宮の御ためなり。
(④四五六く七頁)

かつて丸山キヨ子により光源氏の心中とされ⁽¹⁾、後藤祥子による賛同⁽²⁾を得ながらも、最近の『人物で読む源氏物語』⑥紫の上(平17)に至るまで、注釈が訂正された節がないので本論文でも通説に従うが、ここで紫上は「個」の意識を超え、広く女性一般についての意識へと思いを馳せていることは、これまでにも縷々説かれている。しかし、ここで改めて注目したのは、この感慨が、「忌避する」女性でその時正に苦悩していた紫上が、これまたその時正に苦悩していた「拒否する」女性の落葉宮の窮状を仄聞した時に誕生したように描かれているということである。つまりこれは、三従の教えではないけれども、結婚前も駄目、結婚後も駄目ならば、女性の幸福というのは何処にあるのかという状況が極めてリアルに我々の眼前に展開されてこそ、初めて説得力を有する性質のもので、それを生み出すことが、「拒否する」女性と「忌避する」女性とをそれぞれ「連鎖」させ、且つそれを統合した目的であったのではないかということなのだ。

それが、源氏物語に於いて複数の人物を「横」に「連鎖」させて一つのテーマを表す方法を説明した第二章、同じく複数の人物を「縦」に「連鎖」させて一つのテーマを表す方法を説明した第三章の次に本章を置き、このような標題とした所以なのだが、複数人物を配置する方法は、言うまでもなくこれで全てで、第四のバリエーションがあるはずもない。

しかし、ここまでの叙述が自ずと明かしているように、作者が最初から意識していたか、それとも途中で気づき方法化したかは定かでないが、源氏物語の人物表現の特徴としても一つ、「負の力の重視」というものが挙げられると思う。そこで次章ではそれについて述べ、この物語の表現方法を纏めてみたい。

注 (1) 丸山キヨ子「紫上小論——紫上理解に関わる三ヶ所の解釈を中心に——」『香椎潟』昭57・3。

(2) 後藤祥子「手習いの歌」『講座源氏物語の世界』第九集 有斐閣 昭59) 二
三二頁。

第五章

負の力の発見

第一節 序―物語を動かす負の力

源氏物語末摘花巻と玉鬘巻の冒頭は、周知の如く非常に類似している。

A 思へどもなほあかざりし夕顔の露に後れし心地を、年月経れど思し忘れず、ここもかしこも、うちとけぬかぎりの、気色ばみ心深き方の御いどましさに、け近くうちとけたりし、あはれに似るものなう恋しく思えたまふ。 (末摘花①二六五〜六頁)

B 年月隔たりぬれど、飽かざりし夕顔をつゆ忘れたまはず、心々なる人のありさまどもを、見たまひ重ぬるにつけても、あらましかばとあはれに口惜しくのみ思し出づ。右近は、何の人数ならねど、なほその形見と見たまひて、らうたきものに思したれば、古人の数に仕うまつり馴れたり。須磨の御移ろひのほどに、対の上の御方に、みな人々聞こえわたしたまひしほどよりそなたにさぶらふ。心よくかいひそめたるものに女君も思したれど、心の中には、故君ものしたまはましかば、明石の御方ばかりのおぼえには劣りたまはざらまし、さしも深き御心ざしなかりけるをだに、落としあぶさず取りしたためたまふ御心長さなりければ、まいて、やむことなき列にこそあらざらめ、この御殿移りの数の中にはまじらひたまひなまし、と思ふに、飽かず悲しくなむ思ひける。

(玉鬘③八七〜八頁)

従来この類似の理由は、二つの巻がともに玉鬘系に属するものだからとか、或いはその延長上のことと捉え得るのだが、後者が前者を引用したためとかいう解答しか与えられてこなかったように思う。このうち、第一の解答は微妙で、源氏物語の構造を捉える上で、若紫系と玉鬘系の二系に分けてみるという視点はなお有効と考えるが、そこに成立が絡んでくるとすると、全ての巻がその二系に截然と分類し得るのかどうかはやや躊躇いがあるし、源氏物語が一括して発表されたのでないとすれば、如何にして先に発表された巻々の間に後から発表されたとされる巻々を組み込み得るのかが、私見では如何様にしても説明できないため、本論文に於いてはその考えは採用しないことにしたい。また、第二のものは、この用例に限っては特に異論を挟むことは出来ず、それも一つの解答であると考え、本節がこれから徐々に明かしていくように、この二例と通底すると思われる用例は、源氏物語中に散見されるのであり、ここではそれらを統一的に捉え得る新しい視点が提出できないかということを目標としてみた。

一

前段で触れた新しい視点のヒントは、実は平成14年度に宮崎大学大学院教育学研究科修士課程を修了した私の研究室の大学院生・原沢真知男が与えてくれたものである。「源氏物語には異様に死者が多いのではないか」との彼の言を受けて、私に作成したのが次の表であるが、確かにそうであることが分かる。

竹取物語	1	落窪物語	4	宇津保物語	12	源氏物語	26
狭衣物語	7	夜の寝覚	3	浜松中納言	3	とりかへばや	0

細かい議論に入る前に、この表の作り方を説明しておけば、対象は平安時代の長編作り物語に限った。と言うのは、鎌倉以降のいわゆる擬古物語まで同列に論ずることには聊か躊躇いがあるし、如何に虚構性を含むとは言え、事実を根底に有する歌物語や歴史物語を同じく扱うことも、また同様に躊躇われるからである。さらに、いずれにせよ零であるか

ら大筋に於いては変わらないはずだが、堤中納言物語を除外したのも、瞬間を切り取ることに眼目がある短編物語は、よほど特殊な事情のない限り、その短時間内に死者を描くことは考えられず、やはり同一には扱えないと判断したからである。加えて、住吉物語を数えていないのは、周知の如く今伝わるのは改作本のみで、通説ではそれは鎌倉時代成立とされているからであり、各々の作品に於ける死者の数も、余りに端役まで入れると却って意味を失うかもしれないので、年立に出てくる主要人物程度に止めてある。

このように色々と制約のある表ではあるが、或る程度の傾向は窺えるとして用いていくと、先にも述べたように、源氏物語の死者が飛び抜けて多いことに気づく。無論この一因として、源氏物語の扱う時間が約七十年と、極めて膨大であることも考えられるが、約九十年という、それと同等か或いは長いとも言える時を扱う宇津保物語の死者が、その半数以下ということを考えれば、それが主因とも言いつらい。それを解く最初の手がかりは、私見によれば宇津保物語の登場人物の一人である嵯峨院にある。

嵯峨院は、物語の終了まで崩御されることはないが、その時七十二歳である。現代から見ればさほど驚くべき数字ではないかもしれないが、当時とすればやはり長命な方だと思ふし、しかも崩御されることはないのだから、これ以上になったことは確実である。それ故宇津保研究者の間でも、嵯峨院の長命さは印象に残ると聞くが、換言すれば、源氏物語と異なり、宇津保物語は余り人の死なない物語と言えるのではなからうか。そしてこの傾向は、独り宇津保物語に止まらないことを示すのがその表だと思ふのだが、もう少し詳細に見ていこう。

先ずは順番に従って前期物語からといきたいが、その時一番興味深いのは落窪物語で、その数字のほとんどは、次に引用するように、僅か三頁ほどの間に集中する。

C 三の君を中宮の御匣殿になむなしたてまつりたまへりける。帥は任はてて、いとたひらかに四の君の来たるを、北の方、うれしと思したり。ことわりぞかし。かく栄え

たまふをよく見よとや神、仏も思しけむ、とみにも死なで、七十余までなむいましける。(中略) 死にたまひて後も、ただ大臣のいかめしうしたまひける。衛門は宮の内侍になりけり。のちのちのことは次々。(中略) 祖父大殿うせたまひにけれども、「我、思はば、ななし落としそ」とかへすがへすのたまひければ、わづらはしく、や

むごとなきものになむ、弟の君をば思ひたまひける。(中略) 面白は、病重くて法師

になりければ、音にも聞こえぬなるべし。かの典葉助は蹴られたりしを病にて死にけり。「これかくておはするも見ずなりぬるぞ口惜しき。などてあまり蹴させけむ。しばし生けておいたべかりける」とぞ男君のたまひける。女御の君の御家司に和泉守

なりて、御徳いみじう見ければ、むかしのあこぎ、今は内侍のすけになるべし。「典侍は二百まで生ける」とかや。(卷之四・三四一〜三四二頁)

傍線部ア、ウ、エが、ここで死んだ、或いはすぐに死んだわけではないけれども、死を語られた人物と数えられよう。物語の最後に至ってほとんど駆け込みのようにこれだけの死が集中して語られることのみでも充分興味深い現象と言えようが、特に注目すべきはウで、周知の如く典葉は、男主人公・道頼の家来に、復讐の一環として卷之二末尾で蹴られ

るが、それから二巻も経ったこの場所で漸く死が語られることになる。無論典葉はさほど重要人物というわけでもないから、主筋を語るに忙しく、その死を語る暇がここまで無かったということも考えられようが、他の傍線部を考えれば、そうとばかりも言えないように思われる。何故なら傍線部Aでは、「七十余」という数字もさることながら、その前に「とみにも死なで」とあるし、傍線部Eに至っては何と二百歳、換言すればこれらは、「死ぬことは死んだがなかなか死ななかつた」となるうし、傍線部Iについては、重病にはかかったらしいが、結局「死んだ」とは書かれていないからである。

約言すれば落窪作者は、登場人物をなるべく死なさないという方針を持っており、それ故このような現象が惹起されたと思うのだが、その際一つだけ押さえる必要があるのは波線部で、一目すれば明らかな如く、これは傍線部Eと重複している。想像を逞しくすれば、「二の巻にあるべし」（四二〇頁）と、これと類似した末尾を持つ堤中納言物語の「虫愛づる姫君」のように、落窪も最初は波線部で完結しており、それ以後は後の者が書き継いだという可能性も一応は考慮しなければならぬと考えるが、新編日本古典文学全集の頭注の如く、「作者はここで物語を終末させる意図をもっていたが、実在の見聞の筆録という物語の様式に従って主人公の生活が継続していることを示そうとしたもの」（三四二頁頭注五）とする見方もあるし、たとえ別人の筆によるとしても、波線部以前の死者は、傍線部Aの継母・北の方とその夫で、やはり七十まで生きたとされる落窪姫の実父・源忠頼の二人しか存在しないから、先の結論はそう大きく修正する必要はないと思量する。

以上、前期物語を宇津保、落窪と見てきたが、残った竹取もほぼ同様で、問題となりそうな二箇所を次に列挙する。

D さて、かぐや姫のかたちの、世に似ずめでたきことを、帝聞しめして、内侍中臣のふさ子にのたまふ、「多くの人の身をいたづらになしてあはざなるかぐや姫は、いかにばかりの女ぞと、まかりて、見て参れ」とのたまふ。（五六頁）

E この内侍、帰り参りて、この由を奏す。帝、聞しめして、「多くの人を殺してける心ぞかし」とのたまひて、止みにけれど、……（五八頁）

そのまま引用すると余りにも長大になるので便宜上二つに分けたが、お分かりの如くこれは実際に人が死ぬところではなく、五人の求婚者を退けたことを聞いた帝がかぐや姫に興味を抱き、内侍中臣のふさ子に見に行かせるという一連の場面である。それぞれ傍線を付した如く、「多くの人の身をいたづらになし」とか、「多くの人を殺してける」などと繰り返される割には、実際に死んだのは、燕の子安貝を採ろうとして失敗した石上中納言だけ⁽²⁾というのはいやほや奇妙で、これは恐らく、作品上の効果としては多くの人を死なすべきであったが、実際に描くのは何となく憚られたという、心的規制のようなものを想定せざるを得ないのである⁽³⁾。そしてそれは「死」に対するタブー意識に由来するものではないかと想像されるのだが、もとより確証があるわけではない。ただ、見てきたように前期物語には、人の死の描写を避けようとする傾向があるとだけは言えると思うし、後期物語に於いても基本的には変化していないことを示すのが先の表だろう。しかし、説明の都合上それについては後に回し、次にはいよいよ源氏物語を見る。

二

源氏物語の作者を紫式部と断じることについては聊かの躊躇いがあるが、通説に従ってそう見ておくと、「死」のタブーなどに囚われるタイプでないことは、紫式部集の有名な

次の歌からも窺えよう。

F

忽に、もののけつきたる女のみにくきかたかきたるうしろに、おにになり
たるものめを、こぼふしのしぼりたるかたかきて、をとこはきやうよみ
て、もののけせめたるところを見て

なき人にかごとはかけてわづらふもおのがごころのおににやはあらぬ

返し

ことわりやきみがこころのやみなればおにのかげとはしるくみゆらむ(4)

尤もこれは蛇足のようなもので、作者は誰であつても構わないのだが、源氏物語の「死」に関する描写は、単に数が多いというのみならず、A、Bの例もそうであつたように、落窪の如く話の終わりにではなく、むしろ始発に多いという特徴が指摘できる。そもそも全編の始発である桐壺巻の冒頭にしてからが源氏の母・桐壺更衣の死から始まるし、周知の如くその場面の描写は次のようにある。

G

「限りあらむ道にも、後れ先立たじと契らせたまひけるを、さりともうち棄てては、え行きやらじ」とのたまはするを、女もいとみじと見たてまつりて、

「かぎりとして別るる道の悲しきにかまほしきは命なりけり

いとかく思ひたまへましかば」と息も絶えつつ、聞こえまほしげなることはありげなれど、いと苦しげにたゆげなれば、かくながら、ともかくもならむを御覧じはてむと思しめすに、「今日はじむべき祈禱ども、さるべき人々うけたまはれる、今宵より」と聞こえ急がせば、わりなく思ほしながらまかでさせたまふ。(①二二〜三頁)

傍線部に桐壺更衣による光源氏立太子の無言の依頼を読みとるのは藤井貞和(5)だが、そうであればなおさら、たとえそうでなくとも、いわゆる潜在王権(6)実現の形で物語はその道筋を目指すのだから、ここはいわば源氏物語を源氏物語として始発させる重要な箇所、それがやはり人の死を発端とすることは、源氏物語の性質を考える一つの端緒となると思われる。特に新全集本では桐壺巻は十七頁から始まるから、僅かに五頁ほどで死を迎える桐壺更衣は、正に死ぬために物語に登場したと言つても過言ではなく、このような人物を創造しただけでも特筆に値しよう。何故なら、これに類似するものとしては、強いて考えれば継子ものの実母ぐらいが挙げられようが、それとて例えば落窪物語の場合は実母は最初から死んでおり、参考にしたと言えるかどうかは微妙である。

勿論この場に限つては、長恨歌の引用という面からでも説明できないことはないが、最初にも述べたように、本節では全ての場面を統合できる理論を立てられないかという立場を取るので今回は採らない。そしてそういう目で源氏物語を眺めれば、人の死が新たな物語の発端となっているのは、前述の如く、ここだけではないのである。本節の発端であつたA、Bの引用文にしてからが、夕顔の死を忘れられない光源氏が、それに代わる女性を新たに探し出すという話であつたし、その他にも例えば次のような箇所が挙げられるだろう。

ア

H 御わざなども過ぎて、事ども静まりて、帝もの心細く思したり。この入道の宮の御

母後の御世より伝はりて次々の御祈禱の師にてさぶらひける僧都、故宮にもいとやむごとくなく親しき者に思したりしを、おほやけにも重き御おぼえにて、いかめしき御願ども多く立てて、世にかしこき聖なりける、年七十ばかりにて、いまは終りの行ひ

をせむとて籠りたるが、宮の御事によりて出でたるを、内裏より召しありて常にさぶらはせたまふ。このごろは、なほもとのごとく参りさぶらはるべきよし大臣もすすめのたまへば、「今は夜居などいとたへがたうおぼえはべれど、仰せ言のかしこきにより、古き心ざしを添へて」とてさぶらふに、静かなる暁に、人も近くさぶらはらず、あはるはまかでなどしぬるほどに、古代にうちしはぶきつつ世の中のことども奏したまふついでに、「いと奏しがたく、かへりては罪にもやまかり当たらずと思ひたまへ憚る方多かれど、知ろしめさぬに罪重くて、天の眼恐ろしく思ひたまへらるることを、心にむせびはべりつつ命終はりはべりなば、何の益かははべらむ。仏も心ぎたなしとや思しめさむ」とばかり奏しきして、えうち出でぬことあり。

(薄雲②四四九〜四五〇頁)

これも有名な、実の父が光源氏であることを冷泉帝に夜居の僧が伝える場面だが、一読すれば明らかなく、厳密にはこの場面は人の死を描くわけではない。しかし傍線を付した部分から、これが藤壺の死と密接に関わる箇所であることは読み取れようし、特にイは重要と思う。源氏物語に於いてこの夜居の僧はここにしか登場しないが、それがこのように藤壺の死と関わりがあると明確に描かれているからである。無論正確にはこの表現は、病氣平癒のために呼ばれたことを意味しているようだが、当時の慣習から考えてこのような場合は、その葬儀にまで関わったであろうから、こうした言い方も可能と思量する。そしてこの夜居の僧の密奏により、自分の真の父を知った冷泉帝は、以後口には出せないけれども源氏を親として遇するようになる。換言すればこの時から光源氏の新たな栄華の形態が始まるのであるから、ここでも藤壺という人物の死が、新たな物語を領導していると言えるのである。そしてそれは続編になっても変わらない。次の例を見てみよう。

I「昔の御おもむけも、世の中をかく心細くて過ぐしはつとも、なかなか人笑へに軽々しき心つかふななどのたまひおきしを、おはせし世の御絆にて、行ひの御心を乱りし罪だにいみじかりけむを、今はとて、さばかりのたまひし一言をだに違へじと思ひはべれば、心細くなどにも思はぬを、この人々の、あやしく心ごはきものに憎むめるこそ、いとわりなけれ。げにさのみ、やうのものと過ぐしたまはむも、明け暮るる月日にそへても、御事をのみこそ、あたらしく心苦しうかなしきものに思ひきこゆるを、君だに世の常にもてなしたまひて、かかる身のありさまも面だたしく、慰むばかり見たてまつりなさばや」と聞こえたまへば、いかに思すにかと心憂くて、「いとこ

ろをのみやは、さて世にはてたまへとは聞こえたまひけむ。はかばかしくもあらぬ身のうしろめたさは、数そひたるやうにこそ思されためりしか。心細き御慰めには、かく朝夕に見たてまつるより、いかなる方にか」と、なま恨めしく思ひたまへれば、げにといとほしくて、「なほ、これかれ、うたてひがひがしきものに言ひ思ふべかめるにつけて、思ひ乱れはべるぞや」と言ひさしたまひつ。(総角⑤二四五〜二四六頁)

これも厳密には人の死を描く場面ではなく、父・八の宮の死後、迫ってくる薫を妹・中の君に譲るべく宇治大君が画策するという場面である。大君の薫拒否の理由については既に多くの論があり、論者もその驥尾に付したことがあるが、正直一筋縄ではいかない。ただ少なくとも物語に明示されているところは、傍線部Aにある如く、父の遺言に従うと

いうもので、それについては参考までに次に掲げ、その中心となると思われる部分に傍線を付す（本節の論旨とは直接には関わらない箇所なので通し記号は付さない）。

秋深くなりゆくままに、宮は、いみじうもの心細くおぼえたまひければ、例の、静かなる所にて念仏をも紛れなうせむと思して、君たちにもさるべきこと聞こえたまふ。「世のこととして、つひの別れをのがれぬわざなめれど、思ひ慰まむ方ありてこそ、悲しさをもさますものなめれ。また見ゆづる人もなく、心細げなる御ありさまどもをうち棄ててむがいみじきこと。されども、さばかりのことに妨げられて、長き夜の闇にさへまどはむが益なさを。かつ見たてまつるほどだに思ひ棄つる世を、去りなん後のこと知るべきことにはあらねど、わが身ひとつにあらざ、過ぎたまひにし御面伏せに、軽々しき心ども使ひたまふな。おぼろけのよすがならず、人の言にうちなびき、この山里をあくがれたまふな。ただ、かう人に違ひたる契りことなる身と思しなして、ここに世を尽くしてむんと思ひとりたまへ。ひたぶるに思ひしなせば、事にもあらず過ぎぬる年月なりけり。まして、女は、さる方に絶え籠りて、いちじるくいとほしげなるよそのもどきを負はざらむなんよかるべき」などのたまふ。

（権本⑤一八四く五頁）

ただ、単純にこれに従うということなら、Iの傍線部イにある如く、中の君も結婚してはいけないことになるはずで、その矛盾を中の君に突きつけられた大君は、I末尾にある如く「言ひさしたまひつ」、つまり反論できなくなることから、これが主因とは思えない。しかしこの機微を解明していくと別の論になってしまうので、それについては注（7）を参照していただき、当面は物語の表面のみ撫でていけば、これもまた八の宮という死者が物語を領導していくという形を取っている。そしてこれも周知の如く、この後その大君自身も亡くなり、薫はその面影に縛られ、新たな女性を求めていく。これについても既に説があるように、その女性は当初、浮舟ではなかった可能性もある。しかし、本節に於いてはそれもどうでも良いことで、ここでもやはり死者が物語を領導していくことが確認できれば良い。

紙幅の関係上ここでは五例しか紹介できなかつたが、私見によればこうした描かれ方は、全二十六例中、半数の十三例に上る。無論これは解釈によって揺れが生じようし、半数という数字も多いか否かは判断が分かれよう。しかし、該当しない半数の中には、竹河左大臣や蜻蛉式部卿官といった、限りなく端役に近いと思われる人物の死がその三分の一度含まれることや、前述した如く、前期物語には類似した例が皆無と言って良いほどであったことを考えると、論者は多いと判定する。では後期物語はと言えば、これも前述の如く、表の数字を見る限りでは前期物語と変わらない。

無論この数字が出た理由は、最長のとりかへばやでも約三十年、狭衣・浜松は約十年、夜の寝覚は約十五年と、源氏と比較すれば後期物語は皆一様に短時間しか扱わないことにもその一端が求められようし、寝覚・浜松の場合は欠巻が存在することにも由来しよう。特に寝覚の場合、この表で数えている三人の死は、全て現存部分には無いもので、或いは老閑白の死がその後の物語を領導する可能性を有するかも疑われるのだが、確認する術は無い。確認可能で類似するかと思われるものは浜松中納言物語の「死」だけだが、周知の如くこの作品のテーマは輪廻転生で、先ず死ななければ生まれ変わることも出来ないから、そのテーマに忠実であろうとすればこうした展開はいわば必然と言えよう。つまりも

し浜松中納言がそのテーマまで源氏物語のこの方法から発想したとするなら、それを受け継いだものとして数えられようが、当然の事ながらそれは、現段階では不明としか言いようがない。したがってこの、人の「死」をも物語展開の方法としてしまうことは、源氏物語固有の発想と言っても過言ではないと思うのだが、ではその着想は何処から得られたのか。次段ではそれに迫ってみたい。

三

源氏物語が人の「死」をも物語展開の方法とし得たのは、作者が物語を領導する力としてマイナスのエネルギーをも良く理解していたためと思う。前文後半については、薫と女三の宮を例としてこれから説明し、今ここでその詳細を示すわけにはいかないが、論の展開上結論のみを簡潔に述べておけば、既に指摘されている如く、正編の「きよら」から続編の「きよげ」への降格を典型として、薫は終始格下げされ続けることによって逆に物語を統括している節があるし、女三の宮は「幼い」という強烈な負性によって逆に六条院の破壊者たり得たと考えられるというものである。もしこの考えが正しいとすれば、「死」という、人にとつて最も大きいマイナスですら、方法として利用するというのは、この延長上のこととして捉えられるだろう。

しかし、前段末とやや矛盾する物言いを許していただければ、この発想の根底にあるものは、決して源氏物語固有のものではない。何故なら池田香代子の、「昔話は、ヒロインが一度逆境に落ち、しかるのち上昇して終わる」との言(8)を俟つまでもなく、貴種流離譚・継子いじめ譚等を見ても、物語に於けるマイナスエネルギーの重要さは疑うことの出来ないものだからである。否むしろ、これも池田の言、「現代のシンデレラは、ジェットコースターよろしく、上昇の後にもう一度逆境と上昇をくりかえす」が示唆する如く、物語の進展には常に何らかの負的要因が必要であることを思えば、物語を動かすものとは実は幸福等の正的なものではなく、この負的なものなのではないかということが、本章の意図なのだが、だとすれば、源氏物語のこうした傾向は、物語史全体から見れば決して突飛なものではなく、ただそれを方法として自覚していることのみが抜きん出ていると位置づけられると思うのである。

それではその実践例と思われる、女三の宮と薫について、次節以降で詳述してみよう。

注(1) 以下、源氏物語以外の散文作品の引用は全て小学館の新編日本古典文学全集に
より、巻名・頁数を付す。

(2) 五十嵐雅雄『竹取物語裏解』(明25)や井上頼文『竹取物語講義』(明26)のように、「多くの人」を五人の求婚者全員と見る説もあるが、「身をいたづらにな」すならともかく、Eのように「殺してける」となると、その見方は無理のよう
うに思うし、前者は「又死したるは石上もろたか(ママ。なお、原本は京都大学
所蔵の写本ということで未見。引用は、上坂信男『竹取物語全評釈 古注釈篇』
(右文書院 平2)中の翻刻による)一人なるを下文に多く人をころしてける心
そかしといへるなど眼をとめて見へし」と続き、結局良く分からない。後者はその部
分、前の箇所の繰り返しに近いので矛盾は生じていないが、五人が果たして多いかどう
かも問題であろう。なお、新大系や新全集も含め、管見の及んだ現代諸注では、「多く
の人」の内実に対する言及がない。

(3) 例えば蓬萊の玉の枝の話の最末尾「……御死にもやしたまひけむ、え見つけたてまつらずなりぬ。皇子の、御供に隠したまはむとて、年ごろ見えたまはざりけるなりけり」(二七頁)も、同様の表現としてみる事が可能なのではあるまいか。つまり、前文だけでは如何にも皇子が死んだという印象を読者に与えてしまふために、実は生きていたのだけれども、という描写を続けたのではないかと思ふのである。

(4) 引用は新編国歌大観による。

(5) 藤井貞和『源氏物語入門』(講談社学術文庫 平8) I 予言は実現するか 二ふたたび「桐壺の巻」について

(6) 深沢三千男『源氏物語の形成』第一編 光源氏像の形成をめぐって 第一章 光源氏像の形成 序説(桜楓社 昭47)。

(7) 本論文第四章第二節。

(8) 「大きな物語 VS 小さな物語」(『国文学』 學燈社 平成9年2月号)

第二節 負の力を有した主人公

1 女三の宮

一

言うまでもなく女三の宮は薫の母であるわけだが、薫と柏木の繋がりについて論じたものは多かったが、薫と女三の宮の関係を述べた論は少なかつたように思う。次項でも詳述する如く、これは薫に柏木の影が色濃く認められるためだが、それでは女三の宮の影は皆無かと言うと、無論そんなことはない。現に近年それについて触れられた二編の論文が管見に入った。藤田加代によるものと吉井美弥子のものである⁽¹⁾。

論題から窺えるように、藤田のそれは、源氏物語の人物に与えられた植物、特に木の花のイメージについて述べられたもので、用例が弱いのがやや気になるが、「源氏物語世界において、「柳」のイメージを具有する人物はわずか三人、源氏、女三宮、薫である」ことを指摘し、特に「薫に付与されたものは「梅」と「柳」のイメージ、匂宮は「梅」と「桜」のそれであり、「そうした意味では、それぞれに光源氏の後継者でありつつ、薫は女三宮、匂宮は紫上の、おのおの命脈を受けつぐものとして位置づけられている」とするのは、本論文第三章第二節の1とも触れ合うところがあり、興味深い。

一方、吉井の論は、その副題に示されている通り、主に続編における女三の宮の薫に対する影響について論述したものである。その最初と最後に位置する、「言わば薫の特質とされる出家への志向と現世的栄華の二つの要素が、いずれも女三の宮と深く結びついていることが明らかにされている」と、「薫の宇治における恋と挫折による彷徨とは、むしろ女三の宮の罪の報いを代わって引き受けているものとしてとらえるのではないだろうか」という指摘は大変示唆的だが、中心は続編における女三の宮関係の記事が薫の行動を如何に規制しているかという分析であって、本項の意図するものとやや異なる。節名にも示したように、本項ではむしろそれを、造型的繋がりと捉えようとするところに目標がある。

女三の宮の造型と言えば、その幼さが昔から第一に挙げられており、それについて述べた論文は枚挙に暇がないほどである。しかし近年はその反動によるものか、女三の宮はそれほど幼いわけではないと主張するものも出始めた。例えば武原弘や榎本正純によるものである⁽²⁾。もつと女三の宮の内面から物語を見ることが必要だという武原の主張には全面的に賛成だが、これらの論は幼いイコール悪という考えに囚われて、それを否定することに汲々としすぎている観がある。女三の宮が幼いということは本来に悪い意味しかないのかという疑問を投げかけるところに本項の眼目があるが、それを考えるには先ずその幼さが物語中ではどのように描かれているかを知る必要があるだろう。

二

この物語に於ける女三の宮の幼さの描かれ方を知るには、宮は幼い人物として一貫して強調されているわけではないという、榎本の指摘⁽³⁾が最初の手掛かりとなる。しかし、これを指摘するのは榎本だけではない。例えば池田節子も、鈴虫巻の独自性かという限定を付けながらも、やはり女三の宮の変貌を指摘している⁽⁴⁾。してみると、女三の宮の幼さが途中で消えてしまっていることは確実だが、その範囲は何処からか。

無論武原の如く、女三の宮は実は最初からそれほど幼くなかつたという意見もある⁽⁵⁾。

わけだが、歌の内容はともかくとして、それでは物語の叙述と矛盾するような気もするし、また武原が説く如く歌の贈答が宮の内面の深まりを示すならば、一つの例外を除いてそれは柏木との密通後に集中するのだから、その変貌が柏木との密通後だとする榎本の指摘と自ずと重なってこよう。

また、前に掲げた池田の意見も、榎本の意見と微妙にずれるのだが、池田がそのような限定を付けた理由も良く分かる。宮の変貌を確定するには様々な問題が絡むからである。と言うのは、柏木巻辺りで宮の変貌が始まるのは誰しも認めるところだが、それは六条御息所の物の怪が憑いたためとする、藤井貞和の有力な意見が存する⁽⁶⁾し、いずれも点景に過ぎないとは言え、幻巻以後でも、相変わらず幼い女三の宮の姿は描き続けられるからである。それゆえ池田は、前記のように限定したのだと思うが、同じ幼さの描写とは言っても、宮が中心的人物であった頃のものと同なる点描とでは自ずと重さが違うと思うし、特に続編の描写は、既に吉井が指摘した⁽⁷⁾ように、薫との兼ね合いが強いから、やはり意味合いを区別して考えるべきであろう。また、藤井の意見には何ら異を唱えることは出来ないが、つまるところは、これも女三の宮が変貌したことを示す描写には違いないとすれば、その範囲はやはり榎本の指摘に賛同したい。そしてそれは、女三の宮の性格を示す語の分布状況から見ても裏付けられるのである。

池田は女三の宮を特徴付けるものとして、「いはけなし」が十四例、「何心なし」が十例、「らうたげ・らうたし」が十四例、「かたなり」が三例、そして「小さし」などの小柄なことを示す言葉が多用されていることを挙げている⁽⁴⁾が、私に調査したところ、「何心なし」が幻巻・橋姫巻に各一例、「らうたげ・らうたし」が横笛巻に二例、「小さし」が柏木巻・鈴虫巻に各一例使用されている他は、これらの語は全て若菜上・下巻に集中している。また、池田が挙げた中には何故か「若し」「をさなし」等の語彙が無いが、これらを含めたより広い形容語の分布状況の表は、実は榎本の論⁽³⁾の中にある。榎本によれば、幼さを示す形容語とともに、「あて」「なまめかし」などの上品な美を示す語も使われているところに女三の宮の特徴もあるとのことだが、池田の挙げる数字と若干の相違はあるものの、若菜上巻から鈴虫巻まで、ほぼ均等に使用されている美点を示す語に対して、その幼さを言う語は、やはり若菜上・下巻に集中するという傾向は、その表からも指摘できるのである。

以上のことから、女三の宮の変貌は、榎本の説く如く、ほぼ柏木との密通頃からと見て間違いないと思われるが、では何故女三の宮が殊更幼いという記述は若菜巻に集中するかという点について、次段で少し検討してみよう。

三

女三の宮が幼いという記述が若菜両巻に集中すると言うと、それは実年齢が低いのだから当然だと考える向きがあるかもしれない。しかし、事はそう単純にはいかないのである。例えば、女三の宮が幼いという最初の記述は、自分亡き後の不安を語る朱雀院の言葉の中に、「その中に、後見などあるは、さる方にも思ひゆづりはべり、三の宮なん、いはけなき齡にて、ただ一人を頼もしきものとならひて、うち棄ててん後の世に漂ひさすらへむこと、いといたうしろめたく悲しくはべる」(若菜上④二〇頁)と出てくるが、ここには完訳日本の古典も、「その妹宮もいるのに、これを特に「いはけなき齡」とする点に注意」と注している⁽⁸⁾ように、理屈から言っても、また、長谷川政春も述べている⁽⁹⁾ように、

女三の宮の年齢である十三、四歳は、当時としては、さほど幼くはなかったのではないかという点に鑑みても、聊か不審が生じるところなのである。それだけではない。周知の如く若菜下巻には四年の空白期間があり、その間に女三の宮は二十歳を過ぎておはしなすに、なお「姫宮のみぞ、同じさまに若くおほどきておはします」(④一七八〜九頁)と描かれるのだ。単純な実年齢によるものではないことはこれで明らかであろう。

また、宮と同じく皇族で「幼い」姫君と言うと、末摘花の名前がすぐに浮かぶが、思考力のない姫君の典型のような彼女でさえ、「をさなし」という言葉で形容されることは、蓬生巻は勿論末摘花巻でも無く、末摘花巻でただ一度、源氏に何と答えて良いか分からないと言った時に、大輔命婦に「若々し」と言われる(①二八〇頁)のみなのである。すると、女三の宮がここまで徹底的に幼いとされるのは、これともまた違った意味合いを有するに違いない。

池田はそれを宮が朱雀院の娘であるところに求める(4)が、どうもそれには承服できない。何故なら、拙著第2部第2章第6節でも詳述したように、少なくともこの若菜巻では、朱雀院が光源氏に敗れるようには描かれていないと思うからである。そもそも若菜上・下巻とは、それぞれ光源氏・朱雀院に対する若菜の宴があることによる命名だが、それぞれの宴の行われ方は、割とすんなり催されてしまう源氏の宴に対して、延び延びになる朱雀院の宴という違いがある。以前はこれで朱雀院の源氏に対する敗北が決定的になると捉えられていたようだが、武者小路辰子の手により、若菜上巻の賀宴は実は源氏の力の衰えを示していると明かされた(10)からには、この現象は、むしろ朱雀院の源氏に対する優位性を示すと見られるはずである。ならば一体どう考えれば良いかと言えば、それを探るのには、既に多くの先学が辿った道ではあるが、個々の場面において宮の幼さがどのように描かれているかを、もう一度洗い直してみる他はないであろう。

女三の宮の幼さが最初に強調されているのは、言うまでもなくその婿選びの場面に於いてである。

A 姫宮のいとうつくしげにて、若く何心なき御ありさまなるを見たてまつりたまふにも、「見はやしたてまつり、かつはまた片生ひならんことをば見隠し教へきこえつべからむ人のうしろやすからむに、預けきこえばや」など聞こえたまふ。(④二七頁)

そしてこの直後にある、「六条の大殿の、式部卿の親王のむすめ生ほしたてけむやうに、この宮を預かりてはぐくまむ人もがな」(同頁)という朱雀院の希望に従って、二人の年齢差も省みず、宮は源氏のもとに降嫁することになっていくわけだが、その辺りの事情を森一郎は、「宮の幼稚な人柄から考えて、あのばあい源氏は最善最高の親代わりであった」と評している(11)。そこまで断言できるものかどうかはやや躊躇いも残るが、少なくとも論者は、作中人物の完全な自立を認める立場には立っていないので、この判断が朱雀院の錯誤であった(12)とは言えないだろうと思う。故に、ここは森のように、「若菜上巻のはじめ、宮の幼稚さということは、宮を六条院へ割りこませるための造型であった」と見る(11)べきであろう。

さてその次に女三の宮の幼さについて多くを語っているのは、これも言うまでもなく、夫となった光源氏である。

B 姫宮は、げにまだいと小さく片なりにおはする中にも、いといはけなき気色して、ひ

たみちに若びたまへり。かの紫のゆかり尋ねとりたまへりしをり思し出づるに、かれはざれて言ふかひありしを、これは、いといはけなくのみ見えたまへば、よかめり、憎げにおし立ちたることなどはあるまじかめりと思すものから、いとあまりもののはえなき御さまかなと見たてまつりたまふ。

(若菜上④六三頁)

女三の宮が紫上と同じく藤壺の血を引くと気づいて、思わず降嫁を受けてしまった源氏であつたが、宮を實際に引き取ってみると、同じ幼子とは言え、かつての若紫とは余りにも差が大きかつた。それを表すのがこの引用文の傍線アの部分であるが、続いての傍線イからは、源氏の悲しい諦めが聞こえてくる。すなわち、最愛の妻・紫上までも犠牲にして手に入れた女三の宮にはそれだけの値打ちがなく、手にしたものは実に小さかつたというわけである。

そして勿論、当の被害者である紫上も、女三の宮の幼さには苦勞させられている。

C 紫の上にも、御消息ことにあり。「幼き人の、心地なきさまにて移ろひものすらんを、罪なく思しゆるして、後見たまへ。尋ねたまふべきゆゑもやあらむとぞ。

背きにしこの世にのこる心こそ入る山道のほだしなりけれ

闇をはるけで聞こゆるも、をこがましくや」とあり。(中略) 御返りはいかがなど、聞こえにくく思したれど、ことごとしくおもしろかるべきをりのことならねば、ただ心を述べて、

背く世のうしろめたくはさがたきほだしをしひてかけな離れそ

(若菜上④七五〇六頁)

場面は、女三の宮の余りの幼さを心配した父・朱雀院が、源氏とは別に、紫上にも後見を依頼する手紙を送つたところである。本来敵同士とも言うべき別の妻にまで庇護を求める朱雀院の態度も異例だが、それを必要とした女三の宮の異常な幼さというものも充分心に留めておかなければなるまい。また、それに対する紫上の返歌も、この人には珍しく、若干の恨みも感じられるものである。それだけに、今度の女三の宮降嫁に対して、紫上が如何に内心面白からぬ思いを抱いていたかが窺えるというものだが、元来女三の宮の方には紫上に対する敵対心など無い。それどころか源氏の夜離れがあるうと、宮は一向平気なのである。

D 宮の御方にも、とみにえ渡りたまはず、こしらへきこえつつおはします。

姫宮は何とも思したらぬを、御後見どもぞやすからず聞こえける。わづらはしうなど見えたまふ気色ならば、そなたもまして心苦しかるべきを、おいらかにうつくしきもてあそびぐさに思ひきこえたまへり。

(若菜上④八六頁)

これは皇女の理想像なのかもしれないが、この場合宮の幼さがそれに大きく寄与していることは間違いない。すなわち宮の幼さもたまにはプラスに働くこともあるということなのであるが、無論それはマイナスとして働くことの方が多い。これを裏返せば、宮には他人に対する配慮が無いということだからである。

E いと幼げにのみ見えたまへば心やすくて、おとなおとなしく親めきたるさまに、昔の御筋をも尋ねきこえたまふ。中納言の乳母といふ召し出でて、「おなじかざしを尋ねきこゆれば、かたじけなけれど、分かぬさまに聞こえさすれど、ついでなくてはべ

りつるを。今よりは疎からず、あなたなどにもものしたまひて、怠らむことはおどろかしなどもものしたまはむなむうれしかるべき」などのたまへば、「頼もしき御蔭どもにさまざまに後れきこえたまはひて、心細げにおはしますめるを、かかる御ゆるしのはべめれば、ますことなくなむ思うたまへられる。背きたまひにし上の御心向けも、ただかくなん御心隔てきこえたまはず、まだいはけなき御ありさまをも、はぐくみたてまつらせたまふべくぞはべめりし。内々にもさなむ頼みきこえさせたまひし」など聞こゆ。「いとかたじけなかりし御消息の後は、いかでとのみ思ひはべれど、何ごとにつけても、数ならぬ身なむ口惜しかりける」と、やすらかにおとなびたるけはひにて、宮にも、御心につきたまふべく、絵などのこと、雛の棄てがたきさま、若やかに聞こえたまへば、げにいと若く心よげなる人かなと、幼き御心地にはうちとけたまへり。

(若菜上④九〇〜二頁)

かなり長く引いてしまったが、見て分かるように、紫上との最初の対面でも、宮は一言も発していず、すべて乳母が代弁している。勿論、最後の絵や雛の話などには何か返答したかもしれないが、少なくとも物語にはそのように書かれていないことに注意しなければならぬ。すなわち宮は、正妻ならば当然払うべき他の妻妾に対する配慮も払うことが出来ず、代わってそれをしなければならなかったのは、宮によって実質的正妻の地位を追われてしまった紫上だったわけである。そしてそのことは、この引用文に引き続き部分に良く表されている。

F さて後は、常に御文通ひなどして、をかき遊びわざなどにつけても疎からず聞こえかはしたまふ。世の中の人も、あいなう、かばかりになりぬるあたりのことは、言ひあつかふものなれば、はじめつ方は、「対の上いかに思すらむ。御おぼえ、いとこの年ごろのやうにはおはせじ。すこしは劣りなん」など言ひけるを、いますこし深き御心ざし、かくてしもまさるさまなるを、それにつけても、またやすからず言ふ人々あるに、かく憎げなくさへ聞こえかはしたまへば、事なほりてめやすくなんありける。

(④九二頁)

これらを見れば、女三の宮の幼さ故に紫上が如何に苦勞したかが窺えようが、しかもその宮と付き合うには、引用文Eに見られるように、自分のレベルを下げ、宮と同様幼くなることであつたとすれば、紫上の苦惱は如何ばかりであつたかは想像に難くない。してみると、若菜下巻で女三の宮が二品に叙せられ、源氏の渡りも徐々に二人とも同じくらいになった時の紫上の思い、「わが身はただ一ところの御もてなしに人には劣らねど、あまり年つもりなば、その御心ばへもつひにおとろへなん、さらむ世を見はてぬさきに心と背きにしがな」(④一七七頁)も、その幼い女三の宮に自分は負けるのかという思いも籠もっているかもしれない、その意味するところは深い。周知の如く、紫上は心勞のため最後は病に倒れるが、かく見てくれば、その遠因として女三の宮の幼さもまた数えられるのである。

さてその次に女三の宮の幼さの毒牙にかかったのは、これも言うまでもなく柏木である。宮の婿になることを望みながらも叶えられなかった柏木は、その後も諦められずに六条院を徘徊する。そして遂に自分の乳母の妹の娘である小侍従の手引きで女三の宮と会えるのだが、その時の柏木の心は、既に諸家の手により分析されているように、すっかり宮の幼さに翻弄されてしまっている。

G よその思ひやりはいつくしく、もの馴れて見えたてまつらむも恥づかしく推しはか

られたまふに、ただかばかり思ひつめたる片はし聞こえ知らせて、なかなかかけかけしきことはなくてやみなむと思ひしかど、いとさばかり気高う恥づかしげにはあらで、なつかしくらうたげに、やはやはとのみ見えたまふ御けはひの、あてにいみじく思ゆることぞ、人に似させたまはざりける。さかしく思ひしづむる心もうせて、いづちもいづちも率て隠したてまつりて、わが身も世に経るさまならず、跡絶えてやみなばやとまで思ひ乱れぬ。
(④二二五〜六頁)

しかし、こうしてやつとの思いで手に入れた女三の宮は、柏木に一言も答えてくれない。H「かう、いとつらき御心にうつし心も失せはべりぬ。すこし思ひのどめよと思されば、あはれとだにのたまはせよ」と、おどしきこゆるを、いとめづらかなりと思して、もの言はむとしたまへど、わななかれて、いと若々しき御さまなり。

(若菜下④二二八頁)

このように、変わらぬ宮の幼さにより、状況は一時ますます悪化の様相を呈するのだが、柏木が出ていくというのでほつとした宮が歌を詠み、辛うじてそれ以上には至らない。だが柏木の心には何か満たされぬものが残るのである。

いみじくも向田邦子脚本による『源氏物語』では、この部分は、「生まれた時から決めるのはみな父やまわりでした。ひな人形も衣裳も——夫も——(中略)ひとつぐらいは、自分で決めたい」と、女三の宮が柏木を抱きしめることになっている⁽¹³⁾が、まさにこのようであったら、どんなにか柏木にも救いがあったであろう。しかし、実際は、幼い女三の宮はそうした自己の意志などは抱くことはできず、柏木の傷はいつそう深まるというわけである。

だが、このような捉え方は余りに近代的であり、当時の男女間では最初は愛など無い方が普通であるという高橋和夫の主張もある⁽¹⁴⁾。が、もし仮にそうであったとしても、高橋の言う正しい対処方法、「内親王たる者は、こうして男が侵入して来る場合も予想して、侍女たちで守りを固めているべきであり、それを突破されたならば、自分は気高く応待し、その間に、愛情を男に感じたならば秘かに情を通じるべきなのである。(中略) そうでなかったら、ある段階で男を断ればいいのである」を、女三の宮は何れも採れなかったのだから、やはりその責は宮の幼さにあると言えよう。つまり、光源氏と同様柏木も、宮の幼さによって大きく傷つけられたことになる。

やがてこの事件は源氏の知るところとなるが、そのきっかけをなしたのは、これも周知の如く、柏木からの文を宮が源氏に発見してしまうからであり、その行にも宮の幼さは根深く絡んでくる。

小侍従が手紙を広げていったところに源氏が入って来られたので、宮は慌ててそれを「えよくも隠したまはで、御褥の下にさしはさ」む^(④二四八頁)。これだけでも充分幼い隠し方だと言わねばならないが、宮がその粗忽さを發揮したのはここだけではない。紫上が重体であったため、ずっと二条院に籠もりきりであった源氏は、女三の宮の具合も良くないとの知らせを受け、しぶしぶ六条院に帰って来る。最初からしぶしぶなのであるから、女三の宮が実は懐妊しているので元気が無かったのだと見とどけた源氏は、三日ぐらいで二条院に帰ろうとするのであるが、それを宮は引き止めてしまうのである。

I 夜さりつ方、二条院へ渡りたまはむとて、御暇聞こえたまふ。(中略) 例は、なまいはけなき戯れ言などもうちとけ聞こえたまふを、いたくしめりて、さやかにも見あ

はせてまつりたまはぬを、ただ世の恨めしき御気色と心得たまふ。昼の御座にうち臥したまひて、御物語など聞こえたまふほどに暮れにけり。すこし大殿籠り入りけるに、鯛のはなやかに鳴くにおどろきたまひて、「さらば、道たどたどしからぬほどに」とて、御衣など奉りなほす。「月待ちて、とも言ふなるものを」と、いと若やかなるさましてのたまふは憎からずかし。「その間にも」とや思すと、心苦しげに思して立ちとまりたまふ。

夕露に袖ぬらせとやひぐらしの鳴くを聞く聞き起きて行くらん

片なりなる御心にまかせて言ひ出でたまへるもらうたければ、ついゐて、「あな苦しや」とうち嘆きたまふ。
(若菜下④二四八〜九頁)

この時女三の宮はただ心細かっただけで、それをどうこう言うのはお門違いだという見方もあるかもしれないが、「若やかなる」、「片なりなる」(15)といった語の存在が問題なのである。しかも子細に見ればこれらの語は、実に興味深い使われ方をしている。まず、傍線部があることより、宮は普段は幼いさまを示すのに、ここではいつもと違っていたことが分かるが、それは「月待ちて」と言葉を発する辺りから変わってきたらしい。テキストとしてある小学館新編日本古典文学全集の頭注一五にも、「ここで本来の宮の姿にたち返る趣である」とある。すると、柏木との一件があつて、せつかく少しは成長したかと思われた女三の宮が、またもとの状態に戻ってしまうことよつて、この危機は呼び込まれてしまったのだと語られていることになる。さらに、源氏に手紙が発見された時、当の女三の宮は「何心もなく、まだ大殿籠れり」(若菜下④二五〇頁)と描かれることによつて、それは駄目が押されるのである。まことに「柏木事件を最悪の状態に導いたのは、女三の宮の人柄の幼稚さにあることを作者は語っている」(16)のである。しかし、このように見てくれば、女三の宮の幼さが最悪の状態に導いているのは、何も柏木事件だけではないことがわかる。これも柏木事件に限定してなされたものではあるが、「幼稚さ」ということが、事件を主導する役割を持ったのである」との森の評言(17)は、実は若菜巻全般にわたつて言えることなのである。そして、これこそが、宮がこの巻で特に集中的に幼いとされる理由であると思われる。

かくして女三の宮の幼さは、その六条院降嫁決定から始まつて、あらゆる事件に絡んで現れ、それを最悪の状況へと導くのに多大な効果を挙げていることが明らかとなつた。そういう意味では唯一例外として処理した幻巻の女三の宮像も、またややニュアンスが異なるものの、吉井が分析した続編のそれ(18)も、やはりその延長線上のものとして捉えられるかもしれないが、それではそれは如何なる意味を有するのか。次段ではそれについて考察を進めてみよう。

四

女三の宮が若菜巻の主人公として造型されたことは、その出自の紹介を巻冒頭に持つことより動かないと思う。では宮が何のために創造されたかと言えば、それは六条院世界を破壊するためであるということも、前段で辿ってきたところ等に鑑みても、大方の賛同を得られるであろう。だとすれば、その宮がいよいよ六条院にやつて来た時、次のような面白い記述があることにもまた気がつかねばならない。それは、宮が降嫁してきた所は、その直前で玉鬘が源氏に「若菜まゐりし西の放出」であつた(④六一頁)と、わざわざ語られることである。玉鬘こそが俗に言う六条院栄華と等価な存在であり、またそれ故にこそ

若菜上巻でいち早く源氏の賀を行ったのであることは、既に度々述べたところだが、女三の宮がその後継者であることを、いみじくもこの記述は明かしているわけである。それは、六条院世界を破壊するのに、例えば玉鬘がそのまま居残るといった形をとっては何故いけなかったかと言うと、その理由は若菜下巻の次の記述が示している。柏木の文を発見し、すべてを知った後の源氏が、玉鬘を思い浮かべる場面である。

J 右大臣の北の方の、とり立てたる後見もなく、幼くよりものはかなき世にさすらふるやうにて生ひ出でたまひけれど、かどかどしく労ありて、我もおほかたには親めきしかど、憎き心の添はぬにしもあらざりしを、なだらかにつれなくもてなして過ぐし、この大臣の、さる無心の女房に心あはせて入り来たりけむにも、けざやかにもて離れたるさまを人にも見え知られ、ことさらにゆるされたるありさまにしなして、わが心と罪あるにはなさずなりにしなど、今思へば、いかにかどある事なりけり。契り深き仲なりければ、長くかくてたもたむことは、とてもかくても同じごとあらましものから、心もてありしこととも、世人も思ひ出でば、すこし軽々しき思ひ加はりなまし、いといたくもてなしてしわざなり、と思し出づ。

(④二六〇〜一頁)

すなわち、このような事件を引き起こすには、玉鬘はあまりにも賢すぎたのであり、ここにも見られるように、たとえ同様な事件が起こっても、彼女はうまくそれを糊塗してしまい、かくも悲劇的結末には至らなかつただろうということなのである。そういう意味では紫上の場合もこれと同じである。既に高橋亨により、可能態としては、これ以前に夕霧と紫上の密通が存在したことが指摘され⁽¹⁸⁾、それは大方の支持するところとなつていと思うが、それが何故不発に終わったかという理由は、夕霧は最初から認識者として造型されているとか、理想的女性として造型されてきた紫上を汚すに忍びなかつたのだということぐらいしか、従来は言われてこなかつたように思う。それもまた一因であると思うのだが、完璧な藤壺のゆかりであつた紫上ならば、藤壺同様その密通事件を完璧に隠してしまつたと語らねば不自然であつたという可能性も否定できまい。つまり、この密通事件の主役は、完全な女性では駄目なのである。

こう見てくれば、女三の宮の幼さということとは、事態を徹底的に悪化させるという点で、むしろ必須の要件として働いているのが理解されたと思うが、さらに武者小路によれば、女三の宮の幼さには今ひとつの効用が指摘できるところである。それは源氏の理想性を失わせるという効果である⁽¹⁹⁾。確かに、それはDの引用文からも窺えるところではあるが、さらに如実に示されているところは、若菜下巻の六条院における女樂が果てた後の記述である。

K 「宮に、いとよく弾きとりたまへりしことよろこび聞こえむ」とて、夕つ方渡りたまひぬ。

我に心おく人やあらん、とも思したらず、いといたく若びて、ひとへに御琴に心入れておはす。「今は、暇ゆるしてうち休ませたまへかし。物の師は心ゆかせてこそ。いと苦しかりつる日ごろのしるしありて、うしろやすくなりたまひにけり」とて、御琴ども押しやりて大殿籠りぬ。

(④二二一頁)

傍線部の記述はまさに「いといたく若びて」であるが、さらに驚くべき事は、源氏が入ってきたにも拘らず、女三の宮は琴に熱中していて関心を払わなかつたということである。それゆえ源氏の冗談口となる訳だが、武者小路も言うように、今までこのような女人在

たであろうか。正にプレーボーイとしての源氏の権威も形無しといったところだが、ここまで来れば女三の宮の幼さが、他の人物より劣った性質というわけではなく、むしろ優れたものとして働いていることが見てとれよう。

つまり、六条院世界を完膚無きまでに破壊するには、玉鬘や紫上とは違った、徹底的な「幼さ」が必要欠くべからざる条件であったわけで、それ故その使命を帯びた女三の宮はそれにふさわしい人物として造型されたことになる。また、既に池田も指摘している(4)ように、女三の宮はしばしば小柄な人物として描写されるが、中でも若菜下巻の女楽の場面にある、「人よりけに小さくうつくしげにて、ただ御衣のみある心地す」(④一九一頁)という描写は、外見だけは立派だが中身の伴わない女三の宮を実に見事に象徴化したものだと思う。そこで比喩的表現を用いれば、玉鬘が抜けて言わば屋台骨だけ残った六条院世界を徹底的に破壊するには、その空洞部分に真空のブラックホールのような女性を据えるのが一番であったということなのである。それ故要請されたのが女三の宮のような女性であり、彼女は正に、「不吉な影のようなものである点に意義があるのである」(11)だった。

五

以上、女三の宮の幼さは、六条院世界を完璧に解体するためには、かえって他人に優る長所なのであり、宮はそうした徹底的に負性を帯びた主人公として造型されていることを粗々述べてきたが、実は負性を帯びた物語の主人公というのは宮が初めてなわけではない。「物語の出で来はじめの親」である『竹取物語』の主人公かぐや姫も月の都からの流人であったし、そういう意味では、『伊勢』『宇津保』『落窪』の主人公も皆何らかの意味で負性を帯びている。そして他でもない、この源氏物語の主人公光源氏にしてからが、更衣腹で帝になることは世人が許さないと重い負性を背負って出発したのである。だが、もし光源氏が生まれが良く、すんなり帝になれたとしたら、そもそもこの物語は存在したであろうか。前節あるいは本論文第三章第四節で、「幸福な者はストーリーを開拓していくエネルギーを失う」と言うのはこのようなことも踏まえてのことであるが、この傾向は時代が下っても変わらない。何故なら、平安後期物語においても、薫型の主人公は受け継がれていくが匂宮型の主人公は現れないからである。すなわち、何らかの負性を帯びていることこそが主人公の条件なのであり、それ故「女三の宮の性格描写」は「あまりにも反主人公的」(20)だとは思わないが、かと言ってここまで徹底的に負性しか持たない主人公もやはり珍しかろう。

つまり、ここまで負性を帯びた主人公女三の宮は、六条院世界の徹底破壊という必要上偶然獲得されたものなのだが、それを受け継ぎ、自覚的に辿り直したのが薫なのではないかということなのである。そしてそれが、次項で述べる漸層的な薫の墮落の意味するところだと思ふのである。

注(1) 藤田加代「梅」「桜」「柳」のイメージ―源氏物語における人物造型試論として―『日本文学研究』 高知日本文学研究会 昭61・12)、吉井美弥子「薫と〈女三の宮〉―源氏物語第三部の一断面―」(『国文学研究』第百集 早稲田大学国文学会 平2・3)。

(2) 武原弘「女三宮の世界について―「若菜」巻における贈答歌場面を中心に―」(『日本文学研究』第二二号 梅光女学院大学日本文学会 昭61・11)、榎本正純

- 「女三宮攷―物語と作者(下)―」(『武庫川国文』第三〇号 昭63・11)。
- (3) 注(2)の榎本の論。
- (4) 池田節子「女三の宮」(『源氏物語講座』第2巻 勉誠社 平3)。
- (5) 注(2)の武原の論。
- (6) 藤井貞和「光源氏物語主題論」(『源氏物語の始原と現在―定本』 冬樹社 昭55)。
- (7) 注(1)の吉井の論。
- (8) 第六卷一三頁脚注二三。
- (9) 長谷川政春「女三の宮出家」(『講座源氏物語の世界』第七集 有斐閣 昭57)。
- (10) 武者小路辰子「若菜巻の賀宴」(『源氏物語 生と死と』 武蔵野書院 昭63)。
- (11) 森一郎「女三の宮創造―幼稚な人柄の意味するもの―」(『源氏物語の方法』 桜楓社 昭44)。
- (12) 今井源衛「女三宮の降嫁」(『源氏物語の研究』 未来社 昭37)。
- (13) 向田邦子『源氏物語・隣りの女』(新潮文庫 平3) 一五〇頁。
- (14) 高橋和夫「柏木遺愛の笛」(『講座源氏物語の世界』第七集)。
- (15) 『源氏物語大成』によると、河内本系統の七毫源氏のみ「かたなりなる」が「かきりなき」とあるが、大多数の写本と意味の上から、このままで良いと考える。
- (16) 竹内美千代「女三宮」(『源氏物語講座』第四巻 有精堂 昭46)。
- (17) 森一郎「源氏物語における人物造型の方法と主題との連関」(『源氏物語の方法』)。
- (18) 高橋亨「可能態の物語の構造―六条院物語の反世界」(『源氏物語の対位法』 東京大学出版会 昭57)。
- (19) 武者小路辰子「女三の宮像―稚さへの設問―」(『源氏物語 生と死と』)。
- (20) 高橋亨「源氏物語の〈女三の宮〉 幼女性の罪」(『國文學』昭和57年9月臨時増刊号 學燈社)。

2 薫

一

源氏物語の最末尾、夢浮橋巻巻末は、次のようにして閉じられる。

A いっしかと待ちおはするに、かくたどたくて帰り来たれば、すさまじく、なかなかなり、と思すことさまさまにて、人の隠しすゑたるにやあらんと、わが御心の、思ひ寄らぬ限なく落としおきたまへりしならひにとぞ、本にはべめる。(⑥三九五頁)

この物語が本当にここで終結したか否かについては議論もある。しかし、今のところ、大方の見方である完結説を覆すほどの明証もないようなので、それに従って見ておこう。

源氏物語続編の結末というと、浮舟に焦点があるよう論じられることが多いのだが、この結ばれ方を見る限り、強ちそうとばかりも言えないようである。第一、もしも作者が真に余韻嫋々たる浮舟の姿を描かんと欲したならば、この直前の、姉・浮舟に拒絶され、とぼとぼと山道を帰る小君の姿までで止めておいた方がよほどましなのであり、この一節が加わることによって却ってそれが打ち壊された感があるのは、おそらく誰も否めまい。だが、この一節は、たぶん削るわけにはいかなかったに相違ない。と言うのは、これと同様の薫の想いは、手習巻末にも、「さすがに、その人とは見つけながら、あやしきさまに、容貌ことなる人の中にて、うきことを聞きつけたらんこそいみじかるべけれど、よろづに道すがら思し乱れけるにや」(⑥三六八〜九頁)と存在し、この部分はそれと呼応すると考えられるからである。この、巻末と巻末の呼応という事実、しかも手習巻は、一見浮舟が中心となっている巻であるにも拘わらず、巻末に至って、わざわざこの薫の想いが挿入されているということに鑑みても、源氏物語全編がこの一節で閉じられることの重要性は明らかであり、ならばその続編の構造を捉えるためにも、女性側の視点ばかりでなく、薫側からも補助線を引いてみる必要があるだろう。本項はそのような目論見から成るものである。

二

続編の薫を把握しようとするならば、まず目を向けねばならないのは、正、続編における薫の描かれ方の食い違いである。周知の如く薫が誕生するのは柏木巻で、その最初の描写は五十日の祝の折に光源氏の目を通した次のようなものである。

B 大将などの児生ひほのかに思し出づるには似たまはず。女御の御宮たち、はた、父帝の御方さまに、王氣づきて気高うこそおはしませ、ことにすぐれてめでたうしもおはせず。この君、いとあてなるに添へて愛敬づき、まみのかをりて、笑がちなるなど、いとあはれと見たまふ。思ひなしにや、なほいとようおぼえたりかし。ただ今ながら、まなこゐののどかに、恥づかしきさまもやう離れて、かをりをかき顔さまなり。

(④三二三頁)

ここに二箇所見られる「かをり」の語は、視覚的美を表わすもので体臭ではない。薫に芳香が存するという記載は、続編になって初めて見られることは、既に指摘されている。ただ、ここに存する「女御の御宮たち」の中には、前年生まれた匂宮も当然含まれていると考えられるから、既にここから薫の匂宮に対する優位性が語られていることは押えておきたい。そしてそれは単なる源氏の思いなしではなく、かなり客観性を帯びたものである。

ことは、横笛巻での夕霧の目を通した類似の描写、「二藍の直衣のかぎりを着て、いみじう白う光りうつくしきこと、皇子たちよりもこまかにをかしげにて、つぶつぶときよらなり。(中略)宮たちは、思ひなしこそ気高けれ、世の常のうつくしき兒どもと見えたまふに、この君は、いとあてなるものから、さまことにをかしげなるを」(④三六四〜五頁)が存することによって証明される。しかしこの巻に於いて最も興味深いのは、薫に対する源氏の再度の感懐である。

C「この君のままのいとけしきあるかな。小さきほどの児をあまた見ねばにやあらむ、かばかりのほどはただいはけなきものとのみ見しを、今よりいとけはひとことなるこそわづらはしけれ。女宮ものしたまふめるあたりにかかる人生ひ出でて、心苦しきこと誰がためにもありなむかし。あはれ、そのおのおの老いゆく末までは、見はてんとすらむやは。花の盛りはありなめど」
(④三五〇頁)

この箇所から、本来この先に展開するのは薫と女一の宮の恋物語のはずであったが、それがうまくいかなかったため現在見られるような物語となったと考える向きがあることは、周知の事実であろう。しかしそれについては確たる証拠もないことなので、今ここでは深入りしない。ただ確認しておきたいのは、これらの事象から考えて、たとえこの後の展開がどうであったにせよ、正編の段階で次代の主人公として予定されていたのは、明らかに薫であったということなのである。

それではこれが続編になるとどうか。無論そこでも薫が主人公でないなどとは一言も書かれてはいない。否むしろ、薫の主人公性を示すかのような事象は、新たに二つほど付け加えられている。体の芳香と、大君に拒否されるという二点である。

既に軽く触れたように、薫の体から芳香が漂うというのは、続編に於いて新たに付与された属性である。早くに『明星抄』が、「大品経二十七八十随形好云々 四十二者毛孔出香氣 四十三者出無上香云々」と注して(1)以来、薫の前世での功德を示す最高の美質と理解されてきたし、物語本文に於いても、女房達が薫の残り香をそのように取り沙汰している箇所は確かに存在する。

D「経などを読み、功德のすぐれたることあめるにも、香のかうばしきをやむごとなきことに、仏のたまひおきけるもことわりなりや。薬王品などにとりわきてのたまへる牛頭梅檀とかや、おどろおどろしきものの名なれど、まづかの殿の近くふるまひたまへば、仏はまことしたまひけりとこそおぼゆれ。幼くおはしけるより、行ひもいみじくしたまひければよ」など言ふもあり。また、「前の世こそゆかしき御ありさまなれ」など、口々めづることどもを、(浮舟ノ母中將の君ハ)すずろに笑みて聞きぬたり。
(東屋⑥五五頁)

これが当時の一般的理解であったことはまず確かで、匂宮にはこれが無く、そのため人工の香で必死に薫を模倣したと語られることは、同時に薫に対する匂宮の劣位を語ることもであろう。

また、続編全体を通して、薫は女性に拒否されることはあっても、匂宮は、小宰相等の端役は除き、一度も女性に拒否されることが無い。この事実も、同様に匂宮の劣位を語っていると考えられる。その詳細な理由については、本論文第四章第二節を参照して頂きたいのだが、今ここでその結論だけを述べておけば、この物語に登場する「拒否する」女性達の心底には、皆共通して相手が並の男性ではなく、自分等はとて無比肩できないという

思いが存在するのであり、それ故相手の男性は、皆一様に「恥づかし」という語で形容されることを特徴とするのだが、さらに言えば、それは源氏、夕霧といった、主人公性を有する者にほぼ限定されるということなのである。そして薫もその例外ではなく、Bに見られるように、生まれた直後から「恥づかしさま」があると語られ始め、続編を通じてこの語が薫の形容として用いられなくなることは絶えて無い。それに対して匂宮は、この語を用いて形容されることが遂に一度も無いのであり、この点が二人の大きな差異の一つとなっていると思われる。

つまり、これら二点を勘案する限り、薫の匂宮に対する優位は、続編に於いても基本的には変化していないと考えられるのであるが、それにしては若干の疑問が提出できないこともない。特に前者の「香」は問題で、既に指摘が多々ある如く、薫の芳香というのは、彼にとつて却ってマイナスをもたらすことが専らなのである。その移り香が中の君や匂宮に誤解をもたらすこと然り、遂にはそれを模倣されることによって匂宮に浮舟を奪われてしまうことまた然りで、むしろDのように手放して絶賛される方が珍しい。そこでDを子細に検討してみると、引用文末尾に「すずろに笑みて聞きゐたり」とあることに示されている如く、実はこれは、自己の体験から、かなり強度な上流貴族不信に陥っている浮舟の母・中将の君の不安を打ち砕き、やや強引に浮舟と薫を結びつけるために物語に要請されたもので、到底額面通り受け取ることが出来ないことが分かるのである。そしてそれは一見薫の体香を賞賛しているかに見える他の部分に於いても同様で、例えば、その記述が初めて見られる匂宮巻には、次の様にある。

Eげに、さるべくて、いとこの世の人とはつくり出でざりける、仮に宿れるかとも見ゆることそひたまへり。顔容貌も、そこはかと、いづこなむすぐれたる、あなきよらと見ゆるところもなきが、ただいとなまめかしう恥づかしげに、心の奥多かりげなるけはひの人に似ぬなりけり。

香のかうばしさぞ、この世の匂ひならず、あやしきまで、うちふるまひたまへるあたり、遠く隔たるほどの追風も、まことに百歩の外も薫りぬべき心地しける。

(⑤二六頁)

一見すれば分かるように、確かにここでも、薫の香は仏の生まれ変わりかという意のことが語られてはいるが、引用前半部からも少し窺える如く、子細に見ればこの部分は、匂宮と薫を、香を軸に対として紹介し、さらにその後を、源氏が如何に優れていたかという挿話で挟むことによって、二人がそれよりは劣っていることを示す構造となっており、やはり鶴呑みにするわけにはいかないものである。つまり、薫の体香というのは、その主人公性を何とか保証するものではあるものの、それを過大に評価することは出来ない(と)というのが当面の結論となるわけだが、この引用文に於いてさらに重要な問題は、既に三枝秀彰も指摘している(3) 如く、薫の容貌が、「いづこなむすぐれたる、あなきよらと見ゆるところもなき」と評されていることなのである。

この一句により、薫の体香の魅力が減ぜられていることは勿論だが、この句の重要性はそこにあるのではない。既に引用した横笛巻での夕霧の感慨の中にも見られる、皇子達よりも優る薫の美質を評するために専ら正編で用いられてきた、「きよら」という語がここでは否定されているというところにそれはある。これまでも、薫の美質に対する評言が、正編では「きよら」であるに対して、続編ではそれより一段落ちる「きよげ」で統一され

ているという指摘は幾つかなされてきた(4)が、さらに厳密に言えばそれは、先ず「きよら」の否定から始まり、しかもそこには、薫の新たな、そして微弱な主人公性の保証となる体香の紹介が共にあるということなのである。

ここから導き出せる結論は、正編の段階では主人公たる資質を充分に有していたはずの薫ではあったが、いざ続編でそこに据えられてみると、大分矮小化された形で始発させられているということになるが、それでは一体その理由とは何であったのだろうか。

一つの考え方としては、近年良く言われる、続編は中心を喪失した世界なのだから、主人公という概念を持つこと自体がそもそも間違いなのだということが挙げられよう。しかし、この説を聞いた時疑問となつて来るのは、では光源氏はそれほど確固たる主人公だったかということなのである。確かに彼は当初は中心に位置していたかもしれないが、物語の進行とともに徐々に相対化されて来たことについて、異を唱える者は多くはなからう。またそこまで難しいことを言わなくとも、光源氏を統一した人格と捉えることは不可能だという意見も以前からあり、彼はむしろ狂言回しにしか過ぎないと把握する向きもあったことを思つても良いだろう。それでも彼を主人公と呼び得るならば、見て来た如く、続編に於いてもなお、幾つかの主人公的要素を有する薫は、光源氏程度には主人公である捉えることが可能であると思われるし、薫を分析することにより、続編全体にわたる補助線が引けるであろうとする本項の根拠もそこに存するので、この考え方は今はとらない。だとすれば、これ以外にどんな理由が求められるだろうか。

三枝はその理由を薫の「柏木化」に求める(3)が、この考え方を続編全体に直ちに適用するのは聊か躊躇いが残る。と言うのは、高橋亨や池田和臣が早くに述べた(5)ように、続編に於ける薫の「柏木化」は確かにあるが、池田が示した如く(6)、それがより顕著に認められるようになるのは宿木巻以降の後半部でしかないからである。しかし、薫把握の手がかりが、その「柏木化」に存することも、また確かなように思われるので、まずはその辺りから分析を始めることとしたい。

三

宿木巻は、以前から構想の変更が取り沙汰されてきた如く、幾つかの設定が大変革される巻だが、薫について言えば、その最たるものは今上の女二の宮との婚姻ということになる。周知の如く、若くして仏道に心惹かれていた薫は、召人との関係はあつても、それまで妻は極力持たないことにしてきたはずだが、ここで遂に俗世に縛り付けられることになったわけである。この婚姻自体が既に、朱雀院の女二の宮(落葉宮)と結婚した父・柏木の姿を髣髴とさせるものだが、それに関連して押さえておかなければならない叙述が二、三ある。先ずは、今上帝が女二の宮の降嫁を仄めかした直後の薫の思考から見よう。

F かやうに、をりをりほのかさせたまふ御気色を人づてならず、うけたまはりながら、例の心の癖なれば、急がしくしもおぼえず。いでや、本意にもあらず、さまざまにいとほしき人々の御事どもをも、よく聞き過ぐしつ年経ぬるを、今さらに聖よのもの、世に還り出でん心地すべきこと、と思ふも、かつはあやしや、ことさらに心を尽くす人だにこそあなれ、とは思ひながら、后腹におはせばしもおぼゆる心の中ぞ、あまりおほけなかりける。(5)三七九頁

「后腹におはせばしも」は、直訳すれば「もしも女二の宮が明石中宮腹であつたら」というにすぎないが、薫の心中には女一の宮という明石中宮腹の理想の女性が住んでおり、

これもそれを手繰り寄せるものであることは言を俟たない。女一の宮と女三の宮という具合に、若干の違いはあるけれども、目指す皇女と結婚できず、代わりの女二の宮では、母方の出自が低いので満足できないというこの論理は、まさしく薫の父・柏木のものである。そして、先にも述べた如く、これを嚆矢として、この巻での薫は急速に柏木色を濃くし始める。

例えば、この巻で、最も華やかでめでたいと思われがちの、女二の宮が薫邸に迎えられる直前に行われる藤花の宴に於いても、柏木の姿は黒い影となって絶えず薫につきまとうている。先ずこの時薫が奏した笛は、「かの夢に伝へし、いにしへの形見のを、またなきものの音なりとめでさせたまひければ、このをりのきよらより、または、いつかはえええしきついでであらむと思して、取う出たまへるなめり」と語られる(⑤四八一〜二頁)如く、横笛巻で、柏木から夕霧に夢中での伝言があったあの笛なのである。同席した夕霧は当然それに気づいたことと思われるのに、例によって物語はそのことには口をつぐみ、さしたる波乱は起こらない。ところがこの宴の果てる時に、参会者が各々歌を詠む場面、柏木の姿は再び立ち現われ、薫にまわりつくのである。この時の薫の詠歌は、「すべらきのかざしに折ると藤の花およばぬ枝に袖かけてけり」(⑤四八四頁)というものであった。自分は遂に帝鍾愛の女二の宮を戴いたという薫の自負を表すこの歌は、語り手も「うけばりたるぞ、憎きや」と評している如く、幾分の不快感をかきたてはするものの、一見何の変哲もないものであるかのように見える。しかし、この歌の下の句は、伊藤博も言及している(こ)ように、遠く若菜上巻の桜花の宴で、柏木が初めて女三の宮を垣間見、その直後に宮に贈歌したのを、小侍従がはねつけた時の歌、「いまさらに色にな出でそ山桜およばぬ枝に心かけきと」(④一四九〜一五〇頁)を思い起こすのに充分なものなのである。これは、薫がその歌を知っていたかどうかなどという問題ではない。表現のレベルとして、同じく皇女に心をかけながら、遂にそれを許されなかった父と、若くして叶えてしまったその子の自負との対比が、読者だけにはそれと分かる形で、はっきり描かれているという話なのである。この巻には他に、中の君のもとを訪れた薫が、その扱いのあまりのよそよそしさに、「北面」に入れてくれと頼む場面(⑤三九三頁)などもあり、これも、藤袴巻で玉鬘が内大臣の娘と判明し、入内の詳細を煮詰めるため使者として送られた柏木が、玉鬘のよそよそしさに対してやはり「北面」を要求する場面(③三四〇頁)と通底するかとも思うのだが、問題が複雑になるのでここでは深入りしない。要は、この巻になると、薫が急速に「柏木化」してくるのが確認できれば良いのである。

では何故そうなるのかと問えば、その手がかりはFの引用文中に求められそうである。その末尾が、「あまりおほけなかりける」という薫批判の語り手の言葉で閉じられていることに注目したい。遡って子細に見れば、冒頭近くにある「例の心の癖」も、「癖」という言葉自体が、この物語では余り良い意味で使用されていない(こ)ので、やはり薫批判の言葉となる。つまり、このわずかな部分だけでも薫は二回も批判されているわけで、しかも薫の心長さは、これ以前は彼の美德の一つとしてしばしば数えられてきたのだからより意味は深い。換言すればここで薫は、以前の長所まで短所に「転化」させられているわけであるが、恐らくそれと軌を一にするのは、この巻に至ると急速に語り手の薫批判が増加するという事実である。

Fのような短い部分でも薫批判が二箇所もあるということは既に指摘したが、この巻に

は他にも語り手による薫批判が非常に多い。例えば、中の君に迫りながらも結局何事もなく帰る途中に、匂宮が中の君から六君に心を移せば、自分は堂々と中の君に近づけるといふ、これも如何にも柏木的思考を薫が繰り広げた時の語り手の言葉、「ただ、このことのみつとおぼゆるぞ、けしからぬ心なるや。さばかり心深げにさかしがりたまへど、男といふものの心憂かりけることよ」(⑤四三二頁)もその一つであり、前引の「すべらきの」の歌の後に添えられた評語「うけばりたるぞ、憎きや」(⑤四八四頁)もそれとして数えて良いだろう。だがその圧巻は、中の君所生の若君を見た後、薫の思いを描く場面に存在する。

G されど、言ふかひなくなりたまひにし人の、世の常のありさまにて、かやうならむ人をもとどめおきたまへらましかばとのみおぼえて、このごろ面だたしげなる御あたり、いつしかなどは思ひよられぬこそ、あまりすべなき君の御心なめれ。かく女々しくねぢけて、まねびなすこそいとほしけれ、しかわろびかたほならん人を、帝のとりわき切に近づけて、睦びたまふべきにもあらじものを、まことしき方さまの御心おきてなどこそは、めやすくものしたまひけめ、とぞ推しはかるべき。

(⑤四七九〜四八〇頁)

直接的には「あまりすべなき君の御心なめれ」という部分がそれに当ろうが、問題はむしろその後にある。あまりに薫を腐しすぎたと思つた語り手は、慌ててフォローしようとするのだが、実務面では優れているなどということが、政治面には極力口をつぐみ、恋愛のみを語つて来たこの物語で、果してどれほどフォローたり得ているのかがまず疑問となろう。仮にそれが役立っているのだとしても、「帝」という当時の最高権威を高飛車に構え、それが保障しているのだから読者も信用するべきであるなどとごり押しして来るような語り手の態度は、かつて一度も見られなかった。つまり、このフォローはいずれにせよ破綻をきたしているのであり、やはり批判として捉えるべきであろう。何故なら、下手なフォローは直接的な批判よりも勝ると思われるからであるが、だとすれば、この部分の薫批判の異様な長さは充分理解できるであろう。この部分を「圧巻」と呼んだ所以であるが、実はこの巻には、このように間接的に薫を貶めているのではないかと思われる箇所も多々ある。具体的にはそれは、俗臭芬々たる薫の姿であるが、例えばそれは、召人との関係である。

自分の出生に対する疑惑から、若くして仏道に心惹かれる薫は、妻を決して持とうとしなかったことは既に述べたが、そうは言っても彼も男性であるから、女性と交渉が全くなかったわけではなく、ただそれが召人と呼ばれる、妻妾として数えられない存在であっただけの話である。それと交渉することが、当時どれほどの恥となったかは良く分からない。また、薫とそれとの交渉が、この巻以前にも全く語られていなかったわけでもないのだが、それが具体的な場面描写を伴うのは、やはりこの巻からなのである。しかもそれは、次のような怪しげな語り手の評言を含む。

H 例の、寝ざめがちなるつれづれなれば、按察の君とて、人よりはすこし思ひましたまへるが局におはして、その夜は明かしたまひつ。明け過ぎたらむを、人の咎むべきにもあらぬに、苦しげに急ぎ起きたまふを、ただならず思ふべかめり。

うちわたし世にゆるしなき関川をみなれそめけん名こそ惜しけれ

いとほしければ、

深からずうへは見ゆれど関川のしたのかよひはたゆるものかは

深しとのたまはんにてだに頼もしげなきを、この上の浅さは、いとど心やましくおぼ
ゆらむかし。(中略)「ことをかしき言の数を尽くさねど、さまのなまめかしき見な
しにやあらむ、情なくなどは人に思はれたまはず。かりそめの戯れ言をも言ひそめた
まへる人の、け近くて見たてまつらばやとのみ思ひきこゆるにや、あながちに、世を
背きたまへる宮の御方に、縁を尋ねつつ参り集まりてさぶらふも、あはれなることほ
どほどにつけつつ多かるべし。(⑤四一八〜九頁)

傍線を付した部分がそれであるが、そこにどれだけの薫批判を感じるかは、人によつて
差がある。しかし、特に後者はそれが強いように思われるし、たとえそうではなかつた
としても、こういう描き方をする事自体に、薫に対する幾分かの悪意が存在するように
思えてならないのである。そしてそのような描写は、例えば、匂宮の不在をわざわざ確認
してから中の君の許を訪ねる薫の姿や、それとは逆に、匂宮の在宅時には、わざとさりげ
ない内容の手紙を中の君に送る薫の行為等、この巻の場合他にも幾つも数え上げること
可能なのである。勿論、この巻の薫が、全て批判の対象となつてはいるわけではなく、絶賛
を受けている部分も多々あるのだが、他の巻ではこれほど批判されているものは無いので
あり、やはりこれもこの巻の特徴の一つとして数えて良いようである。だがこれを、この
巻での薫の行動が行動であるから等というように、解消してしまつてはならない。何故な
ら、薫もまた物語の一登場人物である限り、その行動は作者の意図に規制されているはず
だからである。

これらのことを総合すれば、宿木巻での薫の色濃い「柏木化」も、やはりこの一環とし
て捉えることが可能であろう。と言うのは、次に掲げるように、この巻以前、特に正編に
於いては、薫は、実際は柏木の子でありながら、美質の面ではむしろ光源氏に似ていると
されることでその聖性を保証されてきた面がある。

I頭は露草してことさらに色どりたらむ心地して、口つきうつくしうにほひ、まみのび
らかに恥づかしうかをりたるなどは、なほいとよく思ひ出でらるれど、かれはいとか
やうに際離れたるきよりはなかりしものを、いかでかからん、宮にも似たてまつらず、
今より気高くものしうさまことに見えたまへる気色などは、わが御鏡の影にも似
げなからず見なされたまふ。(横笛④三四九頁)

ところがそれが、源氏より常に一ランク劣つた存在として位置づけられていた頭中将の
血を引き、しかも自身も源氏に敗れ去つた父・柏木に、宿木巻の薫の姿がにわかになら
ていくとすれば、それはやはり薫の矮小化として捉えられよう。すなわち、ここ宿木巻で
は、続編開始直後よりも、さらに矮小化された薫の姿が、描かれていると言えるのである。

四

これまでは正編、続編開始直後、そして宿木巻と、徐々に矮小化されていく薫の姿を見
て来たわけだが、それ以後の巻々ではどうであろうか。続いてそれを見てみよう。

宿木巻の次の東屋巻では、前引Dに見られる如く、薫讚美の描写ばかりで、批判は特に
見当らない。しかしそこでも述べたように、薫と浮舟を結びつけようとする、物語の強い
要請がこの原因と考えられるため、あまり参考になるとは思われない。それを逆照射する
かのように、次の浮舟巻に移ると、薫の気長な性格が、「たとしへなくのどかに思しおき
てて」(⑥一〇六頁)、或いは「例の、のどけさ過ぎたる心からなるべし」(⑥一〇七頁)

等と再び批判的に評されるようになるが、思えば自己の香を匂宮に模倣され、浮舟を奪われてしまったこと自体が、既にしてこれに当たるとも考えられる。だが、何と言つてもこの巻は、薫が余り活躍する巻ではないので、これ以上の深入りは避けておこう。そして次の蜻蛉巻こそが、薫がさらなる倭小化を遂げたことを、明瞭に示す巻なのである。

周知の如くこの巻は、宇治十帖の中でも特異な巻で、後半部では、宇治の姫君達の話とは直接的な関連を持たない、匂宮と薫の宮廷恋愛絵巻が繰り広げられる。そしてその話の一部として、宿木巻とも呼ぶる、女一の宮と女二の宮との挿話が語られるわけだが、帝から拝領した女二の宮に飽き足らないというばかりでなく、垣間見た理想の女性・女一の宮と全く同じ衣装を着せようとする薫の行為を、退廃の極みと呼ぶことに、さほど異論はあるまいと思われる。それだけではなく、ここには薫の次のような心中さえ描かれている。

丁わが母宮も劣りたまふべき人かは、后腹と聞こゆばかりの隔てこそあれ、帝々の思し
かしづきたるさま、異事ならざりけるを、なほ、この御あたりはいとことなりけるこ
そあやしけれ、明石の浦は心にくかりける所かな、など思ひつづくることどもに、わ
が宿世はいとやむごとなしかし、まして、並べて持ちたてまつらばと思ふぞいと難き
や。
(⑥二七二頁)

己の宿世に絶対の自信を有し、同じことなら女一の宮と女二の宮、二人並べて妻にした
いという薫のこの想いは、前掲Fなどと比較しても遙かに不遜と言うことが出来よう。換
言すればこれは、より深く世俗に囚われるようになった薫の姿を映し出すものと思われ、
この一事を以つてしても、宿木巻よりこの蜻蛉巻の方が、薫の倭小化が増していると窺え
るのであるが、このことについてはさらに一つの傍証がある。それは、これもやはり宿木
巻と対応する、薫と召人との関係で、この巻では、後に、薫の浮舟発見に大きく貢献する
ことになる小宰相の君との交渉が語られるわけだが、既に篠原昭二も指摘している如く、
薫は「単なる話相手にすぎない女房に自分の心の奥を見透され同情を受けるまでに、この
時零落してい」(9)るのである。

これら全てを総合すれば、この蜻蛉巻を、宿木巻よりさらに薫の倭小化が進んだ巻とし
て位置づけることに對して、大方の賛同が得られるのではないかと考えるが、次の手習巻
はどうであろうか。浮舟巻と同様、これも薫がほとんど登揚しない巻なので、あまり深入
りすることは出来ないが、ただここで登場する、浮舟に懸想する中将が、小型の薫である
ことは既に説かれており、これもまた薫倭小化の一階梯として捉え得るものであることは
指摘しておこう。また、第一段でも既に触れた、夢浮橋巻巻末と呼ぶる、手習巻巻末の
薫の想いも、それを如実に示すものである。

以上のように、続編を粗々辿つて、最終巻夢浮橋まで至つたのだが、そこに一貫して認
められたのは、漸進的とも言える薫の下落であったわけである。そしてそれを夢浮橋巻中
に求めるのは実に容易い。自己の本心を隠しつつ、浮舟の母の想いを楯に、浮舟との仲立
ちを横川僧都に迫る薫の姿。次段で検討する、源氏物語最終にして、この巻唯一の歌であ
る薫の歌と、それを取り巻く手紙文。いずれを見ても、俗世の汚濁にまみれ切つてしまつ
た薫の姿は明らかで、その極北にあると言えるのが、本項冒頭に掲げた、夢浮橋巻末にし
てこの物語の結末でもある、あの部分ということになるのである。つまり、本項で述べ
たかったことは、あの部分は決して単独で読まれるべきものではなく、こうした流れの中
に位置づけてみて初めて、その真の意味性が浮き彫りにされるといふことなのであった。

かつて藤井貞和は引用文Aを評して、「むろん作家が、もしも、薫を、度しがたい男としてえがく、という意図を持つていとすれば、浮舟の男性関係を疑う薫の心中思惟に終わってゆく、少々えげつない物語のどじめを、それなりに効果をねらったものとして了解することができる」と述べたことがある⁽¹⁰⁾。しかし、見て来た如く、それは決して仮定の話ではなく、薫の下落は、一筋の道として、続編全体に認められるものであり、それ故この部分を、「それなりに効果をねらった」程度の、軽いものとして理解することは出来ない。それでは、その意味性は何かと問えば、その手がかりは、小林正明によつて成された、注目すべき続編論⁽¹¹⁾の中にありそうである。小林はその中で、続編の発端と結末に、共に薫の詠歌が位置することに着目し、それを「一文」として続編を読み解くことを説く。これは正に卓見で、本項も多大な示唆を受けたところであるが、問題の二つの歌に関しては、既に小林に言われ尽くした感もある。だがこれも本項の論旨に大に関わるところであるので、まよめの意味も兼ねて、最後に少し検討しておこう。

K 幼心地にほの聞きたまひしことの、をりをりいぶかしうおぼつかなく思ひわたれど、問ふべき人もなし。宮には、事のけしきにても知りけりと思されん、かたはらいたき筋なれば、世ととももの心にかけて、「いかなりけることにかは。何の契りにて、かう安からぬ思ひそひたる身にしもなり出けん。善巧太子のわが身に問ひけん悟りをも得てしがな」とぞ独りごたれたまひける。

おぼつかな誰に問はましいかにしてはじめもはても知らぬわが身ぞ
答ふべき人もなし。(匂宮⑤二三〜四頁)

L さらに聞こえん方なく、さまざまに罪重き御心をば、僧都に思ひゆるしきこえて、今は、いかで、あさましかりし世の夢語をだにと急がるる心の、我ながらもどかしきになん。まして、人目はいかに。と、書きもやりたまはず。

法の師とたづぬる道をしるべにて思はぬ山にふみまどふかな
この人は、見や忘れたまひぬらむ。ここには、行く方なき御形見に見るものにてな
ん。
などいとこまやかなり。(夢浮橋⑥三九二頁)

前者「おぼつかな」詠は、父が誰かを知りたいという思いももちろんあるが、やはり直前にある「善巧太子のわが身に問ひけん悟りをも得てしがな」と呼応させて解くべきであろう。「善巧太子」は、河内本では「瞿夷太子」となっており、それだと、釈迦の死後六年も経つて生まれたため、実子か否か疑われたという羅喉羅のこととなつて、その「悟り」は正しく、父を知る、ということになるのだが、「善巧太子」が羅喉羅のことであるか否かは確証がない。つまり、青表紙本系の本文を採ることが通説となつて現在のテキストの中で、ここは河内本系の本文で解釈していることになるわけで、厳密に考えれば、それは正当でないことになる。それでは何が正解かと問われても、「善巧太子」が誰か不明である現状では、確実に答える術は無いのだが、釈迦その人であるか否かは別として、その候補はほぼ釈迦周辺の者に限られるし、人名という観点から離れば、「善巧」とは、「善巧方便」の略で、「方便」とほとんど同じ意味である。ならば、ここは大きく「仏の悟」ぐらいの意でとつておいた方が、歌に、「はじめ」はともかくとして「はても知らぬ

わが身」という語が見えることから言っても、この歌全体の重みからしても、適当なのはなかるうか。尤も、そういった「悟り」を得れば、自分の親が誰かぐらいは当然分かるだろうから、この考えとて、自身の親を知りたいといった願望を全く否定するものではないのだが、薫が最初に求めたのは、たとえ親が誰であったにせよ、その程度のことでは決して動じないくらいのもっと純粋な「悟り」であったように思うのである。そしてそれがそれほど深遠なものであったが故に、歌の後にわざわざ、「答ふべき人もなし」の一句が付け加えられる必要があったのだと思われる。

ところがその同じ薫が、最終巻夢浮橋に至るとしのような手紙を書くようになる。元々薫の言葉は、その本心を隠した意味の取りにくいものだが、それにしてもこれは非道すぎるのではなかるうか。浮舟の全ての罪は僧都に免じて許し、今はただ「あさましかりし夢語」のみをしたいと思うのだが、我ながらそれはけしからぬ。まして他人はどう思うかというこの文面の、一体どこに浮舟の帰還を願う気持ちが入っているか。浮舟が、帰る決心をつけられなかったとされるのも無理からぬことだが、目を留めるべきは薫が、ほとぼしる迷妄を、もはや收拾する力に欠けていたようにここでは描かれていることなのであり、その絶頂として次の「法の師と」の歌が来る。

これら二首を繋いだところに、源氏物語続編の「文法」があると考えられるわけだが、それはやはり、薫の聖から俗への下落、言い換えれば、薫の超越性の解体ということになるうかと思う。すなわち、これまで本項で追い求めてきたことこそが続編の主筋なのであって、それ故に、薫の下落が極点に達した時、この物語もまた、静かにその流れを止めるのだと思われる。つまり、源氏物語の続編は、数々の枝葉を出しながらも、大筋としては、Aに掲げた結末部へ、一筋に流れ込んでいると言えるのである。

尤も、本項で主に分析したのが匂宮巻・宿木巻・蜻蛉巻と、構想の変更が以前から云々されている巻ばかりであったから、こうした薫の矮小化の原因を、それに求める向きも或いはあるかもしれない。しかし、そのようなことはさして重要ではない。何故なら、仮にそのような継ぎ足しが行われたのだとしても、その結果が、その度毎の薫のさらなる下落となつて現われているとすれば、そこに一連の軌跡を想定することに、何の問題も生じるはずがないからである。

結局、薫は下落を続けることによって逆に続編全体を統御し得るといふ、何とも奇妙な存在だと言えよう。それは恐らく、同様に、実体が虚であることによつて若菜巻の物語を領導し得た、母・女三の宮の性質を受け継がせたものだと思われるが、その点に関しては、前項を参観せられたい。

注 (1) 中野幸一編『明星抄 雨夜談抄 種玉編次抄』(「源氏物語古註叢刊」第四卷 武蔵野書院) 四六五頁。

(2) 大朝雄二「源氏物語・薫論のための覚え書き」(『國語國文研究』北海道大学 昭57・8)では、薫の芳香について、「薫が傑出した理想人物の証拠なのではなく、そのような理想化なしには、とても匂宮と対等に張り合う一方の主役には立ちえなかつた、ということなのではあるまいか」と述べており、「匂宮と対等」というところに私見とやや相違するものがあるが、大筋に於いては賛同したい。

(3) 三枝秀彰「薫試論―その主題的に内実とするもの―」(『中古文学』 昭60・

- 5)。
- (4) 大野晋『古典を読む「源氏物語」』(岩波書店 昭59)等。
- (5) 高橋亨「源氏物語の内なる物語史」(『源氏物語の対位法』 東京大学出版会 昭57)、池田和臣「竹河巻と橋姫物語試論―竹河の構造的意義と表現方法―」(『源氏物語及び以後の物語 研究と資料』 武蔵野書院 昭54)。
- (6) 池田は注(5)の論攷に於いて、竹河巻を、椎本巻から総角巻への展開の中に位置づける。
- (7) 伊藤博『源氏物語の基底と創造』第二編 第十二章「愛執の薫」(武蔵野書院 平6)。
- (8) 秋山虔「好色人と生活者―光源氏の「癖」」(『王朝の文学空間』 東京大学出版会 昭59)。
- (9) 篠原昭二「都の薫―薫論(5)」(『講座源氏物語の世界』第九集 有斐閣 昭59)。
- (10) 藤井貞和「「思ひ依らぬ隈な」き薫」(『源氏物語の始源と現在一定本』 冬樹社 昭55)。
- (11) 小林正明「双数と法の宇治十帖」(『日本文学』 日本文学協会 平元・5)。

第三節 まとめ

以上、本章では源氏物語の特徴の一つと思われる、登場人物の有する「負の力」を利用して物語を展開していく方法について明らかにしてきた。既に前章第三節に於いて明石御方や落葉宮、宇治中の君等の例を挙げて論じたように、「幸福な者は逆に物語を領導していく力を失う」というのは、この物語に限定されない、文学というものが孕む万古普遍の原理である気がするが、この物語の特徴は、それが始発から意識化されていたか、それとも途中で獲得されたものであるかは定かでないが、明らかに意図的にそれをを用いているという点にある。そのことを証するために先ず、人物にとつて最もマイナスの要素と思われる「死」が、この物語には多出し、しかもそれが新たな物語を領導していく端緒となっていることを、平安時代の他の物語と比較して証したてたのが、第一節であった。

そこでこの方法が決して突飛なものではなく、むしろ前述の文学的伝統の延長線上にあることを確認した後、さらにそれを高度化したものと思われる女三の宮と薫へと話題を移した。何故なら女三の宮は「異様に幼い」、薫はいわゆる「俗物性」という負性を帯びていることは既に指摘されているからで、女三の宮の「幼さ」は、この物語で最も理想的とされている光源氏の理想性が理解できないということ、逆に源氏に打ち克つ力ともなり得ること、また、例によつてこの「幼さ」という負性は、宮と柏木との密通事件を引き起こし、且つその結果を最悪とする上で大いに寄与しているのだが、そうした結果を導くには、玉鬘や紫上といった賢い女性では不可能であったこと、換言すれば、宮の「幼さ」というのは、見ようによつてはそれらの女性に優る特性であったことを証したのが、第二節の1であった。

しかし女三の宮は、その活躍期間が若菜上巻から鈴虫巻くらいと、比較的短期に限られるから、これ以上の形を取ることは困難であったに相違ない。そこでそれが担わされたのが、女三の宮の子供でもあり、密通の結果生まれた子という大きな負性も有していた、続編の主人公として予定されていたと思われる薫であったろうと論じたのが、次の2であった。と言うのは、薫が主人公としては下落させられているのは、これまでの指摘のように正編から続編へと移り変わる時のみではなく、宿木巻、蜻蛉巻に於いても然りというように、ほぼ続編全体に亘つて徐々に凋落していくよう描かれているのであり、しかもそれは、夢浮橋巻末の叙述等から、物語が進む方向性と正しく一致していると考えられるので、薫の凋落というのは、決して薫を非難しようという目的によるものではなく、むしろ薫は、凋落していくことによつて物語を領導する、希有なタイプの主人公と捉えるべきと思われるからである。

そして、前節1の末尾でも触れたように、源氏以降、薫型の主人公は現れるけれども匂宮型の主人公は現れないという現象から鑑みると、この方法は後世の物語作者にも理解され、影響を与えたかとも思われるのだが、その辺りの検証は今後の課題としたい。

終章

まとめと展望

以上、本論文では「機能的人物論」という観点から源氏物語を分析してきたが、最後に、その有効性を再度確認する意も込めて、本論文の叙述を駆け足で辿り、併せて今後の展望も示してみよう。

序章は、「研究史から見た機能的人物論の有効性」と題して、これまでの源氏物語人物論の研究史を概観し、「機能的人物論」の有効性を確認した。近年吉海直人は、源氏物語の人物論は方法的に既に否定されていると発言しているが、その真意は、「人格・一貫性を有する主人公格の登場人物」を対象とするものに限定されるようで、「新しい人物論」は逆に待たれているらしい。「機能的人物論」がそれに適うものか否かは今後の検討を待たねばならないが、登場人物を实在の人物のようには扱わず、それが如何に作品形成に寄与しているか(≡機能)のみに着目して論述していくそれは、或る意味その条件を満たしているかと判断し、まずその有効性を確認した。そして、その観点に立てば、源氏物語に於ける人物表現の方法は、「単一人物と他要素の連関による表現法」、「人物の連関による表現法」、「人物の連鎖による表現法」、「複数の人物連鎖とその統合による表現法」の四つに分類でき、またその中から、もう一つの特徴と考えられる「負の力の発見」という問題が浮かび上がってくると思われるので、本論文の叙述はその順に行っていくこと等を述べた。

次いで第一章は、「単一人物と他要素の連関による表現法」の例として玉鬘を取り上げた。何故なら玉鬘は、源氏物語で何々何帖と言われる箇所全体を貫く単独の女主人公という点では、ほとんど唯一であり、十帖全体のテーマがもしあるとすれば、彼女に負わされている可能性が高く、また玉鬘十帖は、その始発と終末にそれぞれ初瀬・石山の霊験的色彩と、源氏物語の執筆時には既に絶えていたはずの男踏歌という特殊な行事が存在し、境目が極めて明瞭な部分であり、加えてこれらの要素は、それぞれ関連していると思われるからである。そこで第二節ではその「初瀬」と「石山」について分析した。その結果、単なる地名以上の意味合いを持つ「初瀬」と「石山」は、源氏物語に於いては玉鬘物語と浮舟物語に見られるが、一見すると女主人公に利益を与えて物語を始発させるように見える「初瀬」と、不利益を与えて物語を終結させるように見える「石山」という共通性があり、その意味では玉鬘十帖は、正しく一つの閉鎖空間であることを確認した。また第三節では、同じく玉鬘十帖の最初と最後、及び竹河卷等に見られる男踏歌に着目し、源氏物語執筆の時点では既に絶えていたはずのその行事が何故描かれ、逆にまだ存在していたはずの女踏歌が何故描かれなにかという、歴史的観点も加えて考察してみた。その結果、山中裕が既に提出していた、玉鬘十帖の二つの男踏歌は源氏の栄華の移動を示唆するという答えを改め、栄華は常に玉鬘と共にあるのであり、源氏の栄華が移動したように見えるのは、実は玉鬘がそのように移動しているからだという、第四節に繋がる私見を出した。次いで第四節ではそれを受け、玉鬘十帖内外での源氏の描写のされ方や「あひ住み」という六条院に於ける玉鬘の位置づけ、及び小林茂美の説や第二節の結果等を勘案すると、玉鬘はほとんど六条院栄華と等価な存在として描かれていることを論証した。この、玉鬘という人物と霊験譚的色彩、行事描写等を自在に組み合わせる六条院栄華の実相という一つのテーマを描き出す方法、これが「単一人物と他要素の連関による表現法」の謂である。

続いて第二章では、「人物の連関による表現法」の一例として、統合体的存在と捉え得る紫上を取り上げた。第二節で詳細に分析したように、子供という、女性特有の逃げ場す

ら持たず、夫との愛情だけしか継るものがないという紫上の存在は、平安時代に於いては希有なものであったことは、これまでも多々言及されてきた。しかしその困難な存在を如何に確立させ得たのかという観点は余り無かったように思われる。本論文ではそれを幾人かの女性で支えたという視点を取り、そのうちの三人を例示した。すなわち、六条御息所・葵上・花散里である。六条御息所は紫上にも崇つていたので、一見すると支えてないように見えるかもしれないが、紫上の直接の死因としては語られていないし、御息所が紫上に取り憑いた箇所は、子細に考えれば紫上の病が必要とされていたところばかりだし、紫上以外に取り憑かれて排除された女性は全て紫上にとつて都合の悪い存在である上に、同じく都合の悪い存在である御息所自身も、早くから物の怪としての正体が発覚して排除されているという事実を総合すれば、実は御息所は、理想的存在として位置づけられ、自身の手を汚すことの出来ない紫上に代わって、その「闇の願望」を成就させる紫上の影的存在として捉えられると結論したのが第三節である。また葵上は、六条御息所と犬猿の仲のように見られがちだが実は共通点は多いのであり、相違するのは、御息所が力づくで紫上の障害を排除していくのに対して葵上は己の存在を限りなく無に近づけることによって逆に紫上を引き上げたり、紫上が子供を生まなくとも源家は存続し、それゆえ不生女の紫上が長く光源氏の正妻格たり得たりするという、方法的なものだけだと結論したのが第四節である。この「無に近い存在」という点は、紫上が主であるに対して常に従と語られている花散里も共通するが、花散里の場合はむしろ、紫上と同様に染色の才を有し、事ある毎に準備を分担しているとされるように、文字通り紫上を「支える」存在として機能しているとしたのが第五節である。そしてこれらは先にも述べた如く、「紫上を幾人かの女性で支えた」と捉えることも勿論可能であるが、第二章第六節でユング心理学を援用して述べたように、逆に「一つの人格を幾人かの女性に分有させた」と捉えることもまた可能なであり、そう捉える見方が、複数の人物を「横」に「連関」させる方法、すなわち「人物の連関による表現法」の謂なのである。

さて、「横」の「連関」があるなら「縦」の「連鎖」もあるだろうと、その例を掲げたのが第三章である。そこに掲げた「連鎖」は三つ。すなわち第二節「薫と匂宮」、第三節「夕霧と柏木」、第四節「光源氏・冷泉・明石姫君」である。「薫と匂宮」、「夕霧と柏木」については、活躍時期がほぼ同時期であるため、「連関」として捉えることも勿論可能であるが、そちらの研究は従来多数に上るので、今回は敢えて「連鎖」としての側面から捉えてみた。「薫と匂宮」を「連鎖」として捉えようと、そこに宇治十帖の「物の怪」という問題が浮かび上がってくる。周知のように手習巻の浮舟の回想によると、浮舟を入水に導いた物の怪は匂宮の姿に見えたとなっており、東屋巻の二人の出会いの場面に鑑みても、浮舟を守った乳母は「降魔の相」をしていたとあるから、宇治十帖後半に於ける物の怪的役割は匂宮が果たしているように見えるのだが、実際に浮舟に取り憑いていた物の怪の言葉に依れば、その正体は薫のように思われるのであり、そう考えてみると、大君の死に至る様相は物の怪の言葉通りになってくるし、第一章第二節で考えた、「石山」の働きとも合致してくるのである。この一見矛盾するように見える事実を統合する方法は、宇治十帖の途中で薫と匂宮の役どころを入れ替わっているという見方であり、それを十帖全体に亘って概観して検証したのが第二節の2である。さらに「夕霧と柏木」は、共に光源氏の批判者として造型されているのだが、通説のようにその役割は若菜巻に至って夕霧から柏木

に移譲されただけではなく、柏木の死後、再び夕霧に戻されており、そういう意味では柏木は夕霧のワンポイント・リリーフ的存在であったと結論づけたのが第四節である。また「光源氏・冷泉・明石姫君」は、誕生時の比喻表現に注目すると、「瑕ある玉」から「瑕無き玉」へと徐々に移行しており、これは、桐壺「帝」という最高権力者でも成し得なかった桐壺更衣を女御に格上げするという悲願を、「桐壺・明石一族」とでも呼ぶべき同じ血を引く一族の冥々の力が、入内して「桐壺女御」となる明石姫君を生み出すという形で実現していく過程を描いたものであると結論づけたのが第四節である。これらが「縦」の「連鎖」、すなわち「人物の連鎖による表現法」の例であるが、ここに挙げた三つの「連鎖」は個別に独立しており、物語全体を形成する以外の接点は持たない。それとは別に、個々の「連鎖」同士がまた「連関」して一つのテーマを表している場合があると思われることを述べたのが第四章である。

それは「拒否する」女性達の「連鎖」と「忌避する」女性達の「連鎖」で、前者についてはほぼ説明することは無かるが、源氏物語には数多くの、男性主人公を「拒否する」女性が登場する。従来はそれを個別に捉え、その拒否理由を論じてきたのであるが、その女性達は皆誇り高く、且つ本心では男性主人公に惹かれており、完全に離れてしまうというのではなく、適度な距離を保って関係を続けたいと願う共通項があると思われる。となればこれは女性の自意識の問題であり、「拒否する」女性達とは自我を守るため、男主人公と適度な距離を保とうとした女性達として描かれているとしたのが第二節である。次いで第三節では、源氏物語に於いて自意識が色濃く描かれている女性は、「拒否する」女性だけでは覆えないこと。それらは、唯一の例外である浮舟を除いて、いったん男主人公を拒絶しながらも、「拒否する」女性のようにそれを貫くことが出来ずに結ばれ、そのあと三角関係に巻き込まれて苦悩の中から自意識に目覚めるという共通点を持つことから「忌避する」女性達として捉えることが可能であること。「拒否する」女性達は男主人公と結ばれる前の自意識を描くことを主眼としているのに対して、「忌避する」女性達はその後それを描くことを主眼としていると思われることを論じた。そして第四節では、それら二つの「連鎖」は実は「連関」して一つのテーマ、「女性の生き難さ」換言すれば「女性は如何に生きれば良いか」を描く方法たり得ていること、それがすなわち「複数の人物連鎖とその統合による表現法」であることを論じたのである。

人物同士の関係としては、これ以外のヴァージョンはあり得ないが、最初にも述べたように、ここまで論じた中で自ずと浮かび上がってきた源氏物語のもう一つの特徴、負の力の重視について述べたのが第五章である。それは例えば第二章第二、五節、第三章第二節1・第四節、第四章第二、三節等に見られたが、源氏物語に於いては、人物の負の面が逆に物語を推進していくエネルギーとして語られることが往々にしてある。その最たるものと思われる「人物の死」ですらもそのような傾向があり、それが物語史上に於いて如何なる位置づけとして捉えられるかを論じたのが第一節である。そして第二節では、それをさらに高度に方法化したと思われる例、女三の宮と薫を取り上げた。女三の宮は「幼さ」というマイナス面を有していることは従来多々指摘されてきたが、それは実は光源氏の理想性を無化し、六条院栄華を徹底的に破壊することに於いては却って他に優る性質となり得ていることを1で論じ、薫は母である女三の宮の負性、或いは遠く六条御息所のそれを背負ったところから出発し、続編の間中、下降し続けることによって逆に物語を領導してい

く希有な主人公であることを論述したのが2である。

これらの見解は皆、一応新しいものと思うが、こうした見解の当否、或いは、これまでの「人物」という概念からやや離れた観もあるこれが「新しい人物論」たり得ているかどうかは、先にも述べた通り、今後検証していかねばならない。しかし、このような新しい自在な発想を導入すれば、源氏物語の新しい面が読み取れることだけは示し得たつもりである。

最後に今後の展望を若干述べておくならば、実例の少なかつた第一、二章、及び第四章の他例を付け加える等して、今しばらくはこの方法を深め、自分なりの「新しい人物論」を構築してみたい。しかし論文の題目にも掲げたように、あくまでそれは源氏物語読解の一方法に過ぎないのであるから、それに囚われることなく、テーマの関係上ここでは触れなかつた、和歌と散文の関係等、テクストそのものの読みも同時に進めてみたい。そしてその先では、昔からの念願である、蜻蛉日記等も取り込んだ、自分なりの物語史の構築に、少しでも近づきたいと思うものである。